
月読の塔の姫君

舘野寧依

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月読の塔の姫君

【Nコード】

N7097P

【作者名】

館野寧依

【あらすじ】

『イルーシャはわたし、わたしはイルーシャ』

今まで情性で生きてきた少女、由希。ある日目覚めたらなぜか絶世の美女になっていた彼女は、古の王妃として第二の人生を歩むこととなって――。

これは伝説の姫君と呼ばれた少女とその周囲の人々と国の変化の物語。

00 伝承

緑と魔法の国、ガルディア。

かの大国には伝説となつている美しい眠り姫がいる。

それはむかしむかしのおとぎ話。

アークリッド王の妃、イルーシャ姫は月光のような淡い金の髪と、青い月のような瞳をしたそれは美しい姫君だった。

王とイルーシャ姫はそれは仲睦まじく、お互いを思い合つて穏やかな時を過ごしていた。

しかしある時、姫君は横恋慕した悪しき魔法使いに呪いをかけられ、長き眠りについてしまう。

どうにかして姫の呪いを解こうとした王だが、その方法を知っているのは呪いをかけた魔法使いだけ。しかし、呪いが成就した魔法使いはそれに満足したのか、それ以来姿をくらましたまま行方が知れない。

王は昏々と眠るイルーシャ姫をかき抱き、絶望に嘆き哀しんだ。

その後、優れた魔法使いでもあったアークリッド王は月読の塔に姫の身を移し、かの王以外誰も近寄ることが出来ないように魔法をかけた。

王は姫が眠りについてからも以前と変わらず足繁く彼女の元へと通い、それは王が退位して死につくまで続いたという。

ガルディア王国の月読の塔に今も姫は眠る。

吟遊詩人たちは詠う。

姫君は長い年月をかけて再び半身たる王と出会つことを夢見ているのだと――。

01 目覚め

……ん……朝？

瞼越しに光を感じて、わたしは寝返りを打った。

柔らかく体を支える布団の感触に違和感をふと覚える。

うちのベッドのマットレスはこんなに柔らかくない。堅くて、長時間寝るともれなく腰が痛くなるというありがたくないオプション付きだ。

それがなに、このふつかふか。

「……え？」

そこでやっと家のベッドでないことに気づいて、わたしは飛び起きた。

……えーと、ここどこよ？

ベッドの天井から透けるような薄い布が幾重にも垂れ下がっている。いわゆる天蓋というやつだろうか。

天蓋付きのベッドなんて初めて見たよ、それだけじゃなくて寝ちゃったよ、うわあ。それも半端じゃない広さだし。

知らないうちに気を失ってどこぞの金持ちが家のベッドに寝かせてくれたとか？ ……いやいや、そういう場合、普通救急車呼ぶよね、などと、我ながら寝ぼけたことを考えながらベッドの端まで移動しようとした時。

「……なにこの格好……」

自分が中世ヨーロッパに出てくる人物のようなドレスを着ていることに今更ながらに気が付いた。

……なんだ、これは。なにかのコスプレかなにか？

ひらひらでふりふりでふわふわの衣装に、なんだか目眩がしてき

た。

普段ジーンズが多いわたしにはある意味拷問だ。

それに、なんかさつきから視界に金色の髪がちらちらしてるんだけど、これってウィッグだね。それも半端なく長い。間違いなく膝裏まであるだろう。なんでわたしはこんなもん被ってるんだ。

鬱陶しくてしょうがないので、思い切ってそのヅラを引っ張ってみた。

「うあ」

——痛い。

ちよつと涙目になりながら、わたしは地肌から抜けた数本の髪を見つめた。

ひよつとしてこの髪は本物なのでは？ という考えがよぎったが、わたしは頭を振ってそれを否定する。

いやいや、間違いなくわたしは平均的な日本人。わたしの地毛は、染めてない黒髪のはずだ。

なんだか妙なことに巻き込まれているような気がした。
とにかく誰かに会ってこの状況を把握しないと。

そう決心してベッドから降りる。

部屋の中はベッドと同じくアンティークな家具が備えつけられていた。

売ったらいいいくらになるんだろう、と夢のないことを考える。

いや、そんなことを考えてる場合じゃなかった。まず、この状況を分かる人を捜さなければ。

「あのー、誰かいませんかー？」

ドアから顔を出して大声で叫んでみる。

……けれど、期待した返事はない。

「……仕方ない、探しにいくかなあ」

ドレスの裾を踏まないように注意しながら螺旋状の階段を降りていく。

こんな所で下手に転んだら、絶対大怪我じゃすまない気がする。なんだろうこの建物、ひよっとして塔、なのかな……？ 変に縦に長い気がする。

それに窓がないのに妙に明るい。……なのに照明らしきものが見当たらないとはどういうことだ。

不思議に思いながらも、わたしはどこまで続くか分からない階段を降り続けた。

「つ、疲れた……」

いったいどのくらい時間がたっただろう。

なんか変なコスプレしてるのもあって、神経使っていやに疲れた気がする。

塔の出口らしいドアを開けると、幸運なことに庭師らしいおじさん（多分）の後ろ姿が見えた。

自分が妙なコスプレをしているのは気になっていたけど、わたしは思い切ってそのおじさんに声をかけてみることにした。

「……あの、すみません」

ここはどこでしょうと聞こうとした時に、おじさんが振り向いた。

「……ひいっ！」

「うわああっ！」

まるで幽霊を見たかのような反応をされて、ついっられて叫んでしまった。

その反応はちょっと失礼じゃない？ と思っておじさんを見る。

あ、このおじさん、後ろから見たときは気が付かなかったけど、外人さんだ。

日本語が通じるかは分からないけど、やっと会えた人だ、とりあえず話しかけてみよう。

「ちよつと聞きたいことがあるんですけど、あの、他に誰かいませんか？」

この言いぐさは自分でもどうかと思ったけど、人の顔を見て腰を抜かしたおじさんではどう考えても話にならないだろう。

おじさんは、ああ、とか、うう、とか意味不明な呻き声をあげながら震える手である方向を指差した。

あ、日本語が通じる人みたい。良かった。

内心ホツとしながら、おじさんが示した方向を見ると、一応舗装されてる小道がある。建物らしきものは見えないけど、多分その方向に人がいることは確かなんだろう。

「ありがとうございます。助かりました」

軽く頭を下げて、その場を後にする。

後ろからおじさんが神よ、とかなんとか呟くのが聞こえてきたけど、気のせいだと思いたい。

まさかホラーなメイクでもされてるんじゃないだろうなと思って顔に触ってみる。

……すべすべだ。

化粧してる感じはしないし、すっぴんとか思えないんだけど、おじさんのあの怯えようはちよつと気になる。

そんなことを考えながら、小道を歩いていたら。

「塔の結界が消えたと思ったら、まさかこんなことが起こるとはね」
流暢な日本語でそう言ったのは、超が上に付くような美形のお兄さん。なぜかこの人もわたしと同じファンタジー映画に出てくるような格好をしている。

長い金髪に緑の瞳。この人も外人さんだ。

なんか外人率高いな！ と言っても出会ったのはお兄さんを入れて二人だけ。

あのー、もしもし？ 今あなた、どこから出てきましたか？

なんだか突然現れたような気がするんですが。

思わずぼかんとしていると、目の前のお兄さんはちょっと目を見開いてから、わたしをまじまじと見つめた。

「伝承通りだ、月光のような髪と青い瞳」

はい？ この人、今青い瞳って言わなかった？

この鬱陶しいくらい長い髪がウィッグなのは分かるけど、わたしはカラコンまで入れてるのか？ コスプレにしても、なにその徹底ぶり。

わたしにこの格好をさせた人物の執念にちよつと青ざめていると、美形のお兄さんは私の前で片膝をついた。

え、と思つて見ていると、お兄さんはおもむろにわたしの手を取る。

え？ え？ ちよつと、なにする気？

これは、ひよつとして、ひよつとすると。

「まさかあなた様に出会える日が来るとは思いもしませんでした。

わたしにとって、これ以上の幸福はございません」

美形のお兄さんはそう言つてにつこりと微笑むと、うやうやしくわたしの手にキスをした！

うわあああつ、まさかと思つたけど、この人本当にやってくれたよ！

「な」

思わず固まるわたし。

生粋の日本人であるわたしにこれは無理。

恥ずかしい。恥ずかしすぎる。

「ああああの、あの……っ」

もの凄くどもってしまったが、この場合これくらい動揺しても仕方ないと思う。

頬が熱い。きつと今わたしは真つ赤になつてゐるだろう。

わたしの手を離して立ち上がったお兄さんは不思議そうに首を傾げた。

「なにか変だな。君はイルーシャ姫だよね？」

イルーシャ姫？ 誰だ、それは。

「人違いですつ」

ぶんぶんと首を横に振つて否定したわたしに、お兄さんの質問が続く。

「でも、君、塔から出てきたよね。だとしたら、姫としか考えられないんだけど」

「確かに塔から出てきましたけど、わたしは姫とかじゃないですつ。わたしの名前は原田由希。日本人でただの一般庶民です！」

「ハラダ・ユーキ？ ニッポン？」

ちよつと、なんでいきなりカタコトになるんですか、お兄さん。

それにハラダ・ユーキって呼び方、なんか間抜けでやだ。

「いえ、ユーキじゃなくて、ユキ、由希です！」

「ユーキ」

それからお兄さんとの攻防は少ばかり続いたけれど、結局わたしが折れる形で収束した。

「……もう、ユーキでいいです……」

肩を落とすわたしに、お兄さんは苦笑してごめんね、と謝った。どうやらわたしの名前の発音は外人さんには難しいらしい。

「話を戻すけど、君は姿はイルーシャ姫だけど、中身はユーキっていう女の子なのか」

「さつきからイルーシャ、イルーシャって、誰ですか、それ」

「伝説の姫君。月読つきよみの塔の眠り姫だよ」

「はあ、でんせつのひめぎみ、ですか」

「なんでそこで棒読みになるのかな？ 信じてないみたいだけど、僕は嘘はついてないからね」

お兄さんは苦笑するけど、こんな荒唐無稽な話、信じるという方

が無茶だ。

「……ああ、そうか。君はまだその姿を見ていないんだね？　なら、信じられないのも無理ないか」

お兄さんは頷きながらなにかを呟いた。

そこ、一人で納得しないでください。そう言おうとした途端、周囲の風景が一変した。

「え……ええええっ!？」

さっきまで外にいたはず。なのに今いるのは豪華な内装の室内。

「なんだか随分驚いてるようだけど、ひょっとして移動魔法を知らなかったりする？」

……移動は分かるけど、魔法ってなに。それって、ファンタジー小説とかでよく出てくるあの魔法？

なんかいろいろと妙な展開ばかりで頭が痛くなってきた。

「魔法という言葉は聞いたことはありますけど、実際に見たのは初めてです」

こみかみを押さえながら言うと、瞠目したお兄さんに初めて？と聞き返された。

なに、それ驚くようなこと？

とりあえず頷き返すと、お兄さんはふうんと呟いてなにかを考えている素振りをした。

「君がいたニッポンって国には、魔法の概念はあるのに実行はされてなかったのか。実に興味深いけど、今はそれを聞いている場合じゃなかったね。……君も訳の分からない状況で大変だろうけど、まだしなければならぬことが残ってるよ」

そうだった、このコスプレがどうなっているのか確認しなきゃいけないんだった。

お兄さんに促されて、華奢なデザインのいかにも高価そうな鏡の前に立つ。

目に入ってきたのは、儂げなお姫様。

緩やかに波打つ淡い金の髪と、淡い青の瞳。年齢的には少女と女性の間といったところじゃないだろうか。

小さな顔に、それぞれのパーツが絶妙に配置されている、絶世の美貌。

傾国の美姫っていうのはこういう人のことを言うのね。……って、見とれている場合じゃなかった。

これ、もしかしてわたし？ いやいや、まさか、わたしがこんな美女のわけないじゃない。顔の作りからして全然違うし。

無理矢理笑ってみる。お姫様がどこかぎこちない笑みを見せる。思い切り顔をしかめてみる。お姫様が難しい顔になる。右手を挙げてみる。お姫様もそれに合わせて手を挙げる。鏡の前でターンしてみる。お姫様もターンする。

なんだこれは。なんだこれは。なんだこれは。これはもしかして、……わたし？

「なにこれえええーっ!!」

自分に起こった事態を理解した瞬間、わたしは喉も裂けんばかりに絶叫した。

02 王との対面

「ちょっと、笑いすぎ。失礼です！」

腹を抱えて爆笑するお兄さんに、わたしは涙目になって抗議する。確かにさっきのわたしは端から見たら変な人だったかもしれないけれど。

「ごめん、ごめん。まさか叫び出すとは思わなくて。でも、これで状況は理解できたみたいだね」

無然としているわたしに、笑いをこらえているお兄さん。頼みますから、わたしのさっきの奇行は忘れてください。

「姫が目覚めたとなったら、王に知らせないとならないんだけど。」

僕は目通りの許可を貰ってくるから、君のことは侍女達に任せるけど、いいかな？」

「ちょっと待つて、『おう』つて、王様！？」

「わたし、王様に会わないといけないんですか？ それにここはどこなんですか？ わたし、これからいったいどうなるんですか！？」

わたしは浮かんでくる疑問を矢継ぎ早に出した。

だって、いきなりこんな美女になって、王に会わせるだなんて言われたら訳分からないよ！

「ここはガルディア王国。君から見ればたぶん異世界だよ。ここにはニッポンなんて国は存在しないしね」

「異世界……？」

あまりのことに呆然とお兄さんを見る。その顔は真面目そのものだ。

確かに魔法なんてものがあるし、日常では考えられないことだけだ。

「信じられないかもしれないけど、夢でもなんでもなくて、これは現実だよ。……君には気の毒だと思うけど」

「嘘……」

嘘だよ、日本が存在しないなんて。じゃあ、わたしはどこに帰ればいいの？

混乱のあまり涙が浮かんでくる。

「……ああ、泣かないで。酷かもしれないけれど、絶対に悪いようにはしないから」

お兄さんが指を延ばしてわたしの涙を拭いてくれる。

「そのためにも王に会うことは重要なんだ。……君がその姿でいることも関係あるしね。いきなり王と対面なんて不安かもしれないけれど、僕も同席するから我慢してね。それから王の名はカデイスっていうんだけど、彼は僕と歳も近いし、そんなに緊張する人物でもないから大丈夫だよ」

安心させるようにそつと頭を撫でてくれるお兄さんに頷くと、ほつとしたように彼は微笑んだ。

わたしから離れて、じゃあまたね、と言ってその場を去ろうとしたお兄さんにわたしは慌てた。

わたし、お兄さんの名前聞いてない！

「あのっ、お名前伺ってもいいですか？」

今気づいたとばかりに、ああ、とお兄さんは立ち止まる。

「これは失礼しました。わたしはキース・ルグラン・レグ・アレギリア。ガルディア王国の魔術師師団長を務めています。以後よろしくお願いいたします」

胸の前で右腕を掲げ、丁重にお兄さん、じゃなくてキースさんは言った。

美形はなにをやっても絵になるなあなんて頭の隅で考えながら、わたしも慌てて言う。

「あ、はい。こちらこそ、よろしくお願いします」

キースさんはその言葉に微笑んで頷くと、それじゃあね、と部屋を出ていった。

それから程なくしてドアを叩く音がしたので、はいと返事したら、キースさんが言った侍女と思わしき人が入室してきた。

だいたい四十歳くらいだろうか。栗色の髪をひつつめた青い瞳のその人は、とても品の良い感じがした。

「失礼いたします。わたくしは侍女長を務めております、リイナと申します。僭越ながらわたくしがイルーシャ様のお世話をさせて頂きます。伝説の姫君にお仕えできるなんて、わたくしは果報者ですわ」

……侍女長といったら結構偉い人なんじゃないだろうか。そんな人に頭を下げられて、ここまでへりくだられると、逆にこっちが恐縮してしまう。

「こちらこそよろしくお願いします。目覚めたばかりで、事情がよく分からないのですが、よろしくご指導をお願いします」

「まあっ、わたくしのような者にそんなお言葉をかけて頂けるなんて。イルーシャ様はなんて素晴らしい方なのでしょう。わたくし、誠心誠意あなた様にお仕えさせて頂きますわ」

ぺこりと頭を下げたわたしに、心底感激したようにリイナさんは言った。

いや、中身は一般庶民なので、リイナさんの方が偉いんですとは、この場合、言わない方がいいんじゃないだろうか。

「それでは支度の準備をさせて頂きますね」

リイナさんが手を叩くと、さらに二人の侍女が現れた。

だいたいわたしと同じくらいの歳だろうか。二人はそれぞれシェリーとユーニスと名乗った。

「まずは、ご入浴して頂くことになります」

ご入浴……お風呂！？

リイナさんに手を取られてだっ広いお風呂場に連れて行かれたいや、お風呂場というより、立派な浴場と言った方が正しいかも知れない。

その豪華さに見とれていると、ユーニスさんとシェリーさんがわたしの着ていたドレスを脱がしにかかった。

ひいい、なにをするの！？

思わず二人の手を払いのけようとして、わたしははた、と我に返った。

リイナさん達にとっては、あくまでもわたしはイルーシャ姫なんだ。姫はこんなところで暴れたりしないよね。

耐えろ、わたし。温泉施設だと思えば恥ずかしくない…… かもしれない。ただし、わたし以外の侍女さん達は服着てるけど。

同性とはいえ、他人に衣装を剥かれる羞恥と戦っていると、リイナさん達に感嘆したような溜息をつかれた。

「まあっ、なんて魅力的なお体なんでしょう。輝くような白いお肌といい、どんな殿方もイルーシャ様の前ではいちころですわ」

うつとりとそう言ったのは赤みがかった金髪に榛色の瞳のユースさん。リイナさんとシェリーさんも同意するように頷いている。

「そ、そう……」

見下ろしてみると、確かに出るところは出て、引つ込むべきところは引つ込んでいる体つきをしている。

こんなところまで完璧なのか。イルーシャ姫、恐るべし。

その後のことはあまり思い出たくない。

とりあえず、リイナさん達に体の隅々まで洗われてしまったことだけは言っておく。

でもまあ、侍女さん達に洗ってもらって正解だったと思ったのは、髪。

あまりにも長すぎるので、一人じゃ洗うのはきつと大変だったろう。

いっそ切った方がと提案したら、侍女さん達に揃って「こんな見事な御髪をとんでもない！」と反対された。

いやー、でも毎回侍女さん達に洗って貰うのもなあ。それにやっぱりお風呂は一人でゆっくり入りたいのよ。

でも無理なんだから、と今日一日でいろいろと諦めながら、お風呂からあがったわたしは、リイナさん達に手際よく着付けをされた。

「まあ、瞳と同じ色のドレスがよくお似合いですわ」

淡い青色のドレスを身につけ、小さな白い花を髪に編み込んだ姿は、清楚で可憐と言うのにふさわしく、確かに似合ってる。

それからリイナさんが、支度ができたことをキースさんに連絡しに行つて、ようやく王様とご対面、という段になった。

わたしを見たキースさんは瞳を見開いてから、少し眩しそうに目を細めた。

「とても綺麗だ」

「ありがとうございます」

うん、イルーシャ姫がね。

わたしは人に褒められるのがとても苦手なんだけど、本来と外見が違いすぎるせいとか、どうも他人事のようにしか感じられないんだよね。だから、こんなふうにさらっと流せてしまう。

「本来なら謁見の間で行うのが正式なんだけど、執務室になってしまつてごめんね？」

「いえ、その方がこっちも助かりますから」

キースさんはいかにもすまなそうに言うけど、そんなに仰々しくやられてはこっちが困る。わたしはあくまでも一般庶民なのだ。

キースさんが王の執務室のドアを叩くと「入れ」という返事が返ってきた。

わたしはキースさんに促されて入室する。

書類が積まれた立派な机の椅子に座っていたのは、肩を覆うくらいの漆黒の髪と、藍色の瞳の男性だった。

キースさんが中性的な美形とすれば、王様はいかにも男性的な感じの美形。

——この人が王様。

どうしよう、なにか挨拶したほうがいいのかな。

「あの……」

なんとか絞りだそうとした声を王様が遮った。

「なぜ、よりによって俺の代になって目覚めるんだ、おまえは」

言外になんてことをしてくれただという言葉を含みながら、王様は心底嫌そうな顔をした。

「いきなりそういうこと言うのは、どうかと思うよ」

不機嫌を露わにする王様に、すかさずキースさんがフォローを入れる。が、既にわたしの中で王様の印象は最悪に近い。

「どう言い繕おうが、俺にとって迷惑な存在であることに変わりはない」

「あの、わたしはそんなに迷惑な存在なんですか？」

つい、間の抜けた質問をしてしまつた。でもあの侍女さん達は少なくともわたしに好意的だった。

「ああ、迷惑だな。分かったら、とつとと塔に戻って眠りにつけ。そして二度と目覚めるな」

その一方的な言い方に思わずムカつてきた。

「いくらなんでも、そこまであなたに言われる筋合いはないですっ」

「俺にはそう言える権限がある。王だからな」

「へえ、そうなんですか。だとしたらとんでもない暴君ですね。こんな王様を上に乗っている国民がかわいそう」

「なんだと、もう一度言ってみろ」

「何度だって言うわよ！ 暴君！ 暴君！ 暴君！ 暴君！」

もう敬語とかどうでも良くなってきた。もうこいつに丁寧な言葉を使うのも嫌だ。

「きさま……」

「だいたいなに、目覚めたら見たこともない場所で、伝説の姫君とか言われて、あげくの果てには二度と目覚めるな？ ふざけんじやないわよ」

やばい、感情が高ぶりすぎて止められなくなってきた。不覚にも涙が浮かんでくる。

「わたしだつてね、好きでこんなとこにいるんじゃないのよ！ 元の体に戻るなら喜んで戻ってやるわ！ 分かったか、この馬鹿王——っ！！」

一瞬の沈黙の後。

ぜいぜいと肩で息をするわたし。爆笑するキースさん。啞然とする王様。

涙目でキツと睨むと、王様はなぜか後ろに少し仰け反った。

その顔は反則だよ、とキースさんが呟くのが聞こえたけど、憤っているわたしはそれどころじゃない。

「キース、この女を追放しろ」

「お言葉だけどね、カデイス。この国にとって貴重な観光資源をみすみす追放させる訳にはいかないね」

観光資源で……珍獣扱いか！

気がつかなかったけど、キースさんって結構いい性格してる。

「伝説の姫君が目覚めたことで、この国にもたらされる経済効果は計り知れない。それを他国に持って行かれるかも知れないけど、それでもいいのかい？」

「それは……」

たたみかけるように言うキースさんに、王様の言葉が詰まる。

「じゃあ、わたしはこの国にとって大切な客人なわけね？ じゃあ、せいぜい丁重に扱ってもらわなくちゃね。よろしくね、カデイス！」

今までの鬱憤を晴らすべく、嫌味たっぷりに王様を呼び捨てにしていた。

「君もいい性格してるよなあ」

感心したようにキースさんが笑う。

「カデイスを呼び捨てにするなら、僕もキースと呼んでもらおうかな。丁寧な言葉もいらないから」

「え……と、キース？」

「うん、そう。カデイスばかり親しげに名を呼ばれたら、ちょっと癪だしね」

「誰が親しげだ！」

これに関してはカデイスの言葉に賛成だ。

どうやったらこれが親しげに見えるのキース。こいつはわたしの敵だよ。

呆れていたその時、扉がノックされる音が響き、キースがその応対に出た。

その間、わたしは天敵を睨みつけている。

「……可愛くない女だな」

「別にカデイスなんかに可愛いなんて思われたくないし！」

カデイスとわたしが見えない火花を散らしていると、不意に何々とした笑い声が響いた。

03 確認

声がした方を見ると、七十歳くらいの白髪のおじいさんが楽しそうに笑っていた。

その後ろには二十代後半くらいの薄茶色の髪をした男の人が頭が痛いともいうように額を押さえている。

「伝説の姫君は随分と個性的な方のようにゃの」

「……個性的にも程があると思うが。いくら古の王の妃でも現王を馬鹿王呼ばわりとは」

不機嫌を隠そうともせずにカデイスが言う。

ちよつと待って、今変なこと言ってたような気がする。

「古の王の妃ってなに？」

首を傾げながらそう言うのと、キース以外の人に凝視された。

え……なに、わたしなにか変なこと言った？

「五百年前の王、アークリッド王の妃って事だよ」

誰も言葉を発しないのでキースが説明してくれたけど、初めて聞く名前だ。

「アークリッド王？ 誰それ」

「呆れた女だな、おまえは。アークリッド王の人生を狂わせておきながら、その王のことも忘れたのか」

「なに、ひよつとしてイルーシャ姫って物凄い悪女だったりするの？」

そのわりにはリイナさん達の態度は随分と友好的だった気がするんだけど。

「おまえ、何を言ってるんだ。まるで他人事のように……」

「仕方ないと思うよ。実際、他人事だからね」

眉を顰めるカデイスに、キースが肩をすくめて言った。

「おまえまでなにを言ってるんだ、キース」

「信じられないかもしれないけど、この娘、姿はイルーシャ姫だけ

ど中身はユーキって女の子なんだ」

「……失礼ですが、キース様。そんなことが起こりうるのでしょうか」

今まで黙ってた薄茶色の髪の男の人が堅い調子で言う。

「禁呪の魂換えなら考えられるけど、ただ、この娘異世界人なんだよね。その点で人物の特定が必要な魂換えが可能とは思えない」

「……異世界人だと？ なにを馬鹿なことを」

「ユーキ」

よく分らない話をぼうつとして聞いていたわたしは、いきなり名前を呼ばれて慌てた。

「な、なに？」

「君がどこに住んでたのか話してごらん」

「わたしは――」

注目されてちょっと緊張しながら言いかけた時、ドアがノックされた。入ってきたのはリイナさん。

「失礼いたします。皆様、陽の間にお集まりになりました。お食事の準備も出来ておりますが、いかがなされますか」

「そうだね、主要な人物には事情を説明しておいたほうがいいかもね。紹介もしたいし、すぐ移動するよ。リイナも一緒に来て」

「かしこまりました」

キースの移動魔法でその場にいた全員が別の場所に移動した。

この魔法は二回目だけど、こんな大人数でも移動できるんだ。すごいな。

素直に感心して室内に目をやると、そこには騎士みたいな格好をした三人の男の人がいた。その内の一人はとんでもない美貌の持ち主だ。

この人達もキースが言っていた主要な人物なのかな。

「とりあえず席に着こうか。ああ、ユーキはここに座って」

キースに椅子を引かれて、わたしは長テーブルの端に着席する。

わたしの目の前にはカデイス、左隣にはキースが座った。

カデイスの横には白髪のおじいさん、薄茶色の髪の人、二十代半ばくらいの赤っぱい黒髪の人が着席。

反対側のキースの横には、焦げ茶の髪の四十歳くらいの人、二十代前半と思われる蜂蜜色の髪の人が着席した。

「では自己紹介といきますかな。わしはこの国の宰相を務めているアリストと申します」

白髪で青い瞳のおじいさんが人の良さそうな笑顔を浮かべて言う。
「わたしは宰相補佐のイザトと申します。以後よろしくお願いいたします」

アリストさんの隣に座っている薄茶色の髪に水色の瞳をした男の人が堅い調子で言う。なんというか顔は彫像のように整っているんだけど気難しそうな人だ。わたしはその言葉に慌てて頷く。

カデイス、わたし、宰相、キース、宰相補佐……この席順つてもしかしなくても偉い順だったりする？

「わたしは近衛騎士団団長のダリルと申します。イルーシャ様、よろしく願い申しあげます」

キースの隣の焦げ茶の髪に黒い瞳のその人はとっても渋かった。端正な顔といい、若い頃は相当もてたんじゃなかるうか。

「彼はそこにいるリイナの夫だよ」

キースにそう言われて、わたしは後ろに控えているリイナさんを振り返ると、リイナさんは肯定するように頷いた。

「うわー、こんなかつこいい旦那さん、いいなあ。でもリイナさんも美人だし、とってもお似合いだ。」

「わたしは紅薔薇騎士団団長、ブラッドレイと申します。伝説の姫君にお目にかかれて身に余る幸せにございます」

赤みがかった黒髪に赤い瞳の瞳のその人は、どこか気障っぽくそう言った。

この人も美形で、いかにももててそうな空気を放っている。あ、こういうのをフェロモンというのか。

「わたしは白百合騎士団団長ヒューイと申します。よろしくお願い

申し上げます」

蜂蜜色の髪と紫の瞳をしたその人は、わたしの予想に反して、
とてもハスキーな声だった。

ものすごい美人。いや、男の人だって分かってるけど、とにかく
美人。

キースが中性的な美形だとしたら、この人はより女性的な感じの
する美形だ。

わたしがぼかんとしてその人を見つめていると、キースがくすく
すと笑って言った。

「美人だろ、彼。十代の頃なんて絶世の美少女と呼ばれていたんだ
よ」

「……へえ、そうなんだ」

「……キース様！」

頬を染めて抗議する姿はどこか可愛くて、美少女と呼ばれていた
のも大いに納得した。

それにしてもこのメンバー、やたら美形揃いだなあ。アリストさ
んの若い頃はどうかだったのかは本人に聞いてみないと不明だけど。

「あ、わたしは由希、原田由希です。日本から来ました」

わたしがそう言つと、事情を知らない三人の騎士さん達が不思議
そうな顔をした。

「……失礼ですが、あなたはイルーシャ様では？」

ダリルさんが至極もつともな質問をしてくる。

「ええと、体はイルーシャなんですけど、中身は原田由希なんです」

「は？」

三人にそう返されて、わたしはどう説明しようかと思案する。

こんな話、当の本人であるわたしでさえ信じられないのに、他人
が訳分らないのは当然だ。

「見る、キース。こんな荒唐無稽な話、誰も信じないぞ。おまけに
この女が異世界人だと？ おまえ、この女におかしなことでも吹き
込まれたんじゃないのか？」

「ちょっと、失礼なこと言わないでよね。それじゃ、まるでわたしがだましてるみたいじゃない」

「実際そうだろう」

「カデイス、ちょっと黙っててくれないかな」

キースが王であるカデイスの言葉を遮ってそう言ったのには、わたしもびつくりした。

こ、これは俗に言う暗黒微笑というやつでは？

どこか黒いオーラを放ちながらキースが微笑む姿は恐怖以外のなものでもない。

「ユーキのいたニッポンという国はどんな国なんだい？」

キースに聞かれて、わたしは慌てて少ない知識を総動員する。

「ええと、日本は四方を海に囲まれた島国だよ。工業が盛んなかな。一応経済大国って言われてる」

「……島国で経済大国。聞いたことないですね」

イザトさんがこめかみに指を当てて考える仕草をする。

「あ、じゃあ、アメリカは？ ロシア、イギリス、フランス、イタリア、ドイツ、オーストラリア」

とりあえず思いついた国の名前を列挙してみる。

「どれも知らん。キース知っているか」

「どの国もこの世界には存在しないよ。だから言っただろう、ユーキは異世界人だって」

「しかし、それもその女の作り話だと言えなくもないぞ」

「彼女はイルーシャ姫やこの世界のことについて知らなさすぎる。

実際に鏡で自分の姿を見て驚いてた彼女を目にすれば、カデイスも納得すると思うよ」

うああ、お願いだからキース、あの時のことは忘れて！

思わず赤面して頬を押さえるわたしをカデイスはまじまじと見つめると、やがて溜息をついて言った。

「……おまえがそこまで言うのなら仕方ない。一応信じてやる」

「分かってくれたようで嬉しいよ。……じゃあ、食事にしようか」

キースのその言葉を合図に、テーブルに料理が運ばれてくる。

焼きたてのパン、豆のスープ、魚介類を炊き込んだピラフのようなもの。薄くスライスしたジャガイモと挽肉と炒めたタマネギを重ねてパイ生地で包んだ料理。手羽をニンニクで風味付けしてローストしたもの、白身魚のソテー、茹でた野菜などが大皿に盛られている。

ここの食事は大皿に盛った料理を各自で取る形式らしくて、食事のマナーもそう煩くなさそうなので私はほっとする。

「ユーキ、取ってあげるよ」

キースがわたしの分の料理を全部取ってくれた。

「え、ちよつとキース、わたしそんなに食べられないよ」

「どれが君の口に合うか分からないからね。無理して食べることもないし、残していいから」

……キースのこういうところは、いいところの出なんだなあとと思う。庶民のわたしには料理を残すのがちよつと心苦しいんだけどな。そう思いながら、淡い緑色をした豆のスープをスプーンですくって口に運ぶ。

「あ、おいしい」

裏ごしして口当たりを良くしたスープは豆の風味と塩加減が絶妙で、思わず口元が綻ぶ。

「パンにスープやソースをつけて食べてもいいんだよ」

「あ、そうなんだ」

早速言われたとおりに焼きたてのパンをちぎってスープにつけて食べてみた。うん、おいしい。

「ここにもお米ってあるんだね。日本のお米と違って細長いけど」
ピラフもどきをすくって食べてみる。うわ、味もピラフそのものだ。ちよつと嬉しい。

「米がおまえの国にもあるのか」

「うん、一応主食だよ。パンや麺類を食べることも多いけどね。それにしても、ここの料理がわたしのところと似通ってて良かった」

「ほお、異世界でも似たような料理があるとは、不思議なことがあるものじゃの」

アリストさんが感慨深げにそう言ったのを聞いて、わたしはふいに疑問を持った。

「ね、ここが異世界なら、なんで言葉が通じてるんだろ？ わたしの世界では、日本以外の国に行くと言葉が通じないんだけど」

まあ、英語みたいな公用語はあるけどね。

「それは、君がイルーシャ姫の体に入っていることが要因なんじゃないかな。君はこの言葉を普通に話してるよ」

「え、そうなの？」

「うん、たまに分からない単語が混じるくらいだね」

今まで日本語しゃべってるとばかり思ってたから、これには驚いた。

「……そうなんだ。あ、でも、話すのはともかく書く方はどうかな？ さすがにこれは自信ないけど」

「おまえには専任の教師をつけてやるから安心しろ。たっぷり絞らせてやるから覚悟しておけ」

「ええ……」

カデイスの容赦ない言葉に、思わず情けない声が出た。そのくらいわたしは勉強というものが苦手なのだった。

キースが噴き出したのを機に、その場は穏やかな笑いに包まれた。

04 動揺

「勉強は仕方ないからやるけど、できれば元の世界に早く帰りたいんだよね……」

溜息をつきながら白身魚のソテーを切り分けていると、突然周囲が静かになった。

あ、でも、目覚めたわたしはこの国にとって貴重な観光資源なんだっけ。

だとしたら、わたしが元の世界に戻るのは彼らにとって不利益なんじゃないかな。

「……もしかして、帰れないってことはないよね？」
言っててだんだん不安になってきた。

ひよっとすると元に戻れずに、ずっとイルーシャのまま、とか……。

「……一応、過去にそういう例がないか調べてみるよ。心配だろうけど、できる限りのことはするから、そんな顔しないで」

キースが慰めるように言う。

わたし、そんなに情けない顔してる？

「しかし、妙な期待を持つより、帰れないと思っておいた方が賢明ではないか？ そんなことを考えていたら、いつまでたってもこの環境に順応できないぞ」

「な……」

カデイスの言葉は正論だろうけど、酷すぎる。

いきなりこんなことになったわたしの気持ちなんてカデイスには分かんないよ。

「陛下……、それはあまりにも……」

ダリルさんがカデイスを諫める。

「カデイス、言い過ぎだよ。それに帰れないと決まった訳じゃない」
「だがな、キース、おまえも言っていたではないか。この女はこの

国にとって貴重な観光資源なのだと。ならば、無理に帰すこともないだろう」

なにそれ、二度と目覚めるなって言ったのはカデイスじゃない。それを……今になってそんなこと言うの？

「それは言っただけど、なにもこんな時に言うことはないだろう？」
カデイスはすぐく意地悪だ。いくらわたしを嫌ってるからって、こんなやつて酷すぎるよ。

気が付いたら、わたしはぼろぼろと涙をこぼしていた。

「ユーキ……」

みんなの前でみつともなく泣き出してしまったわたしは恥ずかしくて顔を覆う。

こんなことで泣くなんてどうかしてる。

「ご、ごめんなさい、わたし……っ」

「……なにを泣いている。別に泣くようなことではないだろう」
なぜか動揺したような声でカデイスが言う。

「イルーシャ様」

控えていたリイナさんがわたしにハンカチを差し出してくれた。それをありがたく借りて目元に当てる。

「わ、わたし、もう部屋に戻るね。食事ごちそうさま」

いたたまれなくて、わたしは席を立つ。

「……部屋に送るよ。リイナ、付いててあげて」

「かしこまりました」

キースが移動魔法を唱えて、わたしは自分に割り当てられた部屋に戻った。

「……イルーシャ様、なにかお飲みになりますか？」

「ううん、いいです。ごめんなさい、今日はもう休みます」

「……そうでございますか。ではお召し替えを」

着ていたドレスを脱いで、リイナさんに寝間着に着替えさせてもらった。わたしはそのまま寝室に向かう。

「おやすみなさい。……今日はごめんなさい」

「……イルーシャ様が、お気になさることはないのですよ。それではおやすみなさいませ。明日の朝、また参ります」

優しくそう言ってくれて、リイナさんが退出する。

わたしはベッドに沈みこむと、枕に顔を押しつけ声を殺して泣いた。

——会いたい。

普段は空気のように思ってたのに、こんなことになった今になって、無性にお父さんとお母さんに会いたかった。

帰りたい、うちに帰りたいよ。

手抜きでもなんでもいいから、お母さんの料理が食べたい。

これが夢じゃないとしたら、向こうのわたしの体はどうなってるんだろう——。

「由希いいい——っ!!」

誰かが絶叫する声で、わたしははっと目が覚めて起き上がる。

まだ起きるには早い時刻らしく、まだ周囲は薄暗い。

なんだか嫌な目覚め方。

あの声、どこかで聞いたことある気がするんだけど誰だっけ……？

ドキドキしている胸を押さえながら考えて、あれがお母さんの声だということに気が付いた。

家族のこと考えながら眠ったから、あんな夢見たのかな。

今頃わたしの体、どうなってるんだろ。

イルーシャ姫みたいに眠ったままか、最悪、意識不明とか……？
そうだとしたら早く帰らないと。

いくら放任の両親でも、心配かけてるだろうな。

溜息をついてから、もう一度寝ようと横になる。けれど眠気はもう訪れず、周囲が明るくなるまで、まんじりもしないでわたしは

ただ時間が過ぎるのをベッドの上で待った。

「失礼いたします。イルーシャ様、起きていらつしやいますか？」

「あ、はい。起きてます」

リイナさんに声をかけられて、わたしは豪華な天蓋付きのベッドから這い出た。

「キース様からお花が届いておりますよ」

キースって本当にまめな人だな。

花瓶に生けられた青を基調とした花を見て、ちよつと気持ちが浮上する。

今日はシェリーさんにお風呂に入れてもらった。ちなみにシェリーさんは淡い栗色の髪と瞳の美人。

シェリーさんと呼んだら、シェリーとお呼びくださいと言われて戸惑った。

「ユーニスやわたくしも是非そうお呼びください。イルーシャ様、わたくし達には普段通りの口調で良いですよ」

リイナさんにそう言われたので、わたしと歳が近いシェリーさんとユーニスさんは、さん付けをやめることにした。

さすがにリイナさん呼び捨てにはできないと言ったら、苦笑されながら承諾してくれた。……ああ、良かった。

朝の支度と食事を終えて、アッサムミルクティーに似た感じのお茶を飲んで一息入れる。

ころんとした丸い形の茶葉はスパイスやミルクと一緒に煮込んでチャイみたいなお茶にすることもあるそうだ。

コーヒーはないんだろうかと思ってリイナさんに聞いてみたら、どうやらないらしい。残念。

「イルーシャ様、ブラッドレイ様とヒューイ様がいらしてますが、いかが致しますか」

ああ、昨日会った騎士団長の人達か。

「あ、お通ししてください」

しばらくして、花束を手にした二人の騎士団長が現れた。

「イルーシャ様、ご機嫌はいかがですか」

「あ、はい。今日は大丈夫です」

そう返しながら、それぞれの団の名を表す花束を受け取った。
…それにしても、紅薔薇と白百合ってすごい団名だね。

わたしが二人に座ってもらうように促すと、シェリーが頬を赤く染めながら新たにお茶を淹れて持ってきてくれた。

ブラッドレイさんがお礼を言くと、シェリーはさらに真っ赤になつて慌てたように退出していった。いやはや美形の威力はすごいなとわたしは妙な感心をしてしまった。

「あの……ブラッドレイさん、ヒューイさん、昨日はすみませんでした」

わたしが昨日の非礼を詫びると、二人は微笑んだ。

「いいですよ。イルーシャ様が気になさることではありません」

「あと、我々に敬語は必要ございません。どうぞ、ヒューイ、ブラッドレイとお呼びください」

その美貌にあまり似合わない堅い口調でヒューイさんが言う。

「え……でも、わたし中身は庶民ですし」

年上のいかにも貴族然とした二人を呼び捨てにするのは気が引けた。

「陛下に敬称をつけていらつしやらないのに、我々に丁寧な言葉遣いはまずいでしょう。……聞きましたよ、なんでも陛下を馬鹿と言われたとか」

ブラッドレイさんが多少砕けた口調で冗談めかして片目を瞑る。

「あ、あれは……っ」

確かにあれは自分でも暴言だったと思う。

カーツと顔に血が上るのを感じて、わたしは頬を押さえた。

「あれは、カデイスが失礼なこと言うから……っ」

「……失礼なことですか？」

「なんでも、わたしはカデイスにとって迷惑な存在らしいですよ。とつと塔に戻って眠りにつけ、そして二度と目覚めるなど言われました」

「それは……酷いですね」

ヒューイさんが額に手を置いて唸るように呟いた。

「陛下も物言いが少しきついところがありますからね」

「……少しですか？」

「いえ、かなりですね」

わたしの疑問にブラッドレイさんが苦笑いを浮かべて訂正する。

「イルーシャ様、先程も言いましたが、我々に丁寧な言葉はいりませんから。できればブラッド、ヒューと呼んでいただけると嬉しいですね」

「分かりま……、う、うん、分かった。じゃあ、わたしにももう少し砕けた口調で話してくれると嬉しいな」

「イルーシャ様がそう言うのでしたら。公式の間では無理ですけどね」

「うん」

堅苦しいのは苦手なので、わたしはほつとする。

「あ、そういえばカデイスのことなんだけど、よりによってなぜ俺の代で目覚めるんだって言ってたけど、どういう意味なのかな？」

わたしがそう聞くと、二人は一瞬の間を置いて、お互いの顔を見合わせる。……いったいなんだ？

「……それは、世論があなたを陛下の妃にと押すからだと思いますよ」

「……はあ？ なにそれ？」

想像を超えた話にわたしはぽかんとする。

「……この国では結婚歴のある人間を王妃にできるの？ 普通無理だよ」

「……そうですね、普通は無理ですね」

ヒューがわたしの言葉に頷く。

「わたしの世界の他の国の話だけれど、離婚歴のある女性と結婚するために退位した国王がいるよ。王冠を賭けた恋と呼ばれてるけど」

「王冠を賭けた恋か、なんとも情熱的な話ですね」

ブラッドが意味ありげに流し目をくれる。

「……なんだろ？」

「ブラッド、イルーシャ様にまで色目を使うのはやめろ」

あ、そういうことなんだ。

「気にしてないから、大丈夫だよ」

「……いえ、少しは気にしてもらえると嬉しいのですが」

こころなし肩を落としたようにブラッドが呟いた。それを無視してヒューが続ける。

「……話を戻しますが、この国は他の国と違って特殊な事情があるんです。イルーシャ姫が目覚めたら、その代の王か王子が姫と結ばれると言われています」

「へえ、そうなんだ」

「……あれ、今なにか変なこと言わなかった？」

もう一度、ヒューの言葉を思い返す。

イルーシャ姫と、王か王子が結ばれるとか何とか。

——イルーシャ姫はわたし。王は力デイス。……ってことは、力デイスとわたしが結婚するってこと？

「え、ええええ？」

「イルーシャ様、反応が遅すぎます」

ヒューのその突っ込みにも激しく動揺したわたしは言い返すことができなかった。

05 天敵

「カデイスと結婚なんて冗談でしょ？」

まあ、向こうもそう思ってると思うけど。

「イルーシャ様、そうは言いますが、民意というものは無視できないものですよ」

「それはそうかもしれないけど、お互い嫌いあってるのに、結婚なんて無理でしょ」

真面目に言ってくるヒューに、正直唸りたい気分では返す。

「……陛下のことが嫌いなんですか？」

「ああまで言われて好きになる方がどうかしてると思うけど。わたしにとってカデイスは天敵だよ」

「天敵か、これはいい」

なにがいいんだかよく分からないけど、ブラッドが膝を叩いてウケている。

「まあ、陛下はそこまであなたを嫌ってるわけではないと思いますよ。いや、むしろ……」

「むしろ……、なに？」

意味ありげに言葉を濁すブラッドにわたしは首を傾げると、彼はふっと笑って首を横に振った。

「いや、俺が言うようなことではありませんね。もしかしたら、そのうち陛下からなにかあるかもしれませんよ」

「……なにそれ？ 全然訳分からないよ」

「いいんですよ、無理にお分かりにならなくても。では、そろそろ我々はおいとましますよ」

えええ？ ちょっと、それって言い逃げじゃないの？

「おい、ブラッド」

「おまえにはきちんと説明してやるから」

そう言って、せき立てるようにブラッドがヒューの肩を軽く叩い

た。

「それでは失礼します、イルーシャ様」

「失礼いたします」

ブラッドとヒューがそれぞれ騎士の礼をして部屋を退出する。

「……なんなの？」

一人残されたわたしは疑問符だらけだ。

そんなところに、シェリーがやってきた。なんでも、エトール侯爵令嬢のアイリン姫がわたしに面会を求めているという。

……なんだか来客の多い日だなあ。

面識はないけど、身分の高い人みたいだし、会った方がいいのかな。

そう思っ通してもらうように言うと、しばらくして鈴を転がすような声が響いた。

「まあっ、伝説の姫君が目覚められたという噂は本当だったのですね！ おとぎ話にある通り、本当にお綺麗な方！」

現れたのは金髪碧眼のお姫様。

うわあ、可愛いなあ。

いかにも純真無垢そうな可憐な姫に、わたしは目を細める。

わたしは一目でこの可愛い姫が気に入ってしまった。

「はじめまして。エトール侯爵の娘、アイリンと申します。イルーシャ様、よろしくお願い申し上げます」

「こちらこそ、よろしくお願いいたします」

わたしも見よう見まねで挨拶を返す。それからアイリン姫に席に着いてもらった。

シェリーに女の子が好きそうなお茶菓子とお茶を出してもらってわたしとアイリン姫のお茶会が始まった。

「実はわたくし、目覚めたばかりで記憶が抜け落ちておりますの。ですから、伝説の姫君などと呼ばれて少々戸惑っています。もしよろしければ、その伝説というものをお話頂けるとありがたいのですけれど」

わたしのお姫様言葉、変じゃないよね？

この言葉遣いは疲れるけど、アイリン姫にとっては、わたしはあくまでイルーシャ。伝説の姫君なのだ。その姫君のイメージを崩すようなことは、なるべくしないようにしないと。

でもまあ、わたしの即席お姫様言葉はどうやらアイリン姫に通用したようだ。

アイリン姫は瞳を見開いて、まあ、と頬に手を当てると、お気の毒に、と呟いた。

アイリン姫の口から紡がれたのは、五百年も昔の物語。

悪い魔法使いに眠りにつかされた王妃が、再び半身たる王に巡り合うのを待っているというおとぎ話だった。

それに加えて、この国ではイルーシャ姫が目覚めれば、その代の王が王子がアークリッド王の生まれ変わりであるということが通説のようになっていいることも話してくれた。

ああ、だから力デイスはわたしによりによって俺の代でと言ったんだ。

そんな人物が突然目覚めたら確かに鬱陶しく思うだろう。

……だからって、あの態度はどうかと思うけどね！

「あの……大変不躰ではありませんけれど、本日はわたくし、イルーシャ様にお願いがあつて参りましたの」

「……お願いですか？」

わたしがその先を促すように首を傾げると、姫は自分の手をきゅつと握りしめて思い詰めたように言った。

「はい、実はわたくし、陛下の妃候補なのです。ですが、わたくしには事情がありまして、なんとかそれを辞退することはできないものかと考えまして……。そんな時にイルーシャ様が目覚められたと聞き及びましたので、図々しくもこちらに押しかけて参った次第ですの」

なんでも、アイリン姫には幼馴染みに想い合っている人がいるらしい。

同じくらいの家格らしいので、その人と結婚するのはなんの不都合もないらしいのだけど、婚約を発表しようとした矢先にカデイスから姫の父親へ興入れの打診があったらしい。

その為、幼馴染みとの婚約話は立ち消え。

王と普通の貴族じゃ、王の意志が優先されるに決まってるものね。「イルーシャ様が目覚めてくださって、本当に助かりましたわ。もうわたくし達、二人で駆け落ちする覚悟までしておりますもの」「駆け落ちする覚悟っていったら相当だよな。今までなに不自由なく生活していた家や家族を捨てるほどの覚悟。

わたしには好きな人がいたことないから、その気持ちはよく分からないけれど。

「それほどまでに想い合っているのなら、わたくしが王に事情を話しますわ。言ってお分かりにならない王ではありませんもの。大丈夫、姫が心配なさることなど、なにもありませんわ」

「イルーシャ様……」

うるうる瞳を潤ませてアイリン姫がわたしを見つめる。

うつ、可愛いなあ。わたしが男だったら、絶対惚れてたね。

それにしても、カデイスは失恋確定だよな。ざまあ、なんて思うほどわたしは鬼ではない。いやちよつとだけ思ったかもしれないけど。

それから、わたしに何度もよろしくお願いしますと言って、アイリン姫は帰っていった。

「うつ、疲れたあー」

誰もいない部屋でわたしは延びをした。

本当、慣れないことはするもんじゃないわ。

ちよつとだらしく長椅子に寝そべりながら、これからのことを考える。

このまま寢室に行つて寝てしまおうか。

「んー、どうしようかなあ……」

でもカデイスに姫の事情を話すつてアイリン姫と約束したんだよなあ。やつに会つのは気が重いけど、うん、やっぱり約束は守らないとね。

「……よしっ」

気合いを入れて、長椅子から立ち上がる。

——天敵であるカデイスにこれから立ち向かうために。

そんなわけで、わたしは今、王の執務室の前にいる。

ドアの前には私と同じくらいの歳の近衛騎士が立っていた。栗色の髪と青い瞳はどこかで見た色彩だ。

「あれっ、ひよつとしてあなた、リイナさんの」

「はい、息子です。イルーシャ様には、母がお世話になっております」

「いやいや、お世話になつてるのはこっちだから」

近衛に息子がいると聞いてたけど、ダリルさんに似ててかつこい。もうちよつとすると、男前と騒がれそうな容貌だ。

名前はマーティンと言うらしい。歳は私より一つ下の十八歳。マーティン君と呼んだら、君はお止め下さいと嫌がられた。仕方ないので、心の中だけでマー君と呼ぶことにする。

「カデイスに会いたいんだけど」

マー君に取り次いで貰つて、部屋に入った途端、こう言われた。

「またおまえか」

なにおうつ!?

聞こえよがしに溜息までつかれて、臨戦態勢に入りそうになった

わたしは、はた、と思いとどまった。

いけない、いけない。わたしはアイリン姫の結婚話についてカデイスを説得しに来たんだった。

「あの、アイリン姫のことなんだけど」

「……なんだ、会ったのか？」

「うん、さつきね。あの、姫には他に好きな人がいるんだって。でもその人と一緒になるには、もう駆け落ちするしかないって思い詰めてた。だから、姫との結婚を考え直してくれないかな？」

「好きな人がいる、か。それがどうしたというんだ。王族や貴族の結婚は、恋愛感情などとは無縁のものだ。おまえには政略というものがどういうものか分かっていないようだな」

「でも、少なくともカデイスは姫のこと好きだよな？」

わたしがそう言っていると、カデイスは少し不愉快そうに眉を顰めた。

「好きとか嫌いとかでの問題ではない。本当に口の減らない女だな、おまえは」

うわっ、なんか言っちゃいけないことだった？ あんな可愛い姫なら好きにならないわけはないと思って、つい言っちゃったけど。

「……そうだな、どうしても言うなら、考えてやらなくもないぞ」
「え、本当！？」

思わず、わたしは色めきたった。

なんだ、カデイスってば結構話分かるじゃない！

「アイリンが駄目なら、おまえが代わりに王妃になることになるが、それでもいいか？」

「え……？」

思わず頭の中が真っ白になる。

なにを言ってるんだこの男はー！？

「ななな、なに言ってる……っ、わたしが王妃になれるわけないじゃないっ。だ、だって、わたしはひ、人妻ですからー！」

昔の王の妃だったなら、そうだよな？ あ、この場合、正しくは未亡人か。

叫ぶように言ったら、カデイスがくつと笑いだした。

「おまえほど人妻という言葉が似合わない女もいないな。落ち着きが全くない」

そんなことないと言えないのが、ちょっと哀しい。どうせわたしには人妻の色気なんかありませんよ！

「確かに色気はないが……まあ、それは追々どうにかなるだろう」「はあ？」

意味が分からず、思わず首を傾げていると、カデイスに腕を引っ張られた。そのままカデイスの腕の中に閉じこめられると、カデイスは感心したように言った。

「おまえは抱き心地がいいな」

「——っ!？」

はいーっ!？　ちょっとあなた、どうしちゃったんですか!？

突然の事態に混乱するわたし。

そんなわたしの気持ちもお構いなしに、カデイスの大きな手が背中を滑る。その途端、ぞくりとした感覚が背筋に走った。

思わずびくりと反応してしまったわたしに、カデイスがにやりと笑った。

「なんだ、ここが弱いのか？」

「なに人の背中撫で回してるのよ、このセクハラ大王！　離せえええっ!」

「なにを言ってるのか分からんが、とりあえず嫌がってるのは分かった」

「分かってるのなら、とつとと離しなさいよ！　この馬鹿——っ!」

「何度も俺を馬鹿扱いするのはおまえくらいだな」

滅茶苦茶に暴れるも、カデイスの腕は緩まない。

本当にもう、嫌だああああ！

「カデイス、いい加減にしときなよ。嫌われるよ」

突然声が響いて、空中からキースが現れた。

いや、もう嫌ってたから！

カデイスもそのはずなのに、どうしてこうなったんだ。

……そうか、嫌がらせか。嫌がらせなんだな？

「キース、助けて！」

「はいはい、お姫様」

キースがわたしの手をとって、カデイスの腕から救い出してくれた。

……が。

なぜかキースはそのまま腕を引いて、わたしをぎゅっと抱きしめた。

「ああ、本当に抱き心地いいね」

なに、そのセリフ。

ひょっとして今までのやりとりを黙って見ていたわけ？

「おまえものぞき趣味とは悪趣味だぞ」

「いやあ、おもしろそうだから、ついね」

じゃあなに？ わたしが困ってるのを見て楽しんでたってこと？

わたしをのけ者して話す二人に、わたしはワナワナと震えた。

「二人とも、わたしで遊ぶな——っ！」

そうわたしが叫んだのは言うまでもない。

06 天敵の異変

「それで、結局アイリン姫との結婚は考え直してくれるの？」

かなり軌道から外れたけど、わたしはアイリン姫のことでカデイスに会いに来たんだった。

「だから、おまえが俺のきさ……」

「却下。断固拒否。お断りします」

「……まだ皆まで言っていないぞ」

カデイスがなんかほざいてるけど、やつの言いそうなことは大体分かる。

聞いてしまつて、またからかわれるのはごめんだ。

でもこれって、こっちの一方的な願いなんだよね。結婚の申し込みをなかつたことにしてつて言つて、はい分かりましたつていうわけにはいかないか。なにか取引に使える材料……あ、そうだ。

「そう言えば、わたしのこと観光資源とか言つてたけど、見せ物にでもなるわけ？」

齒に衣着せずに聞いたわたしに、キースが苦笑した。

「まあ、ある意味そうかもね。国民に姫が目覚めたことを知らしめる必要があるから」

「世間一般には、あくまでもイルーシャ姫として振る舞えつてことだよな？ でも、わたし、ここの礼儀作法とか知らないけどどうするの？」

「それについては、君に学んでもらうしかないね」

「……やっぱりそうなるか。」

「下働きとかで雇つてくれても良かったんだけどなあ」

むしろそっちの方がわたしの性にあっている。姫とか、どう考えでも柄じゃない。

「その容姿じゃ無理だろう」

「うん、無理だね。むしろ現場が混乱すると思うからやめてほしい

ね」

容赦なく二人に言われて内心肩を落しながら、わたしは自分の白い手を観察する。

これはどう見ても水仕事なんかしたことありませんって手だよな！。爪まで綺麗に磨かれてるし。

「……分かった、イルーシャ姫として振る舞う。ただし、条件があるんだけど、いいかな？」

「なんだ？」

「アイリン姫の輿入れの件は白紙に戻すこと。代わりにわたしが王妃に、とかふざけたこと言わないこと」

「そんなのでいいの？ 欲がないなあ」

驚いたようにキースがわたしを見る。

いや、ここ大事なことだから！ 無理矢理王妃にされたらたまったものじゃない。

それに、アイリン姫にカデイスを説得するって約束したしね。

「ふん、俺もアイリンに駆け落ちされてしまったら醜聞になるしな。仕方ない、承諾しよう」

……やった！

どこまでも偉そうにカデイスが言うのも、この時ばかりは気にならなかった。

浮かれたわたしは、ついカデイスの手を取ってぶんぶん振ってしまっつ。

「良かったあー。カデイス、ありがとう！」

「あ、ああ……」

なんかカデイスが引いてる気もするけど、まあ気にすることもないか。

アイリン姫、喜ぶだろうなあ。

良かったね、姫。

わたしはにこにこしながら、また伺いますと言っていたアイリン姫の愛らしい顔を思い浮かべる。

「なんと言つか、君って最強だよね」

溜息とともにキースに言われたけど、どういう意味だったんだろう、謎だ。

わたしは一仕事終えた気がして、上機嫌でお風呂に入っていた。もう侍女さん達にお風呂に入れてもらうのも恥ずかしくないよ。慣れって怖いね！

「イルーシャ様、なにか良いことでもあられたのですか？」

シェリーとユーニスにそう尋ねられたので、アイリン姫のことを二人に話した。

「まあ、それは良いことをなされましたわ、イルーシャ様！」

「アイリン様もきつとお喜びになられるでしょうね」

二人が褒めてくれるのをわたしはにこにこにやにやの中間くらいの顔で笑って受け止めた。

お風呂に入っている間にシェリーに渡された冷たいお茶を口に含むと、火照った体が少し静まるような気がした。うーん、至れり尽くせりだなあ。

「でも、そうしますと、陛下のお相手がまたいない状態になってしまいますわね」

「あら、シェリー、イルーシャ様がいらっしゃるじゃない」

ユーニスのその言葉に思わず噴き出しそうになって、わたしは慌てて口に含んだお茶を飲み込んだ。

「いや、それはないから！」

「でも、イルーシャ様が一番の有力候補なんですのよ。なんといつても、伝説の姫君なんですもの！」

うつとりと胸の前で指を組み合わせて、ユーニスが言う。

「あら、でも伝説には必ず王族の方と結ばれるとはありませんわよ」
「え、そうなの？」

てつきり王か王子と結婚しなければならぬと書いてあるものだ
と思つてたけど、そうじゃないらしい。

わたしが聞き返すと、シェリーは神妙に頷いた。

「そうですね。ですからイルーシャ様がどなたを選ぶのかはご自由
なのです。わたしのお薦めはキース様なんですけど」

「……はい？」

なんでここでキースの名前が？

「当代一の魔術師で、現国王の従兄弟。身分に不足があるとは思え
ませんし、イルーシャ様ととてもお似合いですわ！」

夢見る乙女の表情でシェリーが力説する。

キースつて国王にタメ口だから偉いんだろうなと思つてたら、従
兄弟だったのか。なんか納得。

「あら、でしたら陛下も負けてませんわよ。陛下は剣を取らせたら
誰にも負けませんもの！」

負けじとユーニスが拳を握つて叫ぶ。

二人の意見が白熱するのをわたしはただ呆然と聞いていたけど、
だんだん限界が近づいてきた。

「……とりあえず、もう上がつていいかな？ いい加減のぼせそう」

——百合の花と白い菊の花が見える。

聞こえてきたのは、幼い頃からよく知っている近所の人の声。

「原田さんのところの由希ちゃん、まだ二十歳前だつていうのに、
かわいそうにねえ」

「残された家族も気の毒よねえ」

——なにを言つてるの？

それじゃまるで、わたしが死んだみたいじゃない。

高いところから落ちるような感じがして、びくりとして目を覚ますと、また昨日と同じ夜明け前だった。

なんだか連続して嫌な夢見たなあ。

夢の中でわたしが死んでるとか、冗談にしても笑えないよね。

豪華なベッドの中で溜息をついて、わたしは寝返りを一つ打つ。わたしが穴を開けたバイトとか、どうなってるんだろう。行けなくなった連絡はお母さんがしてくれるだろうけど。

なんだか泣きたくなってきた、わたしはシーツを引き被る。そして、少しだけ泣いた。

「おはようございます、イルーシャ様」

着替えと朝食を終えたわたしを待ち受けていたのは王室お抱えの教師達だった。

早速今日からか。カデイス、仕事早すぎるぞ！ 今日くらいはゆつくりしていたかったのに。

とりあえずわたしが学ぶのは、礼儀作法と語学と、歴史。これだけでも、わたしにはいっぱいいいっぱいだ。

けど、中学や高校でもこんなに勉強したことはないほど、わたしは頑張った。

「イルーシャ様、大丈夫でございますか？ あまり根を詰めないでくださいましね」

口調は丁寧だけど厳しい先生にしごかれ、午後の休憩時間にはすつかりぐつたりしていたわたしをリイナさんがいたわってくれた。

「ありがとうございます」

なんというかリイナさんは、母親を連想させる。

といっても、うちのお母さんは放任だったから、リイナさんはわ

たしの理想の母親像に近いのかもしれない。

そんなことを考えながら、リイナさんが入れてくれたお茶を飲んで一休みする。

ああ、コーヒー飲みたいなあ。

紅茶も悪くないけど、コーヒーのが好きなのよ。でもなければしょうがない。

「なんだ、一目で既にへばっているのか」

そう言っただけでかかと部屋に入ってきたのはカデイス。

一応女の部屋なんだから、少しは遠慮しろ。

「ちよつと、ノックくらいしなさいよ」

「リイナには断ったぞ」

部屋の主に断れよ！

思わず顔がひきつりそうになる。

そのリイナさんはカデイスのお茶の用意に行ってしまったらしく、ここにはいない。

「わざわざわたしの部屋に来るなんて、カデイスって暇なの？」

「暇ではないが、おまえがきちんと学んでいるか確認する必要があるからな」

思わず喧嘩腰になってしまったわたしの言葉に顔をしかめながらもカデイスが答える。

「そんなことしなくてもちゃんとやるよ、約束だし」

「そうか。是非ともこれからもうあつてほしいものだな」

くうつ、なんて嫌味なやつだ！

せつかくの休憩なのに、よけい疲れた気がする。

ちよつとぐつたりしていると、お茶の支度をして戻ってきたリイナさんが戻ってきた。

「まあ、イルーシヤ様、陛下とすっかり仲良くなられたんですね。さすがイルーシヤ様ですわ！」

なにがさすがなのか分からないけど、激しく勘違いされていると思うのは、わたしの気のせいだろうか。

「ああ、仲良くなったぞ。ほら、この通りだ」

そう言つと、カデイスはわたしの隣に座つて、わたしの肩を抱き寄せた。

「まあっ、そこまで仲良くおなりになつて。素晴らしいですわ!」

——こいつ、後で絶対殴つてやる。

わたしはテーブルの下で拳を固めた。

「それでは、わたくしは下がらせていただきますね。どうぞ、ごゆるりとしてくださいませ」

ちよっ、リイナさん、変な気を回さないで!

リイナさんがこの場を去ったことで、わたしはカデイスと二人きりになる。

早速拳を振りあげてやったけど、残念ながらカデイスにあっさりかわされた。ちえっ。

「凶暴な女だな、おまえは。姫君は拳で殴りかからないぞ。姫として振る舞うと自分で言ったのをもう忘れたのか」

……うっ。

カデイスの言葉に思わずつまつてしまつたわたしだったけど、……いやいやいや。

「そっちが嫌がらせするからでしょ。わたしを嫌うのは分かるけど、いい加減にしてよね」

わたしがそう言つと、カデイスはなぜか瞳を見開いた。

なに、その驚いたような顔は。

「……別に嫌つてはいない」

「嘘でしょ」

「なぜ速攻で返すんだ。……別に嘘はついていないし、その必要もない」

「でも、嫌がらせしてるじゃない。いちいち嫌味言ってくるし」

嫌味に関しては、まあ、わたしの方も酷いけどね。

そう言つと、カデイスはくしゃりと前髪を掻きあげ、溜息をつい

た。

「それは、なんだその、おまえの反応がおもしろいからだ」

おもしろいつて、なんだ！

勢いよく長椅子から立ち上がりかけたわたしだけど、手をカデイスに引かれ、あっと思ったときには彼の胸に転がりこんでしまっていた。

「ちよつと……っ」

カデイスの膝の上に座る形になってしまったわたしの背に彼の手が回される。

ちよつと、どうなってるの、これーっ！？

背中に回されたカデイスの手に力がこもり、わたしは息を止めてカデイスを見つめてしまった。

「どうしてだろうな、伝説の姫君など面倒な存在だと思っていたというのに」

そう言うカデイスの藍色の瞳が揺れる。

な、なんかおかしいことになってる気がする。

リイナさん、お願い今すぐ帰ってきて！

わたしの願いもむなく、カデイスの手がわたしの顎をそつと持ち上げた。

こ、これはひよつとして。

や、やだ……！

カデイスの顔が近づいてきて、わたしは思わずギュッと目を瞑った。

頬に柔らかな感触があたって目を開く。

ひよつとして今の感触は……キス？

突然のことに呆然としてみると、なぜかカデイスは苦しそうな顔をした。

「そんなに俺を怖がるな」

「む、無理だよ、なんでいきなりこんなこと……」

するの、と言おうとしたその時、ドアをノックされる音が響いた。

リイナさん帰ってきてくれたの!?

「はいはいはいっ!」

カデイスの腕が緩み、天の助けとばかりに元気よく返事してわたしは立ち上がった。

部屋に入ってきたのはリイナさんじゃなくてキースだったけど、まさに天の助けとはこのことだ、キースありがとう!!

「なぜおまえはこの頃合いになって来るんだ」

カデイスが唸るように言うと、キースが眉を上げた。

「君がなにを言いたいのかわからないんだけど。カデイス、僕はそろそろ仕事してほしいと言いに来ただけだよ。報告書がたまって後で苦労したいなら退散するけど」

その言葉で観念したらしいカデイスは、溜息を一つつくと立ち上がり、わたしの方を向く。

「また来る。覚悟しておけ」

か、覚悟ってなんですか!?! とつても知りたくないんですけど
ーっ!

混乱するわたしに、事態を察したらしいキースが声をかけてきた。

「……大丈夫?」

ごめん、たぶん大丈夫じゃないです。

07 望郷と喪失

それから後の授業は、散々だった。

カデイスが残っていた言葉が気になってつい上の空になってしまつて、先生にしかられるし。

ひよつとして、あれはわたしをからかったただけだったりして。

……そうだとしたらカデイスめ、どうしてくれる。せつかくまじめに勉強しようとしてるのに。

ぐたつとして長椅子に寄りかかっていると、リイナさんがキースからの伝言を伝えてきた。

今日の夕食をカデイスとキースで一緒にどうかとお誘い。

体は鉛のように重くて正直疲れていたけど、わたしはキースの誘いを受けることにした。

この間の晩餐会は途中で退席しちゃったし、わたしも彼らに確認したいことは山ほどあるしね。

というわけで、わたしは今ガルディア国王カデイス・ディーン・ディレグ・ガルディア陛下と、同じくガルディア国魔術師団長キース・ルグラン・レグ・アレグリアとの晩餐会に参加中だ。

キースは前国王の弟であるアレグリア公爵の嫡男なんだって。

ちなみに魔術師としては、百年に一人出るか出ないかの逸材だとか。どんだけ天は人に二物も三物も与えるんだ。

「すごいなあ。わたしも魔法とか使ってみたいな」

「よかったら教えようか。魔力はありそうだし、簡単なものなら使えるんじゃないかな」

「本当！？　じゃ、教えて」

「うん、いいよ」

やったあ。言ってみるもんだね。

「おい」

キースに約束を取り付けてにこにこしてると、不機嫌そうな声が前の席から響いた。

「さっきから、なぜキースの方ばかりみて話すんだ、おまえは」

「え、ええ……？ な、なぜかな？」

カデイスに声をかけられて、つい挙動不審になるわたし。

ついさっきのことで、非常に気まずいんだけど。

「いきなりせまられば、それは避けられても仕方ないと思うよ」
ひいつ、キースってばそんな核心を突くようなことをつ。

なんでカデイスがあんなことしたのか聞きたいけど、なぜだか聞いたら後悔しそうな気がするんだよね。

うつ、おかげでせつかくの食事の味がよく分からなくてもつたいない。

「口づけたかったんだから、しょうがないだろう」

「な……っ」

カデイスの爆弾発言に、わたしは思わず持っていたナイフとフォークを皿に落としてしまった。

「なんつてこと、あつさり言うのよーっ！」

「本当だね、我慢というものを知らないことを公言するなんて獣と一緒にだね。危ないから近くに寄らない方がいいよ」

「正直に話したただけだろう。むしろキース、おまえのような腹に一物ありげなのが一番たちが悪いんじゃないか？」

「……君は僕に喧嘩を売っているのかな？」

「うわあ、なんだか剣呑な雰囲気だ！」

わたしは慌てて話題を変えることにした。

「ねえ、昼間先生に教わったんだけど、ここって結構大きな国なんだよね？」

「ああ、この大陸では一番大きいぞ」

「ここの気候ってどんな感じなの？ 今は春みたいだけど」

「この国の気候は一年中こんな感じだよ。他の国に行くところはいかないみたいだね。暑かったり寒かったり色々だよ」

「……一年中春……。私の頭に某漫画が浮かんた。」

「じゃあ、常春の国ってこと？」

「常春の国か、いい表現だね」

「思ってたが、おまえ、割りに学があるな」

「……元ネタがギャグ漫画だということは言わないでおこうとわたしは心に決めた。」

「……日本には九年間の義務教育があるから。わたしはそれから三年間高校に通ったけど」

それで結局フリーターやってたんだけどね。学校の勉強が役に立ったと思ったことってあんまりないなあ。

「九年の教育が義務なんだ。すごいね」

「え、そうなの？」

当たり前すぎて、そのすごさがいまいち分からない。

「ああ、すごいぞ。この国も三年の教育を推奨してはいるが。それも義務ではないしな」

「へえ……。実は日本ってすごかったんだねえ。そういえば、日本語の識字率はほぼ百パーセント……。ほぼ完璧らしいよ」

「それは民間人も含めて？ ニホンって国はどのくらいの人口なの？」

「日本人全般だよ。人口は一億二千万人超えてる」

わたしがそう言うと、二人は絶句した。

「……一応確認するけど、桁を間違えてるわけじゃないよね？」

「間違えてないよ。一億二千万人で合ってる」

「おまえがいた国は島国と言っていたが、実は大陸の間違いじゃないのか？」

「うつん、島国で合ってるよ。南北に細長くて国土は狭い、……。ああ、地震大国でもあるかな」

「……地震とはなんだ？」

見るとカデイスが不思議そうな顔をしている。

「あれ、地震知らない？ 地面が揺れるの」

「……よくそんなところで生活してられるな。落ち着かないだろう？」

「多少の揺れくらいなら平気だよ。みんな慣れたものだよ。だってそれが日常だもの」

「……聞けば聞くほど、二ホンって訳が分からない国だね」

キースが感嘆したような溜息をつく。

「そんなに驚かれるようなことかなあ。わたしにとっては、四季がない方が驚きなんだけど」

春は満開の桜。夏は雨に濡れる紫陽花。暑い日差し、空に浮かぶ入道雲。秋には紅葉。冬はいちめんの雪景色。

ああ、なんて綺麗な光景なんだろう。

こうやって思い出してみると、日本って捨てたもんじゃないよね。

その後もわたしは二人の質問を受けて、時々しどろもどろになりながら受け答えをした。

「……うあー、疲れたあー」

……このセリフ、昨日も言ってたような気がするな。

お風呂に入って寝間着に着替えたわたしはふかふかのベッドに沈んだ。

「わたしに専門的なこと聞かれても、分かるわけじゃない……」
まさかの質問責めにたじたじになりながら晚餐会を退散したわたしは、溜息をつくしかなかった。

質問してくる二人は完全に施政者の目だったよ。……お願いだか

ら、一般庶民に多くを求めないでほしい。

ああ、でもわたしって日本で結構恵まれた生活してたんだな。…

…こんなふうに失ってから分かることってあるんだね。

ふいに涙腺が崩壊しかけて、わたしは無理矢理目を擦る。

——もう寝よう。そうしよう。

疲れた体を休めるために、わたしは眠る。……それで真実を知ってしまうことになるかも知らずに。

目に入ってきたのは、いちめんの白い菊と百合の花。
泣いているお父さんとお母さん。

うちは共働きだったから、あまり構ってもらった記憶はない。だから放任だとばかり思ってた。
けれど——。

祭壇の前には、棺。

その中に誰かの遺体が安置されている。
綺麗に化粧された青白い顔。

棺に入れられているのは……わたし？

「——それではお別れです」

無情に響く葬儀を取り仕切る人の声。

わたしを入れた棺は狭くて暗い穴の中に入っていく。

なにをするの、やめて。

わたしは生きてる。ここに、今ここにいるのに。

お願い、待って。

だって、わたしはまだ。

その願いも届かずに、わたしの体は炎に包まれる。
燃えてしまう。

わたしのからだ、わたしの体が。

——無くなってしまう！

「やだあぁっ！！」

感じるはずのない熱さを感じた気がして、思わずわたしは飛び起きた。

視野に入ってきたのは、未だ慣れない豪華な内装。

「あ……」

……嫌な夢。

よりによって、あんな——。

ぱたぱたと手元のシーツに水滴が落ちる。

薄暗い部屋の中、わたしは流れる涙を拭うこともできずに、ただただ泣き続けていた。

「イルーシャ様……」

翌朝、わたしの顔を見たリイナさんは驚いたように瞳を見開いた後、冷たいタオルを持ってきてくれた。

「イルーシャ様、いったいなにがあったんですの？」

冷たいタオルをわたしの目に当てながら、心配そうにリイナさん

が聞いてくる。……よつぽど酷い顔してたんだろうな。

「なんでもないんです。……ただ、少し思い出してしまっただけで」

「まあ……イルーシャ様、いろいろとお疲れなんですわ。今日はお勉強を取りやめるように陛下に申し上げてきますわ」

「……ごめんなさい。お願いします」

自分でもかなり打ちのめされているが分かってたから、リイナさんの申し出は正直とてもありがたかった。

その後、リイナさんはわたしを薔薇の花びらを浮かべたお風呂に入れて、明るい色のドレスを選んで着替えさせてくれた。

「今日一日、ゆっくりされたらいいと思いますわ。……ああ、そうですわ、庭園をご覧になると良いかと。こちらの庭園は花がとても綺麗ですの。イルーシャ様もきつと楽しめますわ」

わたしはリイナさんの提案に従って、軽く朝食をとった後、庭園を散策することにした。

「それでは、わたくしはこちらに控えておりますので。ごゆっくりどうぞ」

リイナさんのありがたい申し出に頷きながら、わたしはリイナさんを庭園のテーブルに残してゆっくりと歩きだした。

「本当に綺麗……」

きちんと管理されている庭園は、色とりどりの花に彩られていて、わたしは思わず感嘆の溜息をつく。

「ここは管理が行き届いてるからな」

聞き覚えのある声がして振り向くと、そこにはなぜかカデイスが立っていた。

「どうして、ここに」

「リイナに言われた。おまえが沈んでいるようだから、慰めてこいと」

リイナさん……、もしかして仲良くなったというカデイスの言葉を本気にしてる？

「……昨日あの後、泣いていたのか？」

「泣いてないよ」

「昨日俺達が二ホンのことをあれこれ聞いたから、おまえは故郷を思い出したんだろう？」

——今はそのことに触れてほしくなかったのに。

わたしはカデイスから顔を背けると、また溢れてきそうな涙を堪えた。

「ユーキ」

カデイスがわたしのことを名前で呼んだのは初めてじゃないだろうか。

……でもやっぱりユーキになるんだね。

もう、わたしの名前を正しく呼んでくれる人はいないのかも。

手を引かれて無理矢理カデイスへと向かされたわたしは、みつともない泣き顔を晒してしまった。

「ユーキ、泣くな」

カデイスは苦しげに顔を歪めると、私を抱きしめた。

「……無理だよ」

「ユーキ」

「そんな呼び方しないで。わたしはユーキじゃない。由希、原田由希だよ。ちゃんと呼んでよ」

「……すまない、俺にはユーキが言うようには呼べない」

わたしの無理な要求に、カデイスが謝った。あの俺様なカデイスが。

わたしはカデイスに抱きしめられたまま、ぼうつと思う。

「おまえが一人で知らない場所に放り出されて不安だろうと言うことに気がつけないで悪かった。今もさぞ、心細いだろう。……それでも、俺はおまえがここに来てくれたことを良かったと思っている」

……今、カデイスはなんて言っただろう。

——わたしがここに来てくれて良かった？

わたしはカデイスの胸に腕を突っぱねて、カデイスから距離を取る。

「いくらなんでもそれは酷いよ、わたしは元の世界に帰りたいのに」
「ユーキ、おまえを傷つけるつもりで言ったのではない。……俺は、おまえが好きなんだ」

「——嘘」

「嘘じゃない」

「……嘘だよ。好きなら、なんでこんな酷いこと言うの」
あまりのことに涙がこぼれる。

ひどい、酷いよ、カデイスは酷い。

「……確かに、俺は酷いな。だが、おまえが傷つくと分かっている、おまえを帰したくはないのだ」

「それは、わたしに利用価値があるからでしょ。だから、そんな言葉で誤魔化そうとしてるんだ」

「ユーキ、それは違う」

延びてくるカデイスの腕をわたしは避ける。

「なにが違うの、傷つくのが分かかって言うなんて……」

泣きながら、わたしはじりじりと後ろに下がる。

今はカデイスの顔を見たくなかった。

だから言ってしまった。ただの八つ当たりだと分かっているながら。

「カデイスなんて、大っ嫌いっ！」

わたしは身を翻すと、カデイスから少しでも遠ざかるために走り出した。

08 決意

——どのくらい走っただろう。

気がついた時には、わたしは広い庭園の中で迷子になっていた。

……わたし、なにをやってるんだろう。

きっとリイナさん、わたしを探してる。戻らなきゃ。

自分で自分が情けなくなりながら、手の甲で涙を拭う。

「おや姫君、こんなところでどうされたんですか？」

ふいに声をかけられて、見るとそこにはダークブロンドの髪と、金の瞳の男の人が立っていた。

——誰だろう？

なんとなく、キースと似通った雰囲気を持っている。……魔術師団の人だろうか？

「あ、あの迷子なんです……」

いい歳してちょっと恥ずかしかったけど、私は正直に告白した。

「伝説の姫君が迷子ですか」

目の前の人は、おかしそくに笑いをこらえている。

「わたしのこと、知ってるんですか？」

「知ってるいるものにも、巷では噂で持ちきりですよ、伝説の姫君が目覚めたと。……今実際に会って、すぐにあなたのことだと分かりました」

「……そんなに噂になってるんですか」

そういえば、アイリン姫もわたしの噂を聞いて訪ねてきたんだっけ。

「ええ、まあ。例えば、儂げな絶世の美貌であるとか。姫君は口が悪く、王を『馬鹿』と罵ったとかですね」

「ええ……っ!？」

まさかの言葉に、思わずわたしは赤くなる。

カデイスを馬鹿って言ったこと、そんなに広まってるの？ これ

じゃ、姫君らしく振る舞うなんて無理じゃない？

「それ、そんなに噂になってるんですか？」

恐る恐る聞くと、その人は平然と頷いてくれた。

「ええ、結構有名ですよ。なんでもその時の叫びを聞いた騎士や侍女がいたそうで」

……うあああつ、なんてこと！

わたしは頭を掻き毟ってこの場を転がり回りたい衝動に駆られたけど、人前でそんなことができるわけない。

「そ、そうなんですか」

なんとか平静を装いながら、わたしはひきつった笑みを浮かべた。

「——ああ、あとこれは秘密なんですが、姫君の中身は異世界人であるとか」

「……え……っ」

さすがにこれは、あの時の晚餐会にいた人物しか知らないはずだ。

……それなのに、なんでこの人は知ってるの？

思わず目の前の人の顔を見返すと、その人はにやりと笑った。――

――善良そうな顔の裏に凶悪なものを見た気がした。

「……あなた、誰？」

——この人は危険だ。

そう感じて、わたしは後ずさる。

「わたしの名は、ウィルロー。姫君、以後お見知りおきを」

ウィルローと名乗ったその人は、騎士の礼をとってわたしの手に恭しく口づける。逃げ出したいのに、なぜかわたしは動けなかった。

「……ああ、せっかく姫君と語らっていたのに無粋な邪魔が入ったようだ。それではまたお会いしましょう、イルーシャ姫」

そう言ってウィルローはわたしの目の前から姿を消した。

やっぱり魔術師だったんだ。けど、あの悪意のある笑いは、いったいなに。

「……ユーキ？」

ふいに声がして顔を上げてみると、目の前にキースが立っていた。
「キース、なんでここにいるの？」

あまりにもキースがタイミング良すぎる現れ方をしたので、つい聞いてしまう。

「カデイスやリイナが君のこと探してたからね。僕は君の魔力を追ってここに来た」

「え、じゃ、キースにはわたしがどこにいるか分かるってこと？」

「必要がなければ使わないけどね。だって嫌だろう？　いつでも、どこにいるか把握されるなんて」

そう言つと、キースは自嘲するように笑った。

魔術師としては超一流だけど、キースはキースで、結構そのことで苦労してるんだろうか。

「……そうなんだ。ごめんね、探させちゃって」

「気にしないでいいから。……それはそうと、今ここに誰かいなかった？」

「あ、うん、いたよ。ウイルローって人」

「……ウイルロー……」

途端に厳しい顔になったキースに、わたしはちよつと驚いた。

「……キース、その人がどうかしたの？」

なんとなく不安になって尋ねると、キースはわたしの肩を掴んだ。

「ユーキ、ウイルローとなにを話した？」

「え……、わたしの噂のこと話したよ。あの人、なぜかわたしが異世界人だつてこと知ってたけど、なんでなの？」

「……そう、ウイルローが……」

キースが厳しい顔のまま呟くのわたしは息をのんで見ていた。
そんなわたしに気づいたキースは、厳しい表情を崩してちよつと笑った。

「……ああ、ごめんね。なんでもないんだ」

……なんでもないって感じじゃなかったけどな。

釈然としない思いでキースを見たけど、もう彼はそのことに触れる気はないようだ。

「君がこんなところにいるってことは、どうせカデイスが君になにか言っただろう？　なんなら、まだここにいればいいよ。反省させるためにも、もう少し君を探させるっていうのも悪くないかもね」
少しおどけたようにキースが笑って言う。わたしもそれにつられて笑った。

ちょうどその時、庭園に柔らかな風が吹いてきて、ささくれ立っていたわたしの心も風いでいく。

ああ、綺麗だな。

揺れる花々を眺めながら、わたしは口を開いた。

「……ねえ、キース」

「うん？」

「変なこと聞くけど、この国の埋葬方法ってなにかな？　土葬？」

この聞き方は、やっぱり唐突だったかな。

キースは不思議そうに首を傾げたけど、律儀に答えてくれた。

「一般的にはそうだね。貴族や王族なんかだと、防腐魔法をかけたりするけど」

「そうなんだ。日本では火葬なんだよね。……だからわたしの元の体、たぶんもう無い」

キースがわたしの言葉に絶句する。

わたしは彼の視線を避けるように横を向いた。

「なんとなくだけど、分かつちゃったんだ。わたし、元の世界ではもう死んでるの。だから、もう元の体には戻れない」

「それは……」

「元の体に戻るか調べてくれるって言ったでしょ？　でも、もう必要ないから調べなくても、いい……よ」

なるべく明るく言おうとしたのに、また泣きなくなってきた。

泣き顔なんか見せたら駄目なのに、わたしの意に反して涙は頬を転がっていく。

「ユーキ」

キースがわたしを見て眉を寄せる。

ほら、キースが困ってる。こんなふうに泣いちゃ駄目じゃない。

「ごめ……、わたし……っ」

いたたまれなくて謝った次の瞬間、わたしはキースに痛いほど抱きしめられていた。

「キー……」

突然のことに驚いて、わたしはキースの名前を呼ぼうとしたけれど。

開きかけた唇をキースの唇に塞がれた。

「……なんで……？」

今されたことが信じられなくて呆然として聞くと、キースはなにかを堪えるように顔をしかめた。

キースは、こんな顔をする人だったろうか。いつも飄々として掴み所のない人だと思ってたのに。

「……もう駄目だ。君はカデイスのものになるかもしれないのに、僕はもう自分の気持ちを偽れない」

わたしがカデイスのものになるかもしれないって、なんのこと？ 混乱するわたしを抱くキースの腕に力がこもる。

「僕は、君が好きだ」

そう言った後にまたキースの唇が落とされる。

「え、あの、あの……っ」

ただ狼狽えるだけのわたしの唇に何度もキースが口づける。

キースがわたしを好き？ どうして？

「キー……、や……、ま……っ、て……っ」

口を開こうとする度に唇を塞がれて、息苦しさに目眩がしそうになる。

抵抗することもできずにくたりと力を失ったわたしの背をキース

の腕が受け止める。

キースは苦しげな顔を見ると、わたしを強く抱きしめた。

「ユーキ、このまま君を――」

「なにをやっている!」

怒声が聞こえてきたと思ったら、次にはキースはカデイスに殴り倒されていた。

ふらりとその場に倒れそうになったわたしをリイナさんが支えてくれる。

キースは切れた口の端を拭くと、ゆっくりと立ち上がった。

「我慢できないのは獣だと言ったのは、おまえではなかったのか」

キースはカデイスのその言葉に答えずに、わたしの方を向く。途端にびくりと体が震えた。キースが今までと違う人みたいに見えて怖かった。

キースはわたしの方に手を広げてなにかを唱える。すると、周囲の景色が一変した。

「どうやら、移動魔法を使われたみたいですね」

わたしにくっついていたリイナさんも、一緒に部屋に送られたらしい。

「それにしても、キース様には驚きましたわ。あのように我を忘れてしまわれるなんて。難攻不落と言われたキース様を陥落されるなんて、さすがイルーシャ様ですわ」

……リイナさん、その「さすがイルーシャ様ですわ」って口癖になってない?

「そ、そんなこと……。わたし全然お姫様らしくないし、キースがわたしを好きっていうのになにかの間違いです。わたし、口が悪くて、がさつですし」

「……知ってますわ」

ちよつとうつろたえながらそう言うと、リイナさんはいたずらっぽく微笑んだ。

「口が悪くても、がさつでも、イルーシャ様はイルーシャ様ですわ。陛下や、キース様が惹かれたのもそんなイルーシャ様ですもの。イルーシャ様は、今のご自分にもっと自信を持つべきですわ」

「そ、そうかな……」

二人に好かれてると言うのは、ちよつと自信がない。この容姿だから好きだつてことも充分考えられるし。

「そうですね。飾らない今のイルーシャ様はとても魅力的です」

「そ、そんなに褒められると、ちよつと照れるんですけど……」

思わず赤くなつた頬を両手で隠す。リイナさんは、そんなわたしにふふ、と笑う。

「ほら、イルーシャ様はとても可愛らしいですわ」

リ、リイナさん……、もう勘弁してください。恥ずかしいです……。

褒められ慣れてないわたしには、既に許容量を越えている。

「それでは、わたくしお茶を淹れてきますね。イルーシャ様も二人の男性に告白されているいろいろお疲れでしょう。今度こそ、ごゆっくりしていただかないと」

リ、リイナさん、ひよつとして両方とも見てたの？

内心冷や汗をかく思いで聞くと、リイナさんはにこやかに笑つた。「ええ、もちろんですわ。こんな素晴らしいものを見逃す手はありませんもの」

こ、これは、恥ずかしすぎる。

よろよると、定位置の長椅子に腰をかけるとわたしは肘掛けにくつたりともたれ掛かつた。

いや、とにかくいろいろありすぎた一日だった。

帰れなくなつてしまったのを哀しんでたはずなのに、それもそれほど哀しくなくなつてきた。

……いや、まだちよつと心が痛いけどね。

でも、どんなに泣いても、わたしはここで生きていくしかないん

だ。だったら、とことん、イルーシャとして生きてやる。

——イルーシャ様は、イルーシャ様ですわ。

さつきリイナさんが言った言葉を思い返す。

……うん、そうだね。イルーシャになっても、わたしはわたし。ただ、姿が原田由希からイルーシャに変わったただけだ。

「イルーシャ様、落ち着かれたようで、よかったですわ」

お茶を出してくれながら、リイナさんが微笑んだ。

「うん、わたし、決めたの。自分らしく生きることにするって。リイナさんのおかげだよ、ありがとう」

おいしいお茶を飲んで、わたしはにっこり笑った。

明日、カデイスとキースにわたしの決意を報告することにしよう。

……二人からの告白は、正直どうしていいか分からないけど、それはとりあえず、保留と言うことにしておこう。……うん、そうしよう。

09 新しい世界

決意はしたものの、やっぱり二人に面と向かって言うのは恥ずかしい。

わたしはぐるぐると巡る思いと戦いながら、花々が咲き乱れる庭園をやっぱりぐるぐると歩いてた。

「……なにをやってるんだおまえは。変なやつだな」

問題の一人が現れたのに驚いて、わたしは飛び上がってしまった。
「カ、カデイス、なんで……？」

「窓からおまえがここにるのが見えたから来てみただけだ。さっきのおまえの行動は端から見たら奇行にしか見えんぞ」
「う」

まったくその通りなので、わたしはなにも言い返せない。

「……なにか悩んでるのか？ 俺とキースのせいかな」

「うわああ、カデイスの馬鹿、どうしてくれるの、思い出しちゃったじゃないよ！」

——カデイスに抱きしめられて告白されたことか、キースにキスされて告白されたことか。

真っ赤になった頬を隠すように覆い、その場を駆け出そうとして、わたしははた、と気がついた。

いや、ここで逃げたら駄目なんだ。

「そういえば、わたしカデイスに言っただけだったことあるんだ」

「なんだ、昨日の大嫌いという言葉のことについてか」

「……ああ、そう言えばそんなこと言っただけ」

「おまえ……」

わたしのその言葉にカデイスの頬が引きつった。いや、すっかり忘れてたよ、ごめん。

「大嫌だって言ったのは、八つ当たりだった。ごめん、謝る」

「……八つ当たり？」

「カデイス、あの時わたしがここに来てくれて良かったって言ったじゃない。わたしは元の世界にはどうやっても帰れないのが分かってたから、頭に来てつい言っちゃったんだよ」

「……帰れないのが分かってたとはどういうことだ」

カデイスが不審そうに眉を寄せた。……そういえば、キースには言っただけ、カデイスは知らないんだっけ。

「ああ、元の世界ではわたし、もう死んでるから」

「な……」

カデイスが瞳を見開いて、言葉に詰まる。

「なぜ、それを早く言わない。分かっていたら、あんなことは……」
狼狽するカデイスにわたしはちよつと笑った。

「分かったのはつい昨日のことだったから……。夢で見たの、わたしの遺体が焼かれるところ。それでわたしがもう死んでるって確信したの」

「だが、夢で見ただけなら、元の体がなくなっているとは限らないだろう」

「……ううん、それはないよ。うまく言えないけど、わたしには分かるんだ」

そう言っただけで胸元に手を当てる。

あの時の喪失感を説明するのはたぶん難しいと思う。

今でも泣きたくなくなるような虚脱感と絶望感は忘れられない。

「だからね、たぶん、わたしこのままずっとイルーシャのままなんだ。わたしの元の体はもうないから」

「——ユーキ」

カデイスの腕が私に延びようとしたその時、目の間にキースが現れた。

本当にいつも唐突だね、キース。それで助けられていることも何度もあるけど。

「キース、おまえ……」

「ユーキが心配なのは、カデイス、君だけじゃないんだよ。僕もだ」

まだ二人とも冷戦中なのかな。

わたしの元の体のことも話してなかったようだし。

……あ、そうだ。

二人の顔を見て、わたしは当初の決意を思い出した。

「わたし、二人に聞いてもらいたいことがあるんだけど」

「なんだ」「なに？」

ほとんど同時に返事が返ってくる。

「うん、大丈夫、ちゃんと言える。」

私は深呼吸を一つして、覚悟を決めた。

「あのね、わたし決めたんだ。これからは原田由希じゃなくて、イルーシャとして生きるって」

「――」

二人がなにかを言いかけて沈黙する。

「どうせ、元の体には戻れないし、だったらこのままイルーシャとして過ごすのも悪くないかなと思って」

なんと返答しようか考えあぐねているらしい二人から視線を逸らすようにして、私は横を向く。

「……わたし、元の世界にいたときね」

まずい、また泣きたくなってきた。

わたしは溢れてきた涙をこぼさないように顔を上げた。

「本当に適当に生きてたの。適当に高校卒業して、適当にバイトして、適当に友達づきあいして。これからも、そんなふうにして無難に生きていくんだろうなとか漠然と思ってた」

こう言うと、本当につまんない人生だな。なんかもっとやりようがあったらうに。

「でも、そんな生き方しかしてこなかったこと、自分が死んでるって分かってから、すぐ後悔した。今までのわたしが生きてきた意味ってなんだったんだろうって思ったの」

それに、泣いてたお父さんとお母さん。

結局、なにも親孝行できずに死んじやったな。

そういえば、二人共わたしの小さい時の写真をケータイの待ち受けにしていたっけ。

愛されていることにも気づかずにいたなんて、本当にわたしは親不孝だ。

死んじやった今でも、二人の待ち受けにわたしが表示されているのかな。……だったらいいな。

なにも残せなかった。

それが、今とても哀しい。

もし、なにかに打ち込んでたら。

もし、親友がいたら。

もし、両親の愛情に気づいていたら。

今のこの空虚な気持ちもなにか違っていただろうか。

「わたしがこの世界に来たのはなにか意味があるのかもしれないし、もしかしたらないのかもしれない。でも、今度はイルーシャとしてちゃんと生きるよ。今度は後悔しないように」

この体になってから、まだいろいろなことに慣れなくて大変だけど、少なくとも適当なだけの人生になるようなことはないだろうな。そう考えると、お姫様として生活するのも悪くない気がしてきた。

「……あのね、わたしのこと今度からユーキじゃなくてイルーシャって呼んで」

「……おまえは、それでいいのか？」

「うん、いいよ。それに、イルーシャってことになってるのに、ユーキって呼ばれてたら都合が悪いでしょ？」

「それはそうだが……」

「あ、あと、わたしががさつで口が悪いってもう周りの人にばれるみたいだから、もう猫被らなくてもいいよね。公の場ではちゃんとお姫様やるつもりでいるけど」

「うん、それでいいと思うよ。君はそのままの方が魅力的だし」

「キース、どさくさに紛れて口説くな。……俺もそれには異論はないがな」

キースを牽制しつつ、カデイスが偉そうに同意した。

「よかった……。ありがとう」

そのままの自分で振る舞うのを反対されるのが一番の心配だったから、正直ほっとした。

「別に礼を言われることでもない」

「それでも、ありがとう。嬉しい」

結構無茶な要求かなって思ってたから、認めてくれて本当によかった。そう思っただけで微笑む。

落ち着いてくると、庭園に目をやる余裕ができた。
咲き乱れる花々。風に舞う花びら。

——なんて綺麗なんだろう。

この世界でわたしはもう一度生きるんだ。

そのために、今やらなければいけないことがある。

「ね、早速だけど、わたしの名前呼んでみて」

「ユ……イルーシャ」

「……イルーシャ」

うん、わたしはイルーシャ。

わたしは二人に向き合っただけで微笑んだ。

これは原田由希に決別して、イルーシャとして生きていくための儀式だ。

消えゆくもう一人のわたしを思って、涙が自然と頬を伝っていく。
「……もう一度呼んで」

「イルーシャ」「イルーシャ」

二人の優しい声に涙を堪えられなくて、わたしは顔を覆う。

「……うん」

これでもう、わたしは原田由希じゃない。わたしはイルーシャだ。けど、わたしの本質は変わらないから、それでいいよね。そう思うのに、涙が止まらないのはなぜだろう。

風が優しく吹いてわたしの髪をそつと揺らしていく。

二人がまたわたしの名前を呼ぶ。

「——っん」

イルーシャはわたし、わたしはイルーシャ。

この世界でわたしは新しい生を刻む。

そして、今度こそ後悔しないように生きていくから——。

10 カデイスからの求婚

「いい香りー」

芳香を放っている花に顔を寄せてわたしはその香りを楽しむ。
最近のわたしのお気に入りは庭園。

散策しながら花を楽しむのが朝の日課になっている。

「イルーシャ」

「あれ、カデイス、おはよう。執務はどうしたの？」

「……無粋なことを言うな。せつかくおまえに会いに来たのに」

「……イザトさんに怒られても知らないよ」

イザトさんの名前を出したら、カデイスがちよつと動揺した。

そうか、カデイスもイザトさんが苦手なのか。イザトさん、見るからに厳しそうだもんね。

「それはそうと、おまえに伝えたいことがあるんだが」

「なに？」

首を傾げる私の髪をカデイスの大きな手が梳く。

「イルーシャ、俺はおまえが好きだ。俺の妃になってほしい」

「え……」

わたしは瞳を見開いてカデイスの真剣な顔を見返す。

「俺にはおまえ以外の女を妃に据えるなど考えられない。……考え
ておいてくれ」

「そ、そんな……」

カデイスの突然のプロポーズにわたしは狼狽えるしかない。

「そんなこと突然言われても……、困る」

「困る？ どうしてだ、おまえは俺が嫌いかな？」

カデイスの真摯な視線を受けて、わたしは顔に血が上るのを感じた。

「き、嫌いじゃないけど……」

そりゃ、出会った当初は大嫌いだったけど、今はなんだかんだ言

つてお世話になつてゐるし、カデイスには感謝してる。でも好きかと聞かれたら、よく分からない。

わたしはどうしていいか分からなくて視線をあちこちに彷徨わせる。すると、あるものに目が行った。

——あ、あれ、ひよつとしてっ。

「お、おいっ!？」

いきなりその場からダッシュしたわたしに驚いたらしいカデイスが声をあげる。

目的のものの側に駆け寄ったわたしはあちこちそれを観察する。幹の色や花の形、花の付き方といいこれは。

「……やっぱり桜だあ……」

感激して、思わず幹に抱きつく。

「エーメの樹じゃないか」

わたしを追ってきたカデイスが樹を見上げて言う。

「こつちではエーメって言うの？　桜がこつちにあるなんて思わなかったから嬉しいな」

「……抱きつくほどその花が好きなのか？　どうせ抱きつくなら俺にしてほしいが」

「うん、大好き！」

につこり笑つて言つたら、なぜかカデイスが目元を赤く染めた。いや、大好きなのは桜のことであつて、カデイスのことを言つたわけじゃないよ。

「そ、そうか。そんなにエーメが好きならもつと庭園に植えさせるが」

「うーん、庭園も悪くないけど、桜並木の方がいいなあ」

「並木道か。そう言えば、師団への道が殺風景だったな。早速植えさせるか」

「本当!?　楽しみー。日本ではね、夜になると照明付けて夜桜見物とかしたんだ。あれは綺麗だったなあ」

わたしはうつとりとその時の情景を思い返す。

「そうか、それはいいな。夜に花を観賞するか、なんとも趣がある催しだな」

「でしよう？」

実態は飲んで騒ぐのが目的な人も多いんだけどね。まあ、それを言ったら台無しなのでやめておく。

「……ところで俺の妃の件だがな」

わ、忘れてなかったんだね……。

内心冷や汗をかきながらカデイスに向き合うつと、わたしは彼に抱き寄せられた。

「カ、カデイス……」

その腕から逃げ出したかったけど、思いのほか強い力で閉じ込められていて、それは叶わなかった。

「は、離して……」

わたしは真っ赤になつて身を擦る。

「断る、と言ったらどうする」

「こ、困るよ。どうしてこんなことするの？」

「おまえは先程の俺の言葉を聞いていなかったのか？ 俺はおまえが好きだと言っただろう」

き、聞いてたけど、でもっ。

カデイスは右手を挙げてわたしの頬に触れた。親指でそつと唇をなぞられてわたしはびくりとする。

「イルーシャ、怖がるな」

カデイスが苦笑したけど、わたしは首を横に振るしかできなかった。

「む、無理だから……っ」

正直、カデイスに支えられてなかったらこのまま倒れそう。

「……仕方ないな」

そう言つと、カデイスはわたしの額にキスをした。

「本当は唇に口づけたいところだがな」

その言葉で、わたしは耳まで赤くなつて抗議する。

「駄目駄目、絶対駄目！」

「……キースには許したじゃないか」

「あ、あれは、不可抗力で……っ」

「なるほど、不可抗力か」

あれ、なんか微妙にカデイスの目が据わってる。え、え、なんか顔が近づいて来てるような気がするんだけど！

「カデイ……ッ」

仰け反ろうとしたら、頭の後ろに手を添えられてわたしは動けなくなる。

おもむろにカデイスは顔を傾けると、わたしに口づけた。

「や……っ」

一度目は軽く、二度目は長い長いキス。

——もう駄目、酸欠になりそう。

くたつと力の抜けたわたしを支えながら、カデイスが苦笑した。

「息をしないやつがあるか」

いや、頭では分かってるんだけどね……。

わたしは肩で息をしながら、カデイスに寄りかかる。そんな状況の中でカデイスは楽しそうにわたしの髪を撫でていた。

「おまえの言い分からしたら、これも不可抗力だな」

「……あのねえ……」

なんというか、どっと疲れた気分だ。

「恋人でもないのに、そんな簡単にキスしたりしないですよ」

「だから、俺の妃になれと言っている」

どこまで俺様なんだ、カデイス。

「わたしは承諾してないでしょ。……とにかく離して」

そうは言ったものの、脚に力が入らなくてフラフラしていたら、カデイスに抱き上げられた。

こ、これはいわゆるお姫様抱っこ！

「ちよつとカデイス、わたし歩けるからっ。降ろして！」

「説得力がないぞ。まともに歩けないだろう」

う……っ、そうなんだけど、さっきから晒されている好奇の視線が気になって仕方ない。

「だって、恥ずかしい……」

わたしは赤くなつた頬を両手で隠した。

「おまえは時々、すごく可愛いな」

「わ、わたしが可愛いとか、ありえないからっ」

カデイスの言葉に本気でびっくりして言い返す。わたしはむしろ可愛くない性格だと自負している。

「褒めたんだ、素直に受け取れ」

「え、と。う、うん……」

なんとか頷いたものの、わたしは気恥ずかしさから真っ赤な顔で俯くしかなかった。

「そんな顔を他の男に見せるな。特にキースには」

「え、なんで？」

カデイスがなんでそんなことを言うてくるのか分からなくて、顔を上げて聞く。

「それは、やつが獣だからだ」

……カデイスつてば、以前、キースに獣と一緒にって言われたのを気にしてたんだ。

「……それはカデイスもじゃない」

「俺はいいんだ」

「いや、良くないから!」

ここで強く言うておかないと、被害がまたわたしに及ぶ。むうと睨むと、カデイスは仕方なさそうに溜息をついた。

「……一応自重はする」

そんなやりとりがあつたのが十日程前。わたしは再び庭園の散策に出ていた。

「イルーシャ様、おはようございます」

「おはよう」

ヒューとブラッドにばったり出会って、朝の挨拶を交わす。

「イルーシャ様、師団への並木道のこと、ありがとうございます」
「陛下がおっしゃってましたよ。エーメの樹を植えることを提案されたのは、イルーシャ様だと」

「え、あれ、もう完成したの？ それを言ったのは、十日くらい前なんだけど」

「ちょっと早くない？ あまりの仕事の速さに驚いていると、ヒューが言った。」

「ええ、我々騎士団も出たの急のことでしたが、おかげで素晴らし
い出来映えで……」

「騎士団まで出張したの？ なんか、悪いことしちゃったみたい」
わたしの一言でそんな大事になっていたとは知らなかった。今後は発言に気をつけなくちゃ。

「いえいえ、そんなことはたいしたことではないですよ。イルーシ
ヤ様のおかげで殺伐とした我々の宿舎にも潤いが出たというもの
です」

反省するわたしに、ブラッドが微笑んだ。

「そう言ってくれるなら、嬉しいけど……」

わたしは二人に師団への並木道まで案内して貰った。そこでわた
しが目にしたものは。

「な……っ、なにこれ」

「見事なものでしょう？ ちょっとした名所になりますね、これは」
ヒューが感嘆したように溜息をついた。

確かに見事だ。でもわたしはカデイスにここまでしてとは言わな
かった。

満開の桜並木……、はまあいいとしてその樹の大きさ！

背の高いブラッドやヒューの身長を軽く超す樹の高さ。幹も何年
も年月を重ねたらしく立派だ。

「こ、これ、どうやって運んだの？」

「それは魔術師団が移動魔法で運んだんです。ちょっと壮観でしたよ」

……この大きさの桜の樹を何百本と運ぶんだもの、それはそうだろうね。

思わず引きつった笑いを浮かべていると、二人が心配そうに声をかけてきた。

「イルーシャ様？」

「もしかして、お気に召さなかったのですか？」

いや、桜並木はとっても綺麗で気に入ったけど。

「……カデイスがここまでやるとは思わなかったのよ。せいぜい、道沿いに桜の苗木を植える程度だと思ってたし。これ、いったいいくらかかっているのよ」

この桜の樹一本だって相当の値段のはずだ。

「イルーシャ様、陛下からの贈り物の値を聞くなんて野暮というものですよ」

「いや、だってこれ、国民の税金でしょ？ わたし嫌だからね、」

あの女のせいで国庫を圧迫した」なんて言われたら！」

わたしがそう捲し立てると、ブラッドは目を白黒させた。

「そ、そういうことですか……」

「イルーシャ様、しっかりされてますね……」

ヒューはぽかんと口を開けていたけど、しばらくしてから妙に感心したような口調で呟いた。

11 桜並木と師団舎と

「ちょっとカデイスに抗議してくるっ」

「まあまあ、せっかくここへ来たんですから、師団舎まで案内しますよ」

身を翻して駆け出しそうになったわたしをブラッドが引き留めた。

「あ……、うん。そうだね、せっかくだからそうしようかな」

「エーメの並木道をご覧になって行かれると良いですよ」

「うん」

カデイスに文句の一つも言いたいところだけれど、植えてしまったものはしょうがないものね。ここは二人の言葉通りにしよう。

わたし達三人は桜の花びらが舞う並木道をゆつくりと歩いて行く。カデイスにはびつくりさせられたけど、桜は本当に綺麗で自然に微笑んでしまう。

「……なんとも幻想的ですね」

「うん、そうだね」

ヒューの言葉に頷くと、彼は首を横に振ってそれを否定した。

「……イルーシャ様がですよ」

「え？」

「エーメの花がとてもお似合いになるのですね。陛下がイルーシャ様を溺愛されるのも良く分かります」

「え……」

そんなことを言われるとは思ってもいなかったわたしは、かあつと赤くなる。

「溺愛って……、そんなことないよ」

「この植えられたエーメを見て、そんなことを言われるんですか」

た、確かにこれは常軌を逸していると思うけど。

「そ、それはわたしがこの容姿だからだよ。たぶん、カデイスがわたしを好きだって言うのも気のせいだと思うな」

「……陛下があなたに好きだと告白されたのですね？」
「あ」

しまった、言わなくてもいいことまで言っちゃった。わたしは慌てて口を塞いだけでもう遅かった。

「そして、王妃にと望まれていると」

ヒューの言葉を引き取って、ブラッドが言う。

「な、なんで知ってるの？」

ここまで来るとわたしはうろたえるしかない。

「陛下が俺達を集めた席でイルーシャ様を妃にしたい、本人にも求婚したとおっしゃってましたよ」

「ええっ、嘘っ」

みんなの前でそんなこと公言されるなんて恥ずかしすぎる。わたしは真っ赤になって頬を押さえた。

「……あれは俺達に対する牽制でもあるんでしょうね。特にキース様への」

「え……なんでキースが出て来るの」

そもそもヒュー達への牽制ってなんだ。

「陛下とキース様があなたをめぐっての恋敵同士であるということ
は有名ですよ」

「う、嘘……」

なんでそんなことが有名になってるわけ？

「なんでも庭園で殴り合いをしたとか。俺もそれを聞いたときは自分の耳を疑いましたよ。あのキース様が陛下を殴ったんですよ」

今でも信じられないと言うようにヒューが首を横に振る。

「えええっ、キースが!？」

そんなこと初めて聞いたよ。

あの掴み所のないキースがカデイスを殴ったなんて。

「あの時そんなことがあったなんて……」

「あの時？」

「うつん、なんでもないっ。いくらキースでも、カデイス殴って大

丈夫なの？」

「確か二日間の謹慎処分になられていたはずですよ。その後なぜか五日に延びてましたが」

わたしがイルーシャとして生きていくと決意表明したとき、キースは既に謹慎処分中だったのか。ひよつとして謹慎期間が延びたのわたしのせい？ ああ、なんか罪悪感が……。

「殴り合いをするなんて余程のことですよ。なにかあったんですか？」

「無粋なことを聞くなよ、ヒュー。色恋のことに決まってるじゃないか。たとえば口づけとか」

唇をなぞるブラッドの視線をたどってヒューがわたしを見る。

「——っ」

言い当てられたわたしはただただ真っ赤になるしかない。恥ずかしすぎて涙までにじんできた。

「そんな可愛い顔をされると、陛下でなくてもぐらつきますね、イルーシャ様」

「ブラッド、からかわないでよね」

「からかってなんかいませんよ。イルーシャ様はとても可愛らしいです」

まだ言うかつ。それならこうだ！

わたしはブラッドの両頬を摘んで引つ張ると、ハンサムな顔が間抜けになった。……ちよつと笑えるかもしれない。

「……なにしてるんですか、イルーシャ様」

痛むらしい両頬を押さえてブラッドが言う。

「ブラッドがふざけるからよ。誰にでもそついうこと言うのやめてよね」

「なにか誤解があるようですが、誰にでも言っているわけではありませんよ」

「……どうだか」

この間、よく知りもしないわたしに対して色目を使ったのはまだ

忘れてないぞ。

わたしはブラッドに冷やかな視線を浴びせる。

「陛下がイルーシャ様が時々妙な行動に出るとおっしゃってましたが、直に身に受けることができて光栄ですよ」

「妙な行動って……」

……それは、つまり奇行ってこと？

ひくりとわたしの頬が引きつる。

カデイス、わたしのことそう思ってたんだね。そんな女に告白するってどういうこと？

それにブラッド、その反応はおかしくない？　なんでそんなに嬉しそうなんだ。

「……ブラッド、イルーシャ様に対して言葉が過ぎるぞ」

ヒュー、もつと言ってやって！

「しかし、イルーシャ様は大変魅力的な方だ。これには同意するだろう？　ヒュー」

「……まあ、それはそうだな」

えええ、ヒューまで！　これってなんのほめ殺しよ。

「そういえば、陛下とキース様がイルーシャ様の異世界での知識はすごいと褒められてましたよ」

ふと思いついたようにヒューが言う。

「え……、別にすごくなんかないよ。わたし中途半端な知識しかないもの」

そんなことヒュー達に話してたんだ。居心地悪すぎて、なんだか背中あたりがムズムズする。

役に立ちそうな専門的な知識もないし、二人共わたしを買いかけりすぎだよ。

「でも、陛下は消費税を導入して、教育を義務化することを検討されてますよ？　それはイルーシャ様の意見だそうですが」

「……ああ、そういえばそんなことを言ったかも」

晩餐の席でカデイスとキースにいろいろ聞かれた時言っただけ。

でもいきなり課税されたら国民の反発もあるだろうから難しいかもってカデイスには言ったはずだけど。

「国庫を心配したりする姫もイルーシャ様以外いませんね」

「いや、あれは単にわたしが悪く言われるのが嫌だったからで、そんな意図で言ったわけじゃないよ……」

ヒューに褒められるようなことはなにも言っていないぞ。わたしとしては、むしろ計算高い言葉じゃないかと思う。

「国民の税金なんて発想は普通の姫にはありませんよ。それだけでもすごいです」

「いや、税金納めてる庶民だったらそういう発想すると思うよ。日本ではわたし一応働いてたし」

「しかし、人間贅沢には慣れるものですよ。それなのに変わらずにいられるところが、イルーシャ様のすごいところですよ」

「も、もうやめてよ。そんなに褒められると恥ずかしくてしょうがないよ」

真っ赤な顔の前で慌てて手を振るわたし。

「やはり、イルーシャ様は可愛らしいですね。ちょっとした仕草とか、褒められると赤くなれるところとか」

「も、もういいよ。師団舎案内してくれるんでしょ？ 早く行こうよ」

これ以上聞いていられなくて慌てて駆け出すわたしの後ろから、くすくすと二人の笑い声がした。

「イルーシャ様、手前右側が紅薔薇、左が白百合、奥右側が近衛、左側が魔術師団になります」

二人に案内されて師団舎に着くと、ざっと説明してもらった。

三階建ての建物がそれぞれ道を挟んで並んでいる。四つともとても似ている建物なので説明してもらってよかった。

ちなみに魔術師団は女性もいるけど、他の団は男性しかないんだとか。

「ふうん、そうなんだ。女の人でも入れるといいのにね」

「まあ、男の中に女性を入れるといういろいろ問題も出てきますからね」

……そういうものなのか。女の人が男社会に進出するって難しいんだな。

そんなことを考えながら、紅薔薇騎士団の師団舎に入る。ちょうど訓練中のようで、かなりの人数の騎士さん達が剣を振っていた。

「イルーシャ様だ……」

「ほ、本物……」

いきなり注目を浴びて、わたしは焦って二人を見る。

「大丈夫ですよ。とって食いやしません。……たぶん」

ブラッド、……たぶんってなんだ。

「絵姿より綺麗だなあ」「だな」

そんな呟きが耳に入ってきて、わたしは首を傾げる。

「絵姿ってなんのこと？」

「王宮でイルーシャ様の絵姿を発行してるんですよ。これが発行するとすぐ売り切れる人気で……知らなかったんですか？」

「うん、知らなかった。カデイスってば、なんで教えてくれなかったんだろ」

「憶測ですが、愛している女性の絵姿を他の男が持つてることを知らせたくなかったんじゃないですか？」

「愛し……」

かあつと赤くなった途端、周りがもつと騒がしくなった。

「おおつ、赤くなったぞ。可愛いなあ」

「団長、イルーシャ様を口説いてるんですか」

「おまえら、うるさいぞ」

ブラッドがそう言っても騒ぎは収まらない。

ブラッドは溜息をつく、わたしに向き合った。

「イルーシャ様、彼らになにか声をかけてくれると助かります」

そう言われても……、いったいなにを話せと？ まあ、日頃練習しているお姫様スマイルを披露するチャンスだと思えばいいか。

渋谷騎士さんの集団に近寄って行って、おもむろにわたしは口を開いた。

「皆さんおはようございます。あの……鍛錬頑張ってくださいね」

につこり微笑んでそう言うと、うおおおお、という雄叫びが響いてびつくりした。

「イルーシャ様！ 俺、頑張ります！」

「お、俺も！」

「俺も頑張ります！」

「……なにかすごいですね……」

ヒューが呆然としたように呟いたけど、それにはわたしも同意だ。「動機が不純でも、やる気を出してくれるのはいいことですよ。……

……イルーシャ様、これからも是非こちらにいらしてください」

動機が不純って……、つまりわたしはアイドル状態ってこと？

につこり笑うブラッドと俄然はりきって剣を振る騎士さん達をわたしはそれぞれ見やる。

「……分かった。そうする」

ブラッドも結構黒いかもしいなと思いつつわたしは頷いた。

12 師団舎訪問と予想外の出来事

「あいつら、後で鍛え直す」

ヒューが憤ったように拳を握って言う。

あの後、白百合騎士団にも行ったけど、わたしに対して紅薔薇と大体同じような反応だったのが団長としてショックだったようだ。

「ヒューの地の言葉って結構荒いよね。だったら、もうちょっと砕けた言葉で話してくれてもいいのに。……それで出来れば友達になつてほしいな」

「……無理ですよ。立場というものがありませんから、そういうわけには参りません」

予想はしてたけど、つれない返事が返ってきてわたしは肩を落とす。

「立場かあ。結構面倒だよ、それ。わたしに普通に話してくれるの、カディスとキースくらいだし。アイリン姫とは仲良くなれそうだったけど、姫、忙しくなっちゃって会えないし」

なんでも、幼なじみとの婚約式の準備で忙しいんだとか。

地を出して話しかけた時にはびっくりしてたけど、そちらの方が魅力的ですって笑って言うてくれたのにな、姫。

「陛下やキース様と同等に話すわけには参りません。……アイリン姫は時期が来ればまたお会いできますよ」

「……うん」

イルーシャとして生きるってことは、王族として生きるっていうことなんだよね。

それなりの覚悟はしてたはずだけど、普通に話してくれる人が少ないのは、やっぱりちよつと寂しい。

「あ、でも近衛に親しくなれそうな子はあるんだ。マーティンっていうの」

「ああ、マーティンですか」

ブラッドが納得したように頷いた。

「あ、やっぱり知ってるんだ？」

「彼は若いですけど、有名ですよ。近衛団の団長と侍女長の息子ですからね。それでいて、気さくで飾らない人柄で実力も兼ね備えていますから、人望もありますし。将来、団長になることを約束されたような人物ですよ」

「へえ、マーティンって、そんなすごかったんだ」

感心しながら、二人と近衛の師団舎へと脚を進める。

近衛団は、紅薔薇や白百合騎士団よりは落ち着いた感じの人が多
いみたい。ダリルさん達に挨拶したら、ごく穏やかな返事が返つてきた。

「さすがに近衛は違いますね」

「まあ、陛下や王族お付きの師団と我々を比べること自体が間違ってると思うぞ」

ヒューがちよつと悔しそうにして言ったのをブラッドがフォローした。

「近衛ってエリート集団なんだね」

そんなところにマーティンいるんだ。すごいなあ。……ところで、彼はどこにいるんだろ？

舎内を見回していると、ちょうどマーティンがこちらに向かってくるところだった。

「あ、マーク……じゃなかった、マーティン、おはようっ」

危ない、危ない。ついマー君と呼んじやうところだったよ。前に
うっかりそう呼んじやったことがあって、怒られたんだよね。

「イルーシャ様、おはようございます。……ところで、今なにか変なことを言いかけてませんでした？」

「え？ 気のせいじゃない？」

わたしはそらつとぼけた。……ちよつとしらじらしかったかも。

「……イルーシャ様、マーティンと仲いいですね」

ヒューがちよつと硬い表情で言った。……あれ、どうしたんだろ？

「うん、リイナさんにはお世話になってるから普通に親近感わくよ。マーティン、話しやすいだね。弟がいたらこんな感じかなあって思うんだ」

「弟ですか」

なぜかおかしそうにしてブラッドが口元に手をやる。

「一つしか変わらないじゃないですか」

うーん、弟は気に入らないか。

「分かったよ、弟扱いはしないから。じゃ、友達ってことでどうかな？」

「……イルーシャ様、ご自分が王族ってこと忘れてますね？ 一介の騎士が王族の方と友人になるなど恐れ多いです」

ええ、マーティンまでこんなこと言うんだ？

「でも、マーティン一応エリートじゃない。友達になっても問題ないよ」

「一応は余計です。……そのようなこと陛下がお許しになりませんよ」

「なにそれ。いくらカデイスでもわたしの交友関係にまで口出ししたりしないでしょ」

「ご友人が女性でしたら問題ないと思いますよ」

つまり、男性は問題ありだと？ なんでよ。

釈然としない思いで、わたしはマーティンを見返す。

「イルーシャ様、ご自分が陛下の想い人だということを自覚されてください。そんな方と親しくさせて頂くわけにはいきませんよ」

「……そんなこと言われても、わたしはカデイスのものじゃないよ。カデイスがわたしの友達のことであれこれ言う権利はないでしょ」

カデイスにはお世話になってるけど、そこまで干渉されたくない。「じゃあ、わたしカデイスに友達は自分で選ばせてくれって直談判するよ」

「やめてくださいよ。俺が陛下に睨まれるじゃないですか」
本気で切実そうにマーティンが訴えた。

え、駄目？

「なら、『許可してくれなかったら、嫌いになるから』って言うよ。これで文句言ってきたら本当に嫌いになるかもだけど」

「なるほど、それなら陛下も文句は言えませんか」

おかしそうにブラッドが笑った。

「……そういう問題じゃないような気がするんですが」
ちよつと疲れたようにマーティンが言う。

「……立場があるので口調までは変えられませんか？」
これって、了承ってことだね？

「うん、わかった。マーティン、ありがとう」

嬉しくなって笑ったら、マーティンもちよつと笑ってくれた。

「ブラッドやヒューもこれを機にわたしの友達になってくれると嬉しいな」

「そうですね。陛下の許可が下りましたら、問題ないですよ」

ブラッドは笑って頷いてくれたけど、ヒューは黙ったままだ。さつきも拒否されちゃったし、やっぱり無理なのかな。

「……ヒューはどうか？」

内心の不安を隠しながら聞くと、ヒューは溜息をついて首を横に振った。

駄目だったかと思つてしょんぼりしかけたけど、次にはヒューが花のように笑つて言った。

「……イルーシャ様には、本当に負けますね」

わたしは浮かれながら魔術師団の宿舎までの道を歩いていた。

桜並木は綺麗だし、友達も出来そうだし、正直スキップしたい気分だ。

桜並木の件ではカデイスに文句言つてやろうと思つてたけど、それは必要最低限に抑えとこう、とわたしは心に決める。

「イルーシャ、よく来てくれたね」

キースが入り口で出迎えてくれたので、ヒューとブラッドはお役ご免と言うことでそれぞれの宿舎に帰っていった。

キースに案内されて、師団の人達に挨拶する。ここの人達も近衛の時のように反応が穏やかだ。

「ここは師団で唯一、文官と武官が一緒にいるからね。そのせいもあると思うよ。……それはそうと、そんなに熱烈的な歓迎を受けたのかい？」

「それはもう。挨拶しただけで叫ばれたんだもの、びっくりしたよ。わたしがそう言つと、キースは前髪を掻き上げて苦笑した。

「……猛獣の群れに兎を放り込むようなものだね。今日はブラッドレイとヒューイがついてみたいけど、師団を訪れるときは近衛か、傍にいれば僕を連れて行くといいよ」

「え……、近衛の人はともかく、キース忙しいでしょ。悪いよ」

「遠慮しないでいいよ。それに僕は君の傍に出来るだけいたいんだからね」

「え、あの……。あ、ありがとう」

どう反応していいか分からなくて、赤面しながらなんとかお礼を言う。

「どういたしまして。今お茶出すから、座つて」

キースに促されてわたしは応接セットの椅子に腰掛けた。出されたお茶を飲んで一息つく。

「あ、そういえばキース、カデイスと殴り合いしたつて本当なの？」

「ああ、聞いたんだ。本当だよ。僕はカデイスを殴つた」

「ど、どうして……？ あなたがそんなことするとは思わなくて、聞いたときはびっくりしたよ。もしかしくなくても、わたしのせい、だよな？」

「あの後、カデイスが君を無理矢理にでも王妃にするって言つから、つかつとなつたつてというのが真相だよ。あの時のカデイスもどうかしてたけどね」

「カデイスが、そんなこと……。酷いよ、わたしの意思はどうでもいいわけ？」

わたしへの求婚をわたし以外の人に知らせたこともそうだ。カデイスは勝手すぎるよ。

「イルーシャ、カデイスは焦ってるんだよ。君がいつ誰かに浚われてしまわないかね。……僕もそうだ」

なんで二人が好きなのがわたしなんだろう。

わたしは膝の上でぎゅっとドレスを握りしめる。

「わたし……。そういうのよく分からない。本当言うと、あなたやカデイスがわたしを好きって言うのもわたしがこの容姿だからだと思ってる」

「——イルーシャ」

キースはわたしの隣に腰掛けると、わたしの手にその手を重ねた。「君じゃない君なんて、僕は興味ないよ。僕が好きになったのは、ときどき思いもよらないこととして、口が悪くて、強いのに弱くて、恥ずかしがり屋の君だ。……これはたぶんカデイスもそうだよ」

「わたし、そこまで好かれるような可愛い性格でもないよ」

「それは君が気付いてないだけだよ。君はとても可愛いし、魅力的だ」

キースの手がゆっくりとわたしの髪を梳く。

わたしは動けずに、ただキースの顔をみつめていた。

「君を愛してる。……僕の妻になってほしい」

13 友達選びでカデイスと対決

「え……と……、わたし……」

なんて、答えたらいいんだろう。

キースにまでプロポーズされると思ってたわたしは、真っ赤になってうろたえていた。

「わ、わたし、キースのこと嫌いじゃないけど、結婚とかそんなこと考えられない」

「……嫌いじゃないけど、好きでもないってこと？」

「友達としては好きだよ。それじゃ駄目なの？」

「僕はそんなことを望んでるわけじゃない。君の特別になりたいんだ」

「わ、わたし、わたし……」

いったい、なんて言ったらいいんだろう。軽く混乱していたら、キースに腕をとられた。そのまま彼に抱き寄せられる。

「キース……ッ」

キースがわたしの頤をそつと持ち上げる。

「……このまま君を閉じこめてしまいたいよ。誰にも見せずに、ずっと僕だけのものにしてしまいたい」

キースの瞳の中に狂おしいほどの熱情を見た気がして、わたしはびくりと体を震わす。

「イルーシャ、怖がらないで」

そんなの無理だよ。だって、いつものキースはこんなこと言わないじゃない。今日のキースはまるで別人みたいに見えて、体の震えが止まらない。

「……キース、お願いだから離して」

やっこの思いでそう訴えると、キースの腕が緩んだ。

「ご、ごめん。わたし、もう自分の部屋に戻りたい」

わたし、こういうことに耐性なさすぎ。自分の経験のなさを嘆い

ても今更しようがないけど。

「……まいったな。そんなに怖がらせるつもりはなかったんだけど……。君の部屋に送ればいいんだね？」

「……うん、ごめんね」

キースの移動魔法で自分の部屋に戻ったわたしは真っ直ぐに寝室に駆け込んだ。

ぼすんと音を立てて、ベッドにうつぶせに沈むと、こみ上げてくる恥ずかしさに身悶えた。

——わたしは恋がどういうものか知らない。

それなのに二人がわたしにプロポーズしてくるなんて、どうしてもいいか分からないよ。

日本にいた頃は二十代後半くらいで結婚できたらいいなと漠然と思ってたけど、相手がいたわけでもないし、身近な男の人っていったら、お父さんかバイト先の人達くらいだった。

年齢イコール彼氏いない歴のわたしには、二人からの告白は正直重い。

それなのに、恋愛を通り越して突然結婚してくれなんて二人とも飛躍しすぎだよ。

衝動のままに、手足をばたつかせて暴れていたら、ちょっと落ちて着いてきた。

「……二人とも本当にどうかしてるよ……」

わたしはベッドから身を起こすと、溜息をつく。

キースの言葉によると、わたしの性格含めて二人はわたしのことが好きらしい。

今まで好かれているのを容姿のせいにして逃げてきたけど、いい加減わたしも覚悟を決めて認めなきゃいけないのかもしれない。

「……あ、そうだ」

わたし、カデイスに言いたいことがあったんだっけ。忘れないうちにカデイスのところに行ってこなきゃ。

カデイスと二人きりになるのは気まずいから、できれば執務室に

イザトさんがいてくれるといいなあ。

「よく来たな、イルーシャ」

カデイスの執務室を訪れると、最初に会った時の態度とは雲泥の差の対応をされた。

あの頃はカデイス、すごく意地悪だったんだよね。それが、今はこの歓迎ぶりなんだもの。人って変わるものなんだな。

……カデイスの場合、変わりすぎて感じただけ。

お茶を出されてカデイスと向き合つと、わたしは部屋の中を見回した。

「……イザトさんはいないの？」

「……なんだ、イザトに用だったのか？」

カデイスが、心なしがっかりしたような顔になる。

「うつん、そうじゃないけど」

「？ おかしなやつだな」

わたしの心労も知らずにカデイスが不思議そうな顔をする。

「今日は、カデイスにいくつか話があつて来たんだ。……時間いいかな？」

「ああ、大丈夫だ。いくらでも時間を空けるぞ」

「……いや、あまり空けられても困るんだけどね……。カデイスも仕事あるでしょ？」

「まあ、それはそうだが……」

なんだか歯切れが悪い。……これは仕事がたまつてるんだな。

「俺も、おまえに話さなければいけないことがあるんだが」

「なに？」

「例のおまえの披露の日取りが決まった。一月後だ」

「そっか、とうとう決まったんだね」

「おまえの礼儀作法も様になってきたし、そろそろ頃合いかと思つてな。周りからもつたいぶるなと突かれているしな」

カデイスによると、バルコニーで国民に顔見せしてから、馬車で

市内をパレード、夜には舞踏会というスケジュールなんだそう。

「……なんか、忙しくない？」

「ああ、忙しいぞ。おまえは特に色々準備もあるはずだしな」

「うわあ……。お姫様やるのも楽じゃないねえ……」

殺人的スケジュールに早くも挫折そうわたし。

「俺も側にいるから心配するな。辛いようなら言え。息抜きさせる時間くらいは作る」

「……ありがとう、カデイス」

いつも不器用なカデイスの心遣いが嬉しくて、わたしは微笑む。
「無理させておまえに倒れられては困るからな」

カデイスが腕を上げてわたしの髪を撫でる。その顔は優しく、カデイスの好意が伝わってきた。

わたしはカデイスの気持ちに伝えられないことが心苦しくて、彼からそつと視線を逸らす。

「あ、そうだ。桜並木の件なんだけど」

「ああ、見たのか。どうだ、見事なものだったろう？」

「いや……。見事は見事なんだけど……」

「なんだ、気に入らなかったのか？」

不満そうにカデイスがわたしを見る。

「……桜はとっても綺麗で気に入ったよ。でも、あそこまでやられると思ってなかったから、びっくりしたんだけど」

「……やりすぎたか？」

「それはもう。あんな立派な樹じゃなくて、苗木で良かったんだよ。あれ、いったいいくらかかっているの？ わたしの言ったことで国民の税金がたくさん使われているかと思うと申し訳ないよ」

「そうだったのか、おまえが喜ぶかと思ってついやってしまったが……」

「ついっ！？」

そんな気軽にあんなことやらないでほしい。

「い、いや、悪かった。俺が考えなしかった。……それはそうと、

イルーシャ、おまえ国民の税金のことまで考えてるのか」

「だって、わたし中身は庶民だもの。どうしたって気になるよ」
そう言うと、カデイスは感心したような顔をした。

「おまえはすごいな。贅沢にも慣れず、国民のことを考えられる。

……やはり、おまえを選んだのは正解だったな」

「え……、えっと……」

カデイスが手放して褒めるので、わたしは赤くなるしかない。

「だから、あの、気持ちはありがたかったけど、わたしの為にあまりお金使わないでほしいな」

「おまえは本当に欲がないな」

カデイスが仕方なさそうに溜息をつく。

「それで、わたしの絵姿発行してるって聞いたんだけど、その売上を桜並木にかかった費用に充てられないかな？」

「……聞いたのか」

「うん、ブラッド達にね」

わたしのその答えが気に入らなかったらしく、カデイスは眉を顰めた。

「……あまり他の男と仲良くするな」

「……なんで？」

「俺が嫉妬で狂いそうになるからだ」

「嫉妬って……、カデイス大袈裟だよ。ブラッド達は友達だもん。そんなこと心配する必要ないってば」

「おい……、友達とはどういうことだ」

「今日友達になったの。ブラッドとヒューとマーティン」

わたしがそう言うと、カデイスは目をむいて叫んだ。

「だ、駄目だ、駄目だ！ 男だけは駄目だ！」

「ええーっ、カデイス酷いよ。ただの友達だよ？」

「どちらが酷いんだ。おまえが友達と違っていても、向こうがそうだとは限らないだろう」

「そんなことありえないよ。カデイス、考えすぎ。そんなに心の狭

いこと言っんなら、嫌いになるからね？」

ちよつと首を傾げてにつこり笑うと、カデイスは頭を抱えた。

「……俺は今、おまえが悪魔に見えたぞ」

……失礼な。それなら、とことん演技してやるからね。

「友達くらい自分で選びたいじゃない。王族だからみんな遠慮するし、そういうのって結構寂しいもの」

沈んだように下を向いて言うと、カデイスはうつと詰まった。どうやら、カデイスにも覚えがあるらしい。

「……ねえ、どうしても駄目？」

目を潤ませて上目遣いに見ると、カデイスが明らかにうろたえた。「わ、分かった、認める。認めるから、そんな目で見るな！」

——よっしゃあ！

わたしは心の中でガッツポーズを作った。

「カデイス、ありがとう。とても嬉しい」

「……ああ」

にこやかに笑うわたしと、燃え尽きたようなカデイス。

わたしが勝利に酔っていると、執務室のドアがノックされた。カデイスが入室を許可すると、入ってきたのはイザトさんだった。

「随分と賑やかですね。イルーシャ様、いらっしやいませ」

「イザトさん、お邪魔してます。あと少し要件を話したら、カデイスにきつちり仕事してもらいますから」

そう言ったら、イザトさんがくすつと笑った。鉄面皮だとばかり思ってたけど、珍しいものを見たなあ。

「さっきの話の続きなんだけど、わたしの絵姿を桜の代金に充てる件、考えてくれないかな？」

「……分かった、そうしよう。エーメの樹の件についてはそれほどおまえが気に病むことはないぞ。おまえの絵姿が飛ぶように売れていて、需要が供給に追いついていないらしいからな」

「うん、騎士さん達もわたしの絵姿持つてる人いるみたいだったね」
そう言つと、なぜかカデイスは顔をしかめた。

「……どうしたの？」

「いや、おまえの絵姿を他の男が持っているというのは嫌なものだな」

「変なの、ただの絵じゃない。それをいうなら、不特定多数に絵姿を持たれてるわたしの方が恥ずかしいよ」

わたしは笑って言ったけど、カデイスはまだ納得してないようでも不満そうだ。

「……ひょっとして、カデイスもわたしの絵持ってるの？」

「ああ、俺も何枚か持ってるぞ」

「そんなに持っててどうするの。一枚でいいじゃない」というか、一枚でも充分恥ずかしい。

「俺の部屋にいくつか飾ってある。それとしん……いや、なんでもない」

「……？」

カデイスがなにか言いかけてやめたのを不思議に思いながらも、わたしは椅子から立ち上がった。そろそろカデイスに仕事して貰わないとイザトさんが煩そうだ。

「じゃあ、わたしそろそろ帰るね。仕事頑張って」

イザトさんにも挨拶して、わたしは部屋を出る。

「……陛下、嘆かわしいです」

直前にそんなイザトさんの溜息混じりの言葉が聞こえてきたけれど、カデイスのなにが嘆かわしかったんだろう。

14 披露式典へ向けて(1)

「イルーシャ姫様、動かないでくださいましね」

わたしは国内外への披露のために着るドレスの寸法を測っていた。
「本当にすばらしいお体ですね」

採寸の人がしきりに感嘆しながら何度も言う。

「こんなにお美しい方のお衣装を作らせていただくなんて、針子としてなんて幸運なんでしょう。本当に作り甲斐がありますわね」

布地を当てて、わたしに似合う色合いをみたりしながらその人は言った。

作るドレスは全部で十枚。そんなに必要ないだろうと思ってそう言ったんだけど、なんでも国民への挨拶、パレード、舞踏会用のドレスはそれぞれ違うものを着るらしい。

おまけに、舞踏会ではドレスをまた何回か着替えるんだとか。残ったドレスは予備分らしい。

そんなに作って、一月でドレスができあがるのか謎だったけど、王室と契約している衣装屋達が総動員で取りかかるらしい。……大変そうだなあ。

ドレスの採寸が終わって部屋でのんびりしていると、キースが訪ねてきた。

「さつき衣装屋とすれ違ったよ。今回は随分大がかりみたいだね」

「うん、明日は宝石商が訪ねてくるみたいだよ。あんまり大げさな飾りは好きじゃないから、程々にしてくれればいいけど」

わたしは着飾るのがあまり好きではないので溜息しか出てこない。
「まあ、今回ばかりは我慢するしかないだろうね。国内外の賓客が訪れるわけだから、それなりの支度をしないといけないしね」

「うん、まあ、そうなんだよね……」

ああ、気が重い。伝説の姫君をやるのは結構大変だ。

「あ、そうだ。舞踏会の件なんだけど、礼儀作法は及第点もらえたけど、ダンスはまだ教わってないんだよね。日もそんなにないし、どうしたらいいかな？」

「なら、僕が教えようか」

キースの申し出に、わたしは手を叩いて喜んだ。

「本当？ 助かる。でも、迷惑じゃない？」

「迷惑なら、こんなこと言ってるよ。僕には遠慮しないでいいから」

「……うん、ありがとう」

キースは優しいな。……そういえば最初からわたしには親切だったつけ。

ここまで気を遣ってもらってるのに、なんでわたしはキースの気持ちに応えられないんだろう。

「じゃあ、早速やってみようか」

「うん」

音楽を流す魔法器具を持ってきてもらってわたし達は練習を開始した。

キースに差し出された手を取って、わたしはステップの仕方や、ターンのタイミングを教わる。

キースは教え上手で、もう一つ他のダンスを教えてもらった。

「イルーシャは、飲み込み早いね。あとは練習すれば問題なく踊れると思うよ」

「うん、キース、ありがとう。……あとどのくらい覚えればいいのかな？」

「あと六つだね。それも僕が教えるから心配しなくてもいいよ。じゃあ、明日この時間にまた来るよ」

「うん、本当にありがとうキース。明日またよろしくね」

忙しいだろうに、彼の親切は本当にありがたい。……なにも返すことができないのがちょっと心苦しいけど。

とりあえず、今わたしにできることといったら、キースに教えて

もらったダンスを完璧にこなすために練習あるのみだよ。

そういえば、今日はマーティンがわたしの警護に当たってるんだ
っけ。それを利用しない手はないよね。

わたしは部屋のドアを開けてマーティンを呼んだ。

「イルーシャ様、どうしたんですか」

「うん、ダンスの練習の相手をしてもらおうと思って。マーティン、
ダンスできるよね？」

わたしがそう言ったら、なぜかマーティンが狼狽えた。

「それはできますが、駄目ですよ。警護がありますし」

「警護なら、今わたしがここにいるからいいじゃない。わたしもダ
ンスの練習ができて一石二鳥だよ」

自分を指さして主張すると、マーティンは溜息をついた。

「……陛下に知られたら、なんと言われるか分かりませんよ？」

「見ての通り、ダンスの練習じゃない。カデイスがなにか言うとは思
えないんだけど」

「……もう、いいです……」

マーティンは諦めたように小さく言った。

「もう、友達なんだから遠慮することないのよ。カデイスにもきち
んと許可を取ったし」

「……本当に許可を取ったんですか？」

「嫌いになるからって言ったら、まだちょっと渋ってたんで、瞳潤
ませて『駄目？』って聞いたたら許可してくれたよ。そんな目で見る
な！ って叫んでたけど」

「イルーシャ様、結構打算的ですね。……ちょっと陛下に同情しま
す……」

「だって、そのくらいしないと許可してくれそうになかったんだも
の。男は駄目だとか言うし」

「……イルーシャ様は魅力的な方ですから、陛下は心配されてるん
ですよ」

「そんなのカデイスの杞憂でしょ。友達同士でそんなこと心配する

ことないのに」

わたしがそう言うと、マーティンは複雑そうな顔をした。

「イルーシャ様は警戒心がなさすぎです。いくら友人とはいえ、異性なんですよ。男には魔が差すことだってあるんですから」

「……魔が差すって……、マーティンも？」

そう聞き返すと、マーティンはしまったというような顔をした。

近くに控えていたユーニスはなぜか期待に満ちた目でこちらを見ている。

「……分かりませんが、絶対には言い切れませんね」

「……そういうもののなの？」

「……そういうものです」

はつきりとそう言われてしまったので、わたしも強く言えなくなってしまった。

「分かった。友達と思ってても、一応気をつけた方がいいんだね」

「……そうしてくださいと、助かります」

なんとというか、面倒だなあ。

妙な空気になってしまったのを払拭するためにわたしは努めて明るい声を出す。

「じゃあ、早速練習しようか」

ユーニスに音楽をかけてもらって、キースに教わったダンスをマーティンと踊る。

——ええと、ここで右にステップ二回。一步下がってターン。

「イルーシャ様、踊れるじゃないですか」

「うーん、教わったばかりだからだよ。うっかり当日忘れないか心配なんだよね。体に覚えさせれば問題ないと思うんだけど。あと、二回繰り返していいかな？」

「いいですよ」

わたしは今日教わった分のダンスを完璧にするべく、わたしはマーティンを巻き込んで必死に練習した。ちょっと怪しいところもあったけれど、そこは後でメモして自分で練習しよう。……いくら友

達とは言え、警護中のマーティンを使うのも悪いし。

「ありがとマーティン、助かった。今日の分はなんとかなりそう」
につこり笑って言うと、マーティンも破顔した。

「それはよかったです。じゃあ、俺はこれで……」

「あ、ちよつと待って。お茶くらい飲んでいってよ。動いて喉乾いてるでしょ」

「しかし、警護がですね……」

「警護対象がそう言ってるんだから、遠慮しないの」

わたしたちは応接セットに向き合って腰を下ろし、ユーニスにさっぱりした冷たいお茶を持ってきたら喉を潤した。

やっぱり、運動の後のお茶はいいなあ、なんて思っていると、カデイスの訪れが告げられた。

マーティンは素早く立ち上がると、直立不動で敬礼した。

「なんだ、マーティン、ここで油を売っているのか」

「申し訳ありません。わたしはここで失礼します」

カデイスの言いぐさにむかつときたわたしは、つい言ってしまうた。

「ちよつと、そんな言い方ないじゃない。マーティンはわざわざわたしのダンスの相手してくれたんだから。マーティン、席外さなくていいからね」

「しかし……」

「いいから、いいから。まだお茶飲んでる途中でしょ？」

「マーティン、警護中だろう。さぼってるんじゃない」

「カデイス、うるさい」

わたしがにつこり笑って言うと、ユーニスが頬を押さえて「ひゃああ」と小さく叫んだ。

「マーティンもお茶、ちゃんと飲んで行ってよね。……それとも、わたしのお茶が飲めないっていうの？」

正しくはユーニスの淹れたお茶だけ。

わたしはくだを巻く酔っぱらいのようなことを言いながら、マー

ティンに座るように強制した。

「あ、はい、飲みます。飲みますからっ」

最後の方はやけくそになりながら、マーティンはお茶を飲み干した。

「それでは警護に戻ります。失礼いたしました」

「ああ」

マーティンの敬礼しながらの言葉に、カデイスはそっけなく言い返す。

マーティンが再びドアの外での警護に戻ると、カデイスはわたしの前の席にどさりと腰を下ろした。

「なんだか、すごく不機嫌そうだ。」

「ちよつと、なに怒ってるのよ。感じ悪いよ」

「……おまえ、キースに舞踏を習っているそうだな」

「うん。それがどうしたの？」

「なぜ、俺に教わらないんだ」

「なに、ひよつとして拗ねてるわけ？」

「だって、カデイスは執務で忙しいでしょ？ わざわざ時間割かせるわけにいかないじゃない」

「そのくらいの時間は作る。第一、マーティンまで連れ込んでなんだ。おまえは毎回男をとつかえひつかえするつもりか」

「ちよつと、誤解を生むような表現はやめてよね。ダンスの練習してるだけじゃない」

その時、ユーニスがカデイスの分のお茶を持ってきた。カデイスはそれを一気に飲み干す。

「それなら、俺が付き合ってやる。近衛騎士を巻き込むのはやめろ」
「酷いよ。カデイス横暴っ。だいたい本当にカデイスの時間が取れるかどうか分からないじゃない。結構遅くまで仕事してるのわたし知ってるんだからね」

これは凶星だったらしく、カデイスは言葉に詰まった。

「……それなら、時間が取れたらおまえの相手をするということだ」

どうだ」

カデイスにしては、これはかなりの譲歩なんだろうな。仕方ない、認めるしかないか。

「分かった。……でもカデイスが時間取れないようなら、練習できないから他の人に頼むよ?」

「……分かった。どんなことがあっても俺は来るぞ」

「じゃあ、ダンスを教えてもらうのはキースで、練習の相手はカデイスってことでいいんだね?」

「……仕方ない。キースにおまえを任せるのは癪だが、それでいいだろう」

この取り決めのせいで、カデイスは自分の首を絞めることになるんだけど、この時のわたしはそんなこと知る由もなかった。

15 披露式典へ向けて(2)

わたしはいつもの通り、キースにダンスを教わっていた。

もう全部のダンスを教えてもらったので、今は復習がてら練習している。

ここまでできたら、カデイスに無理に練習相手になってもらうこともないんじゃないかなあ。あまり時間取らせるのも悪いし。

「イルーシャ、随分上達したね。これなら、どこに出てもすぐ通用するよ」

「本当？ 嬉しいな」

キースの言葉にわたしは素直に喜んだ。そう言ってもらうと、頑張った甲斐があるってものだ。

「そういえば、イルーシャ、カデイスに練習相手になってもらってるんだって？」

「あ、聞いたの？ 執務で忙しいだろうから一応断ったんだけど、どうしてもって言うから」

「カデイスはかなり遅くまで執務してるみたいだね。体調崩さないといいけど」

「……ええっ、本当？ だったらすぐ練習やめさせないと、カデイス倒れちゃうよ」

「カデイスは鍛えてるから、そうそう倒れないとは思っけど、そろそろ休ませた方がいいかもね」

「うん、今日、わたしカデイスに休むように言ってみるよ」

「僕も言ってみるよ。君には強がって練習を強行するかもしれないし」

「うん、そうしてくれると助かる」

お茶を飲みながら二人でカデイスを待っていると、やがてその本人がやってきた。

「なぜキースがここにいるんだ」

キースの顔を見て、カデイスが露骨に嫌そうな顔をする。

「だって、カデイス、遅くまで執務で無理してない？ カデイスの気持ちはすごくありがたいけど、もうダンスもなんとかかなりそうだから無理して相手してくれなくてもいいよ」

「無理などしていいない」

「だけどね、カデイス。これ以上は執務に影響するよ。君に倒れられたら元も子もないよ」

「俺はそんなに柔じゃない。キース、俺の邪魔をするな」

「……わかったよ、じゃあ、僕は見ているだけにするよ」

キースがそう言ったら、カデイスは思い切り顔をしかめた。

「イルーシャとの時間を邪魔するんじゃない。どこかへ行っている」カデイスの冷たい言葉に、キースは肩をすくめるとその場から姿を消した。

「ちよつと、キースはカデイスを心配してくれてるのに、そんな言い方ないじゃない」

「イルーシャ、俺といえる間は他の男のことを話すのはやめろ。今は俺のことだけ考えていろ」

カデイスはわたしの頬をそつと撫でる。

「そんなの、無茶だよ。カデイス、どうかしてるよ」

わたしの友達はカデイスだけじゃない。カデイスのことだけ考えるなんて無理に決まってるじゃない。

「無茶を言ってるのは自分でも分かっている。おまえが俺が想うほど、俺を好いてないこともな」

カデイスが自嘲的に笑った。

「……カデイス……」

わたしはどうしていいか分からなくて、カデイスの顔を見返す。

「カデイス、わたし、好きとかそういう気持ちよく分からない。……」

でも、カデイスはわたしにとって大切な友達だと思ってるよ」

「……友達か。俺はそんなものになりたいわけじゃない。イルーシャ、俺はおまえを俺だけのものにしたいんだ」

カデイスの瞳の中に狂おしいものをみた気がして、わたしはびくりと震えた。

「……イルーシャ」

カデイスがわたしの手を引く。

わたしは慌てて周りを見回すけど、こんな時に限って誰もいない。――どうしよう、どうしよう。

誰かに助けてほしいのに、どうしたらいいの？

「イルーシャ、愛している」

強い力で抱きしめられて、わたしは身動きもできない。

「カデイス……ごめん、わたしあなたの気持ちに応えられないよ」

そう言ったら、カデイスは苦しそうに笑った。

「……分かっている」

カデイスの気持ちに応えられないのが心苦しい。でもこればかりはどうにもならない。

「どうして、こんなにおまえに惹かれるのだろうな。口は悪いし、やることは突飛だし」

「……ちよつと……」

本人を前にして、それは酷いんじゃない？　わたしは頬をひきつらせた。

「だが、それがおまえの魅力でもある。おまえは考え方も面白いし、時々すごく可愛いしな」

「……カデイス……」

カデイスはわたしを買いかぶり過ぎだよ。わたし、そんなに想われるほどできた人間じゃない。

「どうしたら、おまえの気持ちをおれに向かせることができるのだろうな」

カデイスの顔が近づいてきて、わたしの頬にキスをした。

「カ、カデイス、離して……」

「駄目だ」

カデイスがわたしの頤に手をかけると、今度は瞼にキスを落とす。

「や、やだ、カデイス、やめてよ……っ」

わたしは泣きそうになりながら、訴えた。怖くて震えが止まらない。

「……俺が怖いのか？」

怖いよ。だから、離してよ。

「だ、ダンスの練習するんでしょう？　こんなことしてる場合じゃないんだから……っ」

言葉を無理矢理絞り出して言うと、カデイスがちよつと笑った。

「……そういえば、そう、だったな……」

口調がすごく怪しいと思ったら、カデイスの膝が折れると、わたしの方へ倒れてきた。

「ええっ、ちよつと……っ」

カデイスの下敷きになったわたしは焦って彼の下から脱出しようと試みたけれど、わたしをがっちり抱えていて無理だった。

「ちよ、どうしちやったの、カデイス！？」

よく見ると、カデイスは寝息を立てている。

普通、この状況で寝るか！？

わたしは両手が利くなら、カデイスをものすごく殴りたかった。

「重いーっ、ちよつと誰か助けてえ……っ！」

わたしの叫びを聞きつけた近衛騎士とブラッドが駆けつけてくれて、カデイスを退けてくれた。

「陛下、床の上はちよつとどうかと思いますよ」

この状況で、なに言ってるんだ、ブラッド。

カデイスはこの騒ぎにも関わらず眠ったままだ。

「ああ、やっぱりこうなったんだ」

キースが移動魔法で現れて、呆れたように言った。

「ブラッドレイ、ちよつと、それ貸して」

キースはブラッドから報告書の束を受け取ると、それでカデイスの頭をはたいた。

紙の束とは思えない音がしたけど、どういふことなんだろう。

だけど、それでカデイスが意識を取り戻して身を起こした。

「ああ……、俺はどうしたんだ？　とてもいい夢を見ていたような気がするが」

カデイスは顔を覆って首を横に振る。

「……それはいい夢だろうね。イルーシャを下敷きにしていたんだから」

唇の端をひくつかせながらキースが嫌味を言った。

下敷きどころか、キスされたりしたんだけど、それは言わない方がいいよね……。

わたしは真っ赤になった頬を隠した。

「とにかく、カデイスは休養が必要だから今すぐ休むこと。イルーシャの練習には僕が付き合うから」

「……なんだと」

カデイスに皆まで言わせず、キースは手のひらをカデイスに向ける。

カデイスはそのまま倒れると、その場から消えた。

「え……、あれ？」

「寝室に送ったんだよ。しばらく目覚めないと思うよ」

「あ、そうなんだ。なら、安心だね。カデイスにはしっかり休養とってもらわなきゃ」

「まあ、その後に、山のような報告書が待ってると思うけどね」

……うわあ、大変そうだなあ。

やっぱりダンスの練習、無理にでも断ればよかった。

キースはブラッドに報告書を返すと、近衛騎士さんとブラッドにねぎらいの言葉をかけた。

彼らが部屋を去ると、わたしはキースと二人きりになる。

「……それで、舞踏の練習はできたのかい？」

「それが、できてないんだよね……」

ダンスの練習するはずが口説かれて、キスされて……。

あれこれ思い出しかあぁと赤くなっていると、キースがわた

しの手を取った。

「……ふうん。察するに、カデイスに口説かれたってところかな？」

「え、えっと……」

「イルーシャは、本当に分かりやすいね。ちょっと妬けるな」

キースがわたしの手を引いて抱きしめると、わたしの唇にキスを落とした。

「ちょっと、キース酷い。わたし、そこまでされてないよ！」

「ああ、ごめん、ごめん。ちょっと嫉妬にかられて、つい」

「つい、じゃないよ、キースの馬鹿ーっ！」

……もう、この二人、どうにかしてほしい。

とりあえず、今日のダンスの練習は中止となったのは言うまでもない。

16 披露式典へ向けて(3)

ああ、早く終わらないかなあ……。

わたしは溜息が出そうになるのを何度も堪えていた。

「やつぱり、このお衣装にはこの飾りですよ」

「髪型はどうしましょう。結い上げてもいいですけど、せっかくの美しい御髪が隠れてしまいますものね……」

特注のドレスも出来上がってきて、もう最終的な衣装合わせの段階に入っていた。

わたしとしては、もうどうにでもしてくれという心境だったんだけど、もちろんそんなこと言えるわけがない。わたしは、ただ黙って侍女さん達や衣装屋さんの意見を聞いていた。

「でも、どのお衣装でもイルーシャ様はお美しいですわよね……」

「それはイルーシャ様ですもの、当たり前ですわ」

ああああ、侍女さんや衣装屋さんのわたし礼賛は、ちょっと勘弁してほしい。外見がいくら絶世の美女でも、中身は褒められ慣れない庶民なんだよ！

我慢大会にも近かった衣装合わせの時間がようやく過ぎて、わたしはお気に入りの庭園に気晴らしにきていた。

「なに、あれ？」

見慣れたはずの庭園に、謎の球体がふわふわと浮いていて、かなり不思議な光景だ。

「庭園に明かりを灯す魔法器具だよ。これは夜になると自動的に明るくなるんだ」

わたしの護衛についてくれたキースが説明してくれる。

なんでも桜並木の方にもこの魔法器具が設置してあるとか。

うわあ、綺麗だろうなあ。すごく見たい。

最近キースは執務を副団長に任せて、わたしの側にいることが多

くなくなった。

そんなに大げさに護衛しなくても言ったんだけど、この時期に来てわたしになにかあったら大変だからということらしい。

キース達には手間をかけさせてしまつて、本当に申し訳ないと思う。

わたしがそう言うのと、キースは眉を上げた。

「イルーシャは、まだ自分が重要人物だつて意識がないのかな？」

君は危機意識が薄すぎだよ。普段でも近衛騎士を連れていてほしいのに、一人で行動したりするし」

キースのもつともなお説教にわたしは体を縮ませていた。

……すみません、時々近衛騎士さんを撒いたりしてます。

「ご、ごめんね……。気をつけるよ」

安全なのが当たり前だった日本と比べたら、この世界は魔物も出るし、結構危険なんだそうだ。

わたしはまだ魔物の実物を見たことないけれど、図鑑を見せてもらつて説明を受けたりした。おおざっぱなイメージとしては、猛獣を巨大化変形させた感じだろうか。

「あと、たとえ貴族だとしても気をつけること。君のその美貌なら閉じこめてもほしいと思う輩はたくさんいるんだからね」

「……でも、中身知つたら幻滅するんじゃない？」

いい加減浸透してるとは思うけど、わたしは口が悪くて、がさつ。深窓の姫君とは全くの逆を行っている自信がある。……そんな自信あつてどうするよつて感じだけど。

「……意思を閉じこめる魔法や薬もあるんだよ。君にはこんなことあまり知つてほしくないけど」

そんなものまであるのか。さすが異世界。

誘拐の危険性もあるからこんなにピリピリしてるんだな。今まで自分の行動がいかにも無謀だったか改めて知つて、わたしは冷や汗が出る思いがした。

「そ、そうなんだ。分かつた。気をつける」

わたしは顔をひきつらせながらこくこくと頷いた。

「そうしてくれると助かるよ」

ふう、とキースが溜息をつく。その様子で、これはかなり心配かけさせちゃってるんだなとわたしはやつと気づいた。

「あ……でも、近衛の人連れてても、魔術師相手の時はどうするの？」

いくら近衛騎士でも遠くから魔術を施行出来る魔術師相手には苦戦するだろうし。

「近衛騎士は魔術師団に連絡する魔法器具を持つてるから大丈夫だよ。あと、城の結界内で魔法を使われても分かるしね」

ふうん、防犯システムみたいなものかな。それにしても師団同士ですごく連携取れてるんだな。こういうところは、さすが大国と言えない。

「そうなんだ、なら安心だね」

素直に感心していたわたしだけど、あることが心に引っかった。「あ……、そういえば、わたしがこの間会ったウィルローって人、魔術師団にいなかったみたいだけど、あの人は大丈夫なの？」

いろいろな人に挨拶して回ったけど、彼には庭園で迷子になった時以来出会ってない。

わたしが尋ねた途端、キースは一変して厳しい顔になる。

「ウィルロー……、彼はかつて魔術師団に所属していた人物だよ。

才能があつて僕も彼には期待していたんだけど、ある日突然師団をやめて長らく行方知れずだった」

「……どうして彼は師団をやめたの？」

「僕の存在が目障りで、我慢ならなかったらしいよ。魔術師学校でも天才ともてはやされていたらしいから。……本人にそう言われたし、なにかと敵意を向けられていたからね」

順風満帆そうなキースにそんな過去があつたなんて。それにしても、稀代の魔術師と言われるキースに敵意を向けるなんてすごい自信家だ。

「……そんなの、逆恨みじゃない」

「頭では分かっているけど、感情が納得しないってことあるだろう？
……ウイルローはなまじ才能があったから余計そうだったんだろ
うね」

「……キース……」

苦笑うキースに、わたしはなんて言っているかわからなかった。
「ウイルローは、別の地でもう僕のことなど忘れてやっているとは
かり思ってたんだけど……、そうじゃなかったみたいだね」

「え」

キースの呟くような、でも真剣な言葉に、わたしは瞳を見開いた。
「ウイルローは君のことを異世界人だと知っていただろう。その機
密を調べた形跡があったんだ。……そしてたぶん、彼は君が僕の
大切な人だということを知っている。知っていて君に接触した」

わたしはあの時のウイルローの悪意のある笑いを思い出していた。
もしかなくても、あの時彼に害される可能性があったんだ。

わたしはぞつとして、自分の体を抱きしめた。

「ウイルローは以前と比べて格段に力が上がっているし、魔力の隠
し方も巧妙になっている。注意しすぎるに越したことはないよ。とに
かく、彼に注意して。念のためにこれを渡しておくから」

大小のコイン状のものが連なったデザインの腕輪を渡され、キ
ースに使い方を教わる。

「ありがとう、キース。本当に気をつけるね」

腕輪を身につけたわたしは心の中で使い方を復唱しながら言う。

「いや、逆に君をやっかいごとに巻き込んでしまって申し訳ない
と思ってるよ。本当にごめん」

「変なの、キースが謝ることなんてないのに。悪いのはそのウイル
ローって人でしょ？」

わたしが笑って言うのと、キースも少しだけ笑った。

その時風が強まって、花々とわたし達の髪を乱していった。

「……風が強くなってきたね。中に戻ろうか」

「うん」

頷いて、わたし達はキースの移動魔法で部屋へと戻った。

「地位、名誉、才能、見目、全て持っている。……本当に目障りな男だ」

敵意を剥き出しにして、男の人が呟く。
ダークブロンドに金の瞳。……それは間違いなくウィルローだった。

そして、齒ぎしりをする彼の視線の先にはキースがいた。
幾分今よりは年若く感じる。これは数年前の彼だろうか。
憎悪に似たその視線を感じたのか、キースがウィルローを見る。
ウィルローは忌々しそうに舌打ちすると、キースの前から消えた。

そこで、わたしははっと目覚めた。

辺りはもう明るくなっていて、もう起きてもいい頃合いだろう。

……それにしても、さっきのあれは、まるでわたしがそこにいて
彼らのことを見ているような感じだったな。

以前、わたしが死んだことを知った時のような既視感。

ひょっとして、これはわたしの能力なんだろうか？ 魔力はある
ってキースも言ってたし、可能性はないよね。

今日会ったら、キースに聞いてみよう。

「……それは、過去視じゃないかな」
「……かこし？」

朝の支度を終えて、キースを部屋に迎えたわたしは早速彼に聞いてみた。

「うん、過去に起こったことを見る能力。……君の場合は無意識で使っているみたいだけど、かなり珍しい能力だよ」

「……そうなんだ！ わたしの能力役に立ちそう？」

珍しいと言われて、わたしはすっかり有頂天になってしまった。

この容姿以外で、ガルディアに貢献できるなら嬉しい。

「訓練すれば、他国の情報を得たりできるかもね。移動魔法を使わないから、諜報活動の危険の可能性も減るし」

「本当！？ わたしの力が役に立つなら嬉しい！ キース、良かったらわたしの訓練してくれるかな？」

わたしは胸の前で指を組み合わせて喜んだ。

それにしても、ガルディアも諜報活動なんてしてるんだなあ。——見平和そうに見えても、ここの世界情勢は結構物騒なんだ。

「……できれば、訓練はあまりしたくないな」

「え……、なんで？」

思ってもいない返事が返ってきて、わたしは驚いてキースの顔を見返す。

「……僕としては、あまり君に生臭い話に関わってほしくないんだよ。たぶん、カデイスも反対すると思うよ」

「……え、だってわたし、お世話になるばかりで申し訳ないよ。せっかく役に立ちそうなのに……」

それが、カデイスまで反対するってなんなの？

わたしは眉を下げてキースを見る。

「役になら立つてるよ。伝説の姫君として、君は毎日頑張ってるじゃないか」

「……そういうのじゃないのに。」

わたしは首を横に振って言う。

「そうじゃなくて、わたしはイルーシャとしてこの国の役に立ちたいの。どんなつらいことだって、ちゃんと目を逸らさずに見るよ」

「——駄目だよ」

キースが真剣な表情でわたしの意見をはねのける。

「君にそんな思いをさせるわけにはいかない。……訓練の話は諦めて」

キースの手がなだめるようにわたしの髪を梳く。わたしは納得出来ないまま、キースを見つめていた。

「……ちよつと、カデイスに報告に行ってくるよ。君はこのまま外出せずにいて」

そう言いおいて、キースが姿を消す。

——せつかく役に立ちそうだったのに、キース酷いよ。

こんなふうに甘やかされるのは嫌だった。

わたしを大切にしてくれているのは分かってる。でも——。

納得出来ない思いを抱えて、わたしは懨然として椅子の背もたれに寄りかかった。

17 願い

「イルーシャ、変わった能力を持っているそうだな」

しばらくすると、カデイスが部屋に入ってきて、開口一番にそう言った。

「うん、過去視って能力らしいよ。わたしの力が利用できるなら、そうしてほしいんだけど……」

「駄目だ」

「なんでよ？」

一言で切り捨てられて、わたしはむっとする。

「おまえにそんなまずいことをさせるわけにはいかない」

「まずいことって…… 具体的にはなによ？」

わたしははつきりしないカデイスを挑戦的に見上げて言う。

「具体的に言うとなさうだな……。たとえば他人の閨まで見ることになるが、おまえは大丈夫なのか？」

「ね……」

カデイスにそう言われて、わたしはかあつと赤くなった。

聞いて、つまりその、えっちってことだね？

「そ、そんなの見る必要ないでしょ？ カデイス、なにか理由つけて断ろうとしてるのかもしれないけど……」

「閨を探るのも重要な任務だぞ。事後に男が女に重要事項を話すかもしれないからな」

「——カデイス」

冷たい口調でキースがわたし達の話遮る。

「イルーシャに妙なことを吹き込まないでくれるかな？」

「あ、ああ……、わかった」

キースの冷やかな視線に、カデイスと傍にいたわたしも凍る。こういう時のキースは本当に怖い。

「とにかく、その能力の訓練は駄目だ。……そんなことよりも、今

はおまえもすることがあるだろう？」

「う……」

確かに、そう言われちゃうと弱い。今は披露の式典の準備中だった。

「あ、じゃあ、式典が終わったら……」

「駄目だ」「駄目」

「ひつどい、結局駄目なんじゃないの！」

二人同時に駄目出しされて、わたしは思わず叫んだ。

「もちろん駄目だよ」

「なにを言おうと駄目だ」

「……もう、いいわよっ、二人の意地悪——！」

どうしても納得できないのと、子供じみた反応をしてしまったのが恥ずかしくて、わたしはその場を駆けだした。すると、すぐにキースが目の前に移動してきて、わたしを受け止めた。

「イルーシャ、単独行動は駄目だよ」

——どこまでも冷静な言葉。わたしはかっとなって、すぐにキースの腕から離れる。

「なによ、駄目駄目駄目って！ わたしの自由はないの？」

——ちゃんと生きるって決めたの。

「——おまえがイルーシャとして生きることを選んだ時点で自由は制限されている。……諦めろ」

意味も分らずこの国に来て、いろいろな人に出会った。

「わたしはこの国の役に立ちたいの。それだけだよ。なんで分かってくれないの？」

「君には荷が重すぎるよ」

キースは最初からとても親切だった。なにも分からないわたしの面倒をいろいろ見てくれた。

「おまえの気持ちは嬉しいが、その能力でおまえが傷つかないとは言えない。すまないが諦めてくれ」

カデイスとは最初争いもあつたけど、今ではとても大切にしている。

それからリイナさんや、シェリーやユニスにはいつもお世話になつてる。

それから、それから――。

いろいろな人の顔が浮かんでは消える。

「都合の悪いことは見せないの？ わたしは綺麗なことだけ見ていろつてこと？ そんなの無理だよ」

瞳に涙が浮かぶ。

滲む視界でも、二人が動揺するのが分かった。

「向こうの世界でも悪意は受けたよ。いじめられて人を信じられなくなったことだつてある」

自分でも止められない涙がこぼれ落ちる。

……ああ、こんなんだから、駄目って言われるのかな。なんとなく二人の気持ちも分かる。……けど。

息をのむ二人の前で、わたしは自分の過去を顧みていた。

友達だと思つてた子達からの突然のいじめ。

無視。陰口。嘲笑。

あの時は、教科書隠されたり、上履き捨てられたりもしたっけ。一番堪えたのはノートに『死ね』と書かれていたことも。

いじめの原因は今でも分からない。もしかしたら、ほんの些細な

ことだったのかもしれない。

だけど、あの時からわたしは惰性で生きてきた。

一生懸命やつても無駄。

誰かに期待しても無駄。

人や物事を適当にやり過ごすだけの人生。

けれど、わたしはこの世界に来て、そんな生き方をしてきたことを悔やんだ。

そして今度は後悔しないように生きるって決めたんだ。

そして思った。

イルーシャとして、わたしになにが出来るんだらうって――。

「わたしが甘いのは分かってる。でも、お願い、わたしから可能性を奪わないで。わたしにもなにか出来るんだって信じさせて」

「イルーシャ……」

泣きながら、わたしはカデイスとキースの顔を交互に見る。二人にこの願いが届くことを願いながら。

「……本当に、おまえの願いを断るのは難しいな」

溜息をつきながらカデイスがふいに言った。

「泣かれて訴えられたら、もうどうしようもないね」

カデイスの言葉に頷きながら、キースが苦笑する。

「……それって……」

「仕方ない。認めてやる。ただし、訓練は披露目の後だぞ？」

「ほ、本当に？」

信じられなくて、思わず涙が止まる。

「ああ、本当に仕方なくだぞ。おまえには汚れたものを見せたくはなかったが、そこまで言われては仕方ない」

カデイスが慥然として言ったけど、その頬は少し赤かった。

そんなカデイスの様子がおかしいのか、くすくす笑ってキースが

言う。

「僕も仕方なくだけど、王命には従わないとね」

「なんだ、いつも俺より偉そうにしているくせに。キース、こんな時だけ俺をだしにする気か」

「それはきつと君の気のせいだよ」

すまして言うキースに、さらに慥然とした表情になるカデイス。わたしはそれに思わずくすりと笑った。

「わたし頑張るね。本当にありがとう。ありがとう、ありがとう……」
二人には何度お礼を言っても足りないけれど、また涙が溢れてきてわたしはそれ以上言えなくなってしまった。

二人はそんなわたしの傍に寄り添って優しく涙を拭ってくれた。

……本当に過保護だね、二人とも。

気恥ずかしいながらも、わたしは幸せな気分に戻る。

それは、この国の役に立ちたいというわたしの、新たな目標へ一歩踏み出した瞬間でもあった。

あれから慌ただしい日々が過ぎて、とうとう披露の式典の日となった。
大がかりな支度に身を任せながら、わたしはこれからの大仕事にちよつと緊張していた。

「……イルーシャ様、とてもお美しいですわー……」

「……ええ、本当に……」
大勢の侍女さん達の溜息と共にそんな感嘆する声ばかりが傍で囁かれる。

「——ありがとう」
いつもは照れくさくてしょうがない賞賛も、いい加減慣れてきた。

わたしはにつこり笑って鏡に映った自分を観察する。うん、完璧。瞳の色に合わせたふんわりした淡い青色のドレスと、側面だけ結い上げてつけた淡い青色の髪飾りもちやんと違和感なく似合ってる。そして、わたしの薄紅色の唇よりも少しだけ色の濃い紅をつけて、わたしの支度は完成した。

大勢の騎士や侍女が見守る中、リイナさんに手を引かれて、わたしはカデイスの傍まで連れて行かれる。

「——美しいな」

「ありがとう」

目を細めて言ったカデイスに、わたしはにつこり笑った。

時間をかけて支度したんだもの、普段見慣れてる人からもそう言われないとね。

わたしはカデイスの差し出した手を取りながら、ちょっとした達成感を味わった。

でも、本番はこれから。

近くにはキースとダリルさんも控えていて、いつでも準備万端だ。

「さて、行くぞ。おまえの披露目だ」

「うん」

わたしは、カデイスに手を引かれて城のバルコニーへと向かった。差し込む光がちょっと眩しい。

バルコニーに一步踏み出した途端、ワツという大歓声が上がった。

——すごい。

割れんばかりの声、拍手。手を振る人々。

見渡す限りの大観衆がわたしを見て熱狂的な歓声を上げる。

わたし、これほどこの国の人達に歓迎されてるんだ。そう思うと胸が熱くなった。

わたしがにつこり笑って観衆に手を振ると、更に歓声が高くなる。

——この国がガルディア。

この人達がカデイスを王として上に戴いてるんだ。……カデイスって、本当に偉かったんだね。

わたしはカデイスに失礼なことを考えながらも、伝説の姫君らしく優雅に微笑みながら手を振った。

そう言えば、伝説の姫君であるわたしがいることで経済が活性化するって言われたっけ。

それで、もしかしたらガルディア王国の一人一人の生活が良くなっていくことが出来るのかもしれない。

そう思うと、伝説の姫君って、なんてやりがいのある仕事だろう。

この歓声は、わたし個人じゃなくて伝説の姫君を歓迎している声だっことは分かってる。

でもいつかこれがわたし自身に対するものに変わったら、とても幸せだ。

そのために、高望みかもしれないけれど、伝説の姫君としての責務だけじゃなくて、わたし個人の能力でこの国をより良い方向に持って行けたらいいな。その為にはいろいろな人の協力も必要だろうけど、この国の人達となら上手くやっていける気がする。

「ねえ、カデイス」

笑顔で国民に手を振りながら、わたしはカデイスに声をかける。

「なんだ？」

「わたし、この国に来られて幸せだよ」

カデイスは一瞬瞳を見開いた後、全開の笑顔になった。

——わあ、初めて見たよ、こんなカデイス。

わたしがちよつと驚いて見ると、カデイスはそうか、とだけ返して、嬉しそうに前を向く。

わたしも目の前の観衆に目を移して手を振り返しながらも願う。

ああ、どうか神様。

この世界の神様のことはまだそんなに知らないわたしの願いが届くかどうかは分からないけれど。

どうか、この国のみんなが幸せになれますように――。

18 披露式典（1）

バルコニーでの国民への披露が終わった後、わたしは素早くパレード用の衣装に着替えさせられた。

ドレスは象牙色で、細目のシンプルなデザイン。

髪はサイドを残して結い上げて、一部を巻き髪にして両側から前に垂らしている。サイドの髪は下の方だけ巻いてもらった。

そして、ダイアのティアラを飾って、髪型は完成。ティアラとお揃いの首飾りもつけた。

「こちらも素敵ですわ」

シェリーとユーニスがうつとりしたように言う。

しばらくしてキースがやってきて、この支度の出来映えを褒めてくれた。

「さて、準備はいいかな？」

「うん」

これからわたしはガルディア国の首都ルディア市内を馬車でパレードする。

パレードの配列は、近衛騎士団、紅薔薇騎士団、私達の馬車、白百合騎士団、魔術師団。今回のパレードはかなり大がかりなものになりそうだ。

キースに馬車の乗り口まで移動してもらったら、カデイスはもうそこで待っていた。

「それも似合うな」

「ありがとう、カデイス」

「普段でも充分なのに、こんなに綺麗になられると困るね」

「そ、そう？」

それはキース、褒めすぎだと思っただけだ。

「キース、こんな時にイルーシャを口説くな」

カデイスがキースに文句を言いつつ、わたしの手を取る。

護衛役のマーティンもそこにいて、わたしは彼に笑いかけた。

「マーティン、今日はよろしくね」

だけど、彼の返事がなくて、わたしは首を傾げた。

「……マーティン？」

「あつ、申し訳ありませんっ。本日は僭越ながら護衛を務めさせていただきます」

「うん、よろしく」

どうしたんだろ？　ちよつとぼーっとしてるみたいだ。

馬車に乗るのはわたしとカデイスと護衛であるキースと、マーティン。

ダリルさんは近衛団の団長としてパレードを先導する係だ。

キースはパレードの列に出なくていいのかと聞いたら、魔術師団は他の騎士団と違って馬に乗れる人数も少ないので、馬車で移動している。だから、師団長のキースが無理に魔術師団の馬車に乗る必要もないから、わたしの警護に回っているということだった。

実際のところ、キースに直接守ってもらえたら、かなり心強い。

馬車の乗り込む際にはリイナさん達にも手伝って貰って、ようやく開始の段になった。

パレードの出発点は城門から。そこからルディア市内をぐるりと回るコースだ。

このパレード、緊張もするけれど、ちよつとわくわくもしている。なんと言っても、今まで見たことのない首都をみることができるんだもの。

気楽に市井に下りられたらいいんだけど、そういうわけにはいかないと何度も言い含められているので、これがルディア市内を見る初めてのチャンスなんだよね。

そして、流麗な音楽が流れて、パレードがついに始まった。

わたしはここでも市民の熱狂的な歓迎を受けた。「イルーシャ様

ー」という呼び声、拍手、歓声。花が特産の国らしく花吹雪も舞っていた。

それにしても、首都だからルディア市内は結構豊かだ。郊外に行ったらどうなんだろう、とわたしはこの国にますます興味が湧いてきた。落ち着いたら、城の図書館で本を借りて勉強しよう。

わたしは笑顔で観衆に手を振って応えながら、半刻（一時間）強ほどのパレードを終えて、無事に城まで戻ってきた。

「うー、なんかまだ、笑顔が張り付いてる気がするー」

わたしは新しく作った予備分のドレスにまた着替えさせられて、会議とかする陽の間で、用意された食事を取っていた。

「頑張ったね、イルーシャ。ご苦労様」

キースが空になった私のグラスを交換してくれるように侍女さんに頼みながら言った。

すぐに運ばれてきた果実水を手に取りながら、わたしは笑った。

「うん、ありがと。確かに疲れたけど、楽しかったよ。市内も見れたし、すごく歓迎されたし、嬉しかったな」

「イルーシャ、よくやったな。あとは舞踏会だけだ」

「その舞踏会が一番問題なんだけどね。……でもわたし頑張るよ」

「そうだな、まあ今は休め。舞踏会が始まってしまったら、主役のおまえはなかなか休めないからな」

「うん、そうする」

おいしい料理を食べながら、来たるべき舞踏会に備えて、わたしは英気を養った。

その後、わたしは自分の部屋に戻ると、支度の時間までゆっくりした。

ああ、やっぱり自分の部屋は落ち着くわー。

「お疲れさまでした、イルーシャ様」

長椅子に座ってくつろいでいると、シェリーがミルクティーを持ってきてくれた。

「ありがとう」

「あとは舞踏会ですわね」

「うん、国内外の賓客が来るから、応対には注意しないとね。なんでも、隣国のハーメイからは国王がいらっしやるみたいだし」

わたしがそう言うと、シェリーは眉をひそめた。

「わたくしから申し上げるのもなんですが……、イルーシャ様、ハーメイの国王には気をつけたほうがよいと思いますわ」

「……なんで？」

「あちらの国王には良くない噂が立っております。なんでも異国風の後宮を作って妾妃を何十人も囲っているとか」

「うええ、それって好き者ってこと？ そんな人と会わなきゃいけないなんて、ちよつと、いや、かなり嫌だ。」

「侍女長に聞いた話なんですけど、こういった催しには通常でしたら、宰相、大臣クラスの方、良くて王族の方が来られるそうなんです。でも、国王自らがいらしたとなると、イルーシャ様を直接見られにきたんですわ」

「ええー、ちよつと勘弁してほしいな。……その国王って若いの？」

「五十代と聞きました。が、イルーシャ様はお綺麗ですから、本当に注意してくださいね。もしかしたら、妃に据えようと思ってるのかもしれないもの」

「うわあ……」

それはかなり嫌すぎる。はつきり言っただけ会いたくない。

……国内外の賓客の他に、好き者の他国の国王にも注意しなきゃならないのか。

「とりあえず、護衛の人から離れないようにするよ」

わたしがそう言うと、シェリーが神妙な顔で頷いた。

「そうですね、それがいいと思いますわ」

ミルクティーを飲みながら、わたしは外交デビューであるこの舞

踏会が成功してくれることを心から祈った。

そんなわけで、今わたしは舞踏会の支度中。侍女さん達に薄紅色のドレスを着せて貰うと、編み込んだサイドの髪にはわたしの好きな桜をかたどった髪飾りをつけた。ゆらゆら揺れる桜が可愛い。

いつもは私の瞳の色に合わせた淡い青色のドレスが多いんだけど、こういう色もたまにはいいよね。

「まあ、さすがイルーシャ様ですわ。どのドレスもお似合いですわね」

「薄紅色も素敵ですわね。エーメの髪飾りがイルーシャ様の可憐さをより引き立てていて素晴らしいですわ」

うん、ありがとう。……中身が可憐かどうかに関しては突っ込まないで。

その後、近衛騎士さん達に護衛されて、わたしは舞踏会の会場である広間の控え室まで行く。

「ああ、その衣装も良く似合ってるね」

「似合うぞ、イルーシャ」

キースとカディスに褒められて、わたしはにっこり笑った。

「ありがとう」

「あまりおまえを他人の目に触れさせたくはないが、これも仕方ないな」

「まっただね」

カディスが苦笑して言うと、キースも頷いた。

「あ……、そういえば、シェリーにハーメイの国王には気をつけるって言われたよ。良くない噂があるからって」

「ああ、俺もそれを今注意しようとしていたところだ。あの王は今回おまえを物色しに来たんだろうからな」

「物色って……、わたし物じゃないんだけど」

「ハーメイ国王ギリングにとっては、女は戦利品だ。……だから気をつける」

うわあ、マジですか。なんか冷や汗が出てきた。

「分かった、気をつけるよ」

わたしが頷くと、キースがわたしの肩を叩いた。

「僕もなるべく君のそばにいるよ。もし、僕が傍にいない時になにかあったら、この間渡した腕輪を使うこと。分かったね？」

「うん、分かった」

わたしは左腕にはめた腕輪の感触を確かめて頷いた。

「もつとも、気をつけるのはギリングだけではないからな。諸国の大使や、自国の貴族にも気をつける」

「うん、本当に気をつけるよ。二人ともありがとうね」

少し微笑むと、なぜか二人は溜息をついた。

「おまえがこれほどの美貌でなければ、こんなに神経をすり減らすこともなかったのだから」

「まっただけだね」

うーん、それはどうにもならないと思うんだけど。……あ、それだったら。

「……ねえ、二人ともわたしがこの姿でなくても好きになつてた？」

「それは愚問だな。それでもおまえに変わりはないだろう」

「どんな姿でも好きだよ。君が君である限りね」

そして、わたしは二人に手を取られて、そこに口づけられる。

二人の殺し文句にわたしは真っ赤になるしかない。

「可愛いね。イルーシャのそういうところが好きだな」

「他にもいろいろあるがな。……聞きたいか？」

ごめん、聞いたわたしが馬鹿でした。……だから、二人とももう許してください。

19 披露式典(2)

イルーシャ・マリールージュ・ディレグ・リルディア。

それがわたしのフルネームだ。

大広間でわたしの名前が呼ばれると、カデイスがわたしの手を取って歩き出す。

わたしはそれに従って、しずしずと歩いた。

大広間への扉が開かれて一歩踏み出すと、会場が一瞬静かになった。

注目されて緊張したけれど、わたしは顔を上げてにつこりと微笑んだ。

その途端、パーティ会場にざわめきが戻ってきて、わたしはほっとする。

わたしはカデイスに連れられて広間の中央に行くと、ドレスを摘んで正式な礼をした。すると大きな拍手が沸き起こって、わたしは儀礼用に練習した微笑みを返す。

「まあ、なんてお美しい」「絶世の美貌というのは、嘘ではなかったのだな」なんて囁きが聞こえてきて、とりあえず最初の関門は乗り切ったように思えた。

次には大広間に音楽が流れてきて、わたしはカデイスに手を取られてゆったりと踊りだす。

淡い色彩のわたしのドレスに合わせて、今日のカデイスは白い正装だ。普段黒い格好が多いからちよっと新鮮かも。そんなことを思いながら、わたしはターンする。

「上達したな、イルーシャ」

「本当？　ありがとう、練習につき合って貰ったかいあったかも」

わたしはカデイスに寄り添って、くすくす笑った。

「……なんだ？」

「だって、カデイス、寝る間も惜しんで練習につき合ってくれるん

だもの。倒れてきたときはびっくりしたけど」

わたしがいたずらっぽく笑うと、カデイスは少しづつが悪そうに
した。

「すまない。おまえを下敷きにしたのは悪かったな」

「うつん。そういうことじゃなくて、わたしのために無理しないで
つてこと。それでなくてもカデイス忙しいでしょ」

「だが、俺はおまえになにかしてやりたいのだ。おまえは物を欲し
がらないしな」

「……カデイスって、本当に変わったよね」

わたしがそう言っていると、カデイスが不思議そうにした。

「なにがだ？」

「こう言っちゃなんだけど、最初会った時すごく態度悪かったじゃ
ない。だからカデイスの印象最悪だったんだよね」

あ、カデイスの顔色が変わった。……正直に話しすぎたかも。

「あれは……本当にすまなかった。俺の妃の問題は、おまえのせい
ではなかったのにな」

「うつん、わたしもごめんね。わたしもずいぶん失礼なこと言っ
ちやった。暴君とか、国民がかわいそうとか」

あの時は知らなかったとはいえ、寝る間も惜しんで執務に励んで
るカデイスに言っている言葉じゃないよね。あれじゃカデイスが怒
って当然だ。

「あああれか、あれは結構傷ついたぞ」

「う、本当にごめん。謝る」

「謝らなくていい。あれは俺が未熟だった。その後も俺はおまえを
ずいぶん傷つけたしな」

「カデイス……」

わたし、カデイスが変わったとばかり思ってたけど、本当は元々
こういう人だったのかも。ただ、不器用で俺様だから誤解されやす
いだけで。

「わたし、カデイスにはいろいろお世話になってるし、本当に感謝

してるよ。だから以前のことは気にしないで」

わたしが微笑むと、カデイスも少し笑った。

「……ああ、分かった」

音楽が終わると、わたしはカデイスに手を取られて王族専用の控えの場まで戻って来た。

「——これは、これは。絵姿よりも一層美しいですな。イルーシャ姫」

なんとなく粘着質な感じのする声をかけられて振り返ると、そこには五十代半ばくらいの不健康そうに太った男の人が立っていた。

「ハーメイの——」

カデイスがそう言ったことで、目の前にいるのがハーメイ国王ギリングだと分かった。

けど、この国の王であるカデイスに挨拶もなしで、わたしに話かけるのってどうなのよ。それだけでもこのギリング王の印象は悪い。はっきり言って、ハーメイはこのオルデリード大陸一小さい国だ。その小国の王が大国のガルディア国王であるカデイスを無視したも同然の行為にわたしは呆れ返った。

——愚王、という言葉がふと頭に浮かぶ。……こんなんじゃ、ハーメイ国民は苦労してるんだろっな。

「……それは、ありがとうございます」

わたしはなるべく感情を顔に出さないように返事をする。

カデイスに目をやると、彼も呆れたようにギリング王を見ていた。「ぜひ舞踏をお願いしたいものだが、どうですかな？」

うー、嫌だ。出来ることなら断りたい。

でも、こんな無礼なのでも一応国賓だ。申し込まれたら、一曲くらいは踊らないと駄目だよな。

「……お受けいたします」

わたしはギリング王の脂ぎった手を取ると、嫌々ながら彼と踊った。

けど、このギリング王、手が滑ったふりして、やたらわたしの体に触ってくる。……なんというか、わたしの忍耐力を試されている気がしてきた。

もうそろそろ曲も終盤に入って、この地獄のような時も終わるかとおぼとしてたら胸を触られた。

「……おっと、失礼」

にやにやといやらしい笑いを浮かべながらギリング王が一応謝った。が、全然失礼と思ってないのが丸分かりだ。

こんの、セクハラオヤジ——！

わたしはもうちょっとでハーメイ国王をはり倒しそうになったけど、その時ちょうど曲が終わったので、わたしの立場的には一応助かったんだと思う。

わたしは逃げるようにしてカデイスのいる控えの場に向かったけれど、ギリング王がわたしの手をがっちり掴んでいた。

「イルーシャ姫、もう一曲いかがですか」

「……申し訳ありませんが、気分が優れませんので」
だから、とつとと離しやがれっ。

わたしはそう暴言を吐きたいのを堪えながら、掴まれた手を解こうと必死だった。

「ほう、イルーシャ姫は照れておられるのかな？ さあ、遠慮せずにもう一曲」

いや、遠慮じゃなくてほんつとに嫌なんだって！ 誰かなんとかして、このオヤジ。

「——失礼ですが、ハーメイ国王様、イルーシャ姫と踊りたいと望む者は大勢おります。それをこのように独占されては、諸国の方々にもいらぬ反感を買われるかと存じますが」

「キース」

天の助けとばかりに、わたしはほっと息をつく。

「なにを——」

ギリング王がむっとしたようキースを睨んだけれど、彼は底冷え

のするような笑顔で王を黙らせた。

「それから、あなた様はまだガルディア国王に挨拶していませんか？ それは外交上少々問題なのではないですか」

「この……、無礼だぞ！ ガルディア国王に進言してやる。貴様、名を名乗れっ」

ギリング王のこの言いぐさには、わたしはほとほと呆れ返った。いったいどっちが無礼なんだ。

「どうぞ、好きなように。わたしはキース・ルグラン・レグ・アレグリア。この国の魔術師師団長で、国王の従兄弟ですよ」

「……っ！」

最後の国王の従兄弟という言葉が効いたようで、ギリング王が齒ぎしりした。

「それでは、ハーメイ国王様もこの夜会をお楽しみください。……イルーシャ、おいで」

わたしは心底ほつとして、キースの差し出された手を取った。軽やかな音楽が流れる中、ギリング王から離れた位置まで来るとキースが立ち止まった。

「カデイスの次に君と踊るのは僕だと思っていたのに、あんなのに先を越されるなんて悔しいよ。……ところで、僕と踊ってくださいか、お姫様？」

「喜んでお受けします」

わたしはにっこり笑って、ドレスを摘んでお辞儀をする。

それからわたしは彼のリードに従って踊り出した。

「本当に助かった。キース、ありがとう」

心底安心してキースに笑いかけると、彼はちよつと悔しそうに言った。

「まさか、あの王があそこまでやるとはね。ずいぶん嫌な思いをしただろう？」

「……本当に最悪だったよ。やたら触ってくるし、しつこいし」

「もっと早く助けてあげられたらよかったんだけどね。……こっち

もカデイスが怒鳴りこみそつなのを押さえるのに必死だったよ」

……カデイスもしっかり見てたんだね。それにしても怒鳴りこむって穏やかじゃないな。

「……あの国王、カデイスに挨拶に行くと思う？」

この後、あの王がこのこと挨拶なんかしたら、なにか起こりそうで怖いんだけど。

「行けないと思うよ。あの王の飲み物に細工するように指示しておいたし。次に気がついたときには客室の中だ」

——つわあ、黒い。

あ、でもこの場合、一番平和的な方法なのか。

「カデイスもなに言うか分からないしね。一応カデイスの方も念の為魔法で足止めしといたけど」

「そ、そこまでやる？」

やりすぎじゃないの、それ。

冷や汗が出る思いでキースを見ると、彼はなんでもないというように少し肩を竦めた。

「諸国の大使も来てるしね。問題はない方がいいだろう？」

……いや、そうなんだけどね。

助けて貰っというてなんだけど、キース、黒い。黒いです。

20 披露式典(3)

あれから、わたしは各国の大使や自国の貴族の人にダンスを申し込まれてその相手をしていた。けれど矢継ぎ早に来るその申し込みにちよつと疲れてきた。気のせいかな、頭も痛い。

「……どうした、少し顔色が悪いな」

カデイスが心配そうに声をかけてくれる。

「うん、ちよつと疲れたかも。外の空気吸ってきていいかな」

「ああ、近衛の者を連れていけ。俺がついていきたいが、そういうわけにもいかないしな」

「うん、ありがと」

わたしは近くにいた近衛騎士さんに護衛をお願いすると、広間に繋がるバルコニーに向かった。

わたしはバルコニーに出ると、置いてあるテーブルセットの一つに腰を下ろした。

「イルーシャ様、大丈夫ですか？」

「……うん、ありがとう。大丈夫だよ」

……そうは言ったものの、頭がガンガンしてきた。完全に人に酔ったみたい。

「ですが、お顔の色がよくありません。魔術師を呼んで治癒させますので、少々お待ちください」

そういえば近衛騎士は魔術師を呼べる手段があるとキースが言っていた。ここはこの騎士さんの気遣いに甘えところ。

「うん、お願い」

なんとか笑ってそう言っていると、近衛騎士さんは「かしこまりました」と頷いて腕輪を操作していた。

キースに貰った腕輪と原理は同じそうだなーと思いながらその様子をわたしはぼーっと見ていた。

「おや、イルーシャ姫ではありませんか」

聞き覚えのある声がしたのでそちらに目をやると、いるはずのないハーメイ国王ギリングが赤ら顔をして立っていた。

キースが飲み物に細工をしたって言ってたのに、なぜここに。

「――嘘」

「なにが嘘なのですか」

「陛下、御酒は過ぎされないようにお願いしますよ」

「ウィルローか、分かっておる。今は姫とおるのだ。邪魔をするな」

――ウィルローがなぜここに？ それも、ギリング王と一緒に。

「はい、分かりました。ああ、邪魔者は一応排除しておきましたから、どうぞごゆっくり」

わたしがその言葉に焦って辺りを見回すと、傍にいたはずの近衛騎士さんが見あたらない。

「なにを……」

わたしが絞り出すように言うと、ウィルローはまたあの嫌な笑いをしてその場から消えた。

わたしは貰った腕輪を使ってキースを呼び出そうとしたけれど、その前にギリング王に腕を取られてしまった。

「あ、あの……っ」

「本当に予想以上ですな、姫。本当に美しい、顔もその体も」

セクハラオヤジそのもののギリング王に手を撫でられて、わたしはぞつとして手を引こうとする。けれど、王の手は緩まない。

「離してくださいっ」

ああ、もう最悪。

頭は痛いし、目の前の王は気持ち悪いし。

わたしの目に涙が溜まってきたのをなにを勘違いしたのか、ギリング王はさらに身を乗り出してきた。

「姫、恥ずかしがることはないのですぞ。ここには誰の目もないのですからな」

誰が恥ずかしがるか！

「お願いですから、離してください！」

渾身の力を込めて掴まれた手を引き戻そうとするけれど、逆にわたしはギリング王にがっちりと抱き締められてしまった。

うわあああ、いやだああっ！

「ほお、なんと柔らかい。いや、想像以上のお体ですな」

気持ち悪い、想像するなーっ！

そう叫びたいけれど、わたしの体は生理的な嫌悪感からか、硬直して動けない。

それをよいことに、国王はわたしのお尻や太腿を撫でまくる。

気持ち悪い、気持ち悪い、気持ち悪い。

「や……め……っ」

「イルーシャ姫、ハーメイへ参られて、わしの妾妃になりませんか。いくらでも贅沢し放題ですぞ」

「——それは、聞き捨てなりませんね、ハーメイ国王様」

「だ、誰だ！」

ふいにハスキーな声が聞こえてきたことで、わたしはようやくギリング王から解放された。

陰から騎士の正装をしたヒューが姿を現すと、ギリング王はその美貌に圧倒されたようで息を飲んだ。

「……ヒュー」

わたしがそう言うと、なんだ男かとギリング王が呟いた。どこまでも失礼な奴だ。

「イルーシャ様はこの国の王族。そして、カデイス国王陛下が王妃にと望まれている方です。そのような方を妾妃になどと失礼が過ぎます」

「既に男を知っている女を王妃にだと？ 正気の沙汰とは思えんわ」
ヒューの冷静な態度とは対照的に、ギリング王が狂ったように笑いだした。

「……それは国王陛下とイルーシャ様への侮辱と受け取ってよろし

いのでしょうか」

「――なに？」

ギリング王が気色ばむと、ヒューはその美貌に冷ややかな笑みを浮かべた。

「ガルディアはハーメイとは違います。我が国ではイルーシャ様が王妃となられるのになんの障害もないのですよ、ハーメイ国王様」

「……っ」

ギリング王が言葉に詰まると、ヒューは更に言葉を継いだ。

「それだけでなく、イルーシャ様にあのような無礼な振る舞いをなさるとは、全く信じがたいですね。この目で見たからには、このことをカデイス国王陛下に報告しなければなりません」

カデイスに報告すると言われたギリング王はちつと舌打ちした。

「……覚えていろっ」

その悪役そのものの捨て台詞に、わたしは呆れる。

ギリング王はわたしを振り返ると、ぎらぎらした目をして言った。
「姫、わしは諦めませんぞ」

……いや、お願いだからいい加減諦めてよ。

ギリング王がようやく立ち去ると、ほっとしたわたしは目眩を覚えて倒れそうになった。

「イルーシャ様っ、大丈夫ですか!？」

駆け寄ったヒューに支えられて、わたしはなんとか返事をする。

「大、丈夫……、ありがとう、ヒュー」

「しかし、イルーシャ様、相当具合がお悪いのでは？」

心配そうにヒューが眉を寄せる。

彼が本気でわたしを心配してくれているのが分かって、わたしは気が緩んで涙を流してしまった。

「イルーシャ様……」

「ご、ごめんね。安心したら、つい」

ヒューが来てくれなかったら、わたしどうなってたんだろう。そう思うと今更ながら震えがきた。

——怖かった、怖かったよ。

わたし、伝説の姫君らしくもつと毅然と振る舞えたらよかったのに。こんなところは、以前と変わらない肝心な時に気が小さい由希のままだ。

「謝らなくていいです。怖かったのでしょうか？ ……それはそうと、付いていた近衛はどうしました？」

「ギリング王についてたウィルロー……魔術師が、移動魔法でどこかに飛ばしたみたい」

「ウィルロー？ ひょっとして以前魔術師団に所属していた、あのウィルローですか？」

「うん」

わたしが頷くと、ヒューは何事か考える仕草をした。

「……ヒュー？」

「ああ、すみません。具合がお悪いのでしたね。少しの間失礼します」

そう言くと、ヒューはわたしの膝の裏に手を当てて、わたしを抱き上げた。

「え……まさか、このまま会場に行かないよね？」

披露目のパーティで具合を悪くしたなんて知られたくない。

「大丈夫です、このままここで待機していますから。そのうち誰か来るでしょう」

「でも、ヒュー……重くない？」

誰か人が来るまで待機なんてつらそうだ。

「イルーシャ様は、軽いですよ。それに俺は鍛えていますから大丈夫です。……それはそうと、少し眠られるといいですよ」

うーん、そこまでしたら悪いような気がするんだけど。意識のない人は重くなるって聞くし。

「……ヒューは優しいね」

何気なく言ったら、ヒューが頬を染めた。

……ヒューも結構照れ屋だね。

「べ、別に俺は優しくはないです」

「……優しいよ」

赤くなるヒューがなんとなく微笑ましくて、わたしは小さく笑った。

あ、具合悪いのもあって、本当に眠くなってきた。

そう言えば、キースに貰った腕輪使い損ねちゃったな。後でキースに怒られるかな……。

「——それは、あなただからですよ」

ヒュー、わたしだからって、どういうこと？

そう聞きたいけど、うー、駄目だ。眠すぎる。

……あ、そうか、わたしが伝説の姫君だからだね。

自分の中で納得する答えが出たところで、わたしの意識はそこで途切れた。

21 式典の終了

——外が明るい。

ああ、もう朝かあ、とわたしは寝返りを打つ。……えーと、朝？
「嘘お！？」

うわあ、やってしまった！

予想外の現実には、わたしは焦って飛び起きる。

披露パーティの途中で眠ってしまったてからの記憶がない。きっとあれから眠ったままだったんだ。

慌ててリイナさん呼び出したら、すぐに来てくれた。

「イルーシャ様、今日は顔色もよろしいようで良かったですわ。昨夜お倒れになられた時は驚きました」

う……、きつと大騒ぎだったんだろ？なあ。本当に申し訳ない。

「心配かけてごめんなさい。もう大丈夫だから」

「ですが、ご無理はなさらないでくださいね。昨日の今日ですから」
「はい。でもちよつとだけ用事があるから、それをすませてからゆつくりします」

もう、これだけはしておかないとわたしの気がすまない。

リイナさんはかしこまりましたと頷くと、わたしをお風呂に連れていってくれた。

わたしはお風呂と朝の支度をすませると、速攻でカデイスの部屋へ向かった。

「ほんつとくに、ごめんなさい！」

一応ノックしてから勢いよくカデイスの寝室のドアを開けたわたしは、土下座したい気分彼の元に駆け寄った。

ベッドから身を起こしかけていたカデイスが呆氣にとられた顔をしてわたしを見ている。

「……おまえが本当に悪いと思ってるのは理解できたが、俺の寝室

にまで入ってくるな」

「あ！ ごめんっ、寝てたのに起こしちゃって」

気が動転してつい押しかけちゃったけど、カデイスはわたしの披露パーティのせいで寝たの遅かったんだ。返す返す、本当に申し訳ない。

カデイスは溜息をつくど、ベッドから身を起こした。

「そういうことじゃない。……おまえが鈍いのは分かっているが、男の寝室に簡単に入るんじゃない」

あ、姫としての慎みがないって言ってるのかな。この時間帯ならいいかと思っただけだ。

「ごめんね、朝なら大丈夫かと思っただけど、駄目だった？」

「駄目に決まっている。……それとも、おまえは俺に襲われたいのか。それなら歓迎するが」

「いやいや、滅相もない！」

そんなつもりは毛頭ないから！

ぶんぶん首を振って否定していると、カデイスの枕元に見慣れた物を発見した。

「あれ、わたしの絵」

一瞬カデイスは赤くなると、焦ったようにわたしの絵姿を枕の下に隠した。

なにをそんなに慌ててるんだろ、変なの。

わたしが首を傾げると、カデイスが真っ赤な顔で唸るように言っ

た。……話なら後で聞いてやるから、おまえはとつとここから出

な！ になに怒ってるの。変なカデイス」

なんでか急に怒りだしたカデイスが理解できなくて、まじまじと彼の顔を見る。

「……おまえ、本当に襲うぞ！」

「ううう、ごめん！ わたし隣の部屋にいるから！」

本当にベッドに引きずりこまれそんな気迫をカデイスから感じて、慌ててわたしは寢室から逃げ出した。

しばらくして支度を済ませたカデイスが寢室から出てきた。

とりあえずカデイスがもう怒ってないみたいなので、わたしはほつとした。

「おまえ、朝食はすんだのか？」

「あ……、まだ」

急いでたから食事はまだいいってリイナさんに断ってたんだよね。カデイスにそう言われたことで、わたしは急におながが空いてきた。昨夜もそんな暇なくてなにも食べられなかったし。

「そうか。では、おまえの分も持ってきて来させる」

「うん、お願い。本当にいろいろとごめんね」

今更だ、とカデイスは少し笑うと、侍女さん呼び出す。カデイスが二人分の食事を持ってくるように言うと、既に準備が整っていたようで食事がすぐに運ばれてきた。

「わあ、おいしそう」

焼きたてのパンに、ふわふわのオムレツ、カリカリに焼いたベーコン。ハムとチーズの入ったサラダに濃いめのミルクティー。

わたしはカデイスの部屋に押しかけた理由も忘れて、にこにこしながらおいしい朝食を堪能した。

「おまえは本当に旨そうに食べるな」

「うん、本当においしいもの」

食事を終えたわたしは、侍女さんにおかわりのミルクティーを持ってきてもらって一息つく。

「……さて昨日の夜会のことだが」

カデイスにそう切り出されて、わたしは当初の目的を思い出した。「あつ、本当にごめんね。わたし、途中で具合悪くなっちゃったんだけど、まさか気がついたら朝になってるとは思わなくて」

本当にすごい失態だ。カデイスには何度謝っても足りないくらい

だ。

「気にするな。あらかたの重要人物には引き合わせたし、おまえはよくやっていたぞ。……むしろ、あれはおまえの様子に気がつかなかった俺が悪い」

「そんなこと……。カデイス、気を遣ってくれてるのかもしれないけれど、こういうときは怒ってくれた方がよっぽどいいよ」

とんでもない失態をした上に気を遣われたら、申し訳なくて仕方がない。

「いや、本当に大丈夫だ。おまえにあの時退場させてもなんの問題もなかったんだ」

「……それならいいんだけど……」

「それよりも、俺が問題だと思っているのはハーメイ国王のことだが」

「あ……」

わたしは昨夜ギリング王にされたことを思い出して身をすくめた。「ヒューイから報告を受けたが、無礼な振る舞いをされた上に、妾妃になってくれと言われたそうだな」

「うん、あの時ヒューイが来てくれなきゃ、どうなってたか分からなかったよ」

本当にヒューイが来てくれてよかった。

後でヒューイに助けてもらったお礼言わなくちゃね。

「……そうか。ならば、ハーメイ国王になんらかの抗議はしなければな」

本当は今すぐにも城から叩き出したいが、とカデイスが無然として言う。

その時、キースの訪れが告げられて、彼がカデイスの部屋に入ってきた。

「イルーシャ、気がついたんだね。昨日意識を失った君を見た時は本当に驚いたよ。僕を呼びだしてくれればよかったのに」

う、あれだけ言われたのに腕輪使わなかったんだもの、やっぱり

言われるよね。

「本当にごめんね。言い訳になっちゃうけど、腕輪を使う間がなくで。……そういえば、わたしが意識を失った後、どうなったの？」

「ウィルローが僕の前に現れて、君が大変なことになってるってわざわざ教えに来たよ」

「ええ？ ウィルローが近衛の人を魔法で飛ばしてくれたおかげで、わたしはあんな目にあったわけだけど」

「なんというか、ものすごい嫌味なやり方だ。それって挑発じゃないの？」

「うん、あれは挑発、もしくは嫌がらせだね。ウィルローがハーメイに仕官することも驚きだったけれど」

「仕官……。そうだったんだ」

それなら彼がギリング王と一緒にいた理由も分かる。

「詳細はヒューイに聞いたよ。イルーシャ、嫌な思いをしたらどう？」

「うん、でももう二度と会わないだろうから平気」

わたしは笑って言ったけど、キースの表情は硬いままだ。

「それで意識のない君を部屋に送って、後はリイナ達に任せただけど、本当に具合悪そうだったから心配したよ」

「本当にごめんね。もう大丈夫だから」

今回の件ではいろいろな人に心配かけちゃたなあ。本当に申し訳ない気持ちでいっぱいだ。

「……これまでの疲れが出たんだろうな。おまえの大丈夫は信用ならないから、おまえはもう少し休んでいたほうがいい」

……信用ならないって、カデイスひどい。

「そうだね、イルーシャは無理しないで、ゆっくりした方がいいよ」

「あ、庭園とか桜並木を散歩するくらいはいいよね」

「禁止」「駄目だ」

「なんで？ もう元気だから大丈夫だよ」

思わずむうつとしてわたしは聞き返す。

「念の為だよ。また君に倒れられたら困るからね」
それを言われると弱いけど、でも。

「……夜の庭園とか見てみたかったのに」
庭園や桜並木に設置されたあのライトもどき、いつまであるんだろ。

心配してくれるのは嬉しいけど、ここまで強堅に反対されると、夜の花見は諦めるしかないか。

「あの魔法球はしばらく設置しておく。あと二、三日は我慢しろ」
本当に仕方なさそうにカデイスが言う。隣でキースも苦笑いしている。

「お花見できるの？ カデイスありがとう」
披露式典の準備中も結構楽しみにしてたから、嬉しくてわたしはにこにこしてしまった。

「おまえが楽しみにしていたからな。そのくらいはする」

「心配だから、花見には僕が付いていくよ」

キースがそう言うと、カデイスが張り合うように言った。

「俺も付いていくぞ」

「カデイスは執務があるだろう？」

「夜なら大丈夫だ。意地でも付いていくぞ」

「カデイス、子供みたい」

一国の王らしくないことを言うカデイスに、わたしは噴き出した。

思えばこの披露式典、準備期間からいろいろあったけれど、とても充実していたな。

ただ、舞踏会が最後まで参加できなかったことと、そのことでもそんなに迷惑かけちゃったのがちょっと心残りだけ。

忙しかった一月もようやく終了して、これからは少しゆっくりできるかな。……あ、そういえば、わたしの能力の訓練があったっけ。

うん、それはそれで、また頑張ろう。

「……この式典で、ガルディアの経済効果上がったかな？」

「ああ、景気は上々だぞ。おまえのおかげだ、イルーシャ」

「イルーシャ、頑張ったね」

二人が褒めてくれるのを、照れくさい気持ちと、誇らしい気持ちの両方でわたしは聞く。

——うん、それならよかった。

伝説の姫君としての初仕事が一応成功したことにわたしは安堵して、二人に微笑んだ。

22 騎士の求婚(1)

カデイスからようやくわたしの休養期間終了のお許しが出た。

浮かれた私は、さっそく恒例の朝の散歩に出かけた。

「イルーシヤ様、いらっしや……、な、なにか疲れてませんか？」

披露パーティの時のお礼をどうしても言いたくてヒューのところ
に立ち寄ったんだけど、彼は私の顔を見るなり驚いたようにそう言
った。

「う、うん、ちょっと散歩を張り切りすぎたみたい」

警護担当の近衛の人にも既に止められてただけど、どうせここ
まで来たんだし、と言いついて無理に連れてきてもらったのは、ち
よつと失敗だったみたいだ。

「……散歩って、そんなに憔悴するほど張り切れるものですか？」

う、ヒューからもっともな質問が出た。

「今まで暇を持て余してたから、行動制限がなくなったのが嬉しか
ったんだよね。それでつい庭園回って、桜並木通ってきたらこうな
ったの。この体あんまり体力ないのに、うっかりしてた」

だからいつもは庭園コースか桜並木コースかどちらかなんだよね。
本当になにやってんだろ、わたし。伝説の姫君なんだから、もう
ちよつと考えて行動しなきゃいけないのに、情けない。

「とにかく座ってください。今冷たいものを持ってこさせますから」
へロへロになったわたしをヒューが支えてくれて長椅子に座らせ
る。

「ご、ごめんね」

う、本当に恥ずかしい。

お礼に訪れたはずなのに、こうしてまたヒューのお世話になるな
んて。

「気にしないでください。それはそうと、あまり無理はなさらない
てください。また倒れられても困りますから」

「本当にごめんね。あの時は……」

そう言いかけた時に、飲み物が運ばれてきて、わたしはいったん黙った。

「どうぞ」

ヒューに勧められて、わたしは飲み物に手を伸ばした。喉が乾いてたので、ありがたい。

冷たいお茶で喉を潤して、わたしははふ、と息をつく。

「……あの時は本当にありがとう。あなたが来てくれなきゃ、わたし、どうなってたか分からなかった」

ヒューはわたしの恩人だ。わたしはヒューに向き合って、心からお礼を言った。

「俺は騎士として当然のことをしたまでです」

「それでもありがとう。わたし、あの時気持ち悪いって思うだけで全然動けなかったし、伝説の姫君として上手く立ち回れなくて情けなかったもの」

わたしがそう言うと、ヒューは首を振った。

「あなたはよくやられてますよ」

「ヒュー、甘やかさないで」

「……ですが、騎士とはそういうものなのですよ、イルーシャ様」
ヒューは立ち上がるとわたしの前に片膝を付く。

「国を守り、あなたを守ることが俺の使命なのです」

ヒューの真摯な瞳をわたしは正面から受け止める。

「……そう言えば、前にも優しくするのはわたしだからって言ってたよね。……それって、わたしが伝説の姫君だからだね？」

「……違いますよ」

わたしの手を取りながら、ヒューが苦笑する。

え？ 違っただったら、どういう意味？

「この際ですから、言ってしましましょうか」

ヒューが俯くと無造作に束ねた蜂蜜色の髪が彼の肩でさらさらと流れた。……本当に綺麗で絵になる人だ。

「イルーシャ様、どうかわたしをあなただけの騎士にしてください」
ヒューが恭しくわたしの手に口づける。

お姫様やるようになってから、さんざん騎士の礼を取られてきたけれど、これはそれとはまた別な気がした。

「え、えつと……」

返答に窮していると、ヒューはわたしの手をそつと離して微笑んだ。

「……イルーシャ様、俺は答えは急いでません。陛下やキース様のこともありますでしょうし」

「カデイスやキースのことって……」

「……ああ、異世界出身のイルーシャ様には分かりづらかったですか？ これは騎士の求婚の儀式なんですが」

「え……」

思ってもいなかったヒューの言葉に、わたしは目を見開いた。次いで、かーつと顔に血が上ってくるのを感じる。

求婚するってことは、ヒューはわたしのことが好きってことだよ
ね？

「な、なんで？ いつから？」

わたしは恥ずかしさから涙目になって、みつともないほど取り乱した。

「初めてお会いした晩餐の席で」

「……それって一目惚れってこと？ わたしがこの姿だから？」

きつとそうだよ。そうに違うない。

「一目惚れに近いですが、あなたがその姿だからと言つのはちよつと違いますね」

それって、どういうこと？

わたしは真つ赤な頬を隠しながら、ヒューを見る。

「あなたが幸せそうに食事する姿やちよつとした仕草に目を奪われました。とどめは最後の涙ですね。あれから俺はあなたのことがかり思ふようになりました」

「わ、わたし、がさつで口が悪いよ？」

「知ってますよ。それでもあなたは魅力的です。その恥ずかしがる
ところも、とても可愛らしいです」

うわああっ、やめて、恥ずかしすぎる！

わたしは聞いていられなくて長椅子から立ち上がると、途端に目
眩を覚えて体が傾ぐ。

「イルーシャ様！」

わたしはヒューにとっさに抱き止められて倒れるのを免れた。

「イルーシャ様、疲れられていますから、気をつけてください」
「う、ご、ごめん。でも、聞いていられなくて」

「イルーシャ様は恥ずかしがり屋でおられますから」

ヒューがわたしを抱きしめてくすくすと笑った。

……それは、ヒューもじゃない、と言いたかったけど、あの照れ
屋なあなたはいったいどこへ？ 告白通り越しての求婚もそうだけ
ど、なんかヒュー、いきなり突き抜けてない？

「これだけ疲れられていると、もう休まれた方がいいですね。近衛
の者に伝えて、魔術師を呼び出しますよ」

「あ、それならわたし、キース呼べる、け、ど……」

最後の方は、ヒューの視線が痛かったので自然と声が小さくなる。

「イルーシャ様、求婚の直後に恋敵を呼び出さないでほしいですね」
うわあ、美人が怒るとマジで怖い！

「た、確かに無神経だったかも。ごめんなさい」

「分かっていただけばいいです」

ヒューはにつこり笑うと、わたしを抱き上げた。

「どうして君は僕を呼び出さないかな」

あの後、ヒューに抱き上げられて部屋まで送ってもらったわたし
は、キースのお説教を受けていた。いつもはあっさりと引き下がる

彼だけど、今回は結構しつこい。

「部下に報告を受けて来てみれば……、こんなに疲れるまで散歩するなんて無謀だよ」

うう、ごもつとです。

わたしは長椅子の肘掛けにくったりともたれながらうなだれた。

「ヒューイに礼を言いたかったっていうのは分かったけど、それが済んだら、どうして僕を呼び出さないわけ？」

「ごめんね、どうしても呼び出せない事情があつて……」

「うん、それはさつきも聞いたよ。だからその理由はなに？」

「う、それは、その……」

わたしは赤くなったり、青くなったりを繰り返しながら言いよどんだ。

あああ、ヒューに求婚されて、その直後に恋敵を呼び出すなど言われました！　と言えるものなら言つてしまいたい。

「イルーシャ……」

突然、派手な音を立ててカデイスが部屋に入ってきた。……前も言つたけど、ノックくらいしろー！

「カデイス、突然なに」

疲れていることもあつて、わたしはついつけんどんな対応になる。

「ヒューイから報告を受けたが、おまえ、やつに求婚されたそうだな」

……報告したのかよ！

ついわたしは姫とも思えない突っ込みを心の中で入れてしまう。

つか、無駄に行動早すぎでしょうが。わたしはなにも聞いてないぞ！

「……へえ、そうなんだ。そういうわけ。ふうん」

やたらとへえ、そうと繰り返すキースさん、目つきが怖すぎます。

「……なんだ、おまえやけに疲れてないか？」

うん、疲れてますよ、いろいろありすぎて。

「まさかおまえ、ヒューイと事に及んだんじゃないだろうな？」

「……………あ？」

カデイスのあまりの言葉に、突然柄が悪くなるわたし。案の定カデイスが引いた。

「ふーん、疲れてるってだけでカデイスはそういう発想になるわけだ」。カデイス、不潔ーっ

キースに怒られていたことも手伝って、わたしのこれは完全に八つ当たりだ。

「い、いや、その……………ちよつとした誤解だ」

……………ちよつとか？

わたしが疲れて回らない頭を捻っていると、ドアがノックされてリイナさんが入室してきた。

「陛下にお知らせしたいことがございまして。ハーメイ国王様のことですが」

「なんだ」

ハーメイ国王、と名が出た途端にカデイスがむっとした顔になる。

……………カデイスもあの王のこと相当嫌ってるんだなあ。

「方々でイルーシャ様の部屋はどこだと聞いて回っているそうです」
うわあ、ちよつと勘弁して。

「なんだと」

リイナさんの報告にカデイスとキースが気色ばむ。

確かに諦めないって言ってたけど、そこまでやる？ わたし、も

う二度とあのセクハラ王には会いたくないよ。

「キース、あの王に強制的に帰ってもらえ」

「……………了解」

えーと、それは移動魔法で送り返すってことだね？ 一応国賓のはずだけど大丈夫なの？ ……まあ、キースならうまくやるとは思っけど。

「おまえは事が済むまでここで俺と待機している。……………おい、イルーシャ、どこへ行く」

「疲れた。寝る。」

わたしはふらふらと立ち上がると寝室へ向かった。

「まあ、それではお召し替えを。」

リイナさんがついてきて、わたしの着替えを手伝ってくれる。それからわたしはベッドに潜り込むと、泥のように眠った。

23 カデイスの忠告

……ちよつと寝すぎたかなあ……。

次にわたしが目が覚めた時にはすでに夕方になっていた。

「まあ、イルーシャ様お目覚めですか。陛下が隣のお部屋でお待ちです」

嘘っ、カデイス、あれからずっとわたしの部屋で待機してたの？
まずいなあ。

慌てているうちに、リイナさんがわたしの身支度を整えてくれた。
リイナさんによると、これから陽の間でカデイスとキースの二人
と一緒に晚餐の予定だけど、キースがまだ来てないそうだ。

キースならすぐにハーメイ国王を説得できると思ってたけど、か
なり時間がかかってるみたい。

「カデイス、ごめん。爆睡しちゃった」

持ち込んだらしい書類をテーブルで決済しているカデイスに近寄
ると、わたしはまず謝った。

カデイスは仕事してるのに、わたしは散歩で疲れて暢気に寝てた
んだもん……。うう、立場がない。

「ああ、起きたのか。今は顔色もよさそうだな」

「ごめんね、こんなに長く寝るつもりはなかったんだけど」

ああ、きまり悪い。

舞踏会でのことといい、わたし最近やかしすぎな気がする。

「気にすることはない。とにかくおまえは無理はするな。……しか
し、おまえ体が弱かったんだな」

「うん、そうみたい。それでも、最初の頃よりはだいぶマシになっ
てきたと思っただけ……」

「そういえばおまえ、口づけだけでふらふらになっていたな」

「そ、それは関係ないでしょ!？」

わたしが思わず真っ赤になってカデイスに抗議すると、カデイス

がテーブルに頬杖をついて楽しそうに笑った。

「関係あるぞ。そんなことではこの先が思いやられるからな」

「カデイスとそんなことにはならないし！」

「……おまえ、そこで思い切り否定するな」

「あ……」

求婚されてるのにこれはちょっと酷かったか。ちらりとカデイスを窺うと、心なしかちょっと寂しそうに見えた。

「ご、ごめん。でも、カデイスが恥ずかしいこというからっ」

わたしが赤くなった頬を両手で隠しながらそう言っていると、カデイスが苦笑した。

「おまえのそういうところは、とても可愛いし、正直他の男にその姿は見せたくないと思っていた。……が、俺以外の男に見せるなど言っても無駄なのが今日分かったぞ」

「え……？」

「ヒューイのことだ。おまえに求婚したと言うから、おまえのどこが好きなんだと質問したら、その恥ずかしがるところが好きだと言っていた」

「そ、そうなんだ。でも、ヒューも結構照れ屋だよな？」

わたしがそう言っていると、カデイスが不思議そうな顔をした。……あれ、違うの？

「ヒューイが照れ屋？ あいつはどちらかというと冷徹な人間だぞ。氷の騎士と呼ばれているくらいだ」

カデイスの言ったことが信じられなくて、わたしは思わず笑ってしまった。

「……嘘でしょ？ 冷徹な人間がちょっと褒めただけで赤くなるわけじゃない。それに最初の晩餐の席でキースに絶世の美少女と呼ばれていたってからかわれてた時も赤くなってたじゃない」

そんな人が氷の騎士？ そっちの方がわたしには違和感があるんだけど。

「ああ、あれは珍しいことがあるものだとか俺も驚いた。あれは思う

に、その席におまえがいたからじゃないか？　もしかするとあれが地なのかもしれんが」

「うーん、わたしはそっちがヒューの地だと思うけど。わたしの中では、ヒューは綺麗だけど、すぐ赤くなるおもしろい人だよ」

「おもしろい人か。とりあえず男としては見ていないわけだな」

なにがおかしいのかカデイスは笑いをこらえている。

「だって、友達だと思ってたもん。いきなり告白すつ飛ばして求婚されて、わたしもびっくりだよ。一目惚れに近かったって聞かされたときも驚いたけど、ヒュー、そんな素振り全然見せないんだもの」

「……見せても、たぶんおまえなら気がつかないだろうな。あり得ないほど鈍いしな」

……カデイス、わたしに喧嘩売ってる？

わたしが拳を握って口の端をひくつかせていると、カデイスが苦笑した。

「ヒューイはおまえの泣き顔を見て恋に落ちたと言っていた。出来ることなら俺は過去の自分を殴りたいぞ」

「……え？」

カデイスがなにを言いたいのかわからなくてわたしは首を傾げる。

「おまえを泣かせたのが俺だからだ。あれで、あの場にいた何人がおまえに惹かれたのだろうな」

「……ヒューがたまたまそうだっただけでしょ？」

そんな簡単に惚れた腫れたがあつてたまりますかって。カデイス、考えすぎと言おうとしたら、カデイスが自嘲するように笑った。

「俺もその一人だからだ。おまえの涙を見てから、イルーシャ、おまえが欲しくて仕方なくなった」

カデイスは椅子から立ち上がると、腕を伸ばしてわたしの頬に触れる。それに対してわたしは不自然なほどにびくりとしてしまった。

「俺が怖いかな？　イルーシャ」

……なんて返したらいいんだろう。

正直に怖いって言うべき？　でもそうしたらカデイスが傷つくよ

うな気がして言えない。

「……答えられないのか、イルーシャ」

少しカデイスの口調が厳しくなつて、わたしはあつと思つた時には彼に抱きしめられていた。

「カ、カデイス……」

「出来ることなら、早くおまえを王妃にしてみたい。……妃にしてみれば、誰も手を出せないからな」

その言葉にわたしは大きく体を震わすと、カデイスから逃れようとした。けれど、カデイスの腕は緩まない。

「……わ、わたし、そんなの嫌だよ。……カデイス、どうかしてるよ」

「そうだな、どうかしてるな。そんなことをしたらおまえに嫌われる、そのことだけが俺を留まらせているんだ」

ぎゅつとカデイスの腕に力がこもった。

「カ、デイス……ッ」

痛いほどに抱きしめられて、自然と体が仰け反る。

カデイス、どうしちゃったの？ おかしいよ。

「イルーシャ、おまえは俺がおまえに対してどんなことを思っているか分からないだろうな。……おまえに触れたい。おまえに口づきたい。おまえを抱きたい。そんなことばかりを俺は考えている」

「や、やだ、カデイスやめて……っ」

嫌だ、そんなこと聞きたくないよ。

聞いてしまったら、友達でいらなくなつてしまいそうで、わたしは首を振る。

「駄目だ、イルーシャよく聞け。おまえに求婚したということはそういうことだ。これはキースやヒューイもそう変わらんだろう」

「やめてよ、聞きたくない！」

わたしは泣きそうになりながら、カデイスに懇願する。

「イルーシャ、どんなに優しくされても男には気を許すな。親切そうに見えても腹の中ではなにを考えているか分からんぞ、俺のよう

にな」

そこでようやくカデイスから解放されて、わたしは部屋の隅で控えていたリイナさんに駆け寄って抱きついた。

「……っ」

リイナさんが抱きしめ返してくれたことでわたしは安心してしまつて、それでつい子供のようになにしゃくりあげて泣いてしまう。

「……陛下、イルーシャ様はなにもご存じではないのです。それなのに、今のおっしゃりようは酷うございますわ」

リイナさんが慰めるようにわたしの背中を撫でながら、カデイスに抗議してくれる。

「……分かつている。俺は先に陽の間に行っている。キースが戻ったら通せ」

「……かしこまりました」

カデイスが部屋を出てしばらくすると、キースがようやく戻ってきた。

「……イルーシャ、どうしたの？」

リイナさんにしがみついたまま離れないわたしを不思議に思つてかキースが尋ねてくる。なにも言えないわたしに代わつて、リイナさんが手短に答えてくれた。

「……そう、カデイスが。求婚者が増えたことで焦ってるんだろうな。……なんにしても、イルーシャに聞かせるようなことじゃないよ」

わたしは涙をハンカチで拭いながら、少しいらした様子のキースを見ていた。

カデイスの言ったこと、本当なんだろうか。キースもカデイスの言うようにわたしを抱きたいと思ってるんだろうか。……信じたくない。

「とにかく移動するよ。イルーシャ、気まずいだろうけど我慢して」
わたしが頷くと、次の瞬間、わたしとリイナさんはキースと一緒に陽の間に移動した。

24 急変(1)

「イルーシャ、おまえ酒は飲めるか」

「はあ？」

移動してきた途端、カデイスから唐突にそう聞かれたので、わたしはつい間の抜けた声を上げてしまう。……いきなりなんなんだ、カデイス。

カデイスは既にお酒が入ってるみたいで、少し酔ってるみたいだ。でもまあ、さっきのことで気まずかったので、このくらいの方が話しやすいかもしれない。

「飲めない。そもそも私の国では法律で二十歳からじゃないと飲めないことになってるし」

「この国では十五から酒が飲めるし、結婚もできる。……まあ、少しくらいは飲め」

カデイスに勧められて恐る恐るグラスに口を付けると、フルーティな感じの味がした。果実酒だろうか。

なんだ、結構飲みやすいじゃないと思ってカデイスに注がれるままくいぐい飲んでると、キースが苦笑した。

「イルーシャ、あんまり飲まないほうがいいよ。このルルア酒は口当たりはいいけど、結構強いから」

「……それを早く言つてよ」

うつかり酔い潰れるところだったじゃない。危なかった。

……とはいえ、もう既に顔が熱くて、頭がふわふわしてる。

「あ、そういうえば二人とも今日はごめんね。いろいろ迷惑かけちゃったみたいで」

散歩の件とか、ハーメイ国王の件とか。

「……おまえはしばらく散歩禁止だ。散歩で疲れるやつがあるか」

「ええ、……、それじゃ体なまっちゃうよ。ただでさえ体力がないに」

なんだか、わたし既に酔っぱらいな気がする。気まずかったはずのカデイスに普通に話してるよ。

「倒れて休養したのに、また懲りもせず疲れてくるからだ。自業自得だ、我慢しろ」

「今度は自重するから。少しくらいならいいでしょ？ 本当言つと、走り込みしたいくらいなんだけど」

「走り込みなどやるな。おまえは本当に姫か？ ……とにかくしばらくは駄目だ」

カデイスに一蹴されて、わたしはがっかりする。……あ、散歩が駄目だとするとあれも駄目かなあ。

「それじゃ、夜のお花見も駄目？」

「もちろん駄目だ。諦めろ」

「ええ……カデイスひどいよ」

「なんとも言え。駄目だと言つたら駄目だ」

今回のカデイスは本当に頑固だ。自業自得とはいえ、本当に失敗したなあ。

楽しみにしていたお花見の予定が潰れてわたしがむくれていると、キースがくすくす笑った。

「まあ、それは仕方ないね。また倒れられても困るし」

「ええ？ キース味方してくれないの？」

ちよつとずるいかもしれないけど、キースがカデイスを説得してくれるの期待してたのに。

「今回ばかりはちよつと無理だね。我慢して」

「ええー……」

キースにあつさりと拒否されて、わたしは肩を落とす。

ああ、また退屈な休養期間に逆戻りかあ。……どうせだからこの際、本でも読んで勉強しようかな。明日図書館に本漁りに行こう。

「あと、城内をうろつくのも禁止だからね。散歩するのに対して変わらないから」

「そ、それも駄目なの？」

そこまで徹底されると、過保護通り越して、軟禁されているような気分になってきた。

「おい、キース。俺はそこまでは言っていないぞ」

「ちよつと、ハーメイの動きが不穏だからね。あの国王のイルーシヤへの執着は尋常じゃなかったから」

キースのその言葉で、わたしはギリング王が諦めないと言った時のぎらぎらした目を思い出して身を竦めた。

「向こうはカデイスだけでなく、僕がイルーシヤに求婚していることも知っていたよ。情報源は、どうせウィルローだろうけど」

「……あの男がハーメイにいるのは少々やつかいだな」

真剣に話し込んで二人にどうやって割り込んでいいのか分からなくて、わたしはおいしい料理をつきつつ、ルルア酒をちびちびやる。……あ、お酒がなくなった。

手酌でグラスにルルア酒を注いでいると、キースがデカンターをわたしから取り上げた。

「イルーシヤは、お酒はこれで終わり」

「ええー……、キースひどーい。おーぼー」

わたしは注いだお酒を奪われないように一気飲みした。

「ふふ、おいしーい。ルルア酒さいこー」

「……おまえ、完全に酔っぱらいだな」

「カデイスがイルーシヤにこんな強い酒を勧めるからだろう？ いくら話しぶらいからっていつてもイルーシヤは免疫ないんだから」

キースがカデイスに抗議してくれる。いいぞ、もつとやれ。

「だいたいねえ、カデイスは強引すぎるのよ。わたしは恋もしたことないのに、抱きたいとかドン引きだつーの。分かる？ あ、ドン引きって言うのはねえー……」

「イ、イルーシヤ、あれは俺が悪かった。だからもうやめてくれ」
カデイスが懇願してくるけど、わたしはそんなことくらいでやめてなんかやらないんだからね。

「なーに、今更勝手なこと言っちゃってるのー？ わたしは聞いた

くないって言うてるのにカデイスが無理矢理聞かせたんでしょーが
あ。このドスケベセクハラ大王ーっ！」

一人で盛り上がったわたしはテーブルをバンバン叩く。

うん、カデイスにはこのくらい言うてやらなきゃね。わたしは満足感からにっこり笑う。

「イ、イルーシャ、カデイスも反省していると思うからもうその辺で……」

「ねえねえ、キース。キースもわたしのことを抱きたいって思うの？
どうなの？」

今度は仲裁に入ったキースにわたしは絡みだす。

「え……、それは、違うと言ったら嘘になるけど……」
珍しく困惑した様子のキースに、わたしは一言返す。

「このむつつりスケベ」

絶句するキースからデカンターを奪うのに成功したわたしは、ル
ルア酒をグラスに注いで飲む。

ああ、キースがこれじゃあ、ヒューもこんな感じなのかなあ。そ
んなこと出来そうにもない人に思えるけど。

「あー、やだやだ、男なんて。優しくしてくれたのも下心からなん
だね？ 結局体が目当てなんだー。不潔ーっ、けだものーっ」

う、叫んでたらなんだか泣きたくなってきた。

「イ、イルーシャ、そんなことはないぞっ。俺は本気でおまえを妃
に迎えたいと思っている」

「僕は心から君を愛してるよ。そんな風に言わないでほしい」

「……二人の言うことなんて、わたしには分かんないよっ」

ぼろぼろと涙をこぼし始めたわたしに、二人が慌てる。

「な、泣くな、イルーシャ」

「イルーシャ、泣かないで」

「ごそごそとハンカチを探してたら、リイナさんにハンカチを差し
出された。」

「ありがと、リイナさん」

「いいえ。イルーシャ様、御酒を召し上がり過ぎです。もう今夜はお休みになられた方がよいですわ」

「うん、そうだね」

涙を拭いながらリイナさんの提案につこりする。

こういう時は、なにも考えずに寝ちゃった方がいいよね。

昼間さんざん寝たから寝られるか心配だったけど、ちょうどいい具合に眠気も襲ってきた。

「じゃあ、部屋に送るから」

あ、キースが移動魔法で送ってくれるみたいだ。

「うん、二人ともおやすみーっ」

先程とは打ってかわって上機嫌のわたしに二人が溜息をつく。

「イルーシャ、良い夢を」

キースが手を一振りすると、わたしは自分の部屋に戻った。

暗闇の中、松明の明かりがいくつも見える。そのせいか、夜だというのに結構明るい。

「大変です！ 隊長、ハーメイから敵が攻めてきますす！」

「なんだと、馬鹿な！」

一人の兵からの報告に、ガルディア兵が一気に騒然となる。

砦の入り口付近で敵味方両方の兵が睨みあうと隊長と呼ばれていた人が言った。

「ハーメイのような小国が、ガルディアに攻め込むなど、愚の骨頂。攻め滅ぼされたいのか？」

その視線の先にはウィルローがいた。

「滅ぶかどうかは分からないでしょう。少なくともここにはわたしに対抗出来るだけの魔術師もいない」

そう言くと、ウィルローは右手を掲げた。その途端、ガルディア兵達はいくつものかまいたちに切り刻まれる。

飛び散る肉片、血飛沫、断末魔の叫び。

いやあああつ！！

わたしは視線を逸らすことも出来ずに、ただその凄惨な光景を見ていた。

「やれやれ、ヒルトリア皆もあつけないものですね。こうも簡単に攻め込まれるとは。大国という名にあぐらをかいた平和ボケですか？」

ウィルローが目の前に横たわる隊長の体を踏みにじる。

彼が先程言葉を交わしていた隊長は、とうに生きてはいないと分かる状態になっていた。

いや、いやだ！　こんなのは見たくないよ！

わたしはこみ上げる吐き気をこらえながら、ウィルローを見ていた。

彼は、横たわって呻く魔術師と思わしき人に目を留めると言った。
「あなたは移動魔法が使えるようですから、見逃してさしあげます。ガルディア国王にお伝えください。我々の要求はイルーシャ姫。かの美姫をハーメイに差し出すことです。要求がのまれない場合は周囲の村を襲いますからそのつもりでいてください。……ああ、でもこの近くのトリア村には見せしめになってもらいましょうか」
そう言つと、ウィルローはハーメイの軍隊ごと移動した。

「やだ——っ！」

わたしは覚醒すると、慌ててベッドから降りて洗面所に向かった。ガルディア兵の飛び散った首や手足がリアルに思い起こされて、とてもじゃないけど平静が保てない。起こった事の重大さに、自然と涙が流れてくる。

いやだ、あれはなに。

要求はわたしって、わたしのせいで大勢の人が死んだの？ それもあんな死にかたで――。

わたしは洗面所で胃液しか出ない状態まで吐くと、よろよろとそこを出て、今度こそキースを呼びだした。

25 急変(2)

キースはすぐに移動してきた。彼は、わたしを見て眉を顰める。
「イルーシャ、どうしたの。そんな格好で……。それに、顔色が悪いね」

確かにわたしは寝間着のままだ。なにも羽織らないでいるこの格好は確かにはしたなかったかも。

キースは身につけていたマントを取りはずすと、わたしの肩にかけた。わたしはキースの厚意をありがたく受け取って、それを羽織る。

「キース、大変なの。ヒルトリア砦が攻め込まれたの。ガルディア兵がウィルローに切り刻まれて……。次は見せしめにトリア村に向かうって言うってた」

「それ、過去視で見たの？」

キースの顔つきが一気に厳しくなる。わたしは震えながら頷いた。
「分かった、カデイスに知らせるよ。悪いけど、君も一緒に来て」

そう言うのと、キースはカデイスの執務室の前まで移動した。

「カデイスに緊急で目通りを」

ドアの前の近衛騎士にそう言うのと、キースはドアをノックした。
すぐにいらえがあつて、わたし達は入室を許可される。

「……どうしたイルーシャ。その格好は……」

カデイスは寝間着にキースのマントを羽織ったままのわたしに目を留めると、席を立った。

「イルーシャがヒルトリア砦がウィルローに襲われるところを過去視で見たらしい。我が国に対するハーメイの事実上の宣戦布告だ」
「なんだと」

「ウィルローはトリア村に向かうって言うってた。カデイス、早くなんとかして」

わたしは涙を流しながらカデイスに訴える。

その時、近衛の人からヒルトリア砦がほとんど全滅に近いという
報せが入った。

「……分かった、トリア村には紅薔薇と魔術師団を向かわせる。キ
ース、おまえが指揮を取れ」

「分かった。すぐ向かう」

キースは厳しい顔で頷くと、その場から移動した。

——キース、お願い。早く村の人達を助けてあげて。もうあんな
光景は見たくない。

祈るような気持ちでキースの消えた場所を見ていると、ふいに肩
を叩かれた。

「顔色が悪い。おまえはここで少し休んでろ」

カデイスにテーブルセットの椅子を引かれると、わたしはそこに
腰掛けた。

その後に、またハーメイ軍がトリア村に向かったらしいとの報が
入った。

「——正直、半信半疑だったが、おまえの能力は本物らしいな」

なに、カデイス。信じてなくて、訓練に反対してたの？

わたしがカデイスを見上げると、カデイスは苦笑してわたしの隣
に腰掛けた。

「初めて聞く能力だったものでな。……しかし、おまえのその能力
はやっかいだな。見せたくないものまで見せてしまう。……イル
シャ、怖かったか？」

カデイスの気遣うような言葉にわたしは思わず涙をこぼしてしま
いながら頷いた。

怖かった、とても怖かったよ。

「……ウィルローの要求はわたしだって言ってた。わたしのせいで
大勢のガルディア兵が切り刻まれて……。つ。やだよ、こんなの。や
だ……。っ」

そこまで言ったところでわたしはカデイスに腕を引かれて、気が
ついたときには彼の膝の上にいた。

キースから借りたマントが肩から滑り、床に落ちる。

「カデイス……ッ」

カデイスに抱きしめられて、わたしは寝間着一枚の姿だったことに気がついた。ちょっと、さすがにこの姿はまずいって！

わたしがカデイスの腕の中でもがいていたら、カデイスはあやすようにぽんぽんと背中を叩いた。

「おまえが気にすることじゃない。悪いのはあちらだ」

カデイスがそう言ったことで、意識し過ぎだったと気がついて、わたしはちよつと赤くなる。

「で、でも、わたし見ちゃったんだよ。ウィルローの魔法でガルデア兵の手足や首が飛び散るところ」

あの時の断末魔の声はきつと一生忘れられないだろう。わたしが震えながら泣いていると、カデイスがわたしの背中を安心させるように撫でてくれる。

「おまえの能力……、過去視と言ったか、訓練するのはやめるか？今回は不測の事態だったが、このままなにもしないでいれば、おまえの能力もそう発現しないかもしれない」

カデイスは心からわたしのことを思っそう言ってくれてるのだろう。……でも。

わたしはカデイスの胸に手について身を起こして首を振る。

「うつん、訓練はする。わたし、この国の役に立ちたいよ。迷惑かけてるだけじゃやだ」

「俺達は別に迷惑だと思ってない。おまえはこの国に充分貢献しているぞ」

カデイスはわたしのいることでの経済効果を言っているのだろうけど、わたしはそれだけじゃ嫌だ。カデイスはわたしを気遣って言うってくれてるのに、わたし、かなりわがままだ。

「でも現に、わたしのせいで皆やトリア村が襲われてるじゃない。わたしはただ黙って見ているのは嫌だよ」

わたしはカデイスの目をまっすぐに見つめて言うと、カデイスが

顔を歪めた。

「まったく、おまえというやつは」

ああ、カデイスに強情だと思われちゃったかな。でも、これは譲れないよ。

「カデイス……」

ごめん、と言おうとした途端に、また強い腕に抱きしめられる。

「俺は、おまえにはそんな苦しい思いはしてほしくない。おまえが見た映像も、普通の姫なら一生目にしないだろうものだ。それなのにおまえは自らそれに身を投じるというのか」

「ごめん。ごめんね、カデイス」

心底わたしを心配してくれるカデイスにわたしは謝るしかできない。うう、もうちょっとわたしに語彙とかあればいいのに。

「仕方ないな、それがおまえだ」

……分かってくれたの？

カデイスが苦笑いする気配が伝わってきて、わたしは思わず体の力が抜ける。

カデイスはそんなわたしを支えてくれながら今度は声を立てて笑った。

「しかし、おまえはこんな格好で、不用心だな。襲われてもしらんぞ。……もうかなり堪能させてもらったがな」

からかうようなカデイスの口調にわたしは真っ赤になって言い返す。

「カデイス、不謹慎だよ！ 向こうではキースやブラッド達が戦ってるのに」

「ああ、悪い。……だが、かの魔術師がいうと、すぐに決着はつくだろう。皆では不覚を取ったが、ハーメイは我が国の軍事力を舐めすぎだ」

そこでわたしはカデイスの膝から降ろされて、床に落ちたキースのマントを拾って羽織る。

「とりあえず、おまえは自室に戻って休め。もしかしたら、これか

ら忙しくなるかもしれんからな」

「うん、分かった」

わたしは素直に頷いた。実際これ以上力デイスの執務室にいてもなにができるってわけじゃないしね。

今日はわたし付きのマーティンに部屋まで送ってもらうと、わたしはユーニスによく眠れるというハーブティを淹れてもらった。

あんな映像見ちゃった後だから、正直眠れるとは思えなかったけど、せっかくだからユーニスの厚意に甘えておこつ。

「それでは、イルーシャ様おやすみなさいませ」

「うん、おやすみ」

ユーニスにもらったラベンダーに似た香りのサシェを枕元に忍ばせる。……これで寝られるといいな。

わたしは横になって枕元のハーブの香りを大きく吸い込む。

元が図太いのか、ハーブが効いたのか、わたしはだんだんうとうとしてきた。

……あー、眠れそう……。

そんなときに、わたしの上になにかのしかかってむっとする。

せっかく眠れそうなのになによ。

「――姫」

ふいにわたしの上から聞き覚えのある声がして、わたしは総毛立った。

不健康そうに太った体躯。ぎらぎらとした目つき。

それはどう見ても、ハーメイ国王、ギリングだった。

「なぜ、ここに」

いるはずのない人物がここにいるのが信じられなくて、自然と声が掠れる。

「姫に会いたくてはるばるここまで来ました。この前は阻まれましたが、今回は邪魔者はいませんぞ。さあ、姫、愉しもうではありま

せんか」

そう言つと、ギリング王はわたしにかかつていたシーツを取り払つた。

まさか襲う気！？ 敵地でこんな暴拳に出るなんて正気じゃない！わたしはもがいてギリング王の体の下からなんとか出ようとしたけれど、簡単にその動きは封じられてしまった。

「……離して！」

気持ち悪い。こんな男にどうにかされるなんて、絶対に嫌だ！

「姫、本当に美しい。姫、姫……っ」

ギリング王はわたしの寝間着に手をかけると、それを一気に引き裂いた。わたしの素肌が曝され、そこに湿ったギリング王の手が這う。

「いやああああっ！！！」

誰か、誰か助けて！

わたしは半狂乱の態で喉も裂けんばかりに叫んだ。

26 急変(3)

「いや、いやあつ!」

わたしはなんとかギリング王から逃げようと懸命だった。わたしにキスしてこようとするギリング王の頭を押さえながら、叫びに叫んだ。

「イルーシャ様、どうしました!？」

騒ぎを聞きつけたらしいマーティンの声が聞こえてくる。……助かった!

「助けて! マーティン、助けて!」

わたしは必死でドアの向こうにいるだろうマーティンに助けを求めた。

「——無駄ですよ」

わたしの安堵を打ち消すように、にやりとギリング王が笑う。

「この部屋には魔術が施してあります。あの扉は開かない」

——嘘っ! だとしたら、このままわたしはこの男の餌食ってこと!?

「イルーシャ様! くそっ、なぜ開かない!」

ギリング王の言葉を裏付けるようにドアの取っ手が鳴るだけで、マーティンがドアを開けられるような気配はない。

マーティンがドアに体当たりしているような音が聞こえるけど、それでも駄目なんだろうか。

「多少外はうるさいが、まあ、それも一興。あの男にあなたの啼き声を聞かせてやろうではありませんか」

……この変態!

わたしがきつと睨むと、目の前の男は楽しそうに笑った。

「なんと、見かけによらず気の強いことだ。……しかし、そんな女を組み上げてよがらせるのもわしの愉しみの一つですよ、姫」

……この、ド変態!! 絶対あんたなんかの思い通りになんかな

るもんか！

そう思って手足をばたつかせていると、ギリング王はそれを意に介す様子も見せずに、わたしの寝間着をビリビリと破いた。その間も胸やお腹を撫で回されてわたしは鳥肌を立てる。

「やだーっ！」

「イルーシヤ様！」

「ほお、柔らかいのに弾力がある素晴らしい肌ですな。さすがにその辺の女とは伝説の姫君はわけが違う」

こんな時だけど、わたしはギリング王のこの発言にカチンときた。……こっちは、もともとその辺の女なんだよ！ 絶対にこんな男の好きなようにさせるもんか！

「離しなさいよ！ 誰があんたなんかに！」

「強がる姿も可愛らしいですなあ、姫」

ギリング王はにやにや笑うと、わたしの胸に顔を埋めてキスをした。

ぎ、やああああっ！！

「い、痛……っ」

キスされたときに吸い上げられた痕が肌に赤く残る。

「さあ、それでは本格的に愉しむことにしますかな」

だらしなく笑いながらギリング王はわたしの太腿に手を伸ばす。太腿の内側をゆっくりと蠢く指の動きに、わたしははつきりと身の危険を感じとった。

「！ いやっ、いやっ、いやああああっ！！」

わたしは首を横に振りながら、恥も外聞もなく泣き叫んだ。遠くでマーティンが叫ぶのが聞こえる。

こんなの嫌だよ。やだ、やだ、マーティンでも誰でもいいから助けて！

ギリング王はわたしの太腿を撫で上げると、下着に手をかける。

「やだああああっ！！」

「マーティン、どけっ！！」

わたしが半狂乱になって叫ぶのと、ハスキーな声がしてドアが大きな音を立てて開くのが同時だった。

「な、馬鹿な……っ」

わたしを押し倒していたギリング王は慌てて身を起こすと、呆然と声を漏らした。

寝室にヒューとマーティンが駆け入ってきて、わたしは慌ててシートを引き被る。

うつ、見られたかな。見られたよね。……でも助かってよかった。

「なにが『馬鹿な』なんですか」

すつと紫色の瞳を細めて、ヒューがギリング王を冷たく見つめる。

「誰も部屋に入れないはずだ！ ウィルローはなにをやっている！」
ギリング王がうるたえてそう言う間にもヒューはギリング王にゆつくりと近づいていく。それに合わせて、ギリング王も後ずさる。

「あいにくと、その計画は潰えたようですね」

助けてもらっというてなんだけど、ヒューの凍るような目つきが怖い。怖すぎる！

わたしはなんでヒューが氷の騎士と呼ばれているか分かったような気がした。

「ひ、ひ……」

ギリング王がおかしな声をあげてベッドの上を後退する。……あ、もう少しで落ちそう。

そこでわたしがえいやっ、と思い切りシートを引っ張ると、見事にギリング王はひっくり返った。……ざまみろ！

わたしが溜飲を下げていると、ユーニスが泣きながらわたしに抱きついてきた。……ああ、心配させちゃったなあ。ごめんね。

ユーニスを抱きしめ返すと、今更ながら震えがきて、わたしもぐすぐす泣いてしまった。

「な、な、なにをするっ、無礼な！」

ギリング王の叫び声が聞こえてきて、見るとヒューがやつの首に

剣を突きつけるところだった。

「見て分かりませんか？」

ヒューは一度剣を引くと、素早くギリング王に向けて剣を振る。

「ひいっ！」

ヒューはギリング王の衣服のあちこちを斬り裂くと、もう一度王の首に剣を突きつけた。

「お、王に向けて剣を振るうなど……っ」

「敵国の、でしょう？　ならばなにをためらう必要があるのですか？」

も、もしかして、ヒュー、すごく怒ってる？　ギリング王を半殺しにしそうな勢いなんだけど。

「ヒュー、わ、わたしは大丈夫だったから、あなたは人を傷つけないで」

わたしがそう言うのと、ヒューは苦しそうな顔をしてこちらを振り向く。なんだかその様子が、子供が泣き出す直前のように見えて、わたしは一生懸命に何度も頷いた。

ヒューはわたしの願いを聞き入れて、仕方なさそうに剣をおさめる。

「大丈夫、じゃないですよ。イルーシャ様」

「うん、ごめんね。ヒュー、助けてくれてありがとう」

わたしがぎこちない笑みを浮かべると、ヒューも少し笑った。

「……すみません、俺もいるんですが」

マーティンがギリング王の腕を取って立たせながら、横から口を出す。……ごめん、すっかり存在を忘れてたよ。

「あ、ごめん、マーティン。ありがとうね」

「別にいいですよ、俺は。イルーシャ様が無事ならば」

う、ちよつと拗ねてる？　だってヒューの勢いが凄かったからさ、つい……。

「本当にごめんって。感謝してるよ、助かった」

「本当に間に合ってよかったです、イルーシャ様」

わたしの必死な様子に苦笑いしながら、マーティンはヒューと一緒にギリング王を拘束する。

ギリング王が引き立てられながら、まだわたしの名前を呼んでいたけれど、わたしは耳を塞いでそれをやりすごした。

しばらくして騒がしさが遠ざかると、ユーニスがわたしに向かつて言った。

「さ、イルーシャ様、お風呂に入りましょう！ あんな気持ちの悪い王に触れたんですもの。さぞ、お嫌だったでしょうね……」

最初は勢いよく、最後のほうは泣きそうになって言う。

「ほ、本当にもう大丈夫だから、ユーニス泣かないでよ……」

そんなふうになされたら、わたしまで泣きなくなっちゃうよ。

「も、申し訳ございません。さ、イルーシャ様」

わたしはシーツにくるまったまま、ユーニスの手を取って、お風呂に連れていってもらった。

「あら、いやだ。こんなところに！」

泡風呂で体を洗ってもらっている途中で、ギリング王に付けられたキスマークをユーニスに見つけられてしまった。

「ああ、いやだわ。けがらわしい。わたし達のイルーシャ様が……」

あのー、もしもし？ わたし達のつてなに？ ……いや、細かいことは聞かないでおこう。怖いから。

「ユ、ユーニス、痛い、痛い」

スポンジでゴシゴシ擦られてわたしは悲鳴を上げる。

「あ……。も、申し訳ありません、つい……」

ユーニスが眉を下げて何度も謝ってくる。

「あ、いいよ、いいよ。気にしないで。わたしもこれ見てると嫌な気分になるもん」

わたしが顔の前で両手を振って言うと、ユーニスがぱっと顔を輝かせた。

「……そうですね！」

ちよつ、ユーニス、切り替え早すぎ。……でもまあ、気に病まれるよりはいいけど。

そんなこんなで入浴を終えて、ドレスに着替えたわたしの居室には、既にカデイスが待っていた。

「イルーシャ！」

カデイスはわたしを見るなり駆け寄ると、いきなり抱きしめてきた。

「カ、カデイス……」

「イルーシャ、おまえが無事で本当によかった」

その切実な響きにわたしは息を止める。

……わたし、そんなに心配かけたの？

「カデイス、心配かけてごめんね」

「おまえが悪いわけじゃない。謝らなくていい」

カデイスがわたしを抱く手に更に力が籠もる。カ、カデイス、ちよつと痛いよ。

「……やっぱイルーシャ様には、陛下ですわー……」

ユーニスがうつとりして呟くのをわたしは脱力して聞いていた。

翌日。シェリーに起こされて、わたしは寝ぼけ眼を擦りつつ朝の支度をした。

なにか城内が騒がしいのでシェリーに聞いてみたら、途端に彼女は沈痛な面持ちになる。……え、なんなの？

「——なにかあったの？」

「それがその……、拘束されたハーメイ国王が昨夜謎の死を遂げたそうです」

それを聞いたわたしは、城のざわめきが一気に遠くなる。

見えないところで恐ろしいなにかが蠢いているような、そんな気

が
し
た。

27 急変(4)

ハーメイ国王死亡の報を受けて、わたしはカデイスの執務室に急いだ。

カデイスはどちらかというと夜型の人間なので朝は遅い。だけど、今日は既に起きてきていて、わたしが行ったときには執務室にはキースとヒューもいた。

「イルーシャ」

「あ、キース、おかえりなさい」

トリア村はどうだったの？ と聞こうとした途端、彼に腕を取られて抱きしめられた。

「君が襲われたこと聞いたよ。無事でよかった、イルーシャ」

「……キース、心配かけてごめんなさい」

わたしがそう言うと、キースはわたしから体を離れた。

「君にはどうしようもなかったことだろう？ むしろ、魔術の気配に気づかなかった僕が悪い」

顔をしかめて言うキースにわたしは首を横に振る。

「……そんなこと。キースはトリア村のことでそれどころじゃなかったでしょ？ キースは全然悪くないよ」

「……しかし、敵はキースがトリア村に向かうのを見越して、ハーメイ国王をイルーシャの寝室に移動させたのか。なかなか姑息なことをするな」

カデイスがおもしろくなさそうな顔をして机に頬杖をつく。

ハーメイ国王の名が出たことで、わたしは当初の目的を思い出した。

「あ、そうだ。ハーメイ国王が急死したって聞いたんだけど、死因はなんなの？」

一瞬カデイスは口ごもったけど、観念したらしく再び口を開いた。
「……早朝、見回りに行った騎士が発見したんだが、首を切断され

ていた。既に体は冷たくなっていたそうだ」

わたしは思ってもいなかったギリング王の凄まじい死に方に息をのんだ。

「な、なんで？」

「遺体を調べたところ、首の後ろに呪いの痕があったらしいが」

カデイスの言葉を引き継いでキースが説明する。

「操りの呪いの紋があつて、それを通して魔術を施行されたみたいだね」

「……遠隔操作みたいなもの？」

「そうだね。十中八九ウィルローの仕業だろうけど、ハーメイ国王は君への想いを体よくやつに利用されたつてところかな」

「そう言えば、イルーシャ様が襲われたときにハーメイ国王は『ウィルローはなにをやっている』と言っていました」

ヒューが思い返すようにこめかみに指を当てる。

「しかし、ほかの死因ならまだともかく、首を切るとは嫌なやつだな」

「え……なんで？」

確かに嫌な死に方ではあるけど、わたしはカデイスの言ってる意味が分からなくて首を傾げた。

「ハーメイに送り返すにしても首を切られた死体など、こちらが処刑したと言われるのが関の山だ。周辺諸国にもそのように触れ回るだろうな」

うわ、なにその嫌らしいやり方。思わずわたしは眉を顰める。

「それに、ハーメイ国王が直前までこちらに国賓として滞在していたのもまずかったね。ハーメイに砦や村を襲われたと周辺諸国に説明しても、それもこちらの奸計と思われる確率が高い」

「周辺国に、ハーメイを侵略するための狂言だと思われるってこと？」

「そついうこと」

こちらの被害を説明するにしても、全てが一日足らずの出来事で

は信じてもらうのは難しいってことか。でも、そんなの納得できないよ。こっちは実際に被害を受けてるのに。

「そういえば、トリア村はどうなったの？」

「とりあえず今は落ち着いてる。騎士団が到着した時は村人への暴行や略奪がひどかったけど、ハーメイ軍は追い返した」

「そこに、ウィルローはいた？」

たぶんいなかったとは思うけど、一応確認してみる。

「いなかった。……初めからやつはこうするつもりだったんだろうね。今回はまんまとやられたよ」

悔しそうにキースが言う。対決するつもりで行ったんだろうから、キースにしてみれば余計悔しいだろうなあ。

「君が襲われたって聞いたから、あとをブラッドレイに任せて僕はいったんこっちに帰ってきたけど、皆のこともあるからすぐに帰るつもりだよ」

キースがこうも慌ただしいのは、たぶん、村の方もかなり被害を受けたんだろうな。わたしになにか出来ることがあればいいんだけど、過去視くらいしか取るところないんだよね。

「……忙しそうだね。過去視の訓練、かなり先になっちゃいそうかなあ」

「ああ、簡単なものなら今教えられるよ」

え、本当！？

キースから予想外の答えが返ってきて、わたしは一気に色めきたった。

「まず、なんでもいいからカードを用意して裏返した状態で自分に見えないようにめくる。……これは自分の反対側から見えるようにしてめくるといいね。で、それを反対側から見ている自分を心に思い浮かべる。そうしてるうちにだんだんカードの図柄を当てること出来ると思うよ。……ざっと説明したけど、これで分かったかな？」

わたしはキースの説明を反芻してから頷いた。

「うん、分かった。反対側から見るつもりでカードをめくるんだね」
「うん、そう」

「ありがと、キース。早速今日から始めてみるね」
わたしが両手の拳を握って言うと、キースはちよつと苦笑した。
「うん、頑張つて。僕としては、あまり君にあの能力を使つてほしくないんだけど」

ああ、また力デイスに続いてキースにも言われちゃったよ。
二人に無理矢理訓練をすること取り付けたけど、まだ渋ってるんだなあ。

「……イルーシャ様の能力はやつかいなものを見てしまうそうですね。だとしたら、わたしも使つてほしくはないですね」
うつう、ヒューまで。

「でもわたし、この国の役に立ちたいんだよ。だっているいろとお世話になりっぱなしなんだもん」
「そんなことはない」「そんなことはないよ」「そんなことはありません」

うわ、三人同時に同じ答えが返ってきたよ。
「……そういえば、城内をうろろしないって言ったのに、イルーシャ、早速破つたね」

キースが笑顔で言うけど、目が笑ってない。
「ええっ、ここに来るのも駄目なの？」

まさかこんな近くに来るのにも反対されるとは思わなくてわたしはびっくりした。

「俺は大歓迎だが」
「駄目」

「事情は分かりませんが、陛下の傍に近寄られるのは遠慮していたきたいですね」

わたしの質問に三者三様の返事が返ってきた。

「ヒューイ、それは思い切り個人的な事情だろうが」

「先程陛下が大歓迎と言われたのも個人的事情かと思われませんが」

……ちょっと、二人とも大人げないよ。

「あーもう、喧嘩しないでよ。分かったよ、部屋でおとなしくして
るよ」

「うん、そうして」

多数決に従ったわたしの答えに、カデイスは目に見えてがっかり
していた。

「では、俺がおまえの部屋を訪ねるということでもいいな？」

うーん、カデイスとしては折衷案なんだろうな、これ。……でも
なんかずれてる気が。

「カデイス、仕事して」

冷たくあしらったなら、今度こそカデイスがいじけた。ちょっと、
いい大人がみつともないよ。

「うーん、うまくいかないもんだねー……」

部屋に戻ったわたしは、シェリーにタロットに似たカードを持っ
てきてもらって、早速過去視の訓練を始めた。

裏返したカードをめくってみるけど、つい、目の前の模様を凝視
してしまって反対側から見る、という意識付けが出来ないでいる。

ああ、目を開けているからいけないのか。今度は目を瞑ってカー
ドをめくってみる。

「うー……」

カードの反対側、反対側。……うん、やっぱり分からない。

うう、力みすぎて、なんだか頭が痛くなってきた。

わたしは痛むこめかみを軽く揉むと、長椅子に座ったまま延びを
した。

そういえば、過去視が発現するのはいつも寝てるときなんだよね。
とすると、リラックスしてる状態の方がいいのかもしれない。

わたしはユニースにもらったサシェを寝室から持ち出して、目の

前のテーブルに置く。

うん、ここからでも充分香りは届く。

わたしは肘掛けにもたれてリラックスした状態で、カードをめくって目を瞑る。

反対側、反対側、反対側……。

昨日変な時間に寝たり起きたりしたのがいけなかったのか、そうしてるうちにわたしはだんだん眠くなってしまった。

28 非道（前書き）

文中に陵辱表現があります。苦手な方はご注意ください。

28 非道

微かな明かりの灯る室内。

窓に鉄格子のはめられた豪華な部屋。貴人用の牢獄だろうか。そこにギリング王はいた。

「やれやれ、せっかく想いを遂げさせる機会を作って差し上げたというのにこの体たらくですか」

ギリング王しかない室内に、いないはずのウィルローの声が響く。

「ウィルロー！？ おまえ、部屋に結界を施すと言っていたのに、あれはどういうことだ！」

「ああ、ちよつとした手違いです」

「なんだと！？」

気色ばむギリング王が空中に向かって叫ぶ。

「怒鳴らないでくださいよ。見張りが気づくじゃないですか」

「とりあえず、わしを城に帰せ！」

「……お断りします。あなたはもう用済みです。わたしが仕えるのは新しい王」

「なに！？」

その途端、ギリング王の首が血飛沫をあげて飛んだ。

——やああああっ！

こんな場面は何度見ても慣れない。……慣れたくもないけど。

それにしても、やっぱりギリング王を殺したのはウィルローだったんだ。

ギリング王の首がコロコロと床に転がる。

その恨めしそうな顔を見てしまって、わたしは悲鳴を上げそうになってしまった。

——場面は変わって、夜。家屋のあちこちに火が付いているのが見える。

村——だろうか。それもこじんまりとした村。

普段はたぶんのどこであろう村のあちこちで悲鳴が上がっている。

敵の兵士にいたぶられるように浅く剣で何度も切りつけられ、衣服を赤く染めるおじさん。

勝手に家に上がり込んだハーメイの兵士達が下品な笑い声をあげながら飲み食いをしている部屋の隅で、子供を抱きしめながら怯えているお婆さん。

酷い物だ。これが仮にも国に所属している軍隊の所業なんだろうか。

「アデル、逃げなさい！」

「駄目だよ、リユーシャ姉ちゃん、もう囲まれてる」

「へへへ、そのようだなあ。もう逃げられねえぜ」

一国の兵とは思えない下品な声を上げた男はリユーシャと呼ばれた女の子を見ると、ニヤリと笑った。

「こんな辺鄙な村には珍しい別嬪じゃねえか。こりゃ、楽しめそうだな」

「なんだ、ディック。おまえばかり楽しむなよ。こっちにも回せ」

「分かってるよ。へへ、姉ちゃん、こっちに来なって」

ディックと呼ばれた男に腕を取られた女の子は叫び声をあげる。

「い、いやっ！」

「！姉ちゃんに触るな！」

「ガキはどいてな！」

果敢に男に飛びついた男の子は、腕の一振りです屋の隅の壁に叩きつけられる。

アデルと呼ばれた男の子の体は、そのままずると壁を滑る。

「……ねえ、ちゃ……」

「！ アデル！」

「うるせえ！」

リユーシャは男に頬を殴られて一瞬気が遠くなったようで、途端に動かなくなる。

「へへ、楽しもうぜえ」

床に倒されたリユーシャの上に、男が馬乗りになる。

——このままじゃ、リユーシャが！

男に服を破られて気が付いたリユーシャが悲鳴を上げる。

「いや、いやああっ！」

「へへ、そそられるねえ。おい、ちよつと腕を押さえといてくれよ」

ディックと呼ばれた男はもう一人の男に声をかける。

「おお、いいぜ。すんだら俺に回すのを忘れるなよ」

「分かってるって」

もう一人の男に腕を押さえられたリユーシャは叫ぶことしか出来ない。

「いや、誰か助けて！ いやあああっ」

荒々しく男に体中を触れられて、リユーシャが半狂乱になって泣き叫ぶ。

誰か、誰か早く助けてあげて！

「もう観念しなつて。へへ、行くぜえ」

「！ きゃああつ、痛い、痛いーっ！」

——ひどい、こんなのつて！

「へへえ、初物か。これはなかなかだなあ」

男は下卑た笑いをしながら、リユーシャの脚を抱え込む。

「あう、くう……っ」

男は歯を食いしばって痛みをこらえているリユーシャの上で激し

く動いた。

「くう……っ！」

「い、いやあああっ！」

男はやがてふーっと大きく息を付くとあれなものをズボンに納めた。……うええ、もろに見ちゃったよ！

「おい、交代しろよ」

「分かつてるって」

今度はディックと呼ばれた男はリユーシャの腕を押さえつける。

別の男にのしかかられたリユーシャはショック状態で叫ぶことも出来ないようだ。

「や、いや……」

「それにしても姉ちゃん、災難だったなあ。イルーシャ姫が素直にうちの王さんの妾になってりや、こんな目に遭わずにすんだのに」

ディックと呼ばれた男が楽しそうにリユーシャに言う。

な……っ、わたしのせい？ わたしのせいでリユーシャがこんな酷い目に遭ってるの！？

「イルーシャ姫って、すげえいい女なんだろう？ 一度でいいから抱いてみてえなあ、そんな女」

……吐き気がする。なんて下卑たやつらなんだ。

「おいおい、目の前の女で我慢しろよ。俺たちじゃそんな女拝むこともできないんだぜえ？」

なんてやつらだ！ こんな目に遭ってるリユーシャに失礼すぎる。

「そりゃ、そうだな」

下品な笑いを浮かべると、リユーシャに覆い被さっている男が激しく動いた。

「や……、や……っ、たす、けて、だれ、かあ……っ」

「誰も助けになんか来ないさあ。来ても全てが終わった後だ」

男達がぎやはは、と聞くに耐えない笑い声をあげる。

その次の瞬間、赤いマントが翻るのが見えて、リユーシャに覆い被さっていた男が蹴られて転がった。

「な……っ」

ディックと呼ばれていた男が慌てて剣に手をかける前に、その右肩に剣が突き刺さる。

「いてえっ！」

「……この下衆が」

——ブラッド！

赤黒い髪に赤い瞳。それは確かに紅薔薇騎士団団長ブラッドレイだった。

ブラッドはマントを素早く外すと、リユーシャの上に被せた。

慌てて逃げようとする男達を後から入ってきた騎士団の人達が素早く取り押さえて引き立てる。

「……立てますか？」

手を差し出すブラッドにリユーシャはびくりと体を震わせた後、おずおずとその手を取って頼りなく立ち上がった。

ブラッドはリユーシャを椅子に座らせた後、部屋の隅にいるアデルを抱き起こした。

「わたしはまだ村を見回らなければいけないので、これで失礼します。戸締まりはしっかりなさってください」

「あ、あの、ありがとうございます」

「とんでもない。もつと早く我々が着いていればこんなことにはなっていないかった。お詫びいたします」

悲痛に顔をしかめ、ブラッドがリユーシャに頭を下げる。

「そ、そんな、騎士様のせいではありませんからっ」

真っ赤な顔でリユーシャが否定する。

「そう言っていたけると助かります。後で女性の魔術師を寄越しますので突然現れてもびっくりなさらないでください」

「はい」

リユーシャが頷くと、ブラッドが「それでは」と立ち去ろうとする。

「あ、お待ちくださいっ。あの、あなたのお名前をお聞かせくださ

い」

ブラッドは戸口で振り返ると、月明かりを浴びながら名乗った。

「わたしはブラッドレイ。紅薔薇騎士団の団長です」

「……ブラッドレイ様……」

そうしてブラッドが立ち去った後もリユーシャは赤い顔をして戸口を見つめていた。……もしかして、ブラッドのこと好きになっちゃたんだろっか。

その後、ブラッドの言葉通り女性の魔術師が現れて、リユーシャに避妊薬を飲ませ、お風呂に入れさせていた。

「ブラッドレイ様、昨日はありがとうございました」

昨日と言っていたからこれは今日の出来事か。騎士団の駐屯地にリユーシャが現れた。

「いえ、わたしは当然のことをしたまでですから」

そう返すブラッドをリユーシャは真っ赤な顔で見つめる。うーん、もしかしくなくてもブラッドのこと好きなんだろっか。

「あのっ、お菓子を焼いたんです。良かったら召し上がってくださいっ」

必死な様子で焼き菓子の入った袋を差し出すリユーシャは、傍目にも可愛かった。

「団長、もてますねーっ」

ヒューヒューと口笛を吹いて周りの騎士さん達がブラッドをからかう。

「おまえら、うるさい」

ブラッドは騎士さん達に向かってそう言つと、リユーシャの差し出した菓子を受け取った。

「ありがとうございます。これはありがたく皆で頂きます」

「……え」

ちよつ、ブラッド、それはリユーシャがあなたのために焼いた菓子なんだって！

その証拠に、リユーシャが一瞬哀しそうな顔になる。

「は、はい、皆さんで食べてください。……あ、お借りしたマントはきちんと洗濯してお返しますから」

「ああ、はい。駐屯地の誰でもいいですから渡しておいてください。すぐに分かりますから」

「はい」

リユーシャが泣きそうな顔で頷くのわたしは気の毒に思いながら見ていた。

ブラッドって、女の扱いにはたけてそうだったけど、それはわたしの勘違いだったみたいだ。……ちよつとはリユーシャの気持ちに気がつけてーの！

ああ、ここにブラッドがいたら、女の子の扱いについて懇々と説教してやりたい。

「ブラッドの馬鹿ーっ！！」

わたしは盛大な自分の寝言で目が覚めた。

我ながらちよつと激しすぎる寝言だったなあ。赤面。

ちよつどその時、ブラッドの来訪が告げられた。うわ、タイミンが良すぎ。

人を迎えるには、応接セットにものが散らばって……と思ったら、すでにシェリーによって片付けられていた。うーん、有能だわ。

そこでわたしはブラッドに入室してもらって、彼から騎士の礼を受けた。うん、相変わらず気障っぽい。

「イルーシャ様が襲われたと聞きましたので。心配しましたよ」

それで、ブラッドも忙しいのにわざわざ立ち寄ってくれたんだろ。うか。悪いことしちゃったなあ。

「ごめんね。でも大丈夫だったから」

わたし、いろいろな人に心配かけてるんだなあ。なるべく心配かけないためにも、本当にしばらくはおとなしくしよう。

「ところで、さっき『ブラッドの馬鹿』と叫んでるのが聞こえたんですけど、いったいなんだったんですか」

いたずらっぽくブラッドが笑うのをわたしは冷や汗が出そうな気分で聞いていた。

あ、ははは……、すっかり外まで聞こえてたんだね。これからは寝言にも気をつけよう。

29 騎士の求婚(2)

……確かにブラッドがいたら、説教してやりたいって思ったよ？でも目覚めの後にいきなり本人が現れたらちよつと動揺するってもので。

わたしはシェリーにお茶を出してもらった後、ちよつと込み入った話をするからと言って席を外してもらった。

「……えーと、実は今、過去視でトリア村の状況見てたんだよね」「イルーシャ様のその能力は意識して使えるんですか？」

「今のところ意識しては無理。それも眠ってる状態でないと発現しないし」

それが、訓練している途中で居眠りして出てくるなんて皮肉な話だ。

「それで、今回はどこまで見えたんですか？」

「最初はハーメイ国王の死因から入って、次に昨夜から今朝にかけてのトリア村が見えた。リューシャって娘が出てきたけど」

「リューシャ……、イルーシャ様由来の名ですね」

「あ、うん。似てるからそうかもね。……じゃなくて！」

うっかりそのままブラッドのペースに流されるところだったよ。

「ブラッド、リューシャはあなたのためにお菓子を焼いたのに、みんなで頂きますってどういうことよ」

ああ、あの娘はリューシャと言うんですか、とブラッドは暢気に言った。

「どういうことって、言葉通りですが」

「わたし、あなたのことタラシだと思ってたけど、本当はとんでもない朴念仁だったんだね。見りやすぐに分かるじゃない、リューシヤはブラッド、あなたのことが好きなんだよ！」

わたしはビシッ！とブラッドに指を突きつける。

「……なんだか、酷い言われようをされていると思うのは気のせい

ですか？」

あ、わたし今ブラッドのことタラシとか言ってたっけ。

「と、とにかく、そういう場合は皆で食べるとか言っちゃ駄目じゃない。リユーシャがかわいそうすぎるよ！」

ドン、とテーブルを叩くと、目の前のカップが浮き上がる。

「……しかし、その気もないのに余計な期待を持たせる方が残酷ではないですか」

「でも可愛い娘じゃない。今はその気がなくてもつきあってるうちに情も出てくるって！」

わたしは身を乗り出して、見合いを勧めるおばさんよろしく、二人をくつつけようと必死だった。

「……つきあうこと決定なんですか？ 俺はそんな気は毛頭ありませんよ」

「……ひょっとしてブラッド、リユーシャの身が清らかじゃないから駄目なの？」

わたしがそう言うと、ブラッドは目を瞠った。

「なぜあの娘が清らかじゃないと分かるんです。まさか、あの娘が襲われるところを見ていたんですか？」

「……最初から見てたよ、二人の男にリユーシャが襲われるところ」
「見てしまったんですか」

わたしの言葉にブラッドの瞳が陰る。

うん、見ちゃったよ。こんなの見たってキース辺りに言ったら、やっぱり訓練は中止とか言われるかなあ。

「見たくなかったけどね。わたしがハーメイ国王の妾になつてればリユーシャがこんな目に遭わずにすんでたって言ってたけど……あいつら酷いんだよ。イルーシャ姫はいい女なんだろ、一度でいいから抱いてみたい、目の前の女で我慢しろって、リユーシャに酷いことしながら言うんだから」

「……あいつらがそんなことを」

あの程度ですますんじゃないかな、とブラッドがつぶやく。

「……身が清らかとかそういうのは関係ありませんよ。実際今俺が想っている方もそうではありませんから」

「えっ、ブラッド好きな人いたんだ！ そっじゃないってことは恋人がいたとか、人妻とか？」

わたしはブラッドの予想外の答えに興奮して立ち上がると、ついテールを回り込んで聞いてしまった。

「……未亡人ですよ。それもとびきり身分の高い方です。ですから叶わない恋です」

「でもブラッド、紅薔薇騎士団の団長じゃない。それに貴族出身なんでしょ？ 身分的にそんなに釣りあわない人もいないと思うんだけど」

「ですから、俺では釣りあわないくらい高いんですよ。伯爵家出身のヒューならまだともかく、貧乏男爵家の四男の俺では到底無理です」

ええー？ 引く手あまたのブラッドの手の届かない、とびきり身分の高い人って……。

「ま、まさか王太后陛下！？」

未亡人でとびきり身分の高い人って、カデイスの母親であるあの方しか思い浮かばないんだけど。

「……なんでそうなるんですか」

ブラッドが思い切り脱力する。……あれ、違った？

「え、ええっと、ところでその人はブラッドのこと好きなの？ なんだったら、わたし後押しするけど」

うん、この際友達のために伝説の姫君の名を最大限に利用してやるっじゃないの。

「普段は聡いのに、本当にこういうことには鈍感なんですネ、イルシャ様。そしてこの上なく残酷だ」

え、なに？

わたしはブラッドの言っていることが理解できなくて、眉を寄せる。残酷って、わたし自分で気がつかないうちにブラッドを傷つけて

いたんだろうか。

「それ、どういっ……」

意味、と聞こうとブラッドに向かって一歩踏み込むと、腕を取られて彼の膝の上に仰向けに倒されてしまった。

ええええっ、なに、なに、なに——！？

あまりのことにびっくりして目を見開いていると、ブラッドが苦笑した。

「なにが起こっているのか分からないという顔ですね。でもあなたが鈍すぎるのがいけないんですよ。ヒューの名を出して気がつかないんですから」

「え……？」

「あなたはヒューに求婚されているでしょう？ おまけに古の王妃で王族です。……さすがにここまで言えば分かるでしょう？」

「嘘」

ブラッドの好きな人って、わたし……？

わたしがあまりのことに瞳を見開いていると、ブラッドの顔が近づいてきた。

「ブラッド、ちょっと待って……っ」

逃げだそうにもがっちりと抱え込まれていてわたしは動けない。

「後押しするとまで言われるんですから、責任は取ってもらいますよ」

責任って！ そういう意味で言ったんじゃないー！

慌てているうちに、わたしはブラッドにキスされてしまった。

「ん……っ」

つい鼻に抜けたような声が出てしまつてわたしは内心焦った。

わたしの馬鹿ーっ、なに变な声出してるのよー！

ブラッドはわたしを抱え込み直すと、頭の後ろに手を添えてわたしが逃げられないようにした。

今度は角度を変えてわたしをむさばるようにキスをする。

「や、ぶら……ど、やめ……っ」

拒否の意を伝えようと必死になっていると、ふいにブラッドが唇を外して笑った。

「煽っているようにしか聞こえませんかよ、イルーシャ様」

「そ、そんなこと……っ」

わたしが真っ赤になつて否定しようとする、またブラッドにキスされた。

今度は深い口づけ。唇の間からブラッドの舌が侵入してきて、わたしはびくりとする。

「んん……っ」

ブラッドの舌がわたしの口腔内をゆっくりとなぞる。な、なにか変な感じ。

「んあ、や……っ」

や、やだ、なんだか頭がぼーっとしてきた。このままじゃまずい気がする。な、なんとか抵抗しないと……っ。

わたしの内心の焦りにも関わらず、ブラッドのキスは止まらない。「や……っ、ん……っ、だ、め……っ」

ブラッドの舌にわたしの舌がつつかれる。絡め取られてなげられる。舌の裏側を何度もなぞられる。

「……っ！」

わたしがびくんと痙攣すると、ようやくブラッドは唇を離れた。「な……」

なにすんのよーっ！ と叫び出したいけど、頭の奥が痺れていて動けない。

「とても可愛らしいですね、イルーシャ様。危うく理性が保てないところでしたよ」

あまりのことにふるふると震えているわたしにっこりと笑う様はとても憎たらしい。

おおお、思い切りディープなのされたよ！ なんてことしてくれるんだ、ブラッド！ やっぱりあんたはタラシだ！

「そういうことです、リユーシャ嬢の件はなかったことにして

ください。イルーシャ様、いいですね？」

「そ、そ……っ」

くくく、悔しい！ 悔しすぎる！

ディープキスされたことも悔しいけど、それにしっかり反応しちゃったわたしも恥ずかしすぎて悔しい！

「わ、わかったわよっ！ とにかく離してっ」

そう言ったことで、わたしはブラッドの拘束からようやく逃れたけれど、立ち上がるうとした瞬間、フラリとまたブラッドの上に倒れ込んでしまった。

「そこまで反応していただけるとは嬉しい限りですね」

うつ、タラシうるさい！

「……ブラッドって、この手の早さで、あの奥手で直球なヒューの親友なんて本当に信じられない」

「まあ、それはそれ、これはこれですよ。あなたがそう言うところを見ると、あいつは口づけすらしていないようですね」

…… そうだよ！

わたしがむうつとブラッドを睨んだら、彼は意にも介せずによやかに笑った。

「俺は初めてあいつに勝ったと思いましたよ」

黙れ、このエロ騎士。

…… 考えてみたら、わたしに求婚してキスしてこないのヒューぐらいだ。

ああ、ヒューはいいなあ、清らかで。

そんなことをしみじみ思っているうちに、ブラッドはわたしを長椅子に座らせて、わたしの傍に片膝を付いた。そしてわたしの手を取るとおもむろに言う。

「イルーシャ様、どうかわたしをあなただけの騎士にしてください」

厳かに手に口づけられたそれは、騎士の求婚の儀式。

なんてことだろう。これで求婚者が四名になってしまった。

…… この事態、いったいわたしにどうしろと？

30 それぞれの思惑

「イルーシャ!!」

ブラッドが退室して少したった頃、カデイスがノックもせず部屋に飛び込んで来た。……毎度のことながら、いい加減にしろ!

わたしがこめかみをひきつらせていると、カデイスの後ろからイザトさんが現れた。

「……陛下、女性の部屋に入るのに、取り次ぎもなしではまずすぎます。イルーシャ様、申し訳ありません」

あれ、今回は珍しい人が付いてきたなあ。

「あ、いいえ。イザトさんが謝る必要はないです。いくら言っても学習しないカデイスが悪いんで」

「……おまえも容赦ないな」

「カデイス、今度やつたら叩き出すからね」

わたしは有無を言わせない笑顔でカデイスに通告する。

「……一応、俺は王なんだが」

カデイスがぼやいたけど、無視。

二人を応接セットに案内すると、わたしも長椅子に腰を下ろした。

「……ブラッドレイから報告を受けたんだが」

「ああ、求婚の件でしょ」

さすがに二回目になると、そう驚かない。……こんなこと何回もある方がどうかしてるけど。

「ブラッドレイに話を聞いたが、おまえは時々思いもかけないことをするから好きなんだそうだ。……しかし、どうしておまえはこう次から次へと面倒を起こすんだ」

カデイスにそう言われたことで、わたしはブラッドからわたしを好きになった理由を聞いてなかったことに気が付いた。

「……面倒って、ちよっとそれ、わたしのせい? わたしはブラッドの気持ちをついさっき知ったんだけど」

「ついさつき？ …… おまえ、やつになにもされてないだろうな？」
「う、えーと……」

ブラッドに思い切りディープキスされました、などと言えるわけもなく、わたしは真っ赤になって口ごもる。

「イルーシヤ様、分かり易すぎです」

わたしが視線をあちこち彷徨わせていると、イザトさんが苦笑する。

「なにをされた。言え」

「なんでそんなことカデイスに言わなきゃならないの？」
そんな報告、恥ずかしすぎてやだよ。

「では、質問を変える。やつに口づけられたか？」

「……」

わたしは熱くなる頬を押さえて、黙秘。

「…… おまえ、本当に分かり易すぎるぞ」

カデイスが呆れたように溜息をつく。うああ、なにも言ってないのにバレバレだよ！

「まさかヒューイにもされていないだろうな」

「されてない、されてない」

わたしは手を横に振って答えた。これは自信を持って言える。ヒューイとわたしは清らかな関係だ。

「…… まあ、おまえがおもしろい人と言っているくらいだからな。

念のため確認したが、ヒューイはそんなに心配することもないさそうだな」

「陛下、その樂觀が命取りになるときもありますよ。安心するのは早計かと」

「イ、イザトさん、カデイスを焚き付けにきたの？」

イザトさんはカデイスを諷めてくれると思ってたから、ちょっとびっくりだ。

「い、いえ、むしろその逆なのですが。逆上した陛下があなたに無体なことをしないかと思って同行したのですが」

わたしはイザトさんの意外な優しさにちょっと感動した。

「あ、そうだったんですか。わざわざすみません。助かります」
「いえ」

わたしがぺこりと頭を下げると、イザトさんも同じように返す。
わたし、今までイザトさんのこと誤解していたみたいだ。取っ付きづらい、お堅そうな人だと思ってたけど、わざわざ心配して来てくれるなんて、とってもいい人じゃない。

「……おまえ達、俺に対して随分な言いようだな」
カデイスは足を組むと、そこに頬杖をついた。……ちょっと、拗ねないでよ。

「これで求婚者が四名になったわけだが、イルーシャ、おまえは誰に決めるんだ」

……うー、面倒だなあ。

こんなこと思っるのは、わたしに求婚してくれてる人にかなり失礼だと思うけど、これがわたしの正直な気持ちだ。

「……そんなこと言われても、わたしは誰に決めるとかそんなこと全然考えてないよ」

「そうは言うが、いつかは誰かを選ばねばならんぞ」

「わたしは別に一生一人でもいいけど」

今のままでも特に生活に困らないし。

わたしがそう言ったら、カデイスはちょっと驚いたみたいだった。
「おまえ、それは枯れすぎだろう」

「陛下はさかりすぎです」

イ、イザトさん、今カデイスに向かってさかかってるって言ったよ！
実はこういう人だったんだね、びっくり。

「俺の場合はイルーシャ限定だぞ。……どうしたイルーシャ」

カデイスの前からイザトさんの前に移動したわたしをカデイスが不思議そうに見る。

「身の危険を感じるから近寄らないで」

「……いつも自重しているだろうが」

……あれで、自重しているのか。していなかったらどうなんだ、カデイス。

うーん、聞きたいような、聞きたくないような。でも聞いたら後悔しそうだからやめておこう。危ない橋は渡らないに越したことはないよね。

「あ、そうだ。そう言えば、過去視でハーメイ国王の死の場面を見たんだけど」

これはカデイスに報告しようと思ってたんで、彼が来てくれたのはちょうどよかった。

「またおまえは厄介なものを見るな」

カデイスが渋い顔するのもまあ分かる。なにせ死因があれだからなあ。

「ハーメイ国王が死ぬ前にウィルローと話してた。ウィルローは声だけだったけど」

わたしは二人に見た内容をざっと説明した。

「……新しい王か。たぶん王太子のロアデイルのことだろうな」

あ、そうか。王が亡くなれば、次は王太子に王位が移るもんね。

「ハーメイの王太子はギリング王と違って思慮深く、国民の気も高いそうですが、今のところなにも言ってきませんね」

「しかし、あちらにはウィルローがいる。どう出てくるか分からない。うーん、世界情勢になると、わたしにはさっぱり分からないや。

これからこれについても勉強しないとなあ。

そうして、しばらく二人は話し込んだ後、執務室に帰っていった。「さて、じゃあ訓練するかな」

わたしはさつきと同じ環境で、カードを使つての訓練を再開した。もう、一日二日で結果がすぐ出るなんて思わずにじっくりやっついこう。焦っても仕方ないしね。でも、いつか必ず自由に使えるようにするんだ。

わたしは休憩や読書を挟みつつ、就寝前まで訓練に勤しんだ。

——陽が少し傾きかけている。

あ、ブラッドとリユーシャが見える。これは昼間の過去視だな。

「わざわざわたしに返すために待っていたのですか」

騎士団の駐屯地の前。待っていたというから、たぶんブラッドが城から帰ってきたときの映像だろう。

「は、はい。どうしてもブラッドレイ様にお会いしたくて。あのつ、マントお返しします！　ありがとうございますたっ」

リユーシャがぎゅっと目を瞑ってブラッドに綺麗に畳んだマントを差し出す。

「こちらこそありがとうございます」

ブラッドがマントを受け取ると、リユーシャが意を決したように顔を上げた。

「あのつ、ブラッドレイ様、いつまでこの村に滞在なされますか？」

「明日には城に戻る予定です」

「……明日」

愕然とした表情のリユーシャに、わたしは胸が痛んだ。仕方のないこととはいえ、かわいそうだ。

「ではわたしはこれで」

立ち去ろうとするブラッドにリユーシャが慌てたように引き留める。

「お、お待ちください！　わ、わたし、ブラッドレイ様をお慕いしています！」

振り返ったブラッドの視線を受けて、リユーシャは耳まで真っ赤に染めていた。

ああ、可愛いな。……なんでブラッドの好きなのが彼女じゃなくてわたしなんだろう。世の中うまくいかないものだな。

「……申し訳ありません。わたしはあなたの気持ちには応えることができません」

「ブラッドレイ様とわたしでは身分違いなのは分かっています」

どこまでも必死なリューシャ。できるなら彼女には幸せになつてもらいたいけれど。

「そういうことはありません」

「では、わ、わたしが汚れているからですか？」

そこでリューシャは泣きそうな顔をした。たぶん、襲われたときのことを思い出しちゃったんだろう。

「違います。わたしには既に求婚している方がいるのです」

ブラッドの言葉にリューシャはかなり衝撃を受けたようだった。胸の前で握りしめる手が震えている。

「そ、その方とご結婚されるのですか！？」

「……それは難しいでしょうね。か方には身分の高い求婚者が何名もいますから」

「そ、その方はさぞ美しい方なんでしょうね。イルーシャ姫様のような」

無理に笑いながらリューシャが冗談めかして言う。その言葉にブラッドが瞳を見開いた。

そこでブラッドの動揺を感じ取ったリューシャは信じられないと言つように首を横に振る。

「……まさか、本当にイルーシャ姫様なのですか？」

ブラッドは一瞬しまったというような顔を見ると、珍しく迷うような様子を見せる。そして、彼はやがて頷いた。

「そうです。ですから、あなたのお気持ちには応えられません。申し訳ありません」

「そ、そうですか。イルーシャ姫様相手に、わたしなんかかなうわけないですものね……」

——そんなことない。リューシャは可愛いよ！

呆然とするリューシャに、ブラッドが頭を下げる。それが彼女に見えていたかはかなり怪しい。

「誠に申し訳ありません。失礼します」

ブラッドがそう言って立ち去った後も、リユーシャはその場にずっと立ちすくんでいた。

そして場面が変わる。かなり暗い、夜かな。

暗闇に目が慣れてきたところで、馬が何頭もいるのが確認できた。厩だろうか。

わたしはぐるっと見回していると、なにかが天井からぶら下がっているのに気が付いた。近寄るとそれは人だった。

31 慰問

梁にロープを通して一人の女の子が首を吊っている。

嘘、まさか……っ。

虚ろな瞳をして、齒の間から舌が少し出ているその顔は。

——リューシャ！

叫び出しそうになるのを堪えて、わたしは目を開ける。

わたしはいてもたってもいられなくて、キースを呼び出す。それほど時間もかからず移動してきたキースが、わたしの寝間着姿を見て溜息をついた。

「イルーシャ、君はまたそんな格好で」

キースがマントを外そうとするのをわたしは手で制す。

わたしは涙の流れるままにキースに訴えた。

「……キース、トリア村の厩で首を吊っている女の子がいるの。早く降ろしてあげて」

キースは一瞬瞳を見開くと、やがて全てを理解したように頷いた。……分かった。夜も遅いから、イルーシャは寝てて」

キースはそういい残してこの場から消えた。

リューシャが自殺したのは、わたしのせいだ。わたしがハーメイ国王の妾妃になるのを拒んだからあんな酷い目に遭った。

ヒルトリア砦にいた人が亡くなったのもわたしのせい。

わたしは再びベッドに沈んでしばらく泣いていたけれど、涙を掌で拭って控えているはずのリイナさん呼び出した。

あれから慌ててドレスに着替えたわたしはカデイスの執務室にいた。……カデイスがまだ起きててくれて本当に助かった。

「イルーシャ、こんな夜遅くにどうした。それにキースから部屋から出るなど言われていただろう」

カデイスはわたしを見るなり、少し驚いたように言う。

「……あのね、カデイス。わたし、明日の朝トリア村とヒルトリア砦に慰問に行きたい」

「いきなりなにを言っている。この時期におまえが外に出るなど到底許可できない」

「無理を言っているのは分かってるよ。でもお願い、トリア村だけでもいいから行かせて。わたしのせいで酷い目にあつた人がいるのに、わたしだけのうのうと安全なところにいるだなんて嫌だよ」

ぱたぱたと涙をこぼすわたしに、カデイスが狼狽する。

「それでも駄目だ。おまえが村に行ったら、村人に罵倒されるかもしれないんだぞ、それでもいいのか」

「そんなの覚悟してるよ。カデイスお願い、トリア村に行けるんだつたら、本当にしばらくおとなしくしてるから」

願いを込めてカデイスを泣きながら見つめていると、やがてカデイスが溜息をついた。

「……俺もキースにどやされそうだな」

「！ カデイス！」

それは許可してくれたってことだよな！？

「……ただし、キースに同行してもらえ。俺も付いていきたいが、生憎俺はここを離れられないからな」

「うん、わかった。ありがとう、カデイス」

わたしは泣き笑いをしながらカデイスに頭を下げる。

「おまえは俺に頭など下げるな。調子が狂ってかなわん」

カデイスがそっぽを向いて言う。その頬が少し赤い。……ひよつとして、カデイス照れてる？

「うん、カデイス」

「……しかし、こんなにいきなりおまえが言い出すということは、また過去視でなにか見たのか」

「うん、そうだけど。ごめんね、詳細はあまり言いたくない」
「なんだそれは」

案の定カデイスが訳が分からないというように顔をしかめる。
でも、一人の女の子の尊厳がかかってるから、男性であるカデイスにはあまり言いたくないんだよね。

「これはわたしのわがままになっちゃうけど……、本当にごめんね」
「本当にわがままだな。それを許してしまう、俺も俺だが。……イルーシャ、明日の朝行くのだろう、もう寝ろ」

「うん、カデイスありがと。おやすみなさい」
「ああ」

わたしはカデイスに挨拶をすると、自分の部屋に戻った。

翌朝。わたしはキースと一緒にカデイスの執務室にいた。

「こんな時に国境付近の村に向かうなんて、本当に君はわがままだね。……まあ、王命だから従うけど」

キースが少し機嫌悪そうにそう言う。

う、昨夜遅く呼び出して、それから忙しかっただろうに、早朝に呼び出しちゃって本当に申し訳ない。

「い、いろいろとごめんね、キース」

「別にいいよ。……ああ、そうだ。昨夜の件は魔術師団で処理したから」

「キースありがと」

わたしはそれを聞いてほっとした。ブラッド絡みじゃなくてよかった。リユーシャもたぶんあの姿を彼に見られたくないだろうから……昨夜の件とはなんだ」

「戻ったら報告するよ。……じゃあ、イルーシャ行こう」
「うん」

わたしが頷くと、キースとわたしはトリア村へと移動した。

——のどかな村。それが実際にこの地を踏んだわたしの感想だ。
こんな村であんな酷いことがあったなんて、信じられない。
ただ、燃えた家の跡や、破壊された家屋が所々残っていて、それが唯一この地がハーメイに襲われたということを私に伝えていた。
キースの魔法で、まず駐屯地に移動したわたしは、ブラッドに声をかけられた。

「イルーシャ様、来られてすぐにこんなことを言うのはなんですが、ここに来るのは無謀です。すぐにお帰りください」

意外にもうるさくなさそうなブラッドにいきなり怒られた。……ふざけてそうに見えるけど、仕事関係には至極真面目らしい。

「カデイスには許可は取ってあるよ。……なんと言われようとわたしは帰らないからね」

「ブラッドレイ、僕も君の意見に賛成だけど、ここはわがまま姫の言うとおりにしてほしい」

「わがまま姫って、キース酷い」

「あれだけ言うてるのに聞かないんだから、わがままだろう?」
うう、それを言われたらなんにも言えない。

「う、それは……、ごめんなさい」

わたし今日はキースに謝り通しだ。

そんなわたし達をブラッドは笑って見ていたけど、心の中ではなにを考えているか分からないようなそんな目をしていた。

……ブラッドも昨日告白された娘が亡くなったんだもの、それは複雑だろうな。

わたしは彼になんと言っていていいか分からずにブラッドから目を外す。

「ね、まず村長の家に向かった方がいいかな」

「そうだね、その後は今回の犠牲者の墓参りでいい?」

「……ねえ、犠牲者の家に行くのは駄目？」

「駄目だよ。君は王族なんだよ？ そんな身分の者が気軽に民家に立ち寄っては駄目だ」

うー、無駄に高いわたしの身分って面倒だ。

「分かったよ、それはなしでいい」

彼の案で妥協してわたしが頷くと、キースが魔術師団の人を数名とブラッドを連れて、村長の家の前まで移動した。

魔術師団の人が村長の家に取り次ぎに入っていくと、村長と思わしきおじいさんが転がるように慌てて出てきた。

「こ、これはイルーシャ姫様、こんな辺鄙な村までお越しくださるとは、この歳まで生きてきてこんなに嬉しかったことはございませんっ」

……なにかよく分からないけど、ものすごく感激されているみたいだ。

そうこうするうちに、わらわらと村長の家から人が出てきた。

「本当にイルーシャ姫様だ……」

「まあ、本当にお美しくていらっしやる」

「イルーシャひめさま、きれーいっ」

その騒ぎを聞きつけたのか、各家から人が出てくる。

「なに、あのすごい美人」

「ま、まさか、イルーシャ姫様じゃ？」

「俺、絵姿見たことあるぞっ。間違いないくイルーシャ姫様だ！」

「えええっ」

「イ、イルーシャ姫様、トリア村にいらっしやいませ！」

「いらっしやいませーっ」

えええ、なにこの歓迎ぶり。

てつきり罵倒されるとばかり思ってたので、わたしは戸惑うというか逆に居心地が悪かった。

「あ、あの……」

とにかくなにか話さなきゃ。そう思って口を開いたそのときだっ

た。

いきなりわたしに向かつて石が飛んできて、それをキースが魔法ではじいた。ブラッドもキースと一緒に前に出てわたしを守る。

「出ていけ！」

怒鳴る子供の声に目を向けると、それは見覚えのある子だった。

「アデル！ イルーシャ姫様になんてことを！」

村の男の人が怒鳴っても、その子は意に介せずになわたしを睨みつけていた。

アデル。リユーシャの弟だ。

「リユーシャ姉ちゃん、おまえのせいで死んだんだ！ 村から出てけ、出てけよ！」

そう言いながら、アデルは泣きそうだった。

アデルはわたしのせいでひとりぼっちになっちゃったんだ。これはきわめて真つ当な怒り。

「……アデル、ごめんね」

わたしの瞳から涙がこぼれ落ちる。

「……ごめんなさい」

わたしがアデルに頭を下げると、周囲から驚きの声が起こる。

「イルーシャ姫様！」

「イルーシャ、身分の高い君が頭を下げてはいけない」

キースに怒られたけど、わたしは頭を下げたままだった。

こんなことしても、リユーシャは戻ってこないし、アデルの怒りが治まることはないのは分かってる。でも、一人の人間として、アデルには、ううん、村の人達にはきちんと謝っておきたかった。

わたしは一度顔を上げると、集まってきた村の人たちに向けて頭を下げた。

「わたしのせいで、村に迷惑をかけてしまつて本当にごめんなさい」

「……イルーシャ姫様……」

「ひ、姫様、恐れ多い。頭をお上げください」

村長さんが慌てて言うけど、わたしは頭を下げたままだった。：

…わたしにはこんなことしかできなくて歯痒い。わたしがこの村にできることはないんだろうか。

「なんだよ、そんなことしたって俺は騙されないからな！」

その叫びに振り返ると、アデルがその場を走り去るところだった。

「……アデル……」

少し寂しいけど、許されないのは仕方ない。これはわたしの罪だ。
「誠に申し訳ございません。あの子は姉を昨夜亡くしまして気が立っているのです。どうかお許しください」

「いいえ、彼の怒りは正当なものです。許すも許さないもありませ
ん」

「……イルーシャ姫様……」

村長さんが驚いたようにわたしを見る。

「それはそうと、今回の犠牲者の墓前に案内してほしいのだが」

あ、キースの国政での公的な話し方ってこんななんだ。ちょっと
とカデイスに似てるかも。

「あ、はい、こちらです」

村人にそれぞれの家に帰るように指示すると、村長さんはわたし
達を村の墓地に案内してくれた。

この村では村長さんの家を除く人々は集団で埋葬されるらしい。

わたしは魔術師団で用意してくれていた花束を新しく土が盛り上
がったところに置いていく。思っていたよりもその数は多くて、わ
たしは気が滅入りそうだった。

「リユーシャのお墓はどこですか？」

「はい、一番奥にあります」

なんでリユーシャだけこんな離れた場所に？ それに、日当たり
の悪そうな場所だ。ちょっとじめじめしてそう。

わたしがそう言くと、村長さんは少し苦い顔をした。

「あの娘は自ら命を絶ったのでこんな場所になってしまったんです。
かわいそうですが仕方ありません」

この村にとって自殺者は厄介者扱いなのか。あんなに可愛かった

彼女にはふさわしい場所とは思えない。これじゃアデルも憤るだろう。

わたしは涙が出そうになるのを堪えて、彼女の墓前まで歩いていく。すると、既にその場所には花束が置かれていた。

誰だろうと思ったけれど、たぶんブラッドのような気がした。

わたしはリユーシャのお墓に花を供えると、その場にひざまずく。「イルーシャ姫様！」

村長さんはわたしの行動に心底驚いたらしくて、悲鳴のような声を上げたけれど、やがて黙り込んだ。

わたしは指を組んで祈りを捧げる。静寂だけが支配する中で、わたしは知らず涙を流していた。

若くして亡くなったリユーシャ。わたしが目覚めなければもっと幸せな未来が待っていただろうに。

だから、どうか。神様お願いです。

「どうか幸せな来世を」

かなり長い間、わたしはその場で祈っていた。けれどその間、誰も声を発することはなかった。

32 花畑にて

村の集団墓地を離れたわたし達は、村長さんと別れて駐屯地に移動するという段になった。

あ、このまま駐屯地行ったら、城に直帰かなあ。そう思ったわたしはブラッドに声をかける。

「あ、ブラッド、話があるんだけど、少しいいかな」

ブラッドが頷くと、わたしはキースに断りを入れる。

「ごめん、キース。ちよつと外してもらってもいいかな」

キースは一瞬眉を顰めたけど、結局は許可してくれた。

「なにかあったら僕を呼ぶんだよ、いいね？」

「うん」

わたしが頷くと、キースと魔術師団の人達は駐屯地に移動した。

「イルーシャ様、景色のよいところがあるのですが、よかつたらそちらに行かれませんか」

わたし達の現在いるところが村人の目につくかもしれないところだったので、わたしは一も二もなく頷いた。

ブラッドの案内してくれたところは、村はずれの花畑だった。

「わあ、綺麗」

「ここでは休閑地に花を植えてるんですよ。イルーシャ様は花がお好きでしたよね」

「それで、わざわざ連れてきてくれたの？　ありがとう」

うーん、こういうところはさすがタラシ、如才ない。あ、気を使つて連れてきてもらったのに、これは失礼か。

「……あの、リユーシャのことなんだけど、過去視で告白されてるところ見ちゃった。ごめんね」

こう言ってみて思ったけど、わたしが過去視自由に扱えるようになったら、他人の個人情報、わたしにただ漏れってことだよ。使

い方には充分気をつけよう。

「たぶん、そんなことだろうと思っていました。あの娘の遺体を見つけたのもイルーシャ様だそうですね」

「あ……うん」

どこから知られたんだろう。キースかな。……あ、まさか。

「まさか、リユーシャの遺体見てないよね？」

「見ていませんよ」

「あ、そうなんだ、よかった」

ブラッドの答えに、わたしはほっとする。できればあのリユーシヤは見てほしくなかったから。

「……イルーシャ様は、俺を責めないんですか」

「え……なんで？」

思ってもいなかったブラッドの言葉に、わたしは瞳を見開く。

「あの娘が亡くなったのは俺のせいです。……あの娘が傷ついてるのを知っていて、なにもしなかった」

ああ、ブラッドはリユーシャの告白を断ったから自分のせいだと言ってるのか。

「で、でも、それはブラッドには仕方のないことでしょ？ それを言うならリユーシャが亡くなったのはわたしのせいだよ」

「あなたが？ なぜです」

ブラッドがわたしの言葉に眉を寄せた。

「だって、わたしがハーメイ国王の妾妃になっていれば、犠牲者が出なくてすんだもの」

「それは敵の讒言でしょう。あなたは関係ない」

「そんなことないよ。わたしのことが口実になったもの。わたしのせいでヒルトリア砦やトリア村の人達が大勢、亡くなったの」

なるべく淡々と話そうと思っていたのに、わたしはついぼろぼろと涙を流してしまった。……ああ、情けないな、わたしはもっと毅然としてなくちゃいけないのに。

そう思っただけを拭いてたら、ブラッドに腕をとられて抱きしめら

れた。

「ブ、ブラッド……」

「イルーシャ様、ご自分を責めないでください。それに少なくともあの娘が亡くなる原因を作ったのは俺のせいです」

「……違うよ。元タリユーシャが襲われたのはわたしのせいだもの」
そう言いながら、わたしはあの最悪なハーメイ兵達の言動を思い出していた。……今思い出しても、胸が悪くなる。

「……ではあの娘が亡くなったのは俺とイルーシャ様、あなたのことですね」

ブラッドが苦く笑った。彼にとってもこの結論は妥協点なんだろうな。きっと、わたしのせいと主張しても彼は首を縦には振らないだろう。そこで、わたしも妥協することにした。

「……そうだね、わたしとブラッドの罪」

「俺とイルーシャ様の罪ですか。それではこれは二人だけの秘密にしましょうか」

「うん、そうだね」

誰にも本当の真相を話すことのない秘密。

わたしのせいで純潔を失った少女。

わたしのせいで恋を失った少女。そして命まで絶ってしまった。

……なんて、皮肉で悲しい結末なんだろう。

「二人だけの秘密ね」

わたしがブラッドの腕に抱かれたまま泣き笑いすると、彼はわたしの頤に手をかけた。

「ブラッド……ッ」

わたしはそのままブラッドに口づけられて、慌ててその腕から逃れようとするけれど、それは叶わず何度も角度を変えてキスされる。ふわりと膝の裏をさらわれたと思ったら、わたしは花畑の上に横たわらされ、花びらが舞い上がる。

「これも二人だけの秘密にしてしまいませんか」

少し苦しげにブラッドが言う。狂おしいほど情熱的な瞳で見つめ

られて、わたしは思わず息を止めた。

再び彼にキスされたところで、はっと気がついてブラッドの鎧の胸に手をつく。

「ちよつと……っ、こんなときにブラッドふざけないで……!」

「ふざけてなんかいませんよ。俺はあなたが欲しい。それが罪だとしても」

「や、やだ、リユーシャが亡くなってすぐにこんなことができるなんて、ブラッドおかしいよ!」

「そうですね、俺は最低です。でも俺は誰が不幸になろうと、もうこの気持ちを止められないですよ、イルーシャ様」

わたしは両手を頭の上にまとめられてブラッドに再び口づけられる。

「や、やだ……っ」

わたし、ブラッドのこと、友達以上には考えられないよ。それに、リユーシャのお墓参りの後でこんなこと嫌だ!

もがくわたしの首筋をブラッドの唇が、胸を彼の指が伝う。

「! やあ……っ!」

嫌がる気持ちとは裏腹にわたしがびくんと反応すると、ブラッドが怖いくらい優しく笑った。

「イルーシャ様、とても可愛いですよ」

「やだ、ブラッド、ほんとにやめてよ。わたし、あなたのこと嫌いになっちゃうよ」

「……それは困りますね。でも今更止められません」

とろけそうな声。この声でブラッドに囁いてほしいと思う女の人は何人もいるんだろう。でもわたしは――。

「――ブラッドレイ、なにをやっている!」

突然キースの声がして、ブラッドの拘束が外れたと思ったら、彼は数メートル先まで衝撃で飛ばされていた。

キースが傍に現れて、わたしを抱き起こすと彼は厳しい口調で言った。

「イルーシャ、君も警戒心がなさすぎるよ。彼は今手負いの獣なんだよ。戻るのが遅いから気になって来てみたら案の定だ」

「ご、ごめんなさい、キース」

キースが来てくれて本当に助かった。来てくれなかったらきつとあのまま――。

「――キース様」

切れた口の端を拭ってブラッドが立ち上がる。

「わたしはイルーシャ様に求婚しています。わたしはの方が欲しいのです」

「そんなの僕だって同じだよ、ブラッドレイ。だけどね、そう簡単に彼女を奪わせるわけにはいかないね。……最終的に選ぶのはイルーシャだ」

ブラッドははつとしたようにわたしを見るとその瞳を陰らせた。

その目をみてわたしは、キースが手負いの獣と言う意味を理解した。彼がリユーシャの件で傷ついてないはずがないんだ。

「ブラッド、ごめんなわたし……」

わたしが言いかけたそのとき、キースが魔法でブラッドを移動させた。

「キース！」

わたしが抗議の声を上げると、キースは冷たい瞳でわたしを見た。「イルーシャ、君はもう城に戻るんだ。ああ、その前に君の求婚者の一人として言うておきたいことがあるよ。いい加減、男を誘うような真似はやめてほしいね」

キースのこの言葉には、本当にわたしは驚いた。わたしに甘いキースがここまで言うからにはかなり怒っている証拠だ。でも、最後の方の言葉には納得できない。

「わ、わたしは誘ってなんかないよ！」

「分かってる。でも君は無自覚で誘ってるよ。もう少し君は自分の言動に注意すべきだ。その証拠に君の求婚者達は君に振り回され通しだからね」

「そんな……」

無自覚で誘ってるって、わたしが……？

彼の言葉が信じられなくて、わたしが呆然としていると、キースが痛いほどに抱きしめてきた。

「キース……ッ」

「僕だって、君を奪ってしまいたいさ。けれど……」
けれど、なに？

わたしが眉を顰めていると、やがてキースは首を横に振ってわたしを離れた。

「……城に送るよ。僕が言ったこと、よく考えてみて」

キースが手を振ると、わたしはガルディア城のわたしの部屋まで一気に戻った。

わたしは見慣れた居室を見回してぼーっと考える。

ひよつとしたら、キースはリユーシャの件のことを全部知っていたのかもしれない。

そうじゃなければ、たぶんブラッドのことを手負いの獣とは言わなかっただろうから。

33 天然の問題発言

部屋に戻ったわたしは、死者の穢れを落とすということで、ユーニスに浴場に連れて行かれた。

「まあっ、イルーシャ様、その痕、以前より濃くなってませんか？」

ユーニスが以前ギリング王に付けられた胸のキスマークを見て驚いた声を上げた。

「……言われてみればそうかも」

「死者に付けられた痕が濃くなるなんてちょっと気味が悪いですわ」「やだ、ユーニス、脅かさないでよ」

改めて言われるとなんだかホラーみたいで不気味だ。

「あ、申し訳ありません。き、きつとそのうち消えて無くなりますわ」

ユーニスが取り繕うように言った。……きつと内心気にしまくりなんだろうなあ。

「うん、そうだね」

わたしはユーニスの動揺に気がつかない振りをして頷いた。

まあ、いくらなんでもそのうち消えるでしょ。だから、このことは深く考えないようにしよう。

お風呂から戻ってくると、カデイスから部屋に来いというお呼び出しがあった。

いつもの執務室じゃなくて彼の居室っていうのが気にはなったけど、いつも仕事しながらだとカデイスも気が休まらないんだろう。キースから「うるうるするの禁止」と言われたけど、王であるカデイスからの呼び出しならしょうがないよね、うん。

わたしは無理矢理納得してカデイスの居室に向かった。

カデイスの居室に入ると、テーブルにはお菓子やらケーキやらが茶器セットと一緒に並べられていた。ちょっとしたケーキバイキングだ。

これ、もしかなくてもわたしの為に用意してくれたんだろうな。わたしがにこにこしてチョコレートケーキをつっていると、カデイスが優しい顔をして聞いてきた。

「トリア村はどうだった」

「びっくりするほど歓迎されたよ。もっと罵倒されるかと思ってたから驚いた」

「もっと、ということとは罵倒した者もいるということだな」

う、カデイス鋭すぎ。

彼のこういうところは人の上に立つ者なんだなあって本当に思う。「うん、でもしょうがないよ。わたしのせいで家族が亡くなってるんだもの」

それに、まだ小さいのにアデルがこれから一人で生活していけるかどうか心配だ。彼、どうなるんだろう。

「しかし、王族を表だって罵倒するなどあつてはならないことだ。調べさせて、その者を罰する」

えええ、ちよつとカデイス本当にやる気！？

びっくりしたわたしは喉にケーキが詰まりそうになるのを無理矢理お茶で流し込む。

「カデイス、やめてよ。わたしは罵倒されるの覚悟で行ったんだよ。村の人を罰さないで」

「しかし、それでは示しがかん。本来王族と会うことすら叶わない身分の者達なのだぞ」

うー、カデイス結構強情だ。どうやって説得しよう。

「それを言ったら、わたしも元々庶民だよ。だから、そこをなんとかお願い」

わたしは指を組み合わせて、カデイスに必死にお願いする。

「……イルーシャ、おまえは人がよすぎるぞ」

カデイスが溜息をつくけど、わたしはカデイスが言うようなお人好しじゃないよ。

「別にそんなことないよ。わたしは王族とかじゃなくて、一人の人間としてあの村に行っただよ。わたしのせいで犠牲者が出たんだもの、どうしても村の人に謝っておきたかったんだ」

そう言くと、カデイスはわたしの顔をまじまじと見つめてきた。

「……おまえ、まさか平民に頭を下げたのか？」

「うん、下げた。キースには怒られたけど、わたしがそうするべきだと思ったから」

カデイスは啞然とした顔になると、しみじみと言った。

「……本当におまえのやることは、俺の理解の範疇を超えているな」
「それって、そんなに变なこと？」

「ああ、変だ」

「うわ、即答だよ。」

「……確かにわたしのしたことって王族の権威落としたかもしれない。でもごめん、あれだけは絶対譲れなかったんだ」

「まったく、おまえは」

カデイスは仕方なさそうに溜息をつく、首を横に振った。……
呆れられちゃったかなあ。

わたしは苺のショートケーキをつつくのをやめて、カデイスに謝る。

「カデイス、本当ごめんね。ところで話は変わるんだけど、カデイス、わたしって誘ってるように見える？」

わたしがそう聞いたら、カデイスは一瞬呆氣にとられたようだった。

「なんだいきなり」

「キースに怒られたの、わたしが無自覚に男を誘ってるって」

「……俺が思うに、男にそういうことを聞くこと自体が駄目なんだと思うが」

「え、駄目なの？」

聞くのも誘つてると思われるのか。これはうっかりだった。

「ああ。それにおまえ、俺の寝室に入つて来たこともあったな。あれはもつと駄目だ」

そう言えば「おまえは俺に襲われたいのか」ってカデイスに言われたんだっけ。思えばキースを呼び出したときも寝間着姿だったなあ。……カデイスにも見られたけど。

「……キースがそう言うということは、なにかあったのか。キースが怒るというなら、相手はやつではないな。ブラッドレイか」

「え、えつと……」

わたしが真つ赤になつて不自然に視線を彷徨わせると、途端にカデイスが不機嫌になる。

「以前、おまえを可愛がるのを自重すると言つたし、そのように努力してきたが、他のやつがおまえに妙なことをするのなら撤回させてもらうぞ」

か、可愛がるってなんだっ。ちよつと意味深だぞ、カデイス。

「ひ、引き続き努力しておいてっ」

「拒否する」

慌てて逃げようとするわたしをカデイスが捕まえた。カデイスはわたしを抱き上げると、そのまま長椅子に腰を下ろした。

うわあ、なんだか火に油を注いじやつたみたいだ！

「キースではないが、おまえが無意識に男を誘いまくるからだ。手の早そうなブラッドレイが実際に手を出しているというならば、俺もおちおちしていられん」

「カデイス、離してっ」

カデイスの膝の上に抱えあげられて、わたしは身を擦ろうとするが、びくともしない。

「いい加減、もの分かりのいい振りもやめ時だな。そうしても、おまえは友人としてしか見ないことがよく分かった」

そう言つと、カデイスはわたしにキスしてきた。

「で、どこまでされたんだ。まさか最後まで行っていないだろうな？」
「い、行っていないよっ」

慌ててわたしがそう言った後、カデイスはまたキスしてきた。

「……やつは口づけは上手いか？」

「……」

わたしはブラッドのディープキスを思い出して真っ赤になる。

「……そうか、上手いのか」

カデイスは眉を顰めると、またわたしの唇を塞いできた。今度はカデイスの舌が侵入してきてわたしは焦った。

「か……、や……っんあ」

問答無用とばかりに、カデイスに舌を絡めとられて言葉にならない。

カデイスに変なこと聞いたのはわたしが悪かったから、だ、誰か、たす、助けてえ……っ。

泣き声みたいな変な声を出しつつ訴えていると、部屋のドアがノックされてヒューが入ってきた。

「失礼します。助けてという声が聞こえたので」

ヒュー、いつも危ないところを助けてくれてありがとう！……それにしても近衛の人が二人控えてるはずだけど、なにしてるんだろう。

「ヒューイ、おまえ、こんな時に入ってくるなっ」

無然としてカデイスがわたしを離すと、わたしは長椅子から転げ落ちそうになってしまった。

「イルーシャ！」

それをヒューが受け止めると、わたしを抱き上げた。

「報告書は出しておきました。それから、イルーシャ様は、部屋にお帰りいただきます。よろしいですね？」

言外に仕事しろとヒューが言っと、カデイスは顔をしかめた。

「おまえ、嫌なやつだな」

「なんのことだか分かりかねます。さあ、イルーシャ様、帰ります

よ」

「うん」

心底ほっとしたわたしは、部屋までの帰り道、男を誘ってる云々をカデイスに聞いたらあんなった、とヒューに話した。……そして、深い溜息をつかれた。あ、やっぱり駄目？

「イルーシャ様は警戒心が薄すぎます。俺にそういうことを話すのも駄目です」

「え、でも、ヒューなら大丈夫でしょ？」

なんと言ってもキスもしていない清らかな関係だし。

「俺を安全な男だと思っておられるのなら、大間違いですよ」

ヒューに冷やかな目で見られてわたしは凍りつく。

「……ごめんなさい、わたしが悪かったです」

自分の迂闊さにしょんぼりしているうちに、わたしの部屋についてた。

ヒューはわたしを長椅子に座らせると、素早く触れるだけのキスをしてきた。

「イルーシャ様、俺も一応男だということを認識してください」

頬を染めながら言われるとちょっと説得力に欠けるんだけど、それは言わない方がいいんだろうな。

「う、うん、分かったよ」

「……そう言えばイルーシャ様、ブラッドにも求婚されているんですよ。本当に気を付けてください。やつは手が早いですから」

うん、それはちょっと前に身にしてみたよ。それにしても親友にこう言われるブラッドってどうなの。

「うん、本当に気を付けるね」

わたしが深く頷くと、もう一度ヒューは念を押して帰っていった。

……あーあ、これでヒューとの清らかな関係も終わりかあ。

しかし、求婚者四人同時進行でキス経験ありって乱れすぎだよね。キースが怒るのも無理ないよ。

わたし、もうちょっとあの四人に対して警戒しないといけないなあ。

そんなことを考えて溜息をついていると、わたしの胸元が急に光り始めた。

「ええっ、なにこれ!？」

わたしは慌てて立ち上がるとあたりを見回す。ユーニスは席を外していて、今はいない。

そうこうするうちに、足下からも光が溢れ出て円を描き始める。

そこには奇妙な文字列が書いてあるのが認識できた。

——魔法！

それに気がついたわたしは慌てて腕輪に手を伸ばす。

けれど、わたしは先程のキースの冷たい瞳を思い出して、彼を呼び出すのをためらってしまった。

次の瞬間、わたしは光に包まれると、知らない場所にいた。

34 敵地への召喚

「どうやら召喚は成功したようですね」

どこかで聞いたような声がして、わたしはそちらを向く。

「ウィルロー！」

わたしは信じられない事実に愕然とした。ウィルローがいるということは、きつとここはハーメイ城だ。

まんまと敵地に召喚なんてされる羽目になってしまったわたしは、歯ぎしりしたい気持ちでいっぱいだった。返す返す、さつきキースを呼び出すのをためらってしまったことが悔やまれる。

わたしが召喚されたのは、赤い絨毯が敷かれた重厚な広々とした広間。たぶん謁見の間なんだろう。

王座には淡い金髪に茶がかった緑の瞳の端正な顔をした穏やかそうな人物が座っている。

ただし、私を喚びだしたのがこの人物ならただそう見えるというだけだろう。

「イルーシャ姫、ようこそハーメイへ。お初にお目にかかります。わたしはハーメイ国王、ロアデイルです」

——ロアデイル。以前、カデイスが言っていた王太子だ。

ギリング王にはあまり似ていない。たぶん母親似なんだろう。

「わたしを妾妃につけて言っていたギリング王は亡くなったじゃない。だとしたら、わたしに用はないはずでしょ。今すぐわたしを帰して」

わたしは目の前の二人を挑戦的に睨みつけて言った。

ギリング王の時は、わたしに執着する理由にまだ納得がいったけれど、この新王の場合は全く予想がつかない。

わたしの厳しい視線にも意に介さず、ウィルローは肩を竦めて言った。

「馬鹿なことをおっしゃいますね。せつかく喚び出したのに帰す訳

がないでしょう。それに、ロアディール様があなたを喚ぶことを望んだんですよ」

「なぜ、わたしを？」

ロアディール王が喚びだした理由が分からずにわたしは眉を顰める。その様子がおかしかったのか、ロアディール王がくすくす笑う。「ガルディアの重要人物達に求婚されているというあなたをぜひこの目で拝見したかったのですよ、姫」

そこまで知っていて、ただわたしを見たかったなんて理由でこんな愚にもつかないことをするなんて信じられない。

もしかしたら、わたしが一般的な姫のような性格であると勘違いされているなら、ここは是非ともわたしに対する認識を改めてもらう必要があるのかもしれない。

「……言っておくけど、わたしはたおやかな姫じゃないわよ」

「その点はウィルローから聞いています。伝説の姫君は、がさつで口が悪い、でしょう？」

それが分かって、わたしを喚びだすってどういうこと？

わたしは不信気に目の前のロアディール王を見返す。それに対して、彼はにっこりと人好きのする笑みを浮かべた。

「けれども、それを差し引いても充分すぎるほど美しい。あなたはとても魅力的ですよ、イルーシャ姫」

「それはどうも、と言いたいところだけど、わたし容姿だけを褒められるのは好きじゃないの」

なんかその言い方だと、おまえのいいところはその容姿だけだと喧嘩を売られてるような気がするんだよね。まあ、わたしは自分の性格がいいとは思ってはいないけど、それでもこの王の言い方はムカつく。

「お気に触ったのなら失礼。姫君はお気の強い方そうですね」

おかしそうにロアディール王が口到手を当てて笑いを堪えている。「ええ、そうですね。わたしを見て満足したなら、とっととガルディアに帰して。今ならまだ先の所業はギリング王のせいということ

で説明がつくはずだわ。……ただし、それなりに賠償責任は出てくるだろうけど」

砦や、トリア村の被害は相当なものだ。ハーメイ側がなんの責任も取らずに済むということはありえないだろう。第一、カデイスがそれを許すとも思えない。

「賠償責任ですか。そんなことを言う姫は初めてです。あなたはおもしろい方ですね。実際にあなたにお会いして、余計に帰したくなくなりましたよ」

帰したくないって、冗談じゃない！ こいつに、なにをされるのかも分からないのに。

それにわたしが戻らないことで、ガルディア側にも迷惑がきつとかかっている。大事になる前にわたしは帰らなくちゃいけない。

「なに言ってるの？ うぬぼれる訳じゃないけれど、わたしは伝説の姫君としての価値だけはあるわ。それをカデイス……ガルディアの国王が易々と見逃すはずはない。あなたはこの国を滅ぼす気なの？」

「ガルディアに攻め込まれたならば、その時はその時でなんとかします。わたしはあなたに興味がある。ですからこの国が戦火に巻き込まれようとあなたは帰しません」

「単なる興味で、国民を犠牲にしてもいいってことなの？ ……あなた、おかしいわよ！」

なんなの、こいつ。

イザトさんは、ロアデイルは思慮深いと言っていたけど、とてもそうは思えない。被害に遭うだろう国民のことを考えない自分勝手な人間だ。

「それでも簡単にはやられはしませんよ。もしガルディアが我が国に攻め込んだら、先の王の死を含めて、周辺諸国はそれをかの国の侵略行為と取るでしょうしね」

こともなげにウィルローが言う。そもそも企んだのはそつちじゃないか。

「よく言うわよ、ウイルロー。あなたがギリング王を殺したんじゃない。王の首の後ろに操りの呪いの紋があつたって聞いたわよ」

「それでもそれを証拠とするのは弱いですよ。周辺諸国にきちんと説明できる確たる証拠がなにかあるんですか？」

そう言われて、わたしは黙ってしまふ。

わたしは過去視でウイルローがギリング王を殺したところを見たけど、そんなのわたしの妄想だと言われてしまえばそれで終わってしまう可能性が高い。

唯一の能力の証明もできないわたしにはできることがない。まったくの役立たずだ。

それどころか、自分のせいでガルディアの評判が落ちるかもしれないと知って、わたしは唇を噛んで俯いた。

「まあ、そう気を落とさないでください、姫。我が城に滞在中はゆったりとなさってください」

……この状況でどうやってゆったりしろと？ わたしは目の前の王を睨んだ。

「わたしの処遇もどうなるか分からないのに、それは無理でしょ、ロアデイル王」

「どうぞ、ロアデイルとお呼びください。あなたの扱いは悪いようにはしませんよ。無体な真似もするつもりありませんからその点は安心してください」

ロアデイルのこの言葉には、先のギリング王の件もあつたからわたしは驚いた。

わたしが信じられない気持ちでロアデイルをじっと見つめると、彼はくすくすと笑った。

「信じられないというような顔ですね。しかし、わたしは先の王とは違いますから」

「どうだか」

自国民を犠牲にしてもいいと平気で言うような人物の言葉なんて信じられないよ。

「あなたがどうしてもわたしに手を出してほしいと言われるなら、わたしも考え直しますが」

「そんなこと、言うわけないでしょ！」

冗談めかして言われた言葉に、わたしは慌てて首を振る。もし気が変わられたりしたらすごく困る！

「あなたは本当にももしろい方ですね」

くつつ、完全にもしろがられている。く、悔しい。

ともあれ、彼の言葉を信じるなら、身の危険がないことだけは助かった。

わたしが少しだけほつとしていると、ウィルローが余計なことをのたまった。

「ロアデイル様、せっかく伝説の姫君を召喚したのにお手をつけないとはどういうことですか。王を含むガルディアの重要人物達を虜にしている姫ですよ。それではわたしが喚びだした意味がありません」

ちよつと、その点だけは穩便に済ませそうだったのに、変なこと焚き付けないでよ！

「ウィルロー、わたしは姫と実際に会って、こうして話すことができるだけでも満足だ。それに姫には無理強いをしたくない」

「あなた様までこの姫の求婚者達のようなことを言われるとは。この後、国の状況は厳しくなります。その前に汚してしまつたらよろしいのです」

ウィルローの冷たい視線とその言葉の内容に、わたしはびくりと震えた。

——怖い。

ウィルローのわたしに対する悪意。それに底知れぬ恐怖を感じた。キースへの対抗心もあるんだろうけど、もしかしたらガルディアという国自体への憤懣があるのかもしれない。

「くどいぞ、ウィルロー。わたしにはその気はない。このことは姫の前で二度と口にするな」

「……かしこまりました。それではわたしはこれでひとまず失礼します」

未だ不満げにわたしを見やると、ウィルローは魔法でどこかへ移動した。

「……まったくあいつは。姫、失礼しました。普段はとても有能な男なのですが」

「……有能であろうとなかろうと、平気で人を切り刻むような人間は好きになれないから」

ウィルローがヒルトリア砦でガルディア兵にした行為は忘れてくてもそう簡単にできるもんじゃない。

わたしは敵愾心を露わにしながら、ロアデールの言葉を否定する。

「姫の耳にはそんなことまで入っておられましたか。できれば姫には知られたくはなかったですが、残念なことです」

——よくも、いけしゃあしゃあと。

命じたのはギリング王だけれど、それでもロアデールに全く責任がなかったわけじゃないだろう。王太子という立場にいた彼なら、ギリング王を諫めることは可能だったはずなのだから。

やっぱり、この人物は好きになれない。

わたしは目の前の優しげな顔立ちのロアデールを無言で睨みつけながら、この先に起こるであろう戦争の予感に気が滅入りそうになる自分を無理矢理奮い立たせていた。

35 ハーメイにて

かくして、ハーメイに拉致されたわたしが連れていかれたのは、王の私室の隣だった。

「……ちよつと、この部屋って……」

ガルディアでは王の隣の部屋って言ったら、王妃の部屋って決まってるんだけど、するとここもしかして。

「ああ、王妃の間です」

えええええ！？

ロアディールにこともなげに言われて、わたしは数歩退いた。

「あなたと語らうのにちようどよい場所なので決めただけですよ。

そんなに警戒しないでください」

顔をひきつらせるわたしをロアディールはおもしろそうに見やる。

「いや、でもこういう場所って一応部屋は分かれてるけど、実は中で繋がってるって聞いているんだけど」

「ええ、そうですね。たびたびあなたを訪ねると思いますので、そのつもりでいてください」

そのつもりでいてくださいって、おい——！

「いますぐ、部屋を変えて！」

「もう決めましたから駄目ですよ。侍女達にも通達しましたから」

「そんなん、国王権限でどうにでもなるでしょうが！」

最初の頃は一応姫君らしい口調でいたけれど、もうこうなつてくるとどうでもよくなってきた。

「いったん決めたものをそうそう変えたら迷惑ですよ。諦めてください」

侍女達の迷惑は考えるのに、わたしのそれは受け入れられないのか！

「とりあえずわたしは所用があるので、これで失礼しますよ。晩餐はご一緒しましょう」

「別に一緒になくていいよ。つか、むしろほっとけ」

むかつくやつと一緒に夕食取るなんて消化に悪そう。

すげなく言ったわたしの言葉にも特に気にする様子も見せずに、

ロアデイルは楽しそうに笑った。

「あなたを放っておくなど、とんでもない。本当は一時でも離れていたくはないのですが」

「いいよ、離れてて。鬱陶しいから」

「姫はつれないですね。それではまた後ほど」

くすくす笑いながらロアデイルが部屋を出ていくのをわたしは溜息をついて見送っていた。

ロアデイルは嫌みを言っても全く通じない相手でやりにくいっ
たらない。地を出しても幻滅する様子もないし、向こうから辟易し
て帰してもらおうというわたしの作戦は見事失敗に終わった。

ああ、でもとりあえず、これでようやく一人になったわけだね。
少しだけほっとすると、わたしは腕輪を使ってキースを呼び出す
ことを試みた。……予想はしていたけれど、やっぱりキースは現れ
ない。

わたしが落胆の溜息をついていると、空中からウィルローが突然
出現してきた。

ちよつと、あんたは呼んでないよ！

彼はわたしの腕を掴むと、キースを呼び出す腕輪を見て、嘲るよ
うに言った。

「キース・ルグランを呼び出そうとしても無駄ですよ。この城は外
からの魔法を遮断してありますから」

ウィルローはわたしの腕輪を取り上げると、空中でひしゃげさせ
た。

あああ、唯一の連絡手段が！

さすがガルディア兵を切り刻む鬼畜、やることが容赦ない。

わたしがむつとしてると、ウィルローはニヤリと嫌な笑いをした。

「ロアデイル様は先程あなたに手を出さないと言いましたが、安

心はなさらないことですね。あの方をその気にさせる方法はいくらでもあります」

「そ……」

その方法がどんなのか非常に気になって、うっかりウィルローに尋ねそうになった自分にわたしは冷や汗をかく。

なに考えてるんだ、わたし。もし実行されたりなんかしたらすごく困るし。

あああわと口を押さえて慌てるわたしをふふんというような顔でウィルローは見下ろした。……いちいちムカつくやつだな！

「まあ、今回はやめておくことにしましょう。……楽しみは後に取っておくことにしますよ」

実行に移されなくてよかったけど、楽しみは取っておくことにするってなに？ そんなのとつと忘れ去ってほしい。

「それではわたしもこれで失礼しますよ。……くれぐれも逃げ出そうなどという無駄な努力はなさらないことですね。それはこちらですぐに察知できますから。あなたのような姫が逃げようとしてもすぐに見つかりますよ」

ウィルローはどこまでも慇懃無礼にわたしに釘を刺してきた。

……そんなことは言われなくても分かっているよ！

わざわざ召喚までしたわたしがいるこの部屋に、二重三重の見張りがついてない訳がない。

わたしが不機嫌に顔をしかめていると、ウィルローは「それでは」と言っただけから消えた。

……キースには明かりを灯す魔術だけ教えて貰ったけど、こんなことになるんだったら、もうちょっと色々教えて貰うんだった。

わたしは今更仕方のないことを考えて、溜息をつく。

——しょうがない。今はわたしに出来ることをしよう。

部屋で軟禁状態のわたしは暇を持て余すことを考えて、過去視の訓練でしようかと侍女さん呼び出した。

部屋に現れたのは、コリーンさんという四十代位の人だった。無表情ではあるけど、いかにも仕事ができそうで地位が高そうだ。もしかしたら、リイナさんみたいに侍女長とかだったりするのかもしれない。

わたしはコリーンさんにカードを持ってきて貰って、過去視の訓練に励む。……わたしに出来るのがこんなことだけってのがちょっと悔しいけど。

わたしの訓練は結局ロアデールに呼び出されるまで続いた。

「晚餐の準備が整いました。既に陛下がお待ちです」

訓練に熱中しているうちにコリーンさんが呼びに来て、わたしは彼女に気づかれないように小さく溜息をついた。

ああ、敵との食事会かあ。ちょっと気が重い。

わたしが、コリーンさんに王と王妃共同の部屋に連れていってもらうと、ロアデールが席から立ち上がってわたしを出迎えた。

テーブルに並べられた食事を見て、わたしは急にお腹が空いてきた。こんな状況なのに我ながら現金なものだ。

「お待ちしていましたよ、姫。さあ、座ってください」

「うん」

ハーメイもガルディアと同じくおのおのの皿から料理を取り分ける食事形式のようだ。

敵地で食事を取るっていうのも、なにか食欲に負けたみたいで悔しい。けれど、ここでちゃんと補充しておかないと、いざというとき動けなかったりしたらいけないしね。

今夜のメインはなにかのステーキらしい。スパイスが利いていて癖は特に感じない。赤身でちょっと堅めだけど、なんの肉だろ？

「鹿の肉ですよ。イルーシャ姫は口にするのは初めてですか？」

わたしがちょっと首を傾げていると、ロアデールが説明してく

れた。

「うん、初めて。こっちはなんのお肉？」

薄くスライスして野菜と煮込んだ肉をわたしは指さす。

「それは猪です」

猪肉も初めて食べるなあ。

わたしは興味を引かれて、そっちも口にしてみる。あ、ちよつと豚肉に似た感じ。

獣肉って結構食べられるものだね。とはいえ、ある程度味付けされてれば、鰐でも蛇でも食べられる自信はあるんだけど。人に聞いた話だけど、蛙とか鶏肉よりおいしいらしいし。

「……しかし、鹿に猪とは妙な勘違いをされたものですね」

「え？」

ロアディールの言ってることがよく分からなくて見返すと、彼はちよつと苦笑した。

「城の者は今夜わたしがあなたをどうにかするとすっかり思いこんでいるようです」

こ、この野趣溢れるメニューはアレに備えて、精をつけさせる意味合いなのか！？

せつかく珍しいものをおいしく頂いてたのに、わたしはすっかり動揺してナイフとフォークを皿に落としてしまった。

「姫は随分分かりやすい方ですね」

くすくすとおかしそうに笑われて、わたしは思わず顔を真っ赤に染める。

「それにとっても可愛らしい。姫、……ああイルーシャとお呼びしますけれど、よろしいですか？」

以外と律儀というか、ロアディールがわざわざ許可を求めてくる。……別にいいけど」

わたしとしても、姫よりイルーシャの方がまだしっくりくるので赤い顔でぞんざいにそれを認めた。

「イルーシャは口は悪いですが、そんな顔をされたら思わずどきり

としますね」

「……」

気さくに話しかけてくるロアディールに対して態度悪いけど、わたしはただ黙ってこの場をやり過ごそうとした。

だって、万が一にも彼に変な気になられたりしちゃ困るのよ。そんなことになったりしたら、ガルディアに帰るに帰れないじゃない。妙な雰囲気になるのを阻止するためにも、ここはいかにも機嫌悪そうに装うほうがいいよね。

わたしはなるべくロアディールを無視するべく、ポテトのクリーム煮を皿に取って口に運んだ。……ああ、クリーミーさと塩加減が絶妙で、おいしいー。

思わず笑顔を浮かべると、ロアディールが嬉しそうに笑った。

「やっと笑ってくれましたね」

「……」

う、わたしの機嫌を取る方法が食事だとバレたかな。カディスやキースにはもうバレバレだけど。……でも、別に食い意地が張ってる訳じゃないと思いたい。

そこでわたしはなるべく不機嫌そうな顔をして、次の目的のパンに手を伸ばす。バターたっぷり塗って頂くと、やっぱりおいしい。

焼きたてのパンはいいなあ、とにつこりしていると、ロアディールが嘔き出した。

「イルーシャ、無理矢理顔を作らなくてもいいですよ。その、少し笑えますから」

……笑えるってなに？

興味本位で無理に連れてこられて、軟禁されてるのに、こんな言われようって。

「……やっぱりわたし、あなたのこと大嫌い」

「それは悲しいですね。でもわたしはあなたのことが大好きですよ」
「恥ずかしげもなく、につこり笑って言うロアディールにわたしは呆れかえる。なんというか、暖簾に腕押し、糠に釘？ ……もう、

無視だ、無視！

それからしばらく、食事に専念するわたしと、それをにこやかに
見つめながら食事を進める敵国の王の一見和やかで、ある意味異様
な光景が繰り広げられた。

36 穢れ(1) (前書き)

文中に主人公への陵辱表現があります。苦手な方はご注意ください。
い。

36 穢れ(1)

おかしな雰囲気の晩餐も終わり、わたしはハーメイの侍女さん達にお風呂に入られて寝間着に着替えさせられていた。

ロアデールに手を出されるといふ、一番心配していたことも起こらなそうで、すっかり安心していったわたしは、ベッドの上で安堵の息をついていた。

けれど、そんなわたしの期待を裏切るようにウィルローが突然寢室に現れた。

「すっかり安心なされているようですが、残念ですね。それではイルーシャ姫、楽しみに取っておいた術を施行致しましょうか」
術ってなに!?

焦って後ろに退こうとしたら、ウィルローが短く何事かを呟き、わたしの体が動かなくなる。

「ちよつと、なにを……っ」

文句をつけようとしたら、ウィルローの手が胸元に伸びてきてわたしはぎよつとする。

……ちよつと、どこを触ってるんだああー!

「別に他意はありませんので安心してください。わたしがあなたに手を出すわけではないですから。……あなたにはもつとおもしろい趣向を与えましょう」

背中 hands を添えられて、胸元に置かれたウィルローの手が強く押さえつけられる。ウィルローがわたしには理解不能な言語でなにかを唱えると、押さえられている胸元が急に熱くなった。

「あああっ!!」

激痛にも似た熱さを感じて、わたしは思わず体を反らせて叫んだ。

——熱い、熱い、熱い!

胸元から体の奥底までをかき混ぜられるような感じがして、わたしは身を振った。

ウィルローに押さえつけられていた手が退けられると、わたしは胸を押さえてベッドに倒れ込む。先程感じた熱さが体中を駆け巡って、とてもじゃないけど起きていられなかった。

「……イルーシャ！ どうされました！？ ウィルロー、いったい彼女になにをしたんだ！」

嫌な汗をかきながら熱さに耐えていると、ここにはいないはずのロアデイルの声が聞こえた。……ああ、ウィルローが召喚したのか。

「……ああつ！」

わたしはロアデイルに抱き起こされて、また叫び声をあげた。彼に触れたところがとんでもなく熱かったのだ。

「睡蓮の呪いをかけました。別名傾国の呪いと言います。その呪いで、彼女はなにもしなくても男を誘うのです。やがて、彼女に溺れた男達は争いあい、国を滅ぼすでしょう」

もともと魔力の高い者にはその呪いは効きませんが、とウィルローは笑った。自分には呪いは効かないぞということらしい。

「なんとということをして！ 今すぐ呪いを解け！」

「解呪の方法はありません。ロアデイル様が姫君にお手を付けないなどとおっしゃられるからいけないのですよ」

全く悪びれる様子もなく、ウィルローが言った。

「ウィルロー……、おまえは……」

ロアデイルがなにかを耐えるように、わたしを抱きしめて呻く。「それでは邪魔者は退散しますよ。お二人ともこの夜をお楽しみください」

そう言って嫌な笑みを浮かべると、ウィルローは寝室から消えた。この頃になってようやく体を巡る熱さから解放されたわたしは、ロアデイルの腕から逃れようとがいた。なんというか、彼と触れているところから妙な感覚が這い上がってきて、いてもたってもいられなかったのだ。

けれど、ロアデイルはわたしを離す気配はなく、それどころか

更に強く抱きしめられた。

「は、離して！」

「申し訳ありませんが、それはできません」

「な、なに言つて……っ」

さっきわたしを抱き起こしたのは、わたしを助けてくれようとしたからじゃないの！？

「あなたには手を出さないと言いましたが、それはもう無理のようです。わたしはまんまと呪いにかかり、あなたをどうしても手に入れたくなつてしまった」

「そんな……っ」

わたしはロアデイルの突然の心変わりに驚愕して彼を見る。

それはわたしを汚そうとしてるってこと？ そんなの嫌だよ！

わたしはなんとかして彼から逃れようとしたけれど、なぜか力が入らずに少し身動ぎしただけだった。

「イルーシャ、愛しています」

ロアデイルが覆い被さつてきて、わたしにキスをする。キスされたただけなのに、体の奥が打ち震えるような感じがして、わたしは愕然とした。

いやだ、怖い、怖いよ。わたしの体、どうなっちゃったの……？

「そのように怯えないでください。イルーシャ、わたしはあなたを怖がらせたくはない」

震えるわたしの頬をそつと撫でると、ロアデイルは少し苦しげに言う。

「んっ、だ、だったら、こんなことやめてよ。こんなの、わたしやだ……っ」

頬を撫でられる感触にびくりとしながら、わたしは体が自由にならない悔しさに涙を溢れさす。

「すみません、わたしはこの呪いにあらがえない。ウィルローの思うつぼだと知つていても、あなたが欲しくて仕方ないのです」

ロアデイルは涙が流れるわたしの頬に口づける。そしてまた唇

に口づけられると、彼の舌が侵入してきた。

「ん、あ……っ、やあ……っ」

口腔内を舌でまさぐられる度にわたしの体はびくんと痙攣して、甘ったるい声が漏れる。

嫌だ、こんなの恥ずかしすぎる。

わたしが真っ赤になっていると、ロアデイルは唇を外して優しくに微笑んだ。

「とても可愛いですよ、イルーシャ」

ロアデイルはわたしの寝間着に手をかける。抵抗するすべもなく、わたしは肌を曝され彼に触れられる。

「い、や……！」

怖い、恥ずかしい、体が変。

混乱する中で、わたしは自分の胸元に睡蓮の花のような印があるのを見つけた。……ああ、だから睡蓮の呪いというのか。

ロアデイルがわたしの脚を開かせる。その手は太腿の内側から脚の付け根を伝い、もう一方の手は胸を弄んだ。

「や、ああ……っ」

ロアデイルが胸の中央に口づける。わたしはその慣れない感覚に仰け反る。

——ハーメイに召喚された日。わたしはかけられた呪いによって、ロアデイルに汚された。

何度も気を失う度にロアデイルに揺り起こされ、責めぬかれたわたしはやつと彼に許されたいらしい。

気がついたときには、また過去視を使っていた。

場所はガルディア城、陽の間だ。そこにわたしが初日に会ったメンバー全員が揃っている。

……わたしが突然いなくなっちゃったことで心配かけてるだろうな。すごい迷惑かけちゃって、本当にごめんなさい。

キースはわたしの魔力を辿れるから、わたしがハーメイ城にいることまでは分かっているだろうけど、今はどんな状況なんだろうか。

「……なににせよ、イルーシャは早く取り戻さなくてはならない。

あの美貌だ、既になにをされているか分からん」

「陛下、お気持ちは分かりますが、まだそうと決まったわけではありません。どうか冷静になられてください」

「ダリルさんがかなりイライラしているカデイスを諫めている。

「……そのことだけど、残念だけどイルーシャはもうハーメイ国王に汚されているよ」

……！ キースなんでそのこと知ってるの！？

キースのその発言に、集まっていたみんなも息をのんだ。

「なんだと！？ キース、どういう根拠があつてそんなことを言えるんだ」

「……ハーメイから音声を再生する魔法器具が僕宛に送られてきて、その中に彼女が汚される一部始終が入ってた」

なんてこと！

あまりの羞恥に、わたしは叫び出さなくなってしまった。

じゃあ、キースにはわたしの恥ずかしい声やらなにやら全部聞かれてるってこと！？

わたし、キースにこの後どんな顔して会ったらいいの？ ……い

や、その前にこんなことになってしまって、みんなにも顔向けできないよ。

「悪趣味な……」

ヒューがその美貌に嫌悪を滲ませて言った。他の人もその言葉に同意するように頷いた。

その魔法器具をキースに送りつけたのは間違いなくウィルローだろう。それ以外に考えられない。

「それで、その魔法器具はどうした」

「ごめん、壊した」

カデイスのその質問に静かな怒りをたたえてキースが言った。：

「キース、もしかして相当怒ってる？」

「……それから、その魔法器具を通して分かったんだけど、イルーシャは呪いにかかっている。睡蓮の……、傾国の呪いだ」

「傾国とは、穏やかでない名前だな。どんな呪いなんだ」

カデイスが不快感を隠そうともせず聞く。うつ、当たり前だけどかなり怒ってる。これは会うのが怖いな。

「あれは、呪いにかかった者を目にした異性がその者に誘われ、囚われるという呪いだよ。やがて呪いにかかった者をめぐって国を巻き込んだ争いになることから、傾国の呪いと言われている」

キースの説明を受けて場が少し騒然となった。

わたしが争いの種になるなんて、本当にどうしたらいいんだろう。わたし、このままガルディアに帰らない方がいいんじゃないかって気がしてきた。

「……イルーシャはそんなものにかかっているのか。厄介だな。どうやったら呪いを回避できる」

「魔力の高い者以外はほぼ回避不可能だよ。それと呪いをかけられた者も異性が近づくとはほとんど動けなくなる。おまけに媚薬を浴びているのと同じ効果が現れるから、イルーシャも手だてがないだろうね。具体的な解呪方法も確立されていないし」

媚薬効果あるのか、道理で体の様子がおかしいわけだ。ウィルロのやつ、なんて面倒な呪いをかけてくれたんだろう。

「しかし、それではこちらも手の出しようがないぞ。うっかり呪いの煽りを受けたら、こちらの同士討ちだ」

「それは呪いを防ぐ魔防具と、魔防壁でどうにかなると思う。それにはハーメイ城の結界を破るのと併せて、ヒューイ、君の協力が必要なんだけど。魔術師団にも君以上に魔力のある者はいないしね」

キースがヒューの方を向いて言うと、彼は頷いた。

「わたしがイルーシャ様のお役に立つならいくらでも力をお貸しいたします」

「そう言えばヒューイは魔力が高かったな。望めば魔術師にもなれたのに、おまえ、変わった経歴の持ち主だな」

え、そうなんだ。ヒュー、どうして魔術師にならなかったんだろ？

「でもまあ、この歳でこうして騎士団団長にまでなっているわけだし。簡単なものとはいえ、魔術が使える騎士は貴重だよ。……とりあえず僕の策を話すから、ヒューイは実行の方を頼むよ」

「かしこまりました」

……よかった、なんとかかなりそうなんだ。

わたしがほつとしていると、なにか息苦しくなつて急激な覚醒を余儀なくされた。

「んん……！？」

目覚めると、わたしはロアディールのキスを受けている最中だった。

「イルーシャ、おはようございます」

ロアディールがにっこりと人好きのする笑顔で挨拶してきた。

「……おはよう」

挨拶してしまつてから、別に返す必要もなかったことに気がついて、わたしは愕然とする。

わたしが頭を抱えたい思いでいると、ロアディールはベッドからするりと降りた。慌てて彼から視線を逸らしていると、ロアディールはくすくすと笑った。

「イルーシャは古の王の妃だったというのに、まるで生娘のような反応をしますね」

それはその通りなんだけど、ウィルローから中身が異世界人ってことは聞いてないんだろ？ ……もつとも説明しても信じてくれ

るかどうか怪しいので、避けた可能性もあるか。

「わたし、あいにくその辺りの記憶がないの」

「それは嬉しいですね。それではあなたの記憶が戻るまでは、わたしがあなたの初めての男になるのですね」

「わたしは嬉しくないよ。なんで初めてが無理矢理なのよ」

「……なんか言って悲しくなってきた。わたしが涙を浮かべていると、身支度を整えたロアディールが目元にキスしてきた。わたしはそれにびくりと身構える。」

「イルーシャ、この後も朝食を一緒にしましょう」

ロアディールは唇を離すと、わたしの頬を愛しそうに撫でて言った。

「……こんな時に食欲なんてないよ」

「……それならば今またあなたを襲いますが、それでもいいですか？」

「！ そんなの嫌だよ。分かった、食べればいいんでしょう？」

非情なまでのロアディールの言葉に、慌ててわたしは言い返した。
「分かればよろしいです」

ロアディールは嫌味なくらい優しげに微笑むと、寢室を後にする。しばらくして、わたしは自分の体を隠してなかったことに気がついた。……こういうところが誘ってるって言われるんだろうな、とわたしは溜息をついてベッドから降りる。

「お目覚めとお聞きしましたので」

ちょうどよくコリーンさんが現れて、わたしは裸のままお風呂に連れていかれた。

「……妊娠とか大丈夫かなあ」

お風呂でひとこちついていると、ふと不安が襲ってきた。わたし、思い切り何回もやられちゃったんだよね。もしガルディアに助け出されても、ロアディールの子供なんてできちゃったら目も当てられないよ。

「……もし、ご心配のようなら避妊薬をお渡ししますが」

「本当!？」

コリーンさんが無表情に出した提案に、思わずわたしは手を叩いて喜んでしまった。

「……はい」

いけない、ここは敵地だった。あからさまに喜ぶのはまずかったかな。それにわたしに二代の王が振り回されている形だし、この城にいる人のわたしの印象は最悪だろう。

お風呂から上がって支度をした後、わたしはコリーンさんに薬を数包渡された。

「避妊薬です。一日に一回飲めば大丈夫です。必要な時はお申し出ください」

「あ、どうもありがとうございます」
「……いえ」

どこまでも無表情のコリーンさんにちょっと戸惑いつつ、わたしは用意してもらった水で薬を飲もうとして、はた、と気がついた。

……もしかしてこれって、毒薬じゃないよね。

ちらりとコリーンさんを見ても、彼女はやっぱりどこまでも無表情だった。

どうせガルディアに戻っても生き恥を曝すだけだし、それでもいいか。

わたしは半ば自棄になって薬を飲んだ。……けれど毒薬なんかじやなく、ちゃんと避妊薬だったみたいだ。

「陛下が既にお待ちです。イルーシヤ様、こちらへ」

無表情にコリーンさんに告げられて、わたしは重い気分と体を引きずり、朝食の用意してある場へと向かった。

37 穢れ(2) (前書き)

文中に主人公への陵辱表現があります。苦手な方はご注意ください。
い。

37 穢れ(2)

憂鬱な朝食の後。

うつかりわたしを垣間見る人が出ないようにとカーテンの引かれた部屋の中で、特になにもすることのないわたしはコリーンさんにカードを持ってきてもらって過去視の訓練をしていた。

「占いですか、イルーシャ」

あれからしばらく会議に詰めていたロアデイルが部屋に入ってきた。

「……まあ、そんなところ」

思ったよりも早いロアデイルの訪れにわたしは眉を顰める。ああ嫌だな、なにもされなきゃいいけど。

「わたしの顔を見て、そんなに嫌そうな顔をしないでください」

「……なんでわたしがあなたに気を遣わなきゃいけないのよ」
無理矢理された相手を歓迎しろでも？ 今もなにをされるか分からないのに。

「イルーシャ、ガルディアがこちらへの侵攻を準備しているそうですよ」

「まあ、それは当然じゃないの？ わたしがここにすることはすぐにバレるだろうし」

ウィルローが音声再生装置をガルディアに送りつけたことは言わないでおいた。わたしが過去視を使用することは念のため秘密にしておこうと考えたからだ。なにより、あれは恥以外の何物でもないし。……いつまであなたとこうしていられるのでしょうかね」

ロアデイルが腕を引いて、わたしを抱きしめる。当然のことながら、呪いを受けているわたしは動けなかった。

「離してっ」

「駄目です」

ロアデイルにこうして抱きしめられていると、彼にされたこと

が思い出されて身が竦みそうになる。呪いの効果による妙な感覚も嫌だし。

「ガルディアは必ずわたしを取り戻しに来るから。今のうちにわたしを解放して」

「それも駄目です。元よりそのつもりなら、そもそもあなたを召喚していない」

「なんでわたしを召喚しようって思ったの？　ギリング王のことがあったから？」

「……そうですね。初めは先王が異常なほどの執着を見せる伝説の姫君がどういった人物であるか興味があつたのですよ。そして、ウィルローにあなたの映像を見せられてわたしは一目で恋に落ちました」

「……一目惚れってこと？」

「はい。多少最初の印象と違いましたが、その時以上にわたしはあなたに惹かれました。ですからこれが愚かなことだと分かっていても後悔はありませんよ」

ロアディールになんの迷いもなくそう返されて、わたしは溜息をつく。

「愚かなことだと分かつてるなら、そこで思いとどまってよ……」

国民や兵を犠牲にするかもしれない事態にするだけで王失格でしょ」

「そうですね。……ガルディアの王は良い王ですか？」

いきなりなに？　カデイスのことなんか聞いてどうするんだろ。

「わたしは政治のことは分からないけど、良い王なんじゃないの。

国のことをいろいろ考えてるみたいだし、遅くまで執務こなしてるし」

「……そうですね。あなたはカデイス王と親しいのですね」

「親しいっていうか、友達だし。それにいろいろとお世話になってるから」

なんでわたしはこんなことまでロアディールに話してるんだろ。流されすぎだろ、わたし。

「しかし、カデイス王はあなたのことを友人とは思っていないでしょう。彼があなたに求婚していると聞きましたよ」

「そ、それはそうなんだけど」

それを言われると弱いんだよね。でも、あくまでわたしにとってカデイスは友達だ。

「彼はやろうと思えば、すぐにあなたを手に入れられる。それだけの権限もある。わたしが彼ならすぐにあなたを妃にしましたよ」

「カデイスはそんなことしないよ」

カデイスは俺様だけど、わたしの意思を無視したりはしない。やたら抱きしめたり、キスしたりはして来るけど。

「彼は今まで相当な我慢を強いられてきたと思いますよ。……それもあなたを想えばこそでしょうが」

そうなんだろうか。わたし、そこまでカデイスに想われてる……？

「……なぜわたしがガルディアの王ではないのでしょうか。言っても詮無いことですが」

「うん、だから諦めて」

わたしはここぞとばかりに駄目押しした。

「本当にあなたはつれないですね」

ロアディールが苦笑して、わたしの頤に手をかける。わたしはその途端、びくりと体を震わせた。

「けれど、今後ガルディアの王がどう出ようと今だけはあなたはわたしのものです。その事実だけは動かしようがありません」

「や……」

わたしは逃れたかったけれど、簡単に彼にキスされてしまった。

「愛していますよ、イルーシャ」

「わたしはあなたが……っ、ん……っ」

最後まで言えずに、わたしはまた彼にキスされる。

「どんなにあなたがわたしを嫌おうとも、わたしは構いませんよ。今ならばいくらでもあなたを奪える」

「……最低!」

わたしはロアデイルに向かって罵倒した。こんな王に好き勝手されるなんて、最悪すぎる。

「そうですね、わたしは最低です」

ロアデイルは少し寂しそうな笑いをこぼすと、わたしを抱き上げた。

「やだ、やめてよ！ ロアデイル、わたし、嫌だよ！」

「いくらあなたの願いでも聞けませんね」

ロアデイルは寝室に向かうと、ベッドにわたしを横たえる。

「戦いが始まるっていうのに、なに考えてるのよっ」

「こんな時だからこそですよ。いつ、ガルディア国王にあなたを奪われるか分からないからです」

ロアデイルは唇にキスすると、わたしの首筋に唇を這わしてきた。

わたしが思わずびくりとすると、ロアデイルが笑った。

「……ですから、あなたがわたしを忘れられないくらいたくさん刻みつけましょう。あなたがわたしを一生憎んでくださったら本望です」

「ロアデイル、あなたおかしいよ！」

わたしを好きだと言いながら、憎んでほしいなんて矛盾してる。

「そうですね、あなたには理解できないでしょうね。……けれど、分かっていただけでも結構ですよ」

「んんっ」

ロアデイルに唇を貪られつつ甘噛みされると未だに慣れない感覚が襲ってきて、わたしは眦に涙を浮かべる。

嫌だよ、こんなの。早く、早く助けて。

自分でなんとかできたらいいけど、それもできなくて。

自分ではどうしようもない状況に絶望しながら、わたしはガルディアの人達に助けを求める。

「いや……、いやあ……っ」

心ではあらがっているのに、わたしの体はたやすくロアデイル

を受け入れてしまふ。

わたしはロアディールの宣言通り、彼に何度も刻みつけられた。

次に目覚めた時には、既に陽が傾こうとしていた。ロアディールは事が済むと、寝室を後にしたようだ。

わたしはシートにくるまったまま、備えられていた水差しからグラスに水を注ぐと、貰ってあった避妊薬を飲んだ。それからベルでコリーンさんを呼び出すと、お風呂に入れて貰った。

わたしはお風呂で自分の体を見下ろすと、くまなくロアディールに付けられたキスマークが目に入って憂鬱な気分になった。

「……戦況はどうなってます？」

コリーンさんが素直に答えてくれるとは思わなかったけれど、一応聞いてみる。

「……ただいまガルディア勢が城の結界を壊しにかかっているところです。お支度が済みましたらイルーシャ様を謁見の間にお連れするよう、王からご命令を受けております」

「そうですか、ガルディアが」

——とうとう来た。

わたしは安堵感からほつと息をつく。

この城に巡らされている結界も、稀代の魔術師であるキースなら程なく解除するだろう。

わたしのために起こった戦いだけれど、できるなら両国とも犠牲は少ないといい。

お風呂から上がったわたしはロアディールに付けられたキスマークが隠れるドレスを着せられ、呪い除けに頭から豪華な布を被せられた。そして、騒然としている城内の中、コリーンさんに謁見の間まで連れていかれた。

「——コリーンさん」

わたしは謁見の間に入る直前に彼女に声をかけると、コリーンさんは相変わらずの無表情でわたしを見返した。

「わたしのせいで、こんなことになってしまつてごめんなさい」

わたしが頭を下げて謝ると、鉄面皮と思えた彼女がわずかに戸惑っている様子が窺えた。

「……王がお待ちです」

すぐに彼女は元の無表情に戻ると、傍にいた魔術師に謁見の間のドアを開けるように促した。

「……イルーシャ、こちらへ」

ロアデイルがわたしの手を取つて、王の隣の席へ座らせる。……ここつて王妃の席だよな。

「わたし、ここに座りたくない」

「あなたはこんな時まで拒絶しますか。……仕方ありませんね」

ロアデイルは苦笑すると、わたしを椅子から立ち上がらせた。

「そういえば、ウィルローはどこにいるの？」

近くにいてもよさそうだけど、姿が見えない。

「ああ、あいつは越権行為を働いたので罷免しました」

「じゃあ、もうここにはいないってこと？」

「はい」

なんだ、残念。今まで受けた屈辱のお返しに、一度くらい殴つてやりたかったのに。……いや、呪いを受けてるから今は無理か。

それにしても、ウィルローを罷免するってことは勝てる戦いじゃないってことを分かつてたってことだよな。

ちらりとロアデイルを窺うと、彼がわたしを抱きしめてきた。

「や……っ」

わたしが抗議の声を上げようとしていると、不意に外から剣戟の響きと叫び声が聞こえてきた。

「イルーシャ！」

「イルーシャ様！」

——来てくれた。

それほど時もたっていないのに、よく知った声が無性に懐かしく感じる。

わたしはロアデールの腕の中、涙を浮かべて彼らが現れるのを待っていた。

38 呪いの封印

「……ここまでですか」

ロアディールはそう言うと、わたしから離れた。

「……ロアディール？」

彼の様子がなにかおかしいと感じて、わたしは眉を顰める。

ロアディールは腰の宝剣を抜くと、それを逆手に持ち変えた。

「ちよつと、なにを……っ！」

「これで、あなたはわたしを忘れられなくなる。愛しています、イルーシャ。わたしの、傾国の姫君……」

——なにを勝手なことを！

ロアディールの剣はまっすぐに彼の心臓へと向かう。

「そんな勝手なことをされては困りますね、ハーメイ国王」

突然空中からキースの声が聞こえたと思ったら、ロアディールはそのまま動けなくなった。

次の瞬間、キースが姿を現すと、ロアディールの手から剣をむしりとり、遠くへ投げ捨てた。

「キース」

わたしが召喚される前に彼を呼び出していたら、こんな事態にはなっていなかったかもしれない。

それでもわたしをこうして助けに来てくれて、申し訳ないやら、ありがたいやらで、わたしはぼろぼろと涙をこぼしていた。

「……イルーシャ」

キースはわたしへ向き直ると、抱きしめてきた。

う、再会の抱擁はいいんだけど、呪いのせいで妙な感覚が……。

「イルーシャに触れるな！」

ロアディールがこちらを見て叫ぶ。その様子は、さっきまで自殺を図ろうとした人にはとても見えない。

「……それはこちらの台詞です。ハーメイ国王、少し黙っててもら

えますか？」

キースはわたしから体を離すと、冷やかな視線をロアディールに送る。彼は短く呪文を唱えたとロアディールを黙らせた。

「キース、迷惑かけてごめんね。助けに来てくれてありがとう」

わたしが申し訳なくて涙を流していると、キースはわたしの涙を指で拭ってくれた。

「もっと早く来れたら良かったんだけどね。……随分嫌な思いをしたろう？」

わたしはそう言われて、本格的に涙が止まらなくなってしまった。
——うん、嫌だったよ。みんなにもなににされたか知られちゃったし。

しゃくりあげて泣くわたしにキースは少し焦ったようだった。

「ああ、イルーシャ、泣かないで。……って言っても無理だろうな」
わたしはハンカチを出して涙を拭きながら、なんとか落ち着こうと息をつく。

「みんな、なにがあつたか知ってるんだよね。わたし、恥ずかしくて申し訳なくてガルディアに戻れないよ」

それに、キースがあの一部始終を知っているかと思うと、羞恥から消えてしまいたくなる。

「……そうだね、君には分かってしまうんだったね。君は気になるかもしれないけど、みんな君への気持ちは変わってないよ、大丈夫」

キースがそう言った途端、謁見の間のドアが開き、カディスとヒュー、ブラッド、マーティンが入ってきた。

「イルーシャ！」「イルーシャ様！」

魔力の高いヒュー以外の三人はわたしを見て絶句する。……あれ、呪い避けの魔防具があるって聞いてただんだけど、それでも駄目なんだろうか。

「ヒューイ、防御壁と魔防壁を」

「はい」

ヒューはさすがにわたしを見ても平気みたいで、平然とカディス

達に向かつて魔法の詠唱をしていた。うわあ、ヒューが魔法使えるって本当なんだ。なんか凄いな。

「さて、イルーシャ。君の呪いを解くのは無理だけど、封印はできるよ」

「ほ、本当？」

傾国の呪いを受けた身じゃ、ガルディアに戻っても厄介者にしかないと思ってたのに。

キースの言葉が信じられなくて、わたしは彼の顔をマジマジと見てしまう。

「うん、具体的には呪いの効果を睡蓮の印に集めてから封印してしまうんだ。同時に呪いを徐々に弱めるために魔力注入もする。……

ちよつと嫌な感じがするかもしれないけど、我慢して」

嫌な感じって、わたしがウィルローに呪いを受けた時みたいな苦しさなのかな。……ちよつと怖いけど、でもこれくらいは我慢しなきゃ。

「うん、わたしなら大丈夫」

こくりと頷くと、キースはわたしの胸元に手を置いた。うう、大丈夫と言ったけど、やっぱり駄目だ、この感覚。我慢できそうになり。

わたしが思わず身を振ろうとすると、キースはわたしの肩を抱いて動けなくした。

「おい！ キース、どこを触っている！」

「キース様！」

「……それじゃ、始めるよ」

「う、うん」

うるさい外野を無視して、キースの言葉に頷く。

その途端、胸元に衝撃が来てわたしは思わず叫んでしまった。

「きゃあっ！」

「イルーシャ！」

「イルーシャ様！」

今、わたし『きゃあ』って言ったよ。わたしでも女らしい叫び声が出るんだ。びっくり。

キースが目を瞑って詠唱をする。その詠唱に合わせて、両手足の端々から妙な感覚がじわりじわりと胸元へと移動するのが自分でも分かる。

「ん……っ、や、だ……っ」

妙な声が出てしまいそうで、わたしはおかしな感覚から逃れるために首を振る。

「……イルーシャ様」

傍にいるヒューがわたしを見て頬を染めている。傍目からはわたし、どう映ってるんだろ。

キースの詠唱はまだ続いている。ほとんどが省略したものか、無詠唱でも魔法を使えるキースにしてみたらこれは珍しい事だと言えた。それほどこの呪いは厄介なものなんだろう。

「う、くっ、あ……うんっ」

なんとか声を我慢しようとしてるけど、妙な感覚は未だに治まらない。わたしは思わずキースの服を掴んでしまいながら涙を浮かべていると、突然全身を支配していた妙な感覚が消えた。

「あ、あれ……？」

「呪いは封印したよ。これから魔力注入する。これはそんなにかからないから」

「あ、うん」

わたしは思わずほっとして笑った。

キースの言葉通り、これは短い詠唱の後、胸元がふんわり暖くなる感覚がしたと思ったら終わっていた。

「イルーシャ、気分はどう？」

「うん、変な感覚もないし大丈夫みたい。ありがと、キース」

わたしはキースの腕の中から出ると、久々に体の自由がきくようになったことが嬉しくて微笑んだ。

「おい、いつまで俺達を足止めしているつもりだ」

カデイスのその言葉で、キースは彼らの存在を思い出したらしい。
「ああ、ヒューイ、解除してやって」

「はい」

ヒューが魔法を解除すると、いきなり三人がかなりの勢いでわたしに駆け寄ってきて、わたしはびっくりして叫んでしまった。

「ああ、少し呪いの影響を受けてるね。やっぱり一時的に足止めしておくよ」

キースが短い詠唱をした途端、三人は動かなくなった。

「おい、キースッ」

「キース様」

「ああ大丈夫、魔力を注げばすぐに影響はなくなるよ」

キースはカデイス達の顔の前で掌を向けると、本当に三人とも元に戻ったようで、さっきまであった狂おしいような雰囲気は消え去っていた。

足止めを解かれたカデイスはわたしを抱きしめると、額にキスしてきた。

「……イルーシャ、いろいろあっただろうが、俺がおまえを妃にしたいというのは変わってないぞ」

「わたしもあなただけの騎士になりたいということは変わってませんよ」

カデイスの腕から逃れたわたしの手を取ってヒューが騎士の礼を取る。

「こんなことで気持ちが変わるほど簡単な想いではありませんよ、イルーシャ様」

ヒューに続いて、ブラッドが騎士の礼を取る。

「う、うん、えと、助けに来てくれて、ありがとう……」

三人から出た口説き文句に若干戸惑いながらも、わたしはお礼を言う。

「あ、えーと、イルーシャ様を救出することができて良かったです」
「うん、ありがと。マーティン、これからも友達でいてね」

ああ、やっぱり恋とか愛とか関係ない友達って気楽でいいね。口説かれたりしたら、どうしたらいいか分かんないもん。

「は、はい。イルーシャ様がそう望まれるのでしたら」

そう言いながら、マーティンはどことなく消沈している。……あれ？

「……おまえ、本当に鈍いな」

「相変わらず残酷ですね」

「まあ、これ以上恋敵が増えるのもなんですし、いいんじゃないでしょうか」

三人が好き勝手に話してるけど、鈍いとか残酷とか恋敵とかって、えー……？

「イルーシャ！」

キースによって呪いの影響を断ち切られたロアデイルがわたしに近寄ってきた。

四人がわたしを守って前に立つけど、わたしはそれをすり抜けてロアデイルへとつかつかと歩を進めた。

「イルーシャ、謝って済むことではないですが、今回のことはすみませんでした」

苦悩に端正な顔が歪むけど、わたしはそんなことで許してなんかやらないんだからね。

「ロアデイル」

彼の名を呼ぶと、ロアデイルはわたしを見返した。その次には、わたしは彼に向かって思い切り手を振りあげていた。

39 城への帰還

わたしがロアデイルの頬を打つと、かなり小気味よい音がした。
「イルーシャ……」

呆然とするロアデイルにわたしはここぞとばかりに言ってやる。
「本当は跳び蹴りして回し蹴りして、ボッコボコのギッタギタにしてやりたいけど、それはいろいろ問題があるからやめておく」

ロアデイルを指さしながらそう宣言すると、カデイスからさずつつこみが入る。

「姫が跳び蹴りに回し蹴りなどするな」

「しないよ。そもそもドレスじゃ無理だし」

「イルーシャはじゃじゃ馬ですね」

ロアデイルがおかしそうに笑った。

「だから言っただじゃない。わたしはたおやかな姫じゃないって」
彼にされたことを思えば、今更認識を改められても困るんだけどね。

「それでも、もちろんわたしはあなたのことが大好きですよ。普通の姫らしくないところがまたいいですね」

「……あのねえ……」

なんといかとてつもない脱力感が襲ってきた。

ロアデイルって、一応敗戦国の王なんだよね？　それがなに、

この余裕、っていうか、こんな泰然としているの？

「あ、あのね、わたしあなたに文句言いたいことはいろいろあるけど、なにがムカつくって、問題山積みにして、なに勝手に自害なんかしようとしてるのよ。王なら、そのところ責任取らなきゃ駄目でしょうが」

「……そうですね、わたしは王失格ですね。あなたに忘れられたくなくて、一番有効そうな手段を選んでしまった」

ロアデイルが寂しそうに笑う。……そんな笑い方されると、な

んかわたしにも責任の一端がある気がして落ち着かない。

「あのね！ 目の前で自害なんかされたら困るのよ。第一目覚めが悪いじゃない。自分勝手も程々にしてよね」

「……まあ、自害されて困るのもこちらだしな。最高責任者のいない状態では、話し合いにも困るからな」

ロアデイルとの会話にカデイスも入ってくる。

「……カデイス王は、イルーシャ救出の為に、王自身がわざわざ危険を冒してまで来られたんですね。それほど彼女が大事ということですか」

「……まあな、惚れた弱みだ。本人は鈍すぎる上に、そういうことに不慣れだから、大事にしていたんだがな。……そうしていたら今回の事だ。ハーメイ国王、この責任はしっかりと取って貰うぞ」

「……仕方ありませんね。元より覚悟は出来ていますよ」

「え……、ちよつと。責任を取るって、命を取るって事じゃないよね？ 出来ればそれはやめてほしいんだけど」

「イルーシャ、おまえがこの男になにをされたか我々は知っているんだぞ？」

厳しい表情のカデイスのその言葉に、わたしはかっと赤くなると、慌てて言った。

「え、えーと、でもそれは呪いのせいだし。それを言うなら、一番悪いのはウィルローじゃない？ 実際、ロアデイルは最初わたしに手を出さないって言うてくれてたし」

「……イルーシャ、おまえ、人が良すぎるぞ」

カデイスが呆れたように言う。……そうかなあ？

「そんなことないよ、さっきボコボコにしたいって言ったじゃない。それに、わたしのせいで人が死ぬなんて嫌だよ。それよりロアデイルには生きて王としての責任を取らせた方がいいんじゃないかな。たとえば、金銭面での賠償責任とか。ハーメイの国民からは当然非難受けるだろうけど」

「……おまえがそう言うなら仕方ないが」

カデイスは苦虫を噛み潰したように言うと、ロアディールに向き直った。

「当のイルーシャがこう言っているんだ。我々も譲歩しよう。……イルーシャに感謝するんだな」

「はい、イルーシャ、ありがとうございます」

「べ、別にわたしはお礼を言われることは言っていないよ」
赤くなる頬を押さえて、わたしはそっぽを向く。

「……イルーシャはここで照れるから、ものすごく思わせぶりなんだよね」

離れた場所で、話を聞いていたキースが溜息をつく。

「思わせぶりって、ええー！？　わたし、そんなつもりはまったくないよ！」

「わ、わたし、そんなに思わせぶり？」

「うん」「ああ」「はい」

みんなから速攻で返事が来てわたしは撃沈した。

「う、分かった。なるべく照れないように努力するよ」

「無理だな」「無理だね」「無理じゃないですか」

せっかくの決意に、またしてもみんなから速攻で無情な返事が来た。ど、どうしろと……？

「とにかく、イルーシャはガルディアに戻って。ああ、マーティンが付いてくれるかな」

「はい」

「みんなはどうするの？」

「まだ事後処理があるから、ここに残るよ。イルーシャは部屋でゆっくりしていて。……うろろししないでね」

うう、またうろろするなって言われたよ……。

「うん、分かったよ。おとなしくしてる」

わたしはキースに頷くと、マーティンが守るために傍に寄ってきた。

「——イルーシャ」

わたしはロアデイルに声をかけられてそちらを向く。

「もうこれでお会いすることないかもしれませんが、わたしはあなたを愛しています」

「そう、でもわたしはあなたが大嫌い」

一刀両断にすると、ロアデイルが苦笑いする。

「相変わらず、あなたはつれないですね」

「……イルーシャ、そろそろ送るよ」

「うん」

ロアデイルとの会話を眺めていたキースに言われて、わたしは頷く。

ああ、やっとガルディアに帰れるんだ。……やっぱり、いろいろあったからちよつと帰りにくいけど。

キースはわたしに掌を向けると、短い詠唱の後、手を振った。次の瞬間、わたしとマーティンはわたしの部屋にいた。

「イルーシャ様！」

部屋には、リイナさんや、シェリー、ユースが控えていて、わたしは彼女達に駆け寄られた。

「お帰りなさいませ、イルーシャ様」

リイナさんがいつも通り上品に迎えてくれる。

「イルーシャ様、とても心配しましたわ」

「とてもお辛い目に遭いましたね」

シェリーとユースが涙を浮かべながらわたしに抱きついてくる。あー……、この調子だと、彼女等にもわたしがどんな目に遭っていたか知られているんだろうな。

「マーティン、イルーシャ様のお支度をしますから出ていなさい」「は、はい」

リイナさんに厳しく言われて、マーティンが慌てて出ていく。…

…うん、ちょっと可哀想かも。

「イルーシャ様、大体の事情は知らされています。これは避妊薬ですわ。お飲みください」

「うん、一応ハーメイでもコリーンさんって人に貰ってただけど、飲んでおくね」

「まあ、敵国で薬を飲むなんて、毒薬だったらどうするんですか」

「うん、わたしもちょっと疑ったけど、結局避妊薬だったみたいだし。無表情だったけど、結構いい人だったのかも」

言いながらリイナさんに貰った薬の包みを開けて、わたしはシェリーに注いで貰った水で飲む。うん、とくに味がしないのは一緒だ。避妊薬を飲み終わった後は、お風呂に連れていかれて、全身に付けられたキスマークを披露する羽目になってしまった。……うつ、恥ずかしい。

バラとハーブのお風呂に浸かりながらわたしは息を付く。

「あー、本当に帰ってきたなあって感じがするね」

「イルーシャ様、今までいろいろありすぎたんですもの。これから少しゆっくりされるといいですわ」

シェリーの気遣う言葉にわたしは頷いた。

「うん、そうする」

キースにもおとなしくするって言ったしね。

空いた時間をこの国の勉強や過去視の訓練に当てるのもいいかもしれない。

わたしはお風呂から上がってドレスを着付けされると、長椅子に座ってカードを使って過去視の訓練をしていた。

「イルーシャ様、随分と熱心ですわね」

ユーニスがさっぱりしたお茶を出してくれながら感心したように言う。

「うん、今のところわたしの唯一の能力だからね。なんとか役に立つように頑張らないと」

だんだんの中率はアップしてきたけど、そのうち完璧に的中出来

るようにしたいな。

そんなことを思いながら出されたお茶を飲んだと、映像が浮かんできた。

うわ、寝てない状態で過去視は初めてだ。

内心わくわくしながらその映像に集中していると、それはルディア市内の映像らしかった。

「……それは、本当のことなのかい？ 今回の戦にイルーシャ様が絡んでるなんて」

果物屋らしき店頭で、魔術師と思わしき人物が品物を物色していた。

——ウィルロー！ よくものうのと、ガルディアに！

ウィルローは林檎を一つ取ると、代金を女将さんに支払った。

「ええ、本当です。ハーメイに浚われた姫君は、かの国の王とよろしくやっていましたよです。その様子を聞いた者もいたとか」

よろしくやっていたってなんだ！ こっちはあんたのかけた呪いで酷い目に遭ったっていうのに！

「……あたしや信じられないよ。姫様がそんなことをするわけないさね」

果物屋の女将さんが憤慨したように腰に手を当てる。

「しかし、ハーメイに軍を動かしたのは本当らしいぞ。もし浚われたのが本当だとしたら、あの美貌だ、手を出されない訳がない」

常連客らしい男性が女将さんに言うと、見る見る彼女は顔色をなくした。

「そんな……、信じられないよ姫様が……」

「イルーシャ様？ お顔の色が悪いようですが、もしかしてお疲れなのでは？」

ユーニスが心配そうにわたしの顔を窺ってくる。

「あ……、うん。ちょっと疲れたかも」

「まあ、それでしたら、少しお休みになるといいですわ」

「う、うん。そうする」

わたしは今度は寝間着に着替えさせられると、ベッドに横になった。

「それではおやすみなさいませ」

「うん、おやすみ」

目を閉じると、またウィルローが出てきた。今度は別の場所と同じような会話を繰り返し返している。

「……」

わたしは起きあがると、顔を覆った。

ウィルローがわたしの評判を落とそうとガルディア内で暗躍している。

キースに知らせようにも、ウィルローに腕輪を壊されているわたしは彼を呼び出すことも出来ない。

わたしは嫌なことが起こりそうな予感がして、眠ることも出来ず、次々と浮かぶ映像に不安を募らせるだけだった。

結局寝ることが出来なかったわたしは、起き出してユーニスを呼び出してしまった。

「ごめん、やっぱり寝られないや。それと、キースに至急伝言頼めるかな？ 『ウィルローがガルディア国内にいる』って」

「かしこまりました。マーティン様から魔術師経由で伝えていただくように手配しますわ」

ウィルローは既に国内では手配書が回っている罪人だ。

ユーニスは顔を引き締めると、マーティンにわたしの言づてを伝えに行った。

その間もわたしの過去視は続いていた。

ウィルローは髪と瞳の色を変え、各地で今回の戦いの原因はわたしだと主張していた。酷いものでは、わたしが求婚者全員と体の関係があり、ハーメイでも男を誘惑して何人とも寝ていたというものもあった。

……ちよつと、いい加減にしてほしい。

ベッドの端に腰掛けながら、わたしは次々と浮かぶ映像に目眩を起こしかけていた。

「イルーシャ様、お伝えしましたわ。お起きになれますか？」

「うん、起きる。せつかく着替えたばかりだっていうのにごめんね」
わたしが謝ると、ユーニスは首を横に振って心配そうに言ってきた。

「いえ、それは構いませんが……。イルーシャ様、やはりお顔の色がよくありませんわ。寝ておられていたほうがよろしいのでは？」

「うん、でもキースが来るかもしれないから部屋で待ってるよ」
それになにか過去視の様子が変だ。キースならこの状態のこと、なにか分かるかもしれない。

「……そうでございますか？ イルーシャ様、あまりご無理はされ

ないでくださいね」

「うん、ありがと」

わたしはユーニスに悪いなあと思いつつもまたドレスに着替えさせてもらった。

ユーニスに目眩を起こしてることを悟らせないようにわたしは私室の長椅子に腰を下ろすと、肘掛けに寄りかかった。……やっぱり調子が悪い。これはたぶん映像酔いみたいになってるせいだろう。目を瞑っていてもぐらぐらするのを堪えていると、ふいに声をかけられた。

「イルーシャ、大丈夫？」

——ああ、キースだ。

肩に軽く触れられると、浮かんでいた映像は綺麗に消えた。

「……キース」

わたしが顔を上げると、キースが心配そうにこちらを見つめていた。

「魔力が暴走しかけてたから、制御させてもらったよ。随分辛かったろう？」

「ありがと、キース。……映像が次々と浮かんで消えなくて困ってたんだ。助かった」

いくぶん調子が良くなってきて、わたしは少しだけ笑みを浮かべた。

「君に触れたときに少し映像が見えたけど、ウィルローはかなり悪辣なことしてるね。……ちょっと待ってて、少し懲らしめてみる」

キースはそう言って目を瞑って詠唱し始める。しばらくして彼は目を開けて、大きく息を付きながらくしゃりと前髪を掻きあげた。

「……なにをしたの？」

まだ目眩は続いていたけれど、キースの取った行動に興味が湧いて聞いてみる。

「追尾魔法と風の刃の魔法を使った。今頃ウィルローを切り裂いている頃だと思う。……もつとも致命傷にはならないだろうけれどね」

「……そんなことができるんだ。キース、すごいね」

あの鬼畜魔術師にそんな方法で一泡吹かせられるなんて、キースは本当にすごいな。それに比べて、わたしは呪いを受けたり、悪評ばらまかれたりして全然いいとこない。

「そんなことないよ。……イルーシャ、具合悪そうだけど、大丈夫？」

「うん、さっきよりはだいぶ良くなってきたよ。……あ、貰った腕輪、ウィルローに壊されちゃったんだ、ごめんね」

頭を下げるとまだくらくらする。キースはそれを察したようので、治癒魔法を使ってくれた。それでかなりわたしの調子もよくなってきた。

「うん、分かってる。明日新しい物を渡すよ。あと、魔力制御の指輪も。イルーシャ、君は僕が思ってたよりも魔力があるよ。さっきもそれで暴走しかけてたみたいだ」

「え、魔力があつて呪いにかかるの？」

「呪いを直接受ける分には魔力はあまり関係ないんだ。間接的に影響を受けないことに有効なだけだよ」

「……そうなんだ。睡蓮の呪いを弱めることには使えそうかな？」
わたしに施された呪いは、今はあくまでも封印されているだけであつて、呪いの驚異はなくなった訳じゃないんだよね。

キースが呪いを弱めるためにわたしに魔力を注入したことは記憶に新しい。これができれば最後には呪いをなくすことができるんじゃないかな。

「うん、できるよ。やり方は僕が君に教える。あと、ヒューイにもなにがあるか分からないし、念の為にね」

「うん、ありがとキース。よろしくね」

「うん」

その時、ドアがノックされて、マーティンからカデイスの来訪が告げられた。

「カデイス、お帰りなさい」

「ああ。……イルーシャ、顔色が悪いな。疲れが出たのか？」

立ち上がってカデイスを迎えたわたしの顔を見て、彼は少し眉を顰めた。

さっきのキースの治癒魔法でだいぶ具合良くなったんだけど、まだ心配されるほど顔色悪いんだろうか。

「それもあるだろうけど、ついさっきまでイルーシャの魔力が暴走しかけてたんだ。それでかなり具合悪そうだったから治癒魔法を使っただけ、確かにまだ顔色は良くないね」

そう言うのと、心配そうにキースがわたしを見てくる。

「魔力が暴走しかけたとはどういうことだ」

カデイスが不思議そうに聞いてくる。

「過去視の訓練をしてたら、ガルディア国内の映像が次々と浮かんできて止まらなくなったの。キースが制御してくれたから助かった」
「確かおまえの能力は今までは眠っている状態でないと発現しなかったな」

「うん、それが急に起きてても見えるようになったから喜んでただけど、今度は制御できなくなっちゃって」

「たぶん、能力が急激に伸びたことによって、それに引きずられる形で眠っていた魔力が暴走したんだと思う。明日にでも魔力制御の指輪を渡すつもりだよ」

わたしの言葉を引き取って、キースが補足してくれる。

「そうか、それでイルーシャは過去視でウィルローがガルディアにいるのを見たわけだな？」

その言葉で、カデイスもキースへのわたしの伝言を聞いてたんだなと分かった。

「僕もその映像を見たけど、イルーシャの酷い噂をばらまいてたよ。今回の戦の原因はイルーシャだとか、イルーシャは求婚者全員と関係があるとか、ハーメイで王含む複数と関係を持ったとか」

うああ、他人の口から直接聞くとまた違った破壊力だわ。

わたしが真っ赤になって顔を覆っていると、カデイスが舌打ちをし

た。

「ウィルロー……、あいつだけは許さん。見つけ次第殺せ」

「分かった」

カデイスの言葉にキースが頷く。

できれば人が死ぬのは見たくないけれどウィルローは罪を重ねすぎた。だからわたしはカデイスの言葉に特に反対はしない。

……ううん違うな、わたしもきつとウィルローを殺したいほど憎んでるんだと思う。

わたしに呪いをかけてロアデールに汚させ、伝説の姫君の名を地に落とそうとしているウィルローを。

カデイスはどさりとわたしの前の長椅子に腰を下ろすと、わたしを凝視した。

「な、なに？ カデイス」

「本当に大事にしていたのにな」

「カデイス、その話題は……」

キースがカデイスにそれ以上言うなというように首を横に振る。

カデイスの『大事にしていた』というのは、わたしが汚されたことを言っているんだろう。わたしは居たたまれなくて俯いた。

「おまえの望み通り、ロアデールの命は取らない。砦とトリア村の損害賠償を支払うことと特産品の織物と金細工の搬入課税率を上げることで話はついた」

「そ、そうなんだ」

損害賠償金とはかく、織物と金細工の職人さんは大変だよね。

そのところ、これからどうするんだろ。

「だが、ロアデールはおまえを王妃にしたいと言っている」

「ええっ、わたしロアデールにははつきり嫌いだって言ったよ？」

わたしが驚いて顔を上げると、カデイスと視線が合った。

「できればという前置きだったがな。ふざけたことに、おまえが忘れられないと言っていた」

「……いい加減諦めてくれればいいのに」

カデイスから視線を逸らそうと横を向いたら、今度はカデイスの隣に座っていたキースと目が合った。な、なんか気まずい。

それで結局わたしはまた俯くしかなかった。

「……おまえには伝えてはいなかったが、トゥルティエールもおまえを第三王妃に迎えたいと言ってきている」

トゥルティエールって北の大国だね。第三王妃って、妾妃みたいなものだろうか。

「……それ、断ってくれたんだよね？」

「ああ。だが、向こうはまだ諦めてないようだ。催促の書簡が先程また届いていた」

「トゥルティエールの王様ってどんな人なの？」

「歳は三十前半だったか。婚礼はかなり早くて確か王太子がいたはずだ」

「なにそれ、わたしじゃないじゃない」

わたしは思わず呆れてしまった。

この世界では通常成人した王子が王太子に立っていたはずだ。そう考えると、その王にはもう十五歳以上の王子がいることになる。

「向こうの物言いによると、おまえの絵姿に目を奪われたらしいがな。実際に披露式典でおまえを目にしたあちらの大臣も絶賛していたぞ」

「そんな猫かぶりの時の姿を絶賛されてもねえ……」

こちらの感覚では当たり前のことなのかもしれないけれど、わたしとしたら、もううんざりするしかない。

「他の国からも妾妃やら王子妃やらで打診が来ているぞ」

「……みんな見た目に騙されすぎ」

「一目惚れしてから更に実物に会って忘れられなくなったロアディールのような例もあるがな」

「忘れたいのに名前出さないでよ」

わたしが唸るように言うと、カデイスは一瞬黙り込んだ。

「……おまえのその美貌ならどの国でも欲しがる。それこそロアデ

「イルのようにな」

「カデイス！」

これは絶対わざとだ。

わたしは思わずむっとして声を荒げる。

「こんな事態になる前に、さっさと俺のものにしてしまわなかったのが悔やまれるな」

「カデイス」

キースがカデイスを諷めるように名を呼んだ。けれどカデイスは気にした風もない。

「イルーシャ、おまえは呪いがなくても傾国の姫君だ。おまえのその美貌は争いの種になる。国内でも水面下でおまえに近づこうとする貴族が大勢いたのをおまえは知らないだろう」

「え……」

確かにそれは初耳だった。

「それはおまえに見せず、聞かせず我々が守っていたからだ。おまえの能力はこんなところには発現しなかったようだがな」

「だから、わたしにあんなにうろろするなって言ってたの？」

わたしがキースに聞くと、彼は仕方なさそうに頷いた。

「そうだよ。君には窮屈だったろうけど、君を守るにはそう言うしかなかった」

「……そうなの？」

「早く妃にしておけば、おめおめとロアデイルなどにおまえを奪われたりしなかった。おまえの意思を尊重した結果がこれだ。……」

だがまだ間に合う。イルーシャ、おまえは俺の子を産め」

「カデイス、なに言って……」

あまりのことにわたしは瞳を見開くしかなかった。

「おまえがどんなに泣こうが嫌がろうが知らん。俺はいずれおまえを抱く」

「やだよ、そんなの！」

わたしは思わず立ち上がって叫んでいた。涙で視界が歪む。

「異論は認めん。イルーシャ、これは王としての命令だ。おとなしく俺に抱かれる」

「カデイス、やだ、それだけは許して……っ」

友達だと思っていたのに、いきなりこんなおつて――。

溢れる涙を拭うこともできずに、わたしはカデイスに懇願する。

「――ロアディールの下でも、そうやって懇願していたのか？ イルーシャ」

カデイスのその言葉に生々しい記憶が甦り、わたしは思わずびくりと体を震わせて彼を見る。

カデイスは不愉快そうに眉を顰めると、長椅子から立ち上がった。

「今日のところは帰る。……だが、覚悟しておけ、イルーシャ」

「……イルーシャ……」

「キース、戻るぞ」

キースが気遣わしげにわたしを見たけれど、カデイスに厳しい口調で声をかけられて諦めたように口を噤む。

やがて二人が出ていって、わたしはその場にくずおれた。

――イルーシャ、おまえは傾国の姫君だ――。

カデイスの残していった言葉が胸に突き刺さり、わたしは顔を覆って嗚咽を漏らす。

わたしだけしかない部屋の中、わたしはこれから起こることを思い、ただただ泣くだけだった。

41 政略と決断

——イルーシャ、俺はいずれおまえを抱く。

カデイスからされた宣言。

彼にお世話になっっているわたしには、もちろん拒否権なんかないんだろう。

これは、いつもの彼の愛情表現から来る言葉じゃない。わたしの容姿から来る無駄な争いを避ける意味もあるんだろう。

だから、彼のこの命令から逃げるのはただのわがままだ。でも、そう分かっててもわたしは——。

「陛下は酷うございますわ。イルーシャ様があんな目に遭ったばかりだというのに、そんなことをおっしゃるなんて」

泣いていたわたしから事情を根掘り葉掘り聞いてきたユーニスが普段カデイス鼻屑にも関わらず怒りを露わにした。

「わ、わたし、どうしたらいいのかわからないよ。本当はカデイスの命令に従わなくちゃいけないんだろうけど、こんないきなり言われてもカデイスのことそんなふうには見れないよ」

「イルーシャ様……」

みつともなくぼろぼろと涙をこぼすわたしをユーニスが気の毒そうに見てきた。

「……イルーシャ様、この件について他の求婚者様方がただ黙っているとは思えませんわ。ですからあまり気に病まれない方がいいですわ」

「……うん、ユーニスありがとう」

実際のところ、王であるカデイスの命令にあの三人が異を唱えられるとは思わなかったけど、わたしは彼女の気遣いに慰められてハ

ンカチで涙を拭いた。

それから、ユーニスが夕食をどうするか聞いてきたけど、いろんなことがありすぎてどうにも食欲がなかったので断った。

……今日は早めに寝てしまおう。ただの現実逃避かもしれないけど、わたしには今回の事は重すぎた。

わたしはユーニスに着替えを頼むと、早々にベッドに入った。

泣きながら眠りについたわたしは、また無意識に過去視を使っていたようだ。

王の執務室にカデイスとキースがいて二人で話し込んでいるのが見えた。

「カデイス、あの言い方は酷すぎるよ。今回の件で一番傷ついているのはイルーシャだよ。それを……」

「キース、黙れ」

カデイスがキースの言葉を無理矢理遮る。

「さつきは引いたけど、聞けないね。イルーシャの意思を無視して事を進めるなんて絶対反対だ」

キースが強硬に言い張った。いくらキースでも立場が悪くならないだろうか。

「反対なのは、おまえがイルーシャを好きだからだろう？ この件は個人的なものだけではなく国家の問題でもある。イルーシャがこのまま誰にも嫁することがなければ、いずれまた今回のような争いが起きるだろう」

ああ、やっぱりわたしは争いの種なんだ。ここはおとなしくカデイスの言うとおりにしたほうがいいのかな……。

「ふうん、カデイスは今のままでガルディアを守る自信がないんだ」「……なんだと？」

キースの挑戦的な言いぐさにカデイスが気色ばんだ。駄目だよ、

キース。カデイスを挑発しないで。

「イルーシャが争いの火種になるのを回避する方法なら、僕にもあるよ。僕が彼女を浚ってしまえばいいんだ。君がイルーシャを妃にしくても、僕が傍にいれば争い事から彼女を守れる」

わたしを浚うってキース、なに言ってるの？

「キース！ そんなことをすればたとえおまえだろうと容赦はしないぞ」

——ああ、二人ともお願いだからわたしのために仲違いしないで。キースもそんなことしたら人生滅茶苦茶になっちゃうじゃない。わたし、彼にそんなことになってほしくないよ。

それに、わたしそんなふうになら二人が争うほど、出来た人間じゃない。

「……分かってるよ。ただ、イルーシャを守るのは、君じゃなくてもいいってことだ。カデイスのそれはただの嫉妬だよ。いきなり思ってもいないところでイルーシャを奪われたから悔しいんだろ？」

キースの言葉にカデイスがぐつと詰まる。

「……確かにロアデイルに嫉妬していないと言えば嘘になる。だがキース、それはおまえもだろう？ おまえもイルーシャを汚した奴を殺してやりたいほど憎んでいるはずだ」

キースは溜息をつくと前髪をかきあげた。

「……そうだね。確かにあの王を自分の手で殺してやりたいと思っただよ。それをしなかったのは、ひとえにイルーシャが望まなかったからだ。イルーシャは人が死ぬのを良しとしないから」

「イルーシャは甘すぎる。いくら汚されたのが呪いのせいだとしても、そのきっかけを作ったのはロアデイル自身だろう。奴がイルーシャを浚わなければ、今回のような事は起こっていなかった」

キースもその点に関してはカデイスに同意のようで頷いていた。

「……ただ、イルーシャもウィルローに関してだけは、殺すことに反対しなかったね。まあ、あれだけのことをされれば殺したいほど憎いと思うだろうけど」

「奴はこれからこの国に仕掛けてくるだろうな。ウィルローにとつてはイルーシャは戦乱の為の絶好の餌になる。だから俺は命令を覆すことはせん」

「……結局は平行線なわけだ。でもねカデイス、僕はイルーシャが首を縦に振らない限り納得しないよ。君が彼女の意にそまない事をするなら、僕は本当に彼女を浚つてもいいと思ってる」

「キース！」

——駄目だよ、キース。あなたは順風満帆な人生を約束された人なのに。それじゃ、あなたおたずね者になっちゃうよ。

彼にそんな道を踏み外した人生をわたしのためにしてほしくない。やっぱり、わたしがカデイスのものになるのが一番いい気がする。それで、すべてが丸く収まるならいいじゃない。

……そういえば、以前カデイスに『おまえは政略というものが分かっていない』と言われたことがあったっけ。それがこういうことなのかもな、とわたしはなんとなく理解した。

日本でも、意にそまないことでも時にそれに従わなくちゃいけないことはたくさんあった。

でもわたし、この世界の王族の結婚に対して、すごく認識が甘かったんだ。

今回は子供を作るって大事だけど、国家レベルではこういう事も日常茶飯事として受け止めなきゃいけないんだろうな。

それからも二人の間で話し合いがあったようだけど、過去視はここで終わってしまい、わたしは深い眠りに引き込まれていった。

「久しぶりに庭園を散歩したいから、カデイスに許可もらいたいんだけどいいかな？」

翌朝ゆっくり起き出したわたしは支度をし終えてからシェリーに

聞いてみた。

「かしこまりました。陛下に窺って参りますわ」

心得たとばかりに頷いたシェリーはしばらくすると戻ってきた。

……また反対されたかなあ。そう思ったのはわたしの杞憂だった。

「陛下は許可することでしたわ。ただ陛下とキース様が同行することが条件でしたが」

……二人が同行ってことは、カデイスの子供を作ることに関して、わたしの気持ちを確認しておこうってことなんだろうか？

これはわたしの決断を聞いてもらうちょうどいい機会かもしれないな。

「分かった、了承する。カデイスにそう伝えて」

「かしこまりました」

再びシェリーがカデイスのところに窺いに行く後ろ姿を眺めると、わたしはそつと溜息をついた。

そんなわけで、わたしは四季を無視した色々な花が咲き乱れ、花びらが風に舞う庭園に立っている。

「わあ、相変わらず綺麗だねー！」

カデイスとキースを連れ たって久しぶりに庭園を散策しに来たわたしは、思わずはしゃいだ声をあげた。

「そういえばおまえがここに来るのは久しぶりだったな。窮屈だったか？」

「そんなことない、って言うって嘘になるけど、まあ、警護上仕方なかったし」

ちよつと苦笑しながらわたしはカデイスに返した。でもまあ、それでもちよつと過保護かなあって今でも思っただけだね。

「こんな息抜きもさせてあげられなくて悪かったね。でも今度からなるべく君の意向を聞くようにするから」

……キースが謝ることはなんにもないのに。すまなそうに言ってくるキースにわたしは首を振った。

「うっん、キースが謝るようなことじゃないよ。キース、忙しいのにわたしが色々振り回しちゃったし、わたしこそごめんね。でも今度からわがまま言わないように努力するから、わがまま姫ってあだ名は返上させてね?」

わたしがキースに頭を下げて謝ってからいたずらっぽく笑いかけると、彼はちよつと苦笑した。

「うーん、それは今後の君の言動を見てみないとなんとも言えないけど」

「大丈夫、とは絶対言えないけど、わたし今後は少し落ち着くようにするから」

「おまえが落ち着く? それは無理じゃないか?」

……せつかく人が決断したっていうのに、カデイス、あんたって人は。

思わずひきつりそうになる頬をわたしは髪の上から押さえた。風が出てきて髪が舞い上がるところだったのでちょうどよかったといえればいいのか。

「本当だよ、無茶なわがまま言わないようにするし、勝手に出歩かない。……カデイスの命令もちゃんと聞くよ」

失礼なことに多少疑わしそうにしていた二人がそこで固まった。

「おい、それは……」

「イルーシャ」

驚愕に瞳を見開いている二人に微笑むと、わたしは言った。

「わたしはカデイスの命令を聞く。おとなしく子供を産むよ」

42 騎士達の怒り

「本当か、イルーシャ！」

カデイスが喜色満面の態で、わたしの肩を掴んだ。

「う、うん。カデイス、痛いよ」

「ああ、悪い」

わたしが小さく抗議すると、カデイスは肩から手をどけて、今度はわたしを抱きしめてきた。

「イルーシャ、本当におまえが俺のものになるのだな」

「うん、いろいろ考えたけど、そうするのが一番いいのかなと思って」

「……イルーシャ、君は自分が犠牲になればいいと思ってるのかい？」

「キース？」

わたしは首だけをキースに回して彼を見る。その途端、カデイスの腕に力がこもってわたしは眉をしかめた。

「僕は反対だ。君がカデイスを好きだというならまだ納得するけれど、そうでないのなら到底認められない」

わたしを見つめてはつきりとキースが反対を口にした。

その思い詰めたような彼の瞳にわたしは息をのむ。

「キース、イルーシャが決めたことに口を挟むな。余計なことを言うんじゃない」

「キース……、わたし、自分のために誰かが酷い目に遭うの嫌なのだから、ガルディアの国民を守るために王であるカデイスのものになるのが一番いいんだよ」

「……ガルディアの国民は君にそこまで思われて幸せだよ。けれど、君は不幸だ」

「キース！」

カデイスがたまらなくなつたように怒鳴ったけれど、キースはそ

れでも身動きすらせずに、わたしを見つめていた。

「不幸かどうかはわたしが決めるよ。そのことについてあなたにどうこう言われたくない」

……心配してくれているキースに対して自分でも酷いこと言ってると思う。

でも、カデイスと結ばれることで必ずわたしが不幸になると決まったわけじゃないし、それに、いつか彼のこと好きになるかもしれないじゃない。

「……分かったよ。とりあえず、今は引いておく」

「イルーシャがこう言ってるんだ。今はと言わず、潔く諦める」

「君とは話してないよ、カデイス」

キースが冷たく言い放つと、二人の間で火花が散った気がした。

「え、えつと、わたしそろそろ戻ろうかな。二人とも付いてきてくれてありがとね！」

わたしはなんとかカデイスの腕から逃れると、慌てて言った。まだ庭園を堪能してないけど、こうなっては仕方ない。

わたし達はキースの移動魔法でわたしの部屋の前まで戻ってきた。

「イルーシャ」

わたしはカデイスに声をかけられてそちらを向く。

「今夜おまえを抱きに行く。今のうちに覚悟しておけ」

「え……」

こ、今夜！？ そんなにすぐ？

驚いて瞳を見開いていると、カデイスはわたしの腕を引いて、唇にキスを落とした。

「ちよつと、カデイス！」

キースや近衛の人もいるのに、なにをするの！

わたしが真っ赤になって抗議すると、カデイスは声を立てて笑った。

「このくらいでつべこべ言うな。後でいくらでも口づけるんだからな」

カ、カデイスってば、なに言ってるのー！？
あまりのことにわたしはつい涙目になる。

「……信じらんないっ、そういうこと平気で言わないで！」

わたしは慌ててとんでもない発言をするカデイスの前から逃げ出した。

わたしは自分の部屋のドアを後ろ手で閉めると、真っ赤な顔でするするとその場に崩れた。

「まあっ、イルーシャ様どうなされたんですか!？」

わたしの尋常でない様子に、部屋で控えていたシェリーが驚いて聞いてくる。

恥ずかしかったけど、わたしは正直に話した。

「カ、カデイスが今夜わたしの寝室に来るって……」

「ま、まあまああつ、大変ですわ!」

ユーニスから大体の話は聞いているとは思っただけど、シェリーは顔を赤くしておるおろと狼狽えた。

「わ、わたくし、リイナ様にお伝えしてきますわ!」

そう言うのと、シェリーは慌てて部屋を出ていった。

「今夜だなんて……どうしよう……」

わたしは赤い顔でふらふらと長椅子まで歩いていって腰掛けると、肘掛けに突っ伏した。

カデイスはわたしをいずれ抱くとは言っていたけれど、こんなにすぐなんて思わなかった。

わたしが軽く混乱していると、近衛騎士さんから、ブラッドとヒューの訪れが告げられた。

わたしはちよつと慌てたけれど、昨日助けてもらったお礼もほとんどしていないことに気づいて、二人を通してもらうことにした。

「二人ともいらつしやい」

わたしは二人から騎士の礼を受けると応接セットに座ってもらうように促した。

「昨日は助けてくれて本当にありがとう。それと、迷惑かけてごめ

んなさい」

わたしが頭を下げると、二人は少し慌てたようだった。

「イルーシャ様、頭をお上げください」

「イルーシャ様がお気になさることはなにもないですよ」

「でも、迷惑かけたのは事実でしょ？ おまけに妙な呪いまで受けて」

そういえば、この二人にもわたしが汚されたこと知られてるんだよね。

そう意識しだしたら、ものすごく恥ずかしくなつてわたしは涙目になりながら真つ赤な顔を両手で覆つて俯いた。

「イルーシャ様……」

「わたし……、あんなことになつちやつたのをみんなに知られて、恥ずかしくて申し訳なくて死んじゃいたかった」

「そんな、間違つても死にたいなんて言わないでください。あなたが汚されたことを知った時はもちろん衝撃は受けましたが、それでもあなたを愛する気持ちは変わりません。イルーシャ様、泣かないでください」

ヒューが真剣な声で言ってくるけれど、わたしは顔を覆つたまま首を横に振った。

「こんな生き恥を曝して、ガルディアにはもう戻れないと思ったよ。

……でも、戻つてきちゃったけど」

「……イルーシャ様はハーメイにいた方がよかったですか」

「そんなわけではないでしょ。ブラッド意地悪だよ」

わたしがぼろぼろと涙をこぼすと、ヒューが咎めるような口調でブラッドの名を呼んだ。

ブラッドは珍しく少し焦つた様子で口を手で覆うと、わたしに頭を下げた。

「すみません。これはあなたをひとときでも手に入れられたハーメイ国王に対する嫉妬です。あなたにこんなことを言うなんて、俺はどうかしてますね。イルーシャ様、どうかそんなにお泣きにならない

いでください」

そう言われて、わたしはなんとか涙を治めようと、ハンカチを取り出して目元に当てる。

「わたし……、あんなことになっちゃってみんなに合わせる顔がなかったの。軍を動かすような大事になっちゃたし」

「イルーシャ様が気に病まれることはないのですよ。あなたが他国に奪われればガルディアが動くのは当然の事です」

「そう、だね……」

ヒューの言葉にわたしは小さく頷くと、溜息をついた。

わたしがまた今回のようなことに巻き込まれれば、また国同士の戦争になる。それで国民の生活を圧迫したり、脅かしたりするかもしれない。今回は短期間で決着が付いたからまだよかった方なんだ。

「……イルーシャ様？」

「カデイスが言ってた。わたしは呪いがなくても傾国の姫君なんだって。……実際、ハーメイは滅ぶ可能性もあったわけだし、あなたが間違っていないよね」

「陛下がそんなことを」

二人は一瞬だけ顔を見合わせると、眉を顰めた。

「カデイスが言うには、わたしのこの容姿は争いの種になるんだって。このまま誰のものにもならないでいたら、また今回みたいな事が起こるだろうって」

「……陛下がそう言うからには、なにか根拠があるんですか？」

ヒューが考え込むようにして聞いてくる。

「ロアディールはまだわたしを諦めてないみたい。わたしを王妃にしたいって言ってるらしいよ。あと、トウルティエールがわたしを第三王妃にって言って来てるって。カデイスが断ったらしいけれど結構しつこいみたい。他の国からも輿入れの打診があるって」

「そうですか、トウルティエールが」

二人が難しい顔になって唸るように言った。

トウルティエールみたいな大国と戦争になったら、たとえガルデ

「イアだって今回の被害くらいじゃすまないだろう。」

「だから、カデイスはわたしに命令したの。俺の子供を産めって。汚されてもまだ間に合うからって。」

「……は」

ブラッドの瞳が驚愕に見開かれる。

「イルーシャ様、それは……」

ヒューが遠慮がちに聞いてくるけど、わたしがそれにどう答えたか聞いてるんだろうな。

「わたし、カデイスの命令を聞くことにした。だって、わたしのためにガルディア国民が傷つくなんて嫌だもの。たぶんカデイスのものになるのが一番いいんだよ。カデイスはガルディアの王だもの。きつと周辺諸国の驚異から守ってくれるよ」

まだ自分でも無理してるなーって思うけど、わたしは微笑んて言う。うん、わたし一人の人生で国民の幸せが買えるのなら安いもんだよね。

「——俺は納得できません！」

ブラッドらしくもなく、突然憤ったように立ち上がって叫んだので、わたしは面食らってしまった。

「……ブラッド？」

「イルーシャ様の弱みにつけ込むような陛下のやり方は到底承知出来ません。なぜ、あなたの意思を無視して命令などで押さえつけるのです」

「……俺もおまえの意見に同意するぞ、ブラッド」

底冷えのするような瞳でヒューが言った。……ヒュ、ヒュー、もしかしてキレてる？

「え、えと、二人とも落ち着いて？ まさかカデイスに抗議しに行こうなんて思わないよね？」

「そのまさかです」

「イルーシャ様、急で申し訳ありませんがこれで失礼します」

二人は略式の礼をすると、わたしの部屋を後にした。

王命ということですんなり納得して貰えればかり思ってたんだ
けど、こんな展開は予想外でわたしは呆然とする。
まさかこんなことになるなんて、どうしよう!？

43 覚悟

しばらく呆然としていたわたしは、やがてはつと気がつく、慌てて二人が向かったと思われる場所へ行った。

「イルーシャ、君はまた気軽に出歩いて……」

キースが呆れたようにわたしを見たけれど、今はそんなことを気にしている場合じゃない。

「だ、だって、こんな時に悠長に部屋になんかいられないよ」

カデイスの執務室には、わたしの予想通り、ブラッドとヒューがいた。キースもカデイスにまだ用件があつたらしく、まだ一緒にいたらしい。

「イルーシャ様、我々のことを心配してくださるのは嬉しいですが、警護のこともありますし、いきなり部屋を飛び出すのはまずいかと」
ヒューイが少し眉を顰めてわたしを見る。ブラッドにもお小言を頂いた。

「せめて近衛の者に声をかけてから行動されてください」

うああ、二人を止めにいったわたしが逆に怒られたよ。つい慌てて飛び出してきたのは確かにまずかった。落ち着くって言ったばかりなのに迂闊すぎるよ、わたし。

「ご、ごめんね。だけど、二人ともお願いだから思いとどまって」

「もう遅い。ブラッドレイとヒューイは、はつきりと俺に異を唱えたぞ」

カデイスが不機嫌そうに眉間に皺を寄せて言う。……ああ、恐れていたことが起こってしまった！

「イルーシャが俺のものになるのは、国のためだ。それを反対するというからには二人ともそれ相応の覚悟はあるんだろうな？」

「もちろんです」

「愛しい方が犠牲になるのをただ見ているだけなんて我々には到底出来ません」

厳しいカデイスの言葉にも動じずに、二人は真摯にカデイスを見つめて言う。

「そ、そんなこと言っちゃ駄目だよ、二人とも！」

「……そうか。それだけの覚悟があるのなら、おまえ達を処罰する」カデイス、それじゃただの暴君だよ！ ああ、こんな事態になるのだけは避けたかったのに。

「……やめてよ！ わたしはおとなしくカデイスのものになるって言っただけじゃない！」

わたしは泣きそうになる自分を叱咤しながらカデイスに抗議するけど、カデイスはそのことも気に入らなかったみたいだ。

「イルーシャ、おまえはこの者達に心を砕きすぎだ。この二人は国を守るための騎士だぞ。それを忘れて王命を遮ろうとするなど、言語道断だ」

「……僕は二人の意見に同意だけどね。カデイス、君はこの件で王の権威を振り回しすぎだよ。そんなんじゃ、肝心のイルーシャに嫌われるよ」

「なんだと」

カデイスはキースを睨んだけど、一瞬不安になったのか、わたしを見てきた。

「わたし、こんなカデイスは嫌い」

「イ、イルーシャ……」

頷いてきつぱりと言い切ったわたしにカデイスがうろたえる。

だってこんな酷すぎる。これじゃ、初めて会った頃のカデイスのイメージに逆戻りだよ。ただ違うのは、カデイスがわたしを好きだっただけだ。

「カデイスがこんなんじゃ国自体が乱れちゃうよ。ガルディアを守りたいのに、わたしの決意はなんだったの？」

そう言ってる間に、わたしはどうにも涙が溢れてきて止められなくなってしまった。

「イルーシャ……」

「お願い、カデイス。わたしなら、いくらでもあなたに抱かれるから、どうか思いとどまって」

「イルーシャ！」

「イルーシャ様！」

三人がなんてことを言うんだというように叫んだけど、わたしはこの事態を収めるのに必死だった。

「……その言葉に二言はないな、イルーシャ」

真偽を確かめるようにカデイスがじつとわたしを見つめてくる。わたしはそれに泣きながら頷いた。

「うん、カデイス」

わたしの身一つでガルディアが安泰になるならそれでいい。だから、どうかみんな冷静になってほしい。

「イルーシャ、こちらへ来い」

「うん」

カデイスの言葉にわたしは素直に従う。寄り添ったわたしをカデイスが折れるほどの力で抱きしめてきた。

わたしはそれに思わず仰け反ってしまいながらも、カデイスに懇願する。

「カ、デイス、お願いだから、この件で誰も罰さないで」

「分かった」

カデイスは熱情が溢れるような瞳でわたしを見ると、深く口づける。わたしは息をのむ三人の前で何度も角度を変えてキスされて、いろいろな意味で目眩がしそうだった。

「今夜まで待つつもりだったが、もう我慢ならん。イルーシャ、今すぐ俺のものになれ」

「……うん、カデイス」

ものすごく恥ずかしかったけれど、わたしは従順に頷いた。

「イルーシャ、駄目だ！」

「いけません、イルーシャ様！」

三人がわたしを心配して叫んでくる。……ああ、こんな時になん

だけど、本当にわたし彼らに好かれてたんだなあ。

「……ごめんね。わたしを好きになってくれてありがとう」

カデイスに抱き上げられたわたしは、彼らに頭を下げる。……少しでもわたしの気持ちが変わるといいけど。

絶句する三人を後にして、カデイスは執務室から部屋を通り抜け、寝室までわたしを連れてきた。

大切なものを扱うように、カデイスがわたしをそつとベッドに降ろすと、あの熱情が溢れる藍色の瞳でじつと見下ろしてきた。

「……俺のものだ、イルーシャ」

愛しげにカデイスの大きな手がわたしの髪を撫でたかと思ったら、カデイスがわたしの上に移動してきた。

「愛している」

なるべくわたしに体重をかけないように、カデイスが慎重にキスしてくる。

……カデイスも俺様で時々行きすぎるけど、わたしを好きなことは本当なんだよね。

ああ、でもこんなことになる前にお風呂に入っておきたかったなあ。……でも無理だよ。ちらりとカデイスを窺うと彼は全く気になつてないみたいだ。

……それにしても、恥ずかしい。

自分でもいきなりこんなことになるなんて全く想像してなかったよ。

カデイスと目が合うと、わたしは今更ながら真っ赤になって緊張する。

「そんなに堅くなるな」

カデイスが苦笑するけど、どうしても身構えてしまうのはしょうがない。

わたしは襲ってくる恥ずかしさを堪えながらカデイスの啄むようなキスを何度も受けていた。

ロアデイルに汚されたことで、少しは耐性がついたかと思った

けど、あの時は呪いの媚薬効果で、羞恥がそれほどでもなかったことに気がついた。……ああ、なんで今気づいちゃうかな、わたしってば。

カデイスのキスは軽いものからだんだん深いものに変わっていき、わたしの唇をカデイスの舌が無理矢理こじ開けた。

「ん……あ」

カデイスの舌がわたしの舌を軽くつつく。

カデイスはわたしの反応を見ながら、今度は舌の裏側を撫でてきた。

思わずびくりとして、カデイスの服を掴むと、カデイスはなぜか嬉しそうにわたしが反応したそこばかりを責め立てた。

「カ……、んん……っやあ……っ」

何度も痙攣する体が恥ずかしくて、わたしは思わず涙目になる。

キスされたままカデイスの片手がわたしの胸に置かれると、ドレス越しにゆっくりと揉まれる。

「ひゃ……んっ」

思わずびくりと仰け反ったわたしに構わずに、カデイスはそのまま胸を揉みしだきながらその中央を摘んだ。

「ふあ……っ」

もう一方の胸も同じようにされて、わたしは妙な感覚に耐えきれずに身を振る。

「……おまえのこんな姿をロアディールも見たかと思うと、嫉妬で気が狂いそうになるな」

ようやくカデイスに唇を離されたけれど、相変わらず胸は弄ばれたままだ。

「カデイ、ス……ッ、それ、やだあ……っ」

相変わらず体の痙攣は止まらないし、恥ずかしくて死にそうになりながら訴える。

「そうか、これがいいのか。おまえは敏感だな」

「いやあああ！」

嬉しそうにカデイスにそう返されて、わたしは思わず心の中で叫んだ。

「い、意地悪……っ、ああ……っ」

カデイスに抗議しようとしたら、恥ずかしい声まで出てしまって、わたしは耳まで真っ赤になる。

「そんな可愛い反応をされると、もう我慢できんな」

そう言ってカデイスは愛しそうにわたしの唇にキスを落とす。

カデイスがわたしの身をそっと起こし、ドレスの背に手をかけた。カデイスがドレスを脱がしにかかっていることに気がついて、わたしは彼の肩に赤くなつた顔を埋めた。

「やだぁ……っ」

覚悟していたことだけど、やっぱり恥ずかしいものは恥ずかしい。「イルーシャ、あまり煽るな」

カデイスが苦笑する気配がしたけど、わたしにそんなつもりは毛頭ない。

わたしはあまりの恥ずかしさに震えながら、カデイスにされるがままその時を覚悟した。

44 自己嫌悪を抱えて目覚めた先は

カデイスはドレスの背中の鉤ホックを上から徐々に外していく。わたしは薄い下着姿にされて、またベッドに横たえられた。

上の下着はリボンで止める形式で、カデイスは、唇と手でそれを解いていく。

わたしはカデイスの顔を見ていられなくて、真っ赤になって顔を逸らした。

リボンを解ききったカデイスが上の下着を開いて、わたしの体を見下ろす。

「……綺麗だ」

「きゃ……っん」

彼に胸の中央を口づけられて、わたしはびくりと体を反らした。

——恥ずかしい。恥ずかしい。恥ずかしい。

「んん……っ」

カデイスに直に胸を弄ばれて、わたしは声を堪えるのに必死だった。

「イルーシャ、声を我慢するな。おまえの声を聞かせろ」

「や……あ、そんな、恥ずかしい……っ」

わたしは首を横に振って、なんとかこの羞恥から逃れようとした。なんとか我慢しなければと分かっているけれど、出来れば逃げ出してしまいたい——。

そう思った途端、わたしの目の前が一瞬真っ白になった。

——最初に目に入っしたのは銀色。

髪の毛だろうか、まっすぐに綺麗な長い髪。

それから白い塔が見える。あれは確かわたしが目覚めた月読の塔だ。

塔のベッドにわたしは横たわっていて、傍に誰かいる気配がした。

……そこにいるのは、誰？ 長い銀の髪――。

「イルーシャ！」

カデイスの叫び声でわたしははっと我に返った。

気がついたら、わたしは既に下の下着だけの姿にされていて、恥ずかしさから真っ赤になる。

そうだ、わたしカデイスに抱かれるところだったんだ。

「……イルーシャ、おまえはこんな時に過去視を使うほど俺に抱かれるのが嫌か」

わたしがしたことはかなり失礼なものだ。当たり前だけど、相当不愉快そうに詰問してくるカデイスにわたしは慌てて謝罪する。

「ご、ごめんなさい、カデイス。わたし、ちゃんとあなたに抱かれるから」

「……もういい。俺は人形を抱く趣味はない」

……え。

カデイスは不機嫌そうに前髪をかきあげると、ベッドから降りた。

「カデイス……？」

「イルーシャ、おまえに俺のものになれと命じても、肝心のおまえがそんなふうに逃げるのなら無意味だ。……俺はおまえへの命令を取り消す」

そう言つと、カデイスは寢室のドアを開けて出ていった。

たぶん、カデイスは執務室に向かったんだろう。

……どうしよう、あれは絶対にカデイスを傷つけた。

いくら恥ずかしかったとはいえ、よりによってあんな時に過去視を使ってしまうなんて、わたしはなんてことをしてしまったんだろう。

シーツを胸元まで引き上げて呆然としていたら、寢室の扉がノックされてリイナさんが入ってきた。

カデイスにわたしの支度を手伝うように申しつけられたのかな。

「イルーシャ様、着付けをお手伝いしますわ」

「は、はい。お願いします」

……とりあえず、カデイスに失礼なことをしたことはきちんと謝らないと。

わたしはリイナさんに手伝ってもらってドレスを着ると、リイナさんを伴ってカデイスの執務室まで行った。

そこには相変わらず、キース、ブラッド、ヒューの三人と、ものすごく不機嫌そうなカデイスがいた。

「イルーシャ」

「イルーシャ様」

カデイス以外の三人がわたしの顔を見て、安堵の息を漏らす。

「カデイス、あの……失礼なこととしてごめんなさい」

わたしは彼に対して頭を下げた。

「もういい。おまえに無理強いしても無駄なことがよく分かった。心が伴うまではおまえには手を出さん」

「……ごめんなさい」

わたしは再び頭を下げる。カデイスだけでなく、他の三人にも。

「……わたし、ずるい選択をしたの。わたしは誰も選べない。だからカデイスの命令を聞くことで、それから逃げたの。自分で考えて行動するよりも、誰かの命令を聞く方が楽だから。でも、いざとなったら、それも怖くて逃げちゃったの。……わたし、最低だよね」
言ってて自分が情けなくて、わたしはぼろぼろと涙をこぼしてしまった。

「イルーシャ、そんなに自分を責めないで」

キースが慰めるように言ってくるけど、そんなにわたしを甘やかさないでほしい。

「いきなり誰かを選べと言っても、それは無理でしょう」

ヒューがそう言ってくるけど、わたしは緊急に誰かを選ばなくちゃいけないんだよ。

「わたしは、あなたが無理に選ぶことがなくなっただけです」

ブラッド、でもこのままわたしが誰も選ばなかったら、またハーメイの時のようなことが起こるかもしれないんだよ。

「わたし……このままじゃ、またガルディアに災厄を起こすかもしれない。カデイス、そうなる前にわたしを幽閉して」

「……なにを言っている」

わたしの言葉にかなり驚いているらしく、カデイスが瞠目する。

「だって、わたしは人前に出ない方がいいんだよ。カデイスもわたしのこの容姿は争いの元になるって言ったでしょう」

「俺がおまえにそんなことを出来るわけがないだろう」

「……じゃあ、わたしを月読の塔に封印して。キースなら出来るでしょう？」

わたしの言葉に一瞬四人が絶句する。

「馬鹿なことを言うな。そんなことは到底聞けない。キース、イルーシャの言葉を聞くな！」

カデイスがそう叫ぶとキースは頷いた。

「……もちろんそれは聞けないよ。君を封印するということは、もう二度と君に会えないってことだ。とてもじゃないけど、それは出来ない」

とても厳しい顔でキースが言ってくる。彼を説得するのは難しそうだ。

「イルーシャ様、必ず他国が侵攻してくるとは決まったわけではないのです。ですからどうか思い詰めるのはおやめください」

ヒューが真剣な顔で言ってくる。

それはそうだけれど、可能性が全くない訳じゃないでしょう？

「そうなくても、我々が敵を退けますよ。そのための騎士です。イルーシャ様は心安らかにしてお過ごしください」

ブラッドがわたしを安心させるように言ってくるけど、でもわたしは。

「そんな……無理だよ。わたしは、自分のせいで犠牲になった人達のことを知ってしまったのに」

わたしは涙が止まらなくなって、顔を覆って、首を振る。

わたしはそのまましばらく泣いていたけれど、こんなんじゃ駄目だと自分で思い直して、ハンカチで無理矢理涙を拭って顔を上げた。

「……わたしは誰かに守られてるばかりじゃ嫌なの。なんで、わたしの能力が過去視だけなのかな。国どころか自分の身も守れないなんて悔しいよ」

「それなら、君に防御壁と魔防壁を教えるよ。それだけで大分違うはずだよ」

キースのその言葉に、わたしは目を見開いた。

「……本当に？　わたしに魔術を教えてくださいの？」

「うん、今の君の魔力なら、そう無理もせず覚えることが出来るはずだ。……だから、あまり思い詰めないでほしい」

キースはそう言ったけど、それでも、他国から攻めてこられたら、国民に犠牲が出るのはどうしようもないんだよね。

でも、キースの気遣いは嬉しかったし、魔術はこれから先必要になるものだから、覚えなければならぬだろう。

「うん、ありがとう……」

みんなこんなにわたしを心配して、いろいろと手を差し伸べてくれる。

こんなによくしてもらってるのに、なんでわたしは誰も選べないんだろう――。

かなり自己嫌悪に陥りながら、わたしは四人にまた頭を下げる。

「いろいろごめんね。わたし、もう自分の部屋に戻る。……カデイス、本当にごめんなさい」

「謝るな。おまえに謝罪などされると自分が虚しくなる。おまえはしばらくこの話題を出すな。俺もおまえに手は出さん」

「うん……」

カデイスに言われて、わたしは消沈する。

さんざん期待持たせたあげく、拒絶するような真似して、わたしのしたことつて、すごく残酷だよ。カデイスには本当に悪いことしちゃった。……それは心配をかけた三人にも言えることだけだ。

わたしはリイナさんに連れられて、自分の部屋に戻ってきた。

「イルーシャ様、あまり気を落とされないでください。無理矢理ご自分の気持ちを納得させて事を運ぼうとしても、必ずどこかで歪みが生じますわ。いずれ時が来ればどなたかと本当に結ばれたいと思われるようになられます」

「うん……」

……そうだといいんだけど。

わたしはリイナさんに淹れてもらったミルクティーを飲みながら頷いた。

とりあえず、わたしはなるべく厄介事を招かないように大人しくしていよう。

その後、わたしはまた読書や過去視の訓練をしながら過ごした。キースは魔術を教えてくれるって言うていたけど、彼は忙しいらしくてそれはまだ無理そうだ。

わたしはなんとなく気が焦って、夕食とお風呂を済ませた後もベツドの上で過去視の訓練をしていた。

あまり的中率もよくないし、もう切り上げようかなと思っているうちに、ふと疑問が沸いてきた。

そういえば、カデイスの寝室で見た過去視はなんだっただろう。はつきりとは見えなかったけど、長い銀の髪を持ち主は、たぶん男性。

それに、横たわっているわたしが見えたってどうということなんだろう。

「まあ、イルーシャ様、あまりご無理をされなくてください。もうお休みになられた方がよろしいですわ」

シェリーにそう言われて、わたしはかなり長い間そうしていたことに気が付いた。

「あ、ごめんね。もう寝るから」

「はい、おやすみなさいませ」

カードをシェリーに預けて、わたしはシーツに潜り込む。
するとすぐに眠気がやってきて、わたしは簡単に眠りに落ちた。

柔らかい灯りが部屋に満ちている。

朝かなあ、起きなくちゃ。

わたしは寝返りを打ちながら、目を開ける。

「な……っ」

すると、すぐ傍で驚いたような聞いたことのない男性の声がある。

ちよつとなんで、わたしの寝室に男がいるの？

わたしは驚いてベッドから身を起すと、長い銀髪の男の人が藍色の瞳を見開いて目の前に立っていた。こんな時になんだけど、この人とても綺麗な顔立ちをしている。

「だ、れ……？」

気が付いてみれば、ここはわたしの部屋じゃなくて、もしかしたら、あの月読の塔じゃないだろうか。

「……わたしはアークリッド。この国の王だ」

「え……」

にわかには信じ難い言葉が返ってきて、わたしは驚いて目の前の彼を見返す。

それは五百年前の古の王で、高名な魔術師で……。

確かに肖像画で見た顔だけど、でも嘘だよ、こんなこと。

「塔の境界が消えたので、わたしはここに来た。そうしたら、おまえがここで眠っていた。……おまえは何者だ」

この国の王と名乗った目の前の男性が、不審そうにわたしを問いつめる。けれど、わたしはうろたえず、それに答えるどころじ

や
な
か
っ
た。
。

——アークリッド、それはイルーシャの夫の名だ。

45 銀の王(1)

イルーシャが月読の塔に五百年以前も入ってたなんて初耳だ。
がんがんする頭を押さえながら、わたしはアークリッド王に答え
た。

「……わたしはイルーシャです」

「なぜこんな所にいる。見たところ封印をされていたようだが」

「なぜここにいるのかは分からないです」

「……記憶を失っているのか？」

「ええ、まあ、そんなところです。所々記憶が残っていたりもする
んですけど」

これでこの王に納得してもらえただろうか。まさか、精神だけ未
来から来たとは言えないし。

「……不審な女だな」

当然納得できないというように、アークリッド王がわたしを胡散
臭そうに見る。

……まあ、その態度は当たり前だと思うよ。わたしが彼でもおか
しいと思うもん。

私が小さな溜息を漏らしていると、アークリッド王は、私の胸元
付近に指を伸ばした。

「え、え……？」

「なにもしない。睡蓮の呪いの残留があったから、それを抜ってい
ただけだ」

「……わたし、呪いにかかっていたの？」

「ああ、だが既に消えている。心配することはない」

と、言うことは、この塔に入る前に睡蓮の呪いにかかっていたっ
てことだよね。……だからこの塔に封印されたんだろうか。

わたしが口元を押さえて考え込んでいると、アークリッド王は移
動魔法を使ってきた。

移動した先は、たぶん王の執務室。

「ルドルフ、白きの塔の結界が消えた。この女は塔に眠っていた女だ」

アークリッド王がルドルフと呼んだ人は四十代後半、なんとなく威厳があるところを見ると、この国の宰相だろうか。

「なんと……、どの魔術師もかなわなかったあの結界が消えるとは……それにしても相当に美しい方ですね。絶世の美女とはこういう方のことを言うのでしょうか」

興味深そうにルドルフさんがわたしをまじまじと見つめてくる。

「あの……、わたしこれからどうなるんでしょう」

「どうやら、姫君らしいですし、王宮で保護されるのもよいのでは。塔の姫君が目覚めたことで、我が国に良い経済効果をもたらすかもしれない」

経済効果って……。キースもそうだけど、なんでこの国の人はこういう発想ばかりするんだ。

「あ、あの……できれば、わたしは外に出ていきたくないんですけれど」

「なぜだ」

アークリッド王が、不思議そうに聞いてくる。

「……ある人に言われたことですが、わたしは傾国の姫君になりうるそうなんです。ですから、あまり人前、それも諸外国の方の前には出たくありません」

諸外国から妃にと望まれて、それで戦争なんて起こったら困る。

だから、わたしはやたらと姿を見せない方がいいだろう。

「……それと、出来ましたら、わたしを幽閉していただけると助かるんですが」

「……なにを言っている」

アークリッドがわたしの言葉に瞳を見開いた。

「わたしは誰にも会わない方がいいんです。実際に私を巡って大きな争いに発展したこともありますし」

「……それは、おまえの記憶の中での話だろう。ガルディアは魔法大国だ。そうやすやすと諸外国に攻め込まれるとは思えない」

……そうは言っても、五百年後の世界で、国境の砦に攻め込まれちゃったんだよ。

「……まあ、いい。イルーシャと言ったか、おまえを幽閉などしないし、しばらくはこの王宮でゆっくりしているといい」

わたしはアークリッド王の言葉に瞠目した。

「こんな得体の知れない女を王宮に置くんですか？ それは少し無謀ではないでしょうか」

「おまえになにかができるとは思えないが。問者ならもつとうまく立ち回るだろうしな」

うつ、その通りなんだけど、この王様、結構口が悪いよ。

「……でも、わたしは不完全ですが、過去視が使えますよ。自分ではコントロール出来ませんが」

わたしがそう言っていると、アークリッド王はまじまじとわたしを見つめた。

「……過去視か。それは変わった能力だな。今までにどんなものを見た」

「え、と、それは戦況やその被害状況ですとか、周囲の様子とかですね。自分で見ようと思って、発動できないのが悔しいですが」

わたしが顔をしかめてそう言っていると、アークリッド王は少し考える仕草をした。

「……そうか。もしかしたら、おまえの能力は我々の役に立つかもしれない」

「はい？ ……もしかして今ここでは戦争が起きているんですか？」

「戦争というか、トゥルティエルとの国境付近の小競り合いだな」

「あれ、ハーメイはないんですか？」

確かトゥルティエルとガルディアの間にはあの国が挟まれている

たはずだ。

「……ハーメイ？ そんな国はないぞ」

アークリッド王がなにを言ってるんだという顔で見てきたので、わたしは自分がとんでもない間違いをおかしたことに気がついた。そうか、まだこの時代にはハーメイはないんだ。まずいまずい、すっかり自分のいた時代のこと話しちゃったよ。

「あ、あれ、記憶違いかな……？ ごめんなさい、わたしの勘違いだったみたい」

すっかりうるたえながら、わたしはアークリッド王に頭を下げる。……今まで気が付かなかったが、おまえ、口調が姫君らしくない」

まじまじとアークリッド王に見つめられて、わたしは自分の口調が元に戻っていることに気が付いて慌てて口を押さえた。

「ご、ごめんなさい！ あ、いえ、申し訳ありません、アークリッド王！」

うああ、一国の王に町娘そのものの口調で話しかけちゃったよ！これがカデイスとかロアデイルあたりなら気にしないんだけど、わたしが自分の迂闊さに頭を抱えていると、やがて小さく噴き出す音が聞こえた。

見ると、アークリッド王が声を殺して笑っている。……とりあえず、それほど厳しい人でなくて良かったってことなんだろうか。

「……いや、そのままの口調でかまわない。姫君の作法も出来ているようなのに、おまえはおもしろいな」

そう言っただけで笑いかけると彼の藍色の瞳が意外なほどに優しくなる。

わたしはそれになんとかときりとしながらも、しどろもどろになっただけで言った。

「で、でも、一国の王に普段通りの口調なんて無理です」

「王であるわたしが許可すると言っている。……それと、わたしのことはアークリッド、もしくはアークでいい」

「え……」

びつくりしてわたしが彼の顔を見ると、彼がふつと優しく笑った。その様子に、わたしの心臓がまた飛び跳ねる。

ど、どうしちゃったの、わたし……？

「で、でも、あなたのことを呼び捨てになんてできません」

「……おまえは結構強情だな。わたしが許可すると言っているだろう。もちろん、これは周りの者にも徹底させておく。それで問題はないだろう。……わたしもおまえのことをイルーシャと呼ぶがそれでいいか」

「は、はい。それはもちろん」

王である彼にここまで言われたら断れない。わたしはおずおずと頷いた。

「それでは早速わたしの名を呼んでみる」

「ア、アーク？」

「ああ」

わたしが名を呼ぶとまた彼が微笑んだ。すると、再びわたしの動悸が激しくなる。

こ、これは、絶対に変だ。

これじゃ、まるでわたしがアークに気があるみたいじゃない。

今まで彼以上の美貌を持つ人ならヒューがいたし、同じ系統の顔ならキースがいた。

……それなのに、そんな馬鹿なことあるわけじゃない。

わたしは無理矢理自分を納得させると、アークに気になっていたことを質問してみる。

「それで、わたしの処遇はどうなるのかな？」

「ああ、おまえはわたしの客人扱いということにする。それから、おまえをあつたに眠っていた姫君として扱うかはこれから検討する」
もしかなくても、これって特別待遇だね。こんな身元も分からない不審な女をこんなに丁寧に扱ってくれるなんて信じられない。
「そんな、悪いよ。そんな特別待遇にしてくれなくてもいいから！」

「いや、これは警護上の問題もある。おまえのその美貌だと、貴族どもの格好の餌食になる。そうなりたくなければ、素直に承諾しろ」
そう言われて、わたしはちよつとぞつとしてしまって、自分の体を抱きしめた。ほんの少しだけど、ロアデールに襲われたときのこととも思い出しちゃったよ。

「……陛下、女性を脅されるのはどうかと思われます。イルーシャ様、震えていらっしゃるではないですか」

ルドルフさんに諫められて、アークがわたしの顔を見る。彼は眉を顰めるとわたしに近寄ってきた。

「……すまない。そんなに脅すつもりはなかったんだが」

そう言つと、アークはわたしの瞳に浮かぶ涙を指で拭つた。

それだけでまたわたしの心臓が飛び跳ねる。それを隠すようにわたしは慌ててアークから離れて言つた。

「わ、分かつた。警護上の問題なら仕方ないよね」

アークは避けるように離れたわたしを驚いたように見ると、苦笑した。……ああ、あまりにもあからさますぎたかなあ。せつかく心配してくれてるのに、ちよつと罪悪感。

「ああ、おまえには警護の騎士と侍女も付けて万全の体制を取る。

だから、ここで安心して過ごせばいい」

「うん、ありがとう」

わたしは出来るだけのことをしてくれているアークに感謝して頭を下げる。

わたしが長い間結界に阻まれていた塔に眠っていた姫だったからか、はたまた、わたしの能力が特殊だったのがその理由なのかは分からないけれど、特別待遇で王宮に滞在することになってしまった。もしかしたらみんなに心配かけてるかもしれないし、本当は早く五百年後の元の体に戻らないといけないんだけど。

けれど、なんとなくもうちよつとこの世界にいてもいいかななんて思つてる自分もいて、その思考のおかしさに愕然とする。

わたし、この世界に来てからなにかおかしい気がする。そう思う

わたしの視線の先にはアークがいた。すると、彼と目があって、わたしは慌ててアークから目を逸らす。

……わたし、本当におかしい。いたい、わたしどうしちゃったの？

46 銀の王(2)

それから、わたしはアークの部屋からほど近い客間に通された。
……この部屋の位置関係、なんだかカデイスとわたしの部屋に似ているなあ。もちろんこの時代から相当の年月がたっているから、城の中も改築や改装を繰り返されているんだけど。

わたしにはシンシアとエレーンという若い侍女がつくことになった。後で知ったんだけど、ガルディア王国では伝統的に貴婦人に侍女が付く時は大体二名ずつ配置されることになっているらしい。

わたしは二人にお風呂に入れてもらって、この時代のドレスを着付けてもらった。

「まあ……、イルーシャ様、なんという美しさなんでしょう」

「まるで、女神のようすわ」

「ありがとう」

こういう賞賛は今までさんざんかけられているので慣れている。

正しくは慣らされたと言っべきか。

わたしがにつこりと微笑むと、なぜか二人はその頬を染めた。支度を終えたわたしは、ここにも庭園があると二人に聞いた。正直そこに行きたかったけど、今までさんざんトラブルに巻き込まれてきたので一応自重した。

庭園に行く時はアークに許可をもらってからにしよう、うん。

わたしはこの時代のことを知るために、世界情勢の本と、過去視の練習用のカードを用意してもらって部屋でおとなしく過ごすことにした。

……それにしても今回、わたしの意識が五百年前の世界で目覚めたのはひょっとして過去視の影響だろうか？

キースもわたしの魔力が急激に伸びたって言っていたし。

わたしが過去視の訓練をしていると、わたし付きの騎士の一人、ガルヴィン（例によって、さん付けで呼んだら恐縮されたので呼び捨て）がアークの来訪を告げてきた。

わたしは慌ててカードをまとめるとテーブルの隅に置いた。

「いらっしやい、アーク」

立ち上がった彼を迎えると、アークはテーブルを挟んだわたしの前の席に着いた。それを見てわたしも席に着く。

「……なにをしていたんだ？ 占いか？」

テーブルの隅に置かれたカードを見つけたアークが聞いてきた。

「カードの図柄を当てる過去視の訓練。まだ完全とはいかないけれど、かなりの中するようになってきたんだよ」

「そうか。……その方法は、魔術師から教わったのか？」

「うん、そう。わたしの能力を過去視と断定したのも彼で、かなりお世話になった人なの」

わたしがそう言うのと、一瞬アークが不機嫌そうに眉を寄せたような気がした。……あれ、見間違いかな？

「……そうか。魔術師としても優秀なんだな」

「優秀どころか、稀代の魔術師と呼ばれてたよ。他人の魔力を辿ったり、当たり前のように詠唱省略や無詠唱で魔術を施行してた。とにかく規格外な人だよ」

「……それはすごいな。それほどの魔術師はわたしも目にしたことはない」

魔術師でもあるアークがこう言うのだから、キースの能力はここでも桁外れなのだろう。わたしはなんとなく嬉しくなつてにこにこしてしまった。

「……そんなふう嬉しそうにしているところを見ると、その魔術師はおまえの恋人かなにかか？」

「はい！？」

思ってもいないことを言われて、わたしは驚いてしまった。アークを見ると、どこことなく不機嫌そうな顔をしている。

……あ、魔術師であるアークの前でキースの自慢みたいな言
って悪かったかな。ちよつと考えなしだったかも。

わたしは少し焦ってアークの質問に答えた。

「違うよ、友達。……一応彼に求婚はされていたけど」

「それなら友人とは言えないだろう。求婚者は求婚者だ」

友人ではないと断定するアークに、わたしは瞳を見開いた。

「そ、それはそうなんだけど、わたしにとって彼はあくまで友達だ
ったよ」

「その男が友人などという立場になりたいと思っていたとは思えな
いが。おまえがそんな思わせぶりの態度でいたら、相手にも失礼だ
ろう」

「あ、うん……、そうだね」

アークに指摘されて、わたしが今までしてきたことがいかに残酷
なことだったか、なんとなくだけど分かってきた。

「……うん、気をつけるよ」

「気をつけるもなにも、相手はもうこの世にはいないだろう。手遅
れだ」

た、確かに、キースはこの時代にはまだ生まれてないけど。それ
にしても、やけにさつきからアークにつっこまれてるんだよね。わ
たしの言ったことってそんなにまずいことだったのかなあ。

「もしかしてアーク、わたしかなり不快にさせちゃったのかな？
だとしたら、ごめんなさい」

わたしが彼に頭を下げると、アークは瞳を見開いて、片手で口元
を覆った。

「……アーク？」

「いや、なんでもない。それに余計なことを言ったようで悪かった」
アークが謝ってきたけど、なんでもないって言う割にはなにか考
え込んでいるんだよね。それがわたしに関することみたいだから余
計落ち着かない。

「アーク、わたしに悪いところがあるならはつきり言って。出来る

だけ直すようにするから」

悪いところって言ったら、この町娘口調とかもそうだね。ぜんぜん姫君らしくないし。わたしも少しは女らしい言葉遣いに修正したほうがいいのかもしれない。

「いや、おまえが悪い訳じゃない。……ただ、おまえは少しばかり男に対して警戒心が薄いようだな」

う、未来でもさんざん言われていたことをアークにも指摘されてしまった。

「あ、うん。分かった、気をつけるよ。……ところで明日の朝、庭園に散歩に行っていていいかな。もちろん、お付きの騎士は連れていくけど」

「ああ、いいぞ。その折りにはわたしが案内しよう」

アークがそう言ってきたことに少し驚いてしまつて、わたしは首を横に振る。

「そんな悪いよ。アーク、執務とかあるでしょ？ それを邪魔したら悪いし」

「わたしがいいと言っている。問題はない」

「……それならいいけど」

とりあえずアークの機嫌が直つたようなので、わたしは安心する。それから、わたし達は侍女さんにおかわりのお茶を持ってきてもらつて、しばらくたわいない話に花を咲かせていた。

そのうちに、まだ年若い宰相補佐と思われる人がアークを呼びにきた。

「陛下、油を売るのも程々にしてください。報告書が溜まっています」

アークと話しているうちは気にならなかつたけど、結構時間がたっていたらしい。

「アーク、気づかなくてごめんなさい。早く執務に戻つて。お仕事大変になっちゃう」

この辺りはカデイスを見ていたので、なんとなく報告書を溜める

と後が大変なことはわたしでも理解できている。

「……ああ」

アークは仕方なさそうに立ち上がると、ドアの前で振り返って言った。

「イルーシャ、晚餐は一緒に取ろう。わたしはおまえの話を聞いた
い」

「あ、うん。分かった」

わたしもアークの話を聞きたかったので、なんの迷いもなく頷いた。

すると、アークはふつと笑って「それではな」と言って部屋から出ていった。

その彼の笑顔で、また心臓が跳ね上がった気がして、わたしは胸元を押さえた。

本当にわたしおかしい。この動悸はいつたいなに？

……まさか、これが世間一般に言う恋？

わたしはそこまで考えて、首を横に振った。

——駄目だよ、彼だけは駄目。

このままわたしが彼を好きになって、もし彼がわたしを受け入れたりなんかしたら目も当てられない。

わたしはこの恋の結末を知っている。この先待っているのは悲劇だけだ。

伝承ではわたしはいずれ、他の魔術師に呪いをかけられ眠りにつかされる。

そうしたら、わたしは彼を残して月読の塔に封印されることになるんだ。

そして、アークは弟に王位を譲って三十代半ばで生涯を終えることになる。そんなに早く彼が亡くなったのは、月読の塔の封印で命を削ったからだとも言われている。

物事が伝承通りに進むとは思いたくないけど、わたしは彼に早死にしてほしくない。

だからわたしは間違っても彼を好きになつたりしてはいけ
ないだ。

だったら、アークにはわたしではなくて他の姫を娶つて
もらう方がいいのかもしれない。

……そう思つたけれど、それだけで胸が苦しくなるのは
なぜだろう？

わたしはテーブルの隅にやつたカードを取つて過去視の
訓練を再開したけれど、まったく身が入らず、考えるのは
彼のことがかりだつた。

47 銀の王(3)

過去視の訓練は諦めて読書することにしたわたしは、やっぱり身が入らない自分に嘆息していた。

そのうちにアークとの晚餐の時間がやってきて、わたしは彼と今向かい合ってぎこちなくナイフとフォークを動かしていた。

アークに感じる気持ちが恋じゃないかと気づいてから、わたしは彼の顔を見るのも一苦労だ。実際彼と話してて、自分が不自然に赤面したりしないかとはらはらし通しだった。

「……どうした、あまり食べないな。もしかして口に合わないのか？」

食の進まないわたしを心配してか、アークが声をかけてくる。わたしは慌ててナイフとフォークを動かした。

「ううん、そんなことないよ」

五百年後と比べたら、だいぶ料理は美味だけど、食べられないということはない。

わたしは鶏肉のローストを一口大に切って食してからおもむろに言った。

「……ああ、でもちょっと塩気が足りないかな」

他の料理も少し塩分を足しただけで、かなりおいしくなりそうなものにもつたいない。

「そうか、料理長にそのように伝えておく。言われてみれば、確かに塩が足りないな」

得心がいったようにアークは頷くと、笑顔をわたしに向けてきた。……お願いだから、その心臓に悪い笑顔はやめてほしい。

「おまえはおもしろいな。姫君の格好をしていて、その作法もなっている。それなのに口調は町娘そのものだ。今も姫君らしくなく、料理に塩が足りないと指摘する。まるで料理の心得があるようだ」

うん、実は出来るんだけどね。

日本にいた頃には両親不在が多くて、自然と自分で作ることが多かったし。でも実用一辺倒でお菓子とかはあまり作ったことはないんだよね。

ただ、この時代での調理器具で料理できるかは、はなはだ疑問だけど。

「……まあ、多少は料理は作ってたけど。……ただ、魚程度なら捌けるけど、さすがに動物を解体するのはちょっと無理」

スプラッタは出来ればごめん被りたい。

アークは驚いたようにわたしを見ると、ちよつと呆れたように言った。

「……本当に出来たのか。まさかとは思っていたがそこまで出来るとは。しかし、解体作業自体、おまえに見せようとするものはいないだろう」

うんまあ、厨房を時々借りていた五百年後の世界でもそうだったらしいんだけどね。

今更ながらわたしは彼らの心遣いに感謝した。

「今度厨房で料理作ってもいい？　ここでどんな評価もらえるか聞いてみたいんだけど」

「……ああ、まあ、いいが……、料理長にも話を通しておこう」

アークは苦笑したけど、それでもわたしの願いを聞いてくれた。

よかった。明日早速厨房に行ってみよう。

わたしがそう決心していると、アークに忠告された。

「ただし、護衛の騎士は部屋から出るときはどんなときでも連れていけ。厳選した騎士達だ。おまえに言い寄るおかしな輩もそう出るまい」

「うん、分かった。ありがとう」

わたしのこの見た目は災いの元になりうることは、すでに身にしみている。

よけいな火種は作らないに越したことはないものね。わたしはアークの言葉に素直に頷いた。

それからわたしは、いつ切り出そうかと迷っていた、彼に他の姫を娶ってもらうという作戦敢行に移ることにした。

「……ところで話は変わるけど、アークは結婚しないの？」

「なんだいきなり」

う、確かにいきなりだったかな。見るとアークが啞然としてる。

「アークって二十一なんですよ？ 周りが早く妃を娶れとかうるさくない？」

「まあ、たしかにうるさいが」

この世界の成人は十五なので、早い人はその歳でもう婚礼をあげたり、婚約なりしている。

カデイスは今のアークよりも少し上だけど、かなり貴族あたりからの突き上げが激しいらしいし。

「妃候補の姫とかいるでしょ？ アークは早く結婚した方がいいと思うな。跡継ぎとかの問題もあるだろうし」

わたしがそう言うのと、アークはむっとした顔になった。

ああ、わたし彼の不興をかつちゃったかな。……いやいや、この場合はその方がいいんだ。そうなれば、史実通りに物事は進まないだろうから。

そう思うのに、泣きたくなくなってくるのはなぜだろう。

「確かに妃候補はいる。しかし、わたしはそこから選ばうとは思わない」

「なんで？ 候補になっている姫をいつまでも待たすのも残酷じゃない」

求婚者から相手を選べないわたしがこう言うのも変だけど。

「……それは先程のわたしへの反撃か？」

「そ、そうじゃないけど」

わたしがしどろもどろになってなんとかそう言うと、アークは前髪をくしゃりと掴んで溜息をついた。

「わたしは重臣たちが決めた姫から妃を選ぶつもりはない。自分の伴侶は自分で選ぶ」

「そ、そうなんだ……」

彼が自分でそこまで決めているのなら、わたしがこれ以上なにか言っても無駄かもしれない。

わたしはアークが今のところ他の姫を娶ることはないことを知って、内心ほっとしていた。

そこまで考えて、わたしは自分がおかしな方向に安心していることに気づいて、首を横に振った。

駄目だよ。これじゃ駄目。このままじゃ、伝承通りに物事が進んでしまうかもしれない。

「で、でも、会って見るだけでもしてみたら？　そしたら、気も変わるかもしれないじゃない」

わたしはなんとかしてアークの気を変えようと必死だった。……その間も謎の心の痛みに悩まされたけれど。

「……今、わたしは断つただろう。家名だけが取り柄の姫に会うつもりもない」

「アーク、それは酷いよ。中には家名なんて関係なく、素敵な人もいるかもしれないのに」

「……どちらが酷いんだ」

アークはふと苦しそうな顔になって立ち上がるとわたしの傍まで来た。それでわたしも思わず椅子から立ち上がる。

わたしは彼が酷くつらそうなのが気になったけれど、なんとなく危機感を覚えて後ろの壁まで後退する。

「わたしにいきなりそんなことを言う、おまえはこの上なく残酷だ……」

苦しげな顔でアークはそう言うと、わたしの両側の壁に手を付き、顔を傾けてきた。

わたしは動けない。……だって、これって。

やがてアークの唇がわたしの唇に重なり、わたしは肩を彼に押さえられる。

「アー……」

抗議しようとして彼の名を呼ぼうとしたら、アークの唇にまたそれを阻まれた。

軽く触れるような先程のキスとは違って、今度は心の奥底まで揺さぶられるような深い深いキス。

ようやく彼の唇から解放されたわたしは、自分の唇を両手で覆った。

わたしは今きつと、涙目になって、みっともないくらい真っ赤になつて震えているだろう。

「……なんで……？」

「イルーシャ、わたしはおまえが好きだ。そのおまえに他の姫を娶れと言われたら、到底冷静ではいられない」

……アークがわたしを好き？

思つてもいなかったことに、わたしは息をのんだ。

「だ、だって、あなたとは今日会ったばかりじゃない。それなのに、いきなりこんなやつて酷いよ」

酷いと言いながら、同時にどこかで喜んでいる自分もいて、わたしは混乱しながら首を横に振った。

「時間は関係ない。わたしはやることなすこと他の姫とは違つおまえに惹かれた。出来ればおまえを妃に据えたい」

「そんな……」

真摯な瞳で見つめてくるアークをわたしは呆然と見上げる。

だって、だめだよ、このままじゃ伝承通りになつてしまう。

「わ、わたしは今から相当昔の人間で、姫君の身分なんてないよ？それを妃になんて無理だよ」

「身分などどうにでもなる。おまえをしかるべき貴族の養女にすれば問題はない」

そ、そうか、その手があつたんだ。それは身分の低い女性を妃に据えるときの常套手段だ。

「で、でも、わたしはあなたに会ったばかりだし、妃になるなんて考えられない」

「イルーシャ」

わたしがうるたえながらそう言うと、不意にアークに強い口調で声をかけられた。

わたしが彼を見ると、頬に手を伸ばされて、わたしは思わずびっくりとする。

「……わたしを好きになれ、イルーシャ」

熱い視線を浴びせられ動けないわたしに、再びアークは唇を重ねてくる。

「や……」

口づけの合間になんとかわたしは声を発しようとする。

「わたし、は、あなたを……すきになんて……っ」

その度にアークに唇を塞がれて、わたしは息も絶え絶えになる。

駄目だよ、絶対にあなただけは駄目。

喜びに震える心に抗いながら、わたしは否定の言葉を紡ぐ。
それでもアークの口付けは止まらない。

——嫌なら逃げてしまえばいい。

アークの胸を押し返してもいいし、そうそう出来るかは分からないけれど、過去視を発動させて意識を飛ばしても良かった。

そう思ったけれど、そのどちらも出来ずに、わたしはただ彼の唇を受けるだけだった。

48 受け入れ

「や、め……」

頭の奥がしびれた気がして、わたしの膝がかくんと落ちた。それをアークの腕が支える。

「イルーシャ」

アークはわたしを抱きしめると、その次には膝裏をさらって抱き上げた。

「ア、アーク？」

「大丈夫だ、なにもしない」

アークはそう言って、わたしをテーブル席まで運ぶとそこにそっと降ろした。

一瞬キス以上のことをされてしまうかとも思ってしまったわたしは赤面しながら俯く。

「……わたしは少し頭を冷やした方が良さそうだ。わたしはこれに戻る」

アークは食事途中なのに、わたし、なにか悪いことをしてしまったみたいだ。

「でも、アーク食べてる途中でしょ？」

「今は食欲はない。イルーシャ、おまえは食べられるようだったらそうしろ」

「……うん」

正直、わたしも食欲なんてなかったけれど、彼によけいな心配をかけてもなんなので素直に頷いた。

けれど、なぜかアークがわたしの部屋を出ていこうとしたとき、わたしは彼の服をとっさに掴んでしまった。

「イルーシャ？」

「あ！ ごめんなさいっ」

怪訝な顔でアークに見られて、わたしは真っ赤になって彼の服を

離れた。

……彼にこのまま帰ってほしくないと欲してしまうなんて、わたしどうかしてる。それで無意識に彼の服を掴んでしまうなんて。

「……そんな顔でわたしを見るな。齒止めがきかなくなってしまう」
顔が熱いから、真っ赤になっっているのは分かるけど、そんな顔で、今わたしはどんな顔をしているんだろう。

そんなことを考えながらアークを見つめっていると、彼は溜息をついた後、呪文を唱えてその場から消えた。どうやら移動魔法を使っただけらしい。

「……アーク」

一人取り残されたわたしは、なぜだか分からないけれどぼろぼろと涙をこぼしてしまった。

本当に変だ、わたし。

彼がいなくなった途端、寂しいと感じるなんて。

「……イルーシャ様」

それまで控えていてわたし達のやりとりを見ていただろうエレインがそつと声をかけてきた。

「あ……、ごめんなさい。もう食事はいいから片づけて」

わたしは慌てて手のひらで涙を拭くと、エレインに言った。

「かしこまりました。……あの、イルーシャ様、差し出がましい口をきくようですが、あなた様は陛下のことが好きなのでは？ 傍から拝見したらそうとしか思えませんでしたわ」

……わたしがアークを好きに見える？

わたしは驚いてエレインを見返した。

「……そう見えるの？」

「はい。先程のあなた様が陛下を見つめるお姿は恋する乙女そのものでしたわ。ですので、陛下に他の姫君を娶らせようとされるなんて解せません」

「それはアークとわたしは結ばれてはいけないから——」

そこまで言って、わたしは重要なことを見落としていたことに気

づいて愕然とした。

それは伝承通りに物事が進まない、アークは弟に王位を譲ることがないということ。

それは後のガルディア王家の系譜がまったく違うものになってしまふ可能性があるということだ。

たとえばカディスが生まれなかったり、その従兄弟であるキースも生まれない可能性があるんだよね。それは困るな、どうしよう。

わたしが口元を片手で覆って考え込んでいたのをエレーンはどう受け取ったのか、ちよつと勢いこんで言ってきた。

「身分のことならどうともなると陛下もおっしゃっていたではないですか。イルーシャ様は陛下と結ばれるべきですわ！」

「で、でもわたし、アークのこと本当に好きかどうか分からない」
うん、伝承でアークとイルーシャのことをさんざん聞かされていたから、それで彼に恋してるような錯覚をしているだけなのかもしれないし。

「なにをおっしゃいますか。イルーシャ様は陛下が他の姫君を娶ることを拒否された時、安堵されてらしたではないですか」

「そ、そう見えていたの？」

確かにほつとはしたけど傍目にもそう映っていたとは思わなかった。わたしは思わずエレーンの顔をまじまじと見つめてしまった。

「はい、明らかにそうお見受けしましたわ」

「……だとしたら、アークにもそう見えたかもしれないってこと？」

「いえ、陛下は少々苛立っておられましたし、その時はお気づきではなかったようですね。……でも、先程イルーシャ様が陛下を引き留められた時はさすがにイルーシャ様のお気持ちに気づかれたかと」

「そ、そんな……」

そうだとすると、わたしがアークのこと気になってるのばれられないの。これは恥ずかしすぎる。

わたしは熱くなる頬を両手で覆って俯いた。

「イルーシャ様、周囲の者がどう申しても、結局は陛下が決定されたことには誰も異は唱えられませんわ。ですからイルーシャ様は安心されて陛下との愛を育みください。微力ながらも、わたくしとシンシアが全力でお二方を応援させていただきます」

ぐつと拳を握ってエレーンが力説してくる。わたしはその勢いのせられるように思わず頷いて言ってしまった。

「あ、ありがとう」

あああ、これじゃわたしがアークを好きなこと認めたも同然だよ。でもなぜか否定する気にもなれなくて、自分でも訳が分からないことこの上ない。……けれど。

わたし、アークに結婚を勧めた時に彼の不興をかったと思って泣きそうになったんだよね。……つまり、それはわたしが彼に嫌われたくないと思っっているってことで。

そうなると、もうこの感情のことを否定できないだろう。

——どうしよう、わたし本当に彼のことが好きだ。

翌朝。わたしは初めての恋を自覚したことでドキドキして結局よく眠れないまま、朝の支度をすませた。

すると、しばらくしてアークの来訪が告げられて、わたしは慌てた。

でも拒否するわけにはいかないし、ドキドキしながらも彼を迎えた。

彼に付いている近衛騎士とわたしの警護担当のもう一人の騎士のジェラルドが居室の中に入ってきたので首を傾げていると、アークが説明してくれた。

「おまえを庭園に案内すると言っていただろう？　これから移動魔法を実行するから、彼らにも付いてきてもらった」

ああ、そういえば庭園を案内してくれるってアーク言ってたっけ。あれからいろいろとありすぎてすっかり忘れていた。

それなのに、彼はすっかり覚えてくれてたんだなあ。

「ありがとう」

わたしが微笑んで言うと、アークも微笑んでくれた。

その笑顔を見た途端にまたわたしの胸がきゅっとする。

……ああ、わたしアークのこの笑顔が好きだな。

一度好きだと自覚してしまうと不思議なことに、簡単にわたしはそれを認めてしまっていた。

わたしがアークに見とれているうちに彼は呪文を唱えていたようで、気がつくとなわたし達は花が咲き乱れる庭園にいた。

「綺麗……」

規模は五百年後より小さいらしいけど、それでも充分広くて美しい庭園だ。

わたしは近くの花の花弁にそっと触れると、そのかぐわしい香りにうっとりした。

「……気に入ったようだなによりだ」

アークは微笑むと、わたしをすぐ近くの東屋に案内してくれた。

「ここからの景色が一番美しく見えるように庭園を造っている。…

…イルーシャ、座らないか」

わたしはアークに勧められて、東屋に備え付けてあるテーブルセツトの椅子に腰を下ろした。その途端、それを待ちかまえていたかのように侍女達が現れてお茶の用意をしてくれた。

アークの言った通り、東屋からの眺めは絶景で、わたし達はお茶を飲みながらしばし無言で花々を鑑賞していた。

「……夕べのことだが」

ふいにアークがそう言ってきたので、わたしはカップを受け皿に置いて、彼に向き合う。

アークのその眼差しは真摯で、わたしは思わずどきりとしてしまう。

「な、なに……？」

ドキドキする胸を押さえながら、わたしは聞き返す。いつたい彼はなにを言う気なんだろう。

「わたしがおまえを妃に据えたいと言ったこと、考えておいてほしい」

彼の口から紡がれたそれは明らかに求婚の言葉。

「わ、わたし……っ」

わたしはかーっと顔に血を上らせると、言葉に詰まる。

なんというか、嬉しいのと恥ずかしいのが一緒にきて、涙まで浮かんできた。

ああでも、これは予想の範囲内の言葉なんだからちゃんと受け答えしなきゃ。

「わ、わたし、睡蓮の呪いを受けてたんだよ。その辺りの記憶はないけど、清らかかどうかも分からない。そんなわたしでもいいの？」

それでなくても、精神的には既に五百年後の世界でわたしはロアデイルに犯されている。

「構わない。おまえを過去に手に入れた者がいるかどうかについては、まったく気にならない訳ではないが、それはそれだ。わたしはおまえが既に汚れていようが正妃にしたいと思っている」

「……アーク」

ああ、もうだめだと思った。

彼のその言葉に、わたしの頬を涙が伝っていく。

「イルーシャ」

アークがすぐ傍の席に移動してきて、わたしの涙を指で拭く。

「アーク、わたしはあなたが好き」

わたしの告白にアークは一瞬瞳を見開いたけれど、次にはわたしは彼に抱き寄せられていた。

「イルーシャ、おまえが好きだ。愛している」

その愛の告白は、今まで受けた誰のものより何倍も嬉しかった。わたしは彼に抱きしめられたまま、初めての恋に身を任せていた。

アーク、わたしもあなたを愛してる――。

49 蜜月の前に(1)

「イルーシャ」

アークはわたしを膝の上に抱え直すと、瞼に口づけを落としてきた。

そしてそれは、頬から唇へと移動してくる。

「ん……アー、ク」

この時のわたしは傍にアークの近衛騎士がいるとか、わたしのお付きの騎士のジェラルドがいることも忘れ去っていた。

ただ想うのは、アークのことだけ。それだけだった。

やがてアークに唇を離されると、真剣な表情で確認された。

「イルーシャ、わたしの妃になってくれるな？」

わたしはすぐにもその言葉に頷いてしまったかった。……でも。

「……あの、その前にあなたにお願いがあるの」

「なんだ？」

アークはそこでわたしが即答すると思っていたらしくて瞳を見開いたけれど、ちゃんとわたしの話を聞いてくれようとしていた。

わたしは心を決めて、息を吸い込んで吐き出した。

「これから先、どんなことがあっても、わたしを月読の塔に封印しないで」

わたしのこの願いが思いもかけないことだったのか、アークは瞳目したけれど、やがて気を取り直したように言った。

「……あの白き塔は、月読の塔と言うのか？ それなら心配はない。わたしがおまえをあつた塔に封印するなどありえない」

わたしを安心させるかのようにアークは笑って言う。彼はそんなことにはならないと確信しているのだろう。

「……それならいいんだけど。でもお願いね」

「ああ、約束する。そもそも、おまえがそんな心配をする必要もない」

「……うん、そうだね。変なこと言ってごめんなさい」

でもこれで最悪の事態になった時、アークが塔の封印で命を削ることはなさそうだ。

わたしがほつと息を付いていると、アークはもう一度言った。

「これで、わたしの妃になってくれるか？」

わたしは一瞬うんと言いつうになつたけど、慌てて止めた。

プロポーズには、きちんと返したいものね。

「……はい。わたしで良かったら、喜んで」

わたしは瞳に涙を浮かべながらも微笑んで答える。

アークも微笑んで、わたしをぎゅっと抱きしめてくれた。

「イルーシャ、わたしのものだ」

「アーク」

わたしは彼にしがみついていたただ名前を繰り返す。

花びらが舞う庭園で、わたし達は時々口づけを交わしながら、しばらくの間抱き合っていた。

「陛下、そろそろお時間です」

軽い咳払いの後、アーク付きの近衛騎士さんがおもむろに言った。

「そうか、もうそんな時間か。イルーシャ、おまえはまだここに残るか？」

「うん、じゃなくて、ええ」

思わずいつも通りうんと答えてしまったわたしは慌てて言い直した。

「どうしたんだ、急に口調を変えて」

「あなたの妃になるなら、少しはそれらしく振る舞ったほうがいいのかな、……かしらと思って。わたしはあなたにふさわしくありたいの」

「わたしはおまえの口調がどうであろうと気にしないが。……だが、

おまえのしたいようにすればいい」

「……ええ」

彼がわたしの口調はどうでもいいというのは本心で言っているのだというのが伝わってきて、わたしは嬉しくて微笑んだ。

……でも町娘口調のことでアークが周りになにか言われたらとても嫌だし、わたしは王妃にふさわしくなるよう無理にでも口調を矯正することを決めた。

「それでは悪いが先に戻る。……イルーシャ、付いている騎士から離れるな」

「……分かったわ」

うつ、まだ口調に違和感が。かといって、そうすぐに慣れるものでもないで、これは気にしないことにした。

アークは立ち上がって彼の膝の上にいたわたしを椅子に座らせると、軽く唇に口づけてきた。

「それではな」

アークは優しい微笑みを残して近衛騎士さんと共に移動魔法で消えた。

わたしはしばらくアークの消えた地点を見つめていたけれど、そのままぼんやりしていても仕方ないので庭園を散策してこれからのことを少し考えることにした。

わたしはアークの妃になることを承知してしまったわけだけど、とりあえずアークの寿命を削る塔の封印はしないと約束できたわけだし、ひとまずは安心していいのかもしれない。

ただ、この先にわたしに横恋慕するという魔術師の存在には気をつけないといけない。

魔術師相手に利くかどうか分からないけれど、今後のためにもアークに防御壁や魔防壁を習っておいた方がいいのかもしれない。

あと、魔術師に会わないことを前提に考えるなら、今後の王家の系譜を変えない為にも、アークとの子供は作ってはいけなйдらう。

……果たしてこの時代にも避妊薬はあるのだろうかと考えたけれど、この辺りは侍女のシンシアがエレーンに聞いてみるしかない。でもさすがに結婚もしてないのに今から聞くのは恥ずかしいから、それはことがすんでからこっそり聞いてみよう。

それから、五百年後のみんなのことも気にかかる。ここからでは未来になるので、過去視ではどうやっても状況を視ることはできないのが辛いところだ。

知ったからといって、どうこう出来る訳じゃないけれど、心配をかけているかもしれないと思うとやっぱり気になる。

そして、そんな彼らを差し置いて、わたしは今幸せになろうとしている。

それはとても自分勝手に、もし五百年後の世界に帰ることがあるとすれば、わたしは彼らに罵倒されても仕方ないだろう。

そう考えると胸が痛いけど、それでもわたしはアークと結ばれたい。

その気持ちはどうしても変えようがなくて、わたしは自分のその欲深さに溜息をついた。

「……もうそろそろ戻ります」

わたしはいろいろ考えるのをやめて、ジェラルドに声をかける。そして、彼に警護されながら自分の部屋に戻った。

それからアークはわたしの部屋に現れることはなくて少し寂しかったけれど、たぶん執務が忙しいんだろうと思って諦めた。

そういえばわたし、厨房へ行ってみようと考えてたのよね。アークは料理長に話を通しておくとおっしゃってくれていたし、たぶん大丈夫だろう。

「イルーシャ様、本当に厨房に行かれるのですか？」

ジェラルドが心配そうにわたしを見てくる。

「もちろん」

既にわたしは動きやすいように、侍女服を借りて、髪を後ろにまとめている。準備はいつでも万端だ。

わたしが厨房に赴くと、まず中の人がわたしの顔を見て呆然としていた。

その様子にお付きのジェラルドが「無理もない」と苦笑して言った。

「あの……、陛下から話を行っているかと思うのですが、わたしはイルーシャです。料理を作りにお邪魔しました」

「はははは、はいっ！！ 伺っております！」

声の上擦っているけれど、この人が料理長だろう。

「厨房をお借りしてもよろしいですか？」

わたしは彼に許可を直接取るために、首をちよつと傾げて微笑みながら尋ねた。

ずるいやり方だけれど、この聞き方で断られたことは一度もない。

厨房で料理を作るのはそんなに困らなかった。調理器具も魔法で火力調節できるようになっていたし、その辺りは五百年後とそう変わらなかった。

水もきちんと蛇口から出てきたし、てっきり瓶から柄杓で汲まないと駄目かなと思っていたのでこれは助かった。

わたしはいくつか料理を作って厨房の人達やジェラルドに試食して貰ったんだけど、ありがたいことに絶賛してもらった。

料理長からもレシピを聞かれたりした。これを今後王族のメニューに出すことに決めたそうだ。

……まあ、これは五百年後でも出てた料理だから問題ないと思う

けれど。

アークがわたしの部屋に現れたのは晚餐時だった。

ちょうどよく、彼にわたしが作った料理を食べて貰う機会ができたので、にこにこしてしまった。

「どうした。機嫌がいいな」

「あのね、今日厨房で料理作ったの。アークに食べて貰えたら嬉しい、わ」

「……本当に作ったのか」

アークは一瞬信じられないと言うように瞳を見開くと、その次には苦笑した。

「わたしが作ったのは、ホワイトシチューと、魚介のピラフと、ハープを利かせた白身魚のソテーなの。……あなたの口に合えばいいのだけど」

「イルーシャが作った料理か。確かにうまそうだ。どれ、食べてみるか」

アークはホワイトシチューをスプーンですくうと口に入れる。すると驚いたように目を睜った。

「……うまい」

「本当！？ 良かった！」

わたしの料理がアークの口に合ったことで、わたしは飛び上がりたいくらい嬉しかった。

「あ、他のも食べてみて。味はどうかしら？」

わたしはピラフと白身魚のソテーも彼に食して貰って、その感想を聞いた。

「驚いた。どれもうまい。これまでわたしが食べていたものがこんなに味気ないものだったか、たった今気づいた」

アークは本気でそう言ってくれてるらしく、わたしの料理をしつ

かりと平らげてくれた。これは作った者としてはすごく嬉しい。

それに、なんかこれ、ちょっと新婚さんみたいじゃない？

そこまで考えてわたしはかああつと真っ赤になった。

「イルーシャ、どうした？」

「まるで新婚みたいって考えていたの。ちょっと気が早過ぎるわよね」

言ってみて、自分の恥ずかしい台詞に気が付いてわたしは赤くなつた頬を覆った。

アークはそんなわたしに微笑むと、傍に寄ってきた。そしてわたしを抱き寄せて言った。

「いや、そんなに早過ぎでもない。婚礼は五日後に決まった」

50 蜜月の前に(2)

「そ、そんなに早く？」

せいぜい一ヶ月くらい先のことだろうと高を括っていたので、さすがにこれにはびっくりした。

「うるさい貴族どもに口を出させない為にも、なるべく早く婚礼にこぎ着けたかったからな。あと、近い親戚筋のオーディス公爵家におまえを養女にすることを既に了承させてある」

「そ、そうなの……」

ああ、昼間アークが現れなかったのは、婚礼の準備で忙しかったからなんだ。

わたしはアークの素早い行動に内心舌を巻いていた。

「国内へのふれと、諸外国への親書は明日出す予定になっている」
国王の婚礼だから、それは確かにやらないとまずいわよね。それにしても、ふれを出すにしても時間が短いので国民に浸透させるのも大変じゃないかしら。

「国民への披露はあるの？」

「ああ、婚礼の誓約が済んだら、バルコニー露台に出て、国民へ顔見せする」

これは五百年後の世界で経験済みだからなんとかなりそう。

アークと一緒にバルコニーで国民に手を振ればいいのよね。

「そういえば、諸外国の方も招待したりするの？」

「特にしない。婚礼を執り行うことだけを親書で知らせるだけだ」

「……それなら特に心配することなさそうね」

諸外国から要人を呼んで披露パーティーをしないのは助かった。思っていたよりも大層なことにならなさそうなので、わたしはほっとした。

それに国内的にもパレードとかしないらしいし。

五百年後の披露式典と比べたらかなり楽な方だろう。……ただ、期間が短すぎるのが少し問題だけれど。

「おまえも明日から忙しくなるぞ、婚礼の衣装合わせがあるからな。急なことなのでおまえには既製のものになってしまつて悪いが」

「うっん、それはいいの。でもアークの方が大変じゃない？」

これだけの強行スケジュールで、アークは大丈夫なのかしら。体調崩したりしないといいけれど。

「そのために宰相や、宰相補佐がいる。おまえが心配することもない」

「……それならいいのだけど」

そうは言つたけれど、やっぱりアークのことが心配で彼を見つめていると、唇に軽く口づけられた。

「そう心配するな。わたしはそう簡単に倒れたりはしない」

「え、ええ……」

確かにアークは魔術師だけど、剣の心得もあるらしくてそれなりに鍛えているから大丈夫だとは思うのだけど、やっぱり心配になる。

「それでも、無理はしないでね。お願い」

「……分かつている」

わたしがアークを見上げて言うと、彼は優しく微笑む。そして軽い口づけを何度も繰り返した。

「あの……、陛下、イルーシャ様、お邪魔するようで申し訳ないのですけれど、お食事の途中です。よろしいのですか？」

それまで控えていたシンシアから赤い顔で突っ込まれて、わたしも赤面し、アークは苦笑した。

アークの言葉通り、わたしは翌日からいきなり忙しくなった。

それは、衣装合わせや宝石商との打ち合わせが入ったから。

なにせ婚礼本番まで、今日を入れてあと五日しかない。

衣装も既存のものとはいえ、数十着もあり、どれがいいかとエレインやシンシア、侍女長のメルアリータさんと相談しながら数着の

候補を決めた。

「それにしても慌ただしいのね」

ふうとわたしが思わず溜息を付くと、三人が楽しそうに微笑んだ。
「陛下は早くイルーシャ様を手に入れたくて焦っておられるのですわ」

「イルーシャ様はお綺麗ですから、陛下のお気持ちも分らないでもないですが」

「わたくし達はとても楽しいですけれどもね」

三人ともこの状況を楽しんでるのね。……たくましいというか、なんというか。

わたしも五百年後の披露式典を経験しているからこういうのはある程度は慣れたけれど、やっぱり慌ただしいのは否めない。

衣装の候補は絞りこんだけれど、やっぱりどれも捨てがたくて、わたし達は頭を抱えていた。

「どれもお似合いですけれど、やっぱり迷いますわね……。他の侍女にも聞いてみましょうか」

メルアリータさんがこう言ったことで、他の侍女も入れ替わり立ち替わりで衣装を見て貰うことになってしまった。

その結果決まったのは、襟元があいて、後ろの裾が長くなっているドレスだった。

わたしは早速それを着せられて、髪型やら、アクセサリーやらをいろいろ変えられて、どれが合うのか検討された。

「イルーシャ様の御髪はあまり手を入れない方が良いのでは？ せっかくこれだけ美しいのですし」

「それはそうですね。では、後ろはおろして横だけ編み込みみましょうか」

とりあえず髪型は決まったようで良かった。わたしがちょっとほっとしていると、シンシアが言った。

「そうしますと髪飾りはどうしましょう。首飾りと同色の方がいい

と思いますが、イルーシャ様の瞳の色が無色透明か迷いますね」

「……それでは陛下に判断して頂きましょうか」

わたしは横の髪を編み込まれて淡い青の花を模した髪飾りをいくつか差し込まれる。首には同色の首飾り。

そして薄く化粧を施して貰って、第一案の方は完成した。

それから侍女さんがアークを呼びに行つて、しばらくして彼が移動魔法で現れた。

アークはわたしの姿を見ると瞳を見開いた。

「……アーク、どうかしら？」

わたしがちよつとときどきしながら聞くと、アークははつとして、ああ、と言った。

「とてもよく似合っている。イルーシャにはやはり淡い青の方がいいだろう」

「そうですわよね！」

侍女さん達がアークの言葉に賛同したけれど、もう一つの方、見なくてもいいの？

「あの……、これでいいの？ もう一つはダイヤをつける予定だったんだけど」

わたしはそう言つて、侍女さんにダイヤの首飾りを持ってきて貰った。

「いや、これがいい。こちらの方がよりおまえが映える」

はつきり断言して貰ったのでわたしはそれに頷いた。

「あなたがそう言うならこれにするわね。……忙しいのに呼び出してしまつてごめんなさい」

申し訳なくてわたしがアークに頭を下げると、彼は首を振つてから微笑んだ。

「いや、先におまえの花嫁姿が見れて嬉しかったぞ」

アークの言葉にわたしの頬が熱くなる。

「そ、そう？ なら良かった」

そんなわたしをアークは抱き寄せると、赤くなつた頬に口づけた。

「名残惜しいが、それではまた晚餐時に会おう、イルーシャ」
「ええ」

アークも婚礼の準備でかなり忙しいのだろう。その上、執務もあるのだから大変だ。

アークは呪文を唱えると、移動魔法で執務室にまた戻ったようだった。

——ああ、もっと彼と一緒にいたい。

ここ数日は会う機会も限られているだろう。それでも、それも婚礼を挙げるまでの辛抱だ。それからは、彼と一緒に過ごせるのだから。

そう思っても寂しくて、わたしはそつと溜息を漏らす。

「イルーシャ様、早々にお衣装が決まってようございましたわ。陛下もあなた様に見とれておいででしたし。明日はお式の段取りを確認いたしますよう」

メルアリータさんに声をかけられて、アークが消えた場所を見つめていたわたしははつと気がつく。

「あ、そうね。早目に確認しないといけないわね」

わたしは婚礼衣装を侍女さんに脱がされながら頷いた。

……わたしもやることはたくさんあるのだし、寂しいなんて言うてられない。

それにアークも忙しいのにわたしに会う時間を取ってくれているんだから、我慢しないと。

晚餐までまだ時間があるので、わたしはエレーンにお茶を入れて貰って、過去視の訓練がてら、一休みすることにした。

アークの執務室まで行ってみようかと思ったけれど、彼の邪魔にはなりたくないし、晚餐の時には会えるんだからと自分に言い聞かせた。

カデイスの執務室を訪れる時はこんなこと考えたこともなかったのに、我ながら不思議だけど、彼に嫌われるようなことは出来れば避けたいと思った。

そんな自分の心境の変化がおかしくて、わたしは思わずすりと笑みをこぼす。

わたしは彼に会える時を心待ちにしながら、過去視の訓練のためにカードを手を取った。

51 蜜月の前に(3)

「アーク、会いたかった！」

焦がれる想いを抑えながらアークを待っていたわたしは、彼が姿を現すと傍に駆け寄った。

「イルーシャ」

そんなわたしをアークは抱きしめてくれる。わたしも彼の背に手を回した。

アークはわたしの頤に手をかけると、唇にそつと口づけた。それを何度も繰り返されて、わたしは更にアークにしがみついた。

しばらくしてアークの唇が離されて、わたしは彼の腕に抱き寄せられたままでいた。

「……おまえの花嫁姿は美しかったな。他の者に見せるのが惜しいくらいだ」

「ありがとう。アークにそう言ってもらえるだけで嬉しい」

わたしは彼の言葉に頬を染めながらも微笑んだ。

「あの……、陛下、イルーシャ様お食事が冷めますわ。どうぞ着席なさってくださいませ」

エレーンとシンシアがわたし達に遠慮がちに声をかけてくる。

普段はどちらか一人が控えてるんだけど、今日は衣装合わせがあったので、二人一緒だ。

「あ、そうね。早くいただきましょう」

「ああ。そうだな」

わたし達は彼女達に促され向かい合って着席すると、アークが大皿からわたしの皿に料理を取ってくれた。

「ありがとう」

「ああ」

アークが自分の皿に料理を取り終えるまで待つてから、わたしは今日の衣装合わせのことをにこにこして話し出す。

話題は持ち込まれた数十着のドレスのこと。

「あの量のドレスを選別するのは結構大変だったわ。最後にはメルアリータさんが侍女さん達に指令を出して、入れ替わり立ち替わりでドレスを見て選んで貰ったけれど」

わたしが報告すると、アークはおかしそうに笑った。

「そうか、結構大仰なことになっていたんだな」

「そうよ、メルアリータさんと侍女さんの意気込みは並大抵のものじゃなかったわ」

「……そういえば、イルーシャは役職に敬称を付けるのが癖なのかな？　メルアリータも別に呼び捨てで構わないぞ。おまえは王妃になるのだからな」

「あ、そうね」

アークのもつともな意見にわたしは頷いた。

王妃になったら、侍女や騎士をさん付けで呼ぶのはまずいわよね。ちよつと抵抗はあるけれど、これも慣れなきや。

「これからそう呼ぶことにするわね」

「ああ、そうしてくれ。……それにしても、ここ二日の間に料理の味が格段に上がったな。昨日のうちにおまえが料理長に指示したのか？」

ステーキ肉を切り分けながらアークが言う。

「ええ、まあ。塩胡椒の加減とか、ハーブや香辛料の使い方とかが主だったけれど。あの料理長は下処理とかは完璧だったから、かなり楽だったわよ？」

それに、彼が変なプライドみたいなものを持っていなくて助かった。そのおかげで、味気なかった料理が格段においしくなったのだ。

その時には、わたしは料理長と二人して手を取り合って喜んでしまった。……その後、彼は真っ赤になって恐縮していたけれど。

「アーク、婚礼がすんで落ち着いたら、また厨房に行ってもいいかしら？　いくつかレシピを料理長に教えたいし」

王妃らしくないって、怒られるかしらと内心ヒヤヒヤしながらの

提案だったけれど、アークは快諾してくれた。

「ああ、いいぞ。王宮の料理の味上がるのはいいことだ。味気ない料理で客人をもてなす非礼もなくなるだろうしな」

わたしはアークの言葉にほっとしながらも、彼に尋ねた。

「よかった。……それはそうと、アーク、甘いものは大丈夫？」

「ああ、大丈夫だが」

「あまり得意じゃないんだけど、今度焼き菓子作るわね。あなたの口に合えばいいのだけれど」

お菓子のレパートリーはほとんどないけど、クッキーとかマドレーヌあたりなら作れるし、彼にも是非食べて貰いたい。

……それで、おいしいってアークが言ってくれたら、すごく幸せかもしれない。

「イルーシャが作ったのなら、うまいだろう。そう謙遜するな、楽しみに待っている」

「ええ」

アークが大らかな王で本当に良かった。

普通だったら厨房に出入りするだけで大目玉だろうから。

わたしもそれ以外はなるべくおとなしくしていよう。余計なことでわたしの評判が悪くなって、アークの立場が脅かされたら嫌だもの。

食事を終えたわたし達は、長椅子に隣り合って座り談笑していた。その間、シンシアが遠慮しながら食後のお茶を出しに来たけど、そんなに入りづらい雰囲気だったのかしら。

まあ、確かにアークに肩を抱かれて、もたれ掛かってはいたけれど。

「……そうか、それでは明日式の段取りを確認するんだな？」

「ええ、それで最終的にアークと合わせていけばいいでしょうってメルアリータ、が言っていたわ」

「そうか。各国に親書や国内のふれも出し終えたことだし、わたしも早急に段取りを確認しなければな」

段取りの確認とアークが言っただけで、わたしはまだ彼の婚礼衣装の話聞いていないことに気がついた。

「……そういえば、アークは婚礼衣装、決めたの？」

「いや、まだだ。だが明日早々には決める。もちろんメルアリータの意見も聞くが」

まだ、アークの方はそこまでいってなかったんだわ。やっぱり執務やら婚礼の準備やらで忙しいのだろう。

「……なんだかアーク、大変そう」

わたしがアークを見上げてそう言つと、アークは優しく微笑んで抱き寄せてくれた。

「このくらいはなんでもない。気にするな」

「え、ええ……」

当のアークがそう言っているのだから、あまりこの話題を引っ張るものなんだし、もうやめよう。

それよりも。

「……早くその日がくればいいのに」

わたしが小さく溜息をついて言っただけで、アークは微笑みながら頷いた。

「そうすれば、おまえはわたしのものだ」

「ええ、わたしはあなたのもの」

アークの膝の上に抱き寄せられて、少しはしたないかもしれないけれど、わたしは彼の首に腕を回して幸福な気持ちでくすぐすと笑いをこぼす。

そう、その日がくれば、身も心もわたしはアークのものなのだ。不安が全くないって言ったら嘘だけれど、それ以上に彼と結ばれ

たいという気持ちの方が強かった。

わたしとアークが口づけを交わしているうちに宰相補佐のローラントがアークを呼びにきて、わたし達はまた離れ離れにされてしまったけれど、わたしは彼と結ばれる日がこうしている間にも着々と近づいてることに喜びを感じていた。

「イルーシャ様、お幸せそうですね」

「今はお忙しいですけど、それもあと少しの辛抱ですわ。イルーシャ様は間違いなく陛下のお妃になられますもの」

「……ありがとう」

エレーンとシンシアが心底嬉しそうな顔で言ってきたくれるのを、わたしは幸福な気分で受け止めていた。

——もうじきわたしはアークリッドの妃になる。

この先どんな困難が待ち受けていようと、彼と二人でいられるなら、それも乗り越えられるような気がした。

そのくらい、わたしは幸せだった。

52 婚礼の儀と決意

愛しくもせわしない日々が過ぎて、ようやく待ちわびた婚礼当日になった。

白い婚礼衣装を着たわたしは侍女達に衣装を取り決めた時よりも念入りに支度されていた。

編み込んだ横の髪だけでなく、後ろも薄い青色の少し大きめの髪飾りを差し込んだ。そしてドレスの襟元が大きく開いたところに繊細な作りの淡い青色の首飾りを飾る。

おしろいは特にはたかなかったけれど、寒色の装飾品でも華々しく見えるように目元や頬に少し色を入られた。口紅もそれに合わせてわたしの唇の色よりも少し華やかな色が選ばれる。

そうすると、今まで可憐と称されることの多かったわたしの容貌が一気に華やいだ。

「まあ、イルーシャ様、ご立派な王妃様ぶりですわ」

「これでしたら陛下も見とれること間違いなしです」

エレーンとシンシア、それにメルアリータや侍女達が褒めそやしてくれる。

「ありがとう」

わたしもこの支度の出来映えに満足して頬を染めながら綺麗にしてくれた皆にお礼を言った。

支度を終えたわたしはメルアリータに王族の祭儀の間の控え部屋に手を取られながら案内された。

そこには既に品の良い紳士が控えていて、彼がわたしを養女にしてくれたアウデイス公爵だと分かった。

彼は初めて見るわたしに絶句してから、しばらくして笑顔で言った。

「……これは素晴らしく美しい姫君ですね。あなたのような方を養女に迎えられてわたしは幸運ですよ」

「今回はご無理を言って申し訳ございません。このご恩は忘れませんわ。ありがとうございます」

そう言ってわたしはアウデイス公爵に頭を下げる。

彼がわたしを養女にしてくれなければ、この婚礼はなかっただろうと思うと、彼には感謝してもしきれない。

「あなたは王妃になれるのですから、わたしの娘になるといつても、やたらと頭を下げてはなりませんよ」

アウデイス公爵に優しく諫められて、わたしははい、と微笑んで返す。

名ばかりの娘といっても、こういう方の養女に入れて良かった。さすがにアークが選んだ方だ。

「わたしはあなたのような方の養女になることが出来てとても嬉しいです。これからどうかよろしくお願いいたしますね」

「……それは嬉しいお言葉ですね。ありがとうございます。わたしには姫がいなかったのでもとても喜ばしいですよ」

このアウデイス公爵は、にこやかで本当に感じの良い方だ。王妃になっても、この方の姫としてこれからも良い関係を築いていこう。養父であるアウデイス公爵と歓談しているうちにメルアリータにそろそろお時間ですと告げられた。

わたしはアウデイス公爵に手を取られて、アークが先に待っているであろう祭儀の間に入った。

そこにはたくさんの蠟燭が立ち並び、いくつもの炎がゆらゆらと揺れてとても幻想的な雰囲気醸し出していた。

重厚な赤い絨毯の横には重臣達が立ち並び、その先には驚いたようにわたしを見つめるアークと祭司役の宰相のルドルフがいた。……侍女入魂の支度はどうやら成功のようらしい。

わたしはアークに熱心に見つめられたまま、アウデイス公爵に導かれてしずしずと彼の横へ進んだ。

「アウデイス公爵が娘、イルーシャでございます」

アウデイス公爵がそう告げて腕を胸の前に掲げて礼をする。そし

て、二歩後退するともう一度礼をし、重臣達の並んでいる一番前に参列した。

「これより、ガルディア国王アークリッド・エリアス・ディレグ・ガルディアとイルーシャ・マリールージュ・レグ・アウデイスの婚礼を執り行う」

そして、ルドルフの厳かな宣言とともに婚礼の儀が始まった。

「イルーシャ・マリールージュ・レグ・アウデイス、そなたは国と王と民を愛し、これに忠誠を誓えるか？」

「はい、誓います」

簡単に思えるだろうけれど、ここは儀式で一番大事なところだ。

何度も練習したおかげか、わたしは声も震えず、きちんと宣誓することが出来た。それに、アークを愛することはもちろん、国や民を愛する気持ちでいるのも本当だしね。

「アークリッド・エリアス・ディレグ・ガルディア、そなたはこの姫を妻とする事を誓うか？」

アークの宣誓は至極簡単だ。それは彼が王に就任した時既に国や民に忠誠を誓っているからだ。

「わたしは生涯この姫だけを妻とし、愛することを誓う」

——アーク！

予想外のアークのその言葉に、わたしは思わず口元を覆いそうになって、慌てて止めた。

予定では、アークは誓うとだけ言えばいいはずだった。

段取りの時点でもそう言っていたはずだし、まさかこんな宣誓をされるとは、わたしは夢にも思っていなかった。

アークが生涯わたしだけしか娶らないと言ったことで、重臣達がざわめいたけれど、ルドルフが「静粛に」と厳しく発言したことで、その場に静寂が訪れた。

——本当にいいの、アーク。

わたしが涙を瞳に浮かべてアークを見つめると、わたしの気持ち
が分かったかのように彼は頷いた。

「それでは婚礼誓約書に署名を」

そう言われて、先程の宣誓が書かれた紙にアークがまず署名をし、
次にわたしが署名をした。これもなんとか手が震えずに書いて、わ
たしはそつと安堵の息を漏らした。

「——以上で婚礼は誓約されました。……国王陛下、王妃陛下どう
か末永くお幸せに」

最後の言葉はルドルフ自身の言葉だった。それがとてもありがた
くてわたしとアークは笑みをこぼす。

「ああ」

「ありがとう」

婚礼の儀を何とか終え、わたしはアークに手を取られて、城のバ
ルコニーに入る手前まで連れてこられた。

既に城の周囲には国民が集まっているらしく、少し離れていても
歓声が聞こえる。

「イルーシャ、とても美しいな。以前その衣装を見せられた時と思
ったが、今日はそれ以上だ」

アークに瞼や頬を口づけられて、わたしは微笑んだ。

「ありがとう。でも、アークもとても素敵よ」

アークの見事な銀の髪に合わせ銀系をメインに刺繍し、金系でア
クセントを付けた正装はとてもよく似合っていて格好いい。

わたし達は二人して微笑みながら、国民への顔見せの前にしばし

口づけをかわした。

そうこうするうちに宰相のルドルフがやってきて、わたし達をバルコニーへとせき立てた。

わたしとアークが並んで姿を現すと、バルコニーの下が集まっている国民が熱狂的な声を上げた。

この光景を見るのは二度目だけど、何度その身に受けても高揚するような震えが来る。

わたしはアークと一緒に国民に手を振りながら彼に言った。

「わたし、この国が好きよ。その王のあなたも民も。まだ頼りないだろうけど、王妃としてこの国の役に立ちたい」

アークはわたしの発言を聞くと、肩を抱き寄せ優しく微笑んだ。

「その気持ちがあれば大丈夫だ。一緒に国をより良い方向に持つていこう、イルーシャ」

「ええ、アーク」

わたし達二人は寄り添いあいながら、民の声に応えて手を振る。

——わたしは国王アークリッドの妃。

その責務は五百年後にあったことを含めても、考えられないくらい重いもの。

けれど、それにふさわしくあるよう、わたしは努力しよう。……

ずっと彼の隣にいられるように。

そう、今のわたしは、イルーシャ・マリールージュ・ディレグ・リルディア。

ガルディア王国の正妃なのだから——。

53 王と王妃

バルコニーでの国民への披露は終わった。

わたしの部屋は新たにアークの部屋の隣の王妃の間に移されていた。

わたしはそこで侍女達の手によって婚礼衣装を脱がされて、また新しくドレスを着付けて貰った。

「イルーシャ」

わたしと同じく、婚礼衣装を着替えたアークが王と妃の共同の間でわたしを迎えてくれた。

アークはわたしに両手を広げ、わたしはその胸に飛び込んだ。

「アーク」

アークはそんなわたしをぎゅっと抱きしめると、わたしの瞼に口づけを落とした。

そしてわたしの膝裏を浚うと、応接セットの長椅子にわたしを降ろした。

アークがその隣に腰掛けると、待っていたかのようにエレインがわたし達にお茶を出してきた。その表情はわたし達の婚礼を心から祝ってくれているようで、とても嬉しそうだ。

「陛下、イルーシャ様、この度は誠におめでとうございます」

「ああ」

「ありがとうございます」

わたしは彼女の気持ちが嬉しくて、微笑んで言った。隣にいるアークも嬉しそうにっていて、わたしはすごく幸せだった。

それから、わたし達はお茶を飲みながら、これからのことを話し合った。

「……しかし、これほど夜が待ち遠しいことはないな」

「え……」

夜って、初夜のことよね。

息をつきながらのアークのその言葉に、わたしはかあつと頬を赤く染めた。

「早くおまえをわたしのものにしてしまいたいからな」

アークは優しく笑うと、わたしの頬に手を添え唇に口づけた。

しばらくして、わたし達が甘く過ごしていたところに宰相補佐のローラントが現れた。

「失礼いたします。陛下、王妃様、重臣達がこの度の婚礼に祝いの挨拶を申し上げたいと言ってきております」

アークはそれを聞いて、一瞬眉を寄せたけれど、仕方なさそうに溜息をついた。

「……そうか。そうなるとイルーシャ、おまえに重臣達を紹介しなければならぬが、いいか？」

「ええ。いずれはお会いしなければならぬ方達だもの。わたしなら大丈夫よ」

わたしが微笑みながら頷くと、アークはすまないな、と申し訳なさそうに謝った。……別にアークが謝ることなんてないのに。

「それでは晚餐の時にその席を設ける」

「かしこまりました。それでは早速その準備をさせていただきます。ありがとうございます、陛下、王妃様」

さぞかし重臣達からの突き上げが激しかったのだろう。いかにもほつとしたように微笑んだローラントに、中堅管理職の悲哀を見たような気がしてわたしは思わず彼に同情してしまった。

やがてローラントが退出すると、アークは少しだけ眉を顰めた。

「……しばらくしてから重臣達におまえを紹介するつもりだったが、仕方ないな。イルーシャ、本当にすまない」

「いいの。これも王妃の仕事のうちでしょう？ だから、アーク気にしないで」

「……ああ」

それでもあまり気が進まなそうなアークにわたしは微笑むと、彼

の腕にしがみついた。

アークはそんなわたしに微笑むと、しっかりと抱きしめてくれた。

重臣達の挨拶は滞りなく済んで、わたしとアークは彼らと一緒に晩餐の席に着いていた。

紹介を受けた人の顔と名前と役職を一致させるべく、同じく席に着いている重臣達の顔を熱心に眺めていたら彼らに頬を染められてしまった。……あら？

「そ、それにしてもイルーシャ様は、大変お美しいですなあ」

「本当に女神のようですね」

「まったくです」

「まあ、ありがとうございます」

口々に褒めそやされて、わたしは頬を染めながらも彼らに微笑んで礼を言った。

そうしたらなぜか、アークが苦笑してきた。

「その辺にしておけ、イルーシャ。おまえが熱心に見つめたり、頬を染めて笑いかけられたりしたら、やつらの心臓が持たない」

アークに言われて見ると、重臣達は真っ赤な顔で絶句していた。

アークやルドルフは普通に対応してくれるし、すっかり忘れてたけれど、そういうば自分は絶世の美女と言われるような存在だった。と、特に深い意味はないのだけれど。熱心に見ていたのはお名前を覚えようとしていたからなの」

これ、まさかとは思うけど、誘ってるとは思われないわよね？

以前キースやカデイスにそう言われたことがあるから、とても気にかかる。

なんと言っても今のわたしはアークの花嫁なのだし。

「そうであっても、イルーシャは無意識にやるからたちが悪い」

それ、キースに似たようなこと言われたわね。それをアークにも

指摘されるということは余程なのだろう。

「分かったわ。気を付けます」

確かに変な誤解を受けたらたまらないものね。

「ああ、そうしてくれ。……重臣達が王妃に恋わずらいなどたまつたものではないからな」

「へ、陛下、我々は王妃様に懸想などはしておりません」

アークの言葉に焦ったらしい重臣達が慌てたように言った。

「……冗談に決まっているだろう。わたしの大事な花嫁に懸想されたら本当にたまつたものではない」

そこで、彼の一連の言葉が場を和ませるためものだと分かり、重臣達は安堵の息をついた。中には「陛下、お人が悪いですぞ」とか言ってる人もいる。

「アークったら」

……ああ、幸せだわ。

わたしはこみ上げる幸福感を噛みしめながら、わたしはくすくす笑う。

そして、それに合わせたように皆も笑った。

おかげでわたしは始終笑顔で重臣達と会話を楽しむ余裕ができて、その結果、晩餐会は大成功に終わった。

そして晩餐を済ませ、湯浴みも済ませたわたしは今、寝間着姿で寝室にいる。

ついさっきアークが訪ねてきて、初夜ということでかなりドキドキしてしまっただけ、いきなりそういう展開にはならず、二人で寝台の端に腰掛けて先程のことを話し合っていた。

「それにしても、今回の急な婚礼で不満が出るかと思っていたが、イルーシャのおかげでそれもなかったな」

やや拍子抜けしたような様子でアークが言った。

「わたしがいたからじゃないわよ。あそこでアークが機転を利かせたからじゃない？」

「……イルーシャは、本当に自分のことが分かっているいな」

「え……？」

わたしはアークの言わんとしていることが分からなくて、首を傾げた。

「その絶世の美貌で笑いかければ、大抵の者は舞い上がるだろう。」

……実はアウデイス公爵の養女にしても、どこの誰とも知れないおまえとの婚礼に不満はあがっていたのだ。だが、皆おまえを前にして、『この姫君なら無理もない』と納得したようだぞ」

「そう……。それならよかった」

できれば反対はされたくないものね。

わたしはほつと息をついて、アークに笑いかけた。

「ただ、わたしはどんな反対があろうとも、おまえを手に入れるつもりではあったがな」

アークも笑ってくれると、わたしの体を抱き寄せた。

「イルーシャ、愛している」

「アーク、わたしも愛してる」

わたしも彼の背中に腕を回して、溢れる想いを口にする。

アークはわたしの唇に口づけた後、わたしをゆっくりと寝台の上に倒した。

何度も口づけされた後、アークはわたしの寝間着の釦を外しながら、ゆっくりと唇を下へと移動させていく。

「あ……っ、アーク……ッ」

膨らみが形を変えて、アークの手で弄ばれる。その中央をアークの唇が捉え、強く吸い上げた。

「あ、あ……っ」

わたしは未だに慣れない感覚にびくりと痙攣し、大きく仰け反る。

我慢しようとしても、自然と溢れ出る甘い声。
アークの指や唇に反応する体。

とても恥ずかしかったけれど、それと同時にすごく幸せで、わたしは何度もアークに愛してると言った。

しばらくアークの唇や指に翻弄されたわたしは息を乱し、くたりと寝台に横たわっていた。

「愛している、イルーシャ」

アークがそんなわたしに口づけると、ゆっくりと体を重ねてくる。

「アーク、好き。大好き」

わたしはアークの背に腕を回してその時を待つ。

——そして、わたしは名実ともにアークの妻になった。
それはわたしにとって、この上ないほどの幸せだった。

54 回想、輪廻、回帰

——小さな規模の城が見える。

久々に見たけれど、これはかなり昔の映像かしら。

いやに人々の衣装が古めかしい。

まどろみの中、久しぶりの過去視にわたしは興味を引かれて、それに集中する。

そしてそれは、なんだかとても懐かしかった。

『——こうなつてはもう仕方ありません』

わたしの姿をした姫が悲嘆にくれた顔をする。

……ああ、これはわたしだわ。

これは過去の映像でその人物はイルーシャではないはずなのに、なぜかわたしはそう確信してしまった。

なぜなら、その光景が涙が出るほど懐かしかったからだ。

『このままでは国は滅んでしまいます。そうさせない為にもわたしを殺してください』

『わたしにそんなことはできない、エリノア』

わたしにそう言った白金の髪の魔術師の男性の名はルウイ。我が国の筆頭魔術師。

そしてわたしの名は、エリノア。

クイラードという小国の王女だったけれど、恋仲であるルウイと近い内に婚礼を挙げることが決まっていた。

けれど、ある日とある呪術師と出会ったことがすべての悲劇の始まりだった。

わたしに懸想した呪術師の結婚の申し出を断った結果、わたしはかの者から国を滅ぼすという睡蓮の呪いを受けてしまった。

睡蓮の呪いは、別名、傾国の呪い。

その呪いを受けた者は己の意志の関係のないところで異性を誘い、溺れさせ、やがて国まで巻き込んだ争いまで発展させてしまう恐ろしい禁呪。

そして、その解呪の方法が明らかにされていないという最悪の呪いだった。

かの呪術師は国に対する大罪人ということで処刑されたけれど、わたしも人前に出ることはかなわなくなってしまった。

——エリノアを封印せよ。

ルウイは父王にそう命を受けて、特殊な場を持つというこの白い塔にわたしを連れてきた。

国を滅ぼす存在に成り果てたというのに、愛する我が子故に、父王も殺すことはできなかったのだろう。

けれど、愛しい者達とはこれでお別れ。たぶん、二度と会うことはないだろう。

これから呪いを消し去る為にわたしは気の遠くなるような長き眠りにつくのだ。

わたしが涙を流すと、ルウイが困ったような顔でわたしを抱き寄せた。

『ルウイ』

『エリノア、愛している』

わたしもルウイの背に腕を回して想いを伝えた。

『ルウイ、わたしもずっと愛してる』

ルウイは微笑むと、わたしの顔をそっと持ち上げ、唇に口づけをした。

その後、わたしはルウイの魔法で眠らされ、大切そうに寝台に横たえられた。

本当ならその時のわたしの記憶はここで途切れたはずだった。けれどわたしの意識はまだ目覚めたままだった。

『エリノア、今世会うことが出来なくとも、きつと来世で会おう』
ルウイはそう言つと、もう一度わたしの唇に口づけた。

やがてルウイの口から、わたしに向けて難解な呪文が紡がれる。あれはきつとわたしの時を止める魔法。

魔術師自身にもかなりの負担をかける大魔法だ。

そして、わたしへの時魔法をかけ終えたルウイは、塔の外へと移動した。

その姿はすでにやつれていて、とても見てられない。

——お願いだからやめて。これ以上力を使つたら、あなたが死んでしまう！

わたしの願いも空しく、ルウイは塔の結界を完成させてしまった。

そして、その場に崩れ落ちるルウイ。

事態を見守っていた騎士達が彼の元に駆け寄つたけれど、ルウイは既に息をしていなかった。

ルウイ、ルウイ、ルウイ。

ごめんなさい、わたしのせいで。

あなたには今生はずつと生きていて欲しかったのに。

わたしは心の中で引き裂かれそうな哀しみに涙を流す。

待っていて、ルウイ。

わたしは必ず睡蓮の呪いに打ち勝つ。

そして、あなたの言うとおり、いつかきつとあなたに巡り会うから――。

そう願った途端、わたしの意識はなぜか暗闇の中に放り出された。

――なにがどうなっているの？

それを確認するすべもなく、わたしは次に気が付いた時には、変わった衣装を着た人達の子供として、生を受けていた。

大切に育てられたけれど、エリノアとしてのわたしの歳が近づいたその時、わたしはあっさりと流行病で死んだ。

そして、その後は身分もほとんどないような両親の子として生を受け、また同じ歳で戦乱の最中に切り捨てられて死んだ。

生を受けているときはエリノアの意識を無くしていたけれど、肉体が減びると自我を取り戻すわたしは、ここが元いた世界ではなく、まったく別の世界なのではないかと気が付いた。どうやら、封印の時の衝撃で、こちらに意識が飛ばされてしまったらしかった。

――ルウイ、ルウイ、あなたに会いたい。

懐かしいあの世界に帰りたい。

狂ってしまいそんな孤独の中で、その想いだけがわたしを支えていた。

そしてわたしはその世界で転生を繰り返す。

ある時は事故で、ある時はなぶり殺されて、またある時は戦乱の火災によって、いずれも同じ歳でわたしは亡くなっていた。

そして今度は、わたしは由希という娘に転生した。

今度はさほど苦しまず亡くなったわたしは、由希の記憶を持った

まま、ようやくこの世界に帰ってこれた。
でも、そこはわたしがいた時代よりもずっと先の時代だった。

最初にわたしを助けてくれた絶大な力を持つ魔術師がルウイの生まれ変わりなのかと思っただけで、よく分からなかった。

そして告げられた古の王妃という自分の立場。

そんな記憶はないのになぜ？　と思っただけで、わたしはガルディアという大国の王族という身分で迎えられた。

クイラードという国はもう遠い昔に消えてしまっていたのだ。

わたしは由希ともどもイルーシャと呼ばれるようになり、しばらくは穏やかな日が続いた。

そして発現した過去視という能力。

これでルウイに会えると思っただけで、由希はそのことには使わず、主にガルディアのためにその力を行使した。

そして由希とわたしを襲った悲劇。またしてもわたしは消えたはずの睡蓮の呪いをかけられてしまったのだ。

けれど、それは件の魔術師によって封印され、いろいろな問題を残しながらもわたし達はガルディアに戻ってきた。

他国の王に襲われたわたし達は、ガルディアの王の要求にも応えられず、世を乱す「傾国の姫君」という名を与えられ、愛する人を見いだせない哀しみに沈んだ。

——ルウイ、あなたに会いたい。

あなたに会えなければこの世界に戻ってきた意味もない。

そして、奇跡は起きた。

わたしはさらに五百年の時を遡って彼に出会ったのだ。

——ようやく会えた。

銀の髪と藍色の瞳は、以前のルウイとはまったく違っていたけれど、間違いなく彼と確信出来た。

そして歓喜の後に続く、由希との意識の融合。

これでわたしはエリノアでなく、本当にイルーシャとなるのだ。

そして、歴史通りにわたしは彼の妃となる。ルウイ、いえ、アークリッドの妃として。

わたしの世界を渡ったエリノアとしての長い道のりはこれでようやく終わりを告げ、わたしはイルーシャとして生きていくことになった。

……願わくば、これからのことが歴史通りに進まなければいいのだけ。

55 赦しを乞う

優しい日差しが差し込んでくる。

わたしはアークの腕に抱かれながら、とても幸せな気分が目覚めた。

「イルーシャ」

既に目覚めていたらしいアークに抱きしめられると、わたしは彼から優しい口づけを受けた。

「アーク、愛してる」

わたしは彼への溢れそうな想いでいっぱいになりながら、愛の言葉を紡いだ。

「イルーシャ、愛している」

何度もアークの口づけを受けながら、わたしはうつとりとそれに酔っていた。

いつまでもそうしていたかったけれど、アークはそういうわけにはいかなかったようで、「すまない」といつて先に起きだして支度をしだした。

彼と結ばれたばかりのわたしは少し残念だったけれど、いつまでもこうしているわけにもいかないのだろう。

アークは支度を終わると、わたしの頬を愛しげに撫でてもう一度キスをしてから寝室から出ていった。

それからしばらくしてメルアリータがやってきた。

「イルーシャ様、おめでとうございます」

「ありがとう」

彼女の祝いの言葉に、またアークと結ばれた嬉しさがこみ上げてきて、わたしは頬を染めて微笑んだ。

わたしはメルアリータに支度をしてもらい、ついでにベッドメイキングもしてもらった。

破瓜の跡の残るシーツにわたしは赤面したけれど、メルアリータ

は心底安堵した笑顔を浮かべた。……どうやら、彼女にはわたしが睡蓮の呪いを受けていたことが伝わっていたらしい。

——あ、そう言えば、彼女に聞かなければいけないことがあるんだっただわ。

「メルアリータ、あの……、わたし避妊薬が欲しいのだけど、あるかしら？」

こんなことは本当は言いたくないけれど、これからのガルディア王家のことを考えたら、わたしは嫌でも言わなければならなかった。案の定、それを聞いたメルアリータの顔が厳しくなった。

「わたくしの権限ではお渡しできません。なにゆえ、そのようなものが必要なのです」

「えつと……、まだ子を作るには早いかと思つて……。メルアリータ、駄目かしら？」

みるみる鬼のような形相になっていく彼女に、わたしは内心駄目だろうなとびくびくしながらも一応聞いてみる。

「そのような大事、わたくしの一存では決められません。陛下にお伺いをたてませんと」

「え……、お願い、アークには知らせないで！」

そこまで言われて、わたしはアークに知られる可能性についてまったく考えていなかったことに気がついた。

「いけません。イルーシャ様、あなたはガルディア王妃なのですよ？ それですのに、その務めを初めから放棄してどうするのです。

……申し訳ありませんが、このことは陛下にご報告しなければなりません」

「ま、待つて、メルアリータ！」

そんなことになったら、下手したらアークに嫌われてしまう。そう感じたわたしは必死で彼女の腕にすがりついた。

「申し訳ございません。シンシア、こちらに参りなさい！」

メルアリータはわたしの居室に控えていたシンシアを大声で呼び出した。

「ど、どうなさったのです。イルーシャ様」

メルアリータにすがりつく形になっていたわたしを目にして、シンシアが戸惑いを露わにする。

「イルーシャ様は少々動揺されているのです。わたくしは陛下にご報告することがありますから、シンシアはイルーシャ様をお願いします」

わたしはシンシアによって、すがりついていたメルアリータから引きはがされた。

すぐさまメルアリータは身を翻すと、寝室から出ていった。もしかしくても、アークに報告に行ったのだらう。

わたしは絶望的な気分になりながら、ふらふらとベッドに腰掛けていた。

きっと、メルアリータから報告を受けたアークは怒るだらう。…

…もしかしたら、彼への愛情を疑われるかもしれない。

わたしは自分のしたことの浅はかさを呪いながら、溢れる涙を顔を覆うことで隠していた。

「……いったい、どうなさったのです。イルーシャ様。陛下と結ばれためでたい朝ですのに……」

シンシアが戸惑いを隠せずにわたしに問いかけてくる。……けれど、わたしはそれには答えられなかった。いきなり、寝室のドアが勢いよく開け放れたからだ。

そちらに目をやると、アークが見たこともないような怒りの表情でわたしを見つめている。

わたしはアークの視線に、底冷えのするような気分を味わった。

「——侍女、下がれ」

「は、はいっ！」

ひどく冷たい声で告げられて、シンシアは飛び上がるようにしてそそくさと出ていった。……最後にわたしの方を心配そうに見てい

たけれど。

アークはベッドに腰掛けたわたしにツカツカと近寄ってくると、わたしの肩を押してベッドに倒した。

「きゃあ……っ！」

普段のアークからは考えられない乱暴な行動に、わたしは恐怖する。

……間違いなく、アークはこれ以上ない程に怒っている。それが、わたしのせいだと思うと、体の震えが止まらなかった。

「ア、アーク……」

彼にのしかかられてわたしは怯えた瞳で彼を見返す。

「——メルアリータに避妊薬を求めたそうだな。どういっつもりだ、イルーシャ」

ひどく冷たい尋問にわたしは泣きそうになりながら、なんとか返す。

「……そ、それは、まだアークと一緒にゆっくりと過ごしたいから……っ」

……これはだいぶ苦しい言い訳かもしれない。

現に、アークの表情は怒りを含んだままだ。

「……本当にそれだけか？ いきなり避妊薬の話題を出すなどおかしいだろう。なにを隠している、イルーシャ」

「そ、それは……っ」

今後のガルディア王家の系譜の為に、わたしとアークの子は作ってはならないとは、とても言えなかった。

そうしたら、わたし達はいずれ離れ離れになる可能性まで話さなくてはいけなくなる。

「——言えないのか、イルーシャ」

アークに両手首を痛いほどに固定されて、わたしはベッドに縫いつけられる。

「ご、ごめんなさい。それだけでも言えないの」

わたしは瞳に涙を浮かべながら、アークに謝罪する。けれど、彼の怒りは収まらなかった。

「おまえが子をいつまでも作らねば、重臣達はわたしに妾妃を娶れと言ってくるぞ。……おまえはそれでもいいのか」

思ってもいなかったアークの言葉に、わたしは愕然とした。……確かにアークとの間に子がいつまでも出来なければ、そういう可能性は充分あるのだ。

「そんなの、いや……っ」

アークが他の姫を抱くところなんて考えたくもない。

わたしは首を何度も振りながら、流れてくる涙もそのままに彼に訴えた。

「だったら、なぜこんな愚かな真似をする。……おまえはわたしを愛しているのではないのか」

「愛してる、愛してるわ。けど……っ」

わたしのその言葉は、アークを落ち着かせるどころか、更に怒りに火をつけてしまったようだった。

「けど、なんだ。言ってみろ」

「ごめんなさい、言えない、言えないの……っ」

わたしのその返答にかつとしたようにアークがわたしのドレスに手をかける。

絹が裂ける高い音がして、わたしのドレスが派手に破られた。

「い、や……っ」

「——おまえにはどうあってもわたしの子を成してもらっ。どんなにおまえが嫌がってもだ」

愛しいアークの子を成すのが嫌なはずはなかった。……ただ、未来の制約がわたしを縛っているだけで——。

結局なにも言えずにいたわたしは、アークに無理矢理抱かれた。

まだ彼を受け入れたばかりで行為に慣れない体が悲鳴を上げる。

既にわたしの中では、ガルディアの系譜のことなどどうでもよくなっていた。

彼にどう思われるか。ただ、それだけが怖かった。

アーク、お願い。

もうこんな馬鹿なことは言わないから、どうかわたしのことを嫌わないで――。

「アーク……ッ、おねが……、ゆる、して……っ」

わたしは彼に赦しを乞うたけれど、アークは止まらなかった。

――そして、それはわたしが気を失うまで続けられた。

56 連綿たる系譜への罪

次に気がついたときには、昼過ぎだった。

わたしは鬱々とした気分で、シンシアにお風呂にいらしてもらってから着替えた。

……でも、寝室から出る気力も湧かない。

アークはわたしに対してまだ怒っているだろうし、それを考えるとてもなにかをする気にならなかった。

わたしは先程のアークの剣幕を思い、ベッドに身を横たえ、泣きはらしていた。

「……イルーシャ様、どうかお食事を召し上がってください。朝もお召し上がりになられていないではないですか」

心配そうにシンシアが言ってきたけれど、どうにも食欲が湧かない。

けれど、あまり彼女に心配をかけても悪いだろう。

「……それなら、スープだけ。それなら口に出来そうだから」

わたしがそう言うと、シンシアは少しだけほっとしたような顔になる。

それを見て、わたしは申し訳ない気分になったけれど、これ以上はどうしてもそういう気分になれなかった。

シンシアは天蓋付きのベッドにかかった紗をかき分け、ベッド用のテーブルをセッティングする。

そこにスープを置かれて、わたしは溜息を押し殺しながらそれを口にした。

そうしていると、先程のアークの怒りの表情が思い浮かんできて、涙が溢れそうになる。

それをなんとかこらえて、わたしはスープを飲み干すとシンシアに言った。

「……ごちそうさま。もう下げていいわ。……悪いけれど、しばらく

く一人にしてくれる？」

「イルーシャ様、……かしこまりました」

シンシアはなにか言いたそうだったけれど、わたしの意向を汲んでくれたようだ。空になったスープレを下げると、ベッド用テーブルを戻し、頭を下げて退室した。

「……」

一人になったわたしは再びベッドに横たわると、こらえていた涙を流した。

アークに嫌われたかもしれないと思うと、苦しくて仕方ない。

自業自得だけれど、どうにかして彼に許して欲しかった。

けれど、彼の執務室に行って謝罪するのさえ怖い。

もし、彼になにをしにきたという目で見られたらと思うと、どうしても体が萎縮してしまう。

——なんてわたしは臆病になったのだろう。

ふいにこんな自分がおかしくなり、くすりと笑いを漏らしてしまう。

いいえ、恋には人をそういうふうに変えてしまう力があるのかもしれない。……かつて、恋を失って自ら命を絶ってしまったリユーシャのように。

彼女があんなふうになってしまったのに、わたしだけ幸せになるうなんて、虫が良すぎたのかもしれない。

アークに嫌われるのは哀しいけれど、そうなくても仕方ないことをわたしはしたのだし、黙ってそれを受け入れよう。

……これからは、子を成すために夜のアークの訪れを受け入れ、そして王妃の務めを果たせばいい。

——どちらにしてもわたしは罪深いけれど。

ふ、と息をついて起きあがると、近くに人の気配を感じた。

「イルーシャ」

「ア、アーク？　いつからそこに」

思ってもいないアークの訪れにわたしはみつともないほどうろたえてしまった。

けど、いきなり寝室に現れるなんてずるい。不意打ちだわ。

「たった今だ。侍女におまえがずっと泣いていると聞いてな」

……ああ、わたしを心配したシンシアがたぶんアークに直接言うてくれたんだわ。

心配かけさせてしまつて、彼女には悪かったかもしれない。

そんなことを考えているうちに、アークが寝台に腰を下ろし、わたしの頬に触れた。

濡れた頬に触れられて、わたしは思わずびくりと体を震わせた。きつと今わたしは酷い顔をしている。

そんな顔をアークの前に曝したくなかった。

「……見ないで」

顔を逸らそうとしたけれども、アークに両頬を覆われて、わたしは無理矢理彼の方に向けられた。

……ああ、こんな顔見られたくないのに。

新たに涙が浮かんで、わたしの頬を転がっていく。

「イルーシャ、泣くな」

涙の跡にアークの唇が押しつけられる。

……アーク、わたしを嫌いになつたわけではないの？

わたしを思いやるような彼の行動に、わたしは子供のようにしゃくりあげて泣いてしまった。

「イルーシャ」

驚いたようにアークが体を離してわたしをまじまじと見つめてくる。

……アークの前でこんな幼い泣きかたをして恥ずかしい。

「あな、たにきら、われたと思、ったの。わたし、わた、し……っ」「イルーシャ」

そこでわたしはアークに痛いほど抱きしめられた。

その途端に襲ってくるアークに対する愛しさと幸福感にわたしは酔った。

「すまない。おまえがこんなに苦しむとは思わなかった。許してくれ」

「いいえ、わたしが悪いの。アークはわたしのためにいろいろしてくれているのに、わたしはそれを踏みにじるような真似して……っ、ごめんなさい」

ぼろぼろと涙をこぼしながら、わたしはアークにしがみついた。ふいにわたしはアークに上向かされて口づけられる。

「アーク」

「イルーシャ、愛している」

アークのその言葉でわたしはまた涙を流してしまった。

「アーク、わたし、わたしも……っ」

ああ。わたしは彼に酷いことをしてしまったけれど、許してもらえたのかしら……？

だとしたら、わたしはもうなにも振り回されず、アークのことだけを考えよう。

「アーク、愛してるわ。もうあんな馬鹿なこと言わない。あなたの妃にふさわしいように行動するわ」

「そうか」

わたしの言葉にアークが嬉しそうに笑うと、わたしの髪を手櫛で梳いた。……ああ、ベッドに寝ていたから結構乱れてるのかしら。

赤くなりながらアークに聞くと、彼はそんなことはないぞと言って首を横に振った。

なんのことはない、ただわたしの髪に触れたかったそうだ。

「そう言えば、イルーシャ、昼もほとんど食べていないそうだな？」

「あ、ええ。スープだけ」

「それはいけない。わたし達はまだ蜜月が始まったばかりなんだぞ。その花嫁の体調を崩させるわけにもいかない」

「え……」

アークの言葉に目を白黒している間に、わたしは彼に抱き上げられた。

そして共同の間にアークの魔法で一瞬で移動してきた。そこでわたしはアークの腕から降ろされる。

そこにはお茶のセッティングが既に出ていて、焼き菓子に加えて、簡単に摘める軽食も用意されていた。

「これ……、アークの指示？」

アークの腕にしがみつきながら、わたしは尋ねた。

「ああ。わたしもそれほど昼に食欲があったわけではないからな。

……わたしとしても、あれは結構な衝撃だったんだぞ？」

「……ごめんなさい」

再び涙が盛り上がってきそうなところで、アークはわたしの瞼に口づけを落とした。

そしてそれは、頬から唇に移動してきて次第に熱烈なキスになっていった。

そこへ少しばかりわざとらしい複数の咳払いが聞こえたので、見るとそこにはアークとわたし付きの侍女が一同に介していた。

サービス体制は既に万全ということなんだろう。

見ると、あちこちの花瓶に生けられた花々が美しい。

これはきつと侍女達がわたし達に心を砕いて、室内に居ながらにして美しい眺めになるようセッティングしたんだわ。

「綺麗ね」

わたしが侍女達を労うと、彼女達はとても嬉しそうな顔をした。

「陛下、王妃様おかけになってください」

メルアリータがわたし達をそれぞれの席に案内した。

テーブルを挟んで向かい合わせになるようにセッティングしていったらしいそれを見て、アークがわたしと隣り合わせになるようにしてほしいと言ってきた。……アークったら。

「わたしはこのままでもいいけれど」

「いや、わたしはイルーシャの隣がいい。その方が新婚らしいだろう」

おどけたように『新婚』と言うアークに、わたしはかあつと頬を染める。

「……そうですわね。気がつきませんで申し訳ありませんでした」
メルアリータが頭を下げてくるけれど、そこには朝の時の鬼のよ
うな表情はない。

とりあえず、彼女の機嫌も直ったらしいと感じてわたしはほつ
した。

アークと二人で茶会の席についたわたしは、アークに焼き菓子や、
サンドイッチのようなものを進められ、頷いてそれを食した。

アークと仲直りした途端に現金なもので、わたしは心なしか食欲
が戻ってきたようだ。

「……それで、イルーシャはわたしの子を産む覚悟はあるか？」

侍女達に聞こえないくらいの声でアークが聞いてくる。アークが
寄り添っているからできることだけど、わたしもそれに小声で答え
た。

「……ええ、あるわ。わたしはあなたの子を成したい」

わたしは愛しいアークにっこり笑いかける。

けれど、わたしのしようとしていることはまさに悪魔の所業だ。

わたしが子を成せば、さんざん世話になったカデイスやキース、
それに類するたくさんの方の血縁の者は存在しなくなる。

——「ごめんなさい。何度謝っても許されないだろうけれど、ごめ
んなさい。」

わたしはアークと生きることを選びます。

だから、いくらでもあなた達はわたしをなじっていい。

「イルーシャ」

アークが眉を寄せてわたしを覗き込んでいる。たぶん考え込むわたしが不審に映ったのだらう。けれど、わたしは彼に愛情を疑われることはしたくない。

わたしは未来の全ての関わりを絶つと、アークに微笑んだ。

「アーク、わたしはあなたの王子を産みたいわ」

それはわたしが、未来に関わった人達よりもアークを優先させた瞬間だった。

——わたしはこの罪を受け入れる。そうして生涯ずっとそれを償っていきましょう。

わたしはそう決心すると、アークに甘えるように寄り添った。

それに対して、アークは口づけで応える。

……わたしの罪を覆い隠して、今この時だけは、穏やかな時が過ぎていくようにしていた。

57 王妃として

あの慌ただしかったアークとわたしの結婚式からすでに一ヶ月がたとうとしていた。

わたしはこの期間に、だいぶ王宮内のことも把握してきて、少しは王妃らしくなってきたと思う。

でも、わたしには少し王妃らしくない趣味がある。

それは王族用の厨房で時々料理やお菓子を作ったりすること。

この日も、わたしは昼食の準備が終わって少し落ち着いた王族専用の厨房を借りて、お菓子作りをしていた。

とはいえ、前日に生地とかは仕込んで冷やしてあったので、あとは型に流し込んで焼くだけだった。

「んー、なかなかうまく焼けたかしら」

そして、わたしはオーブンからマドレーヌを焼け具合を確認して微笑んだ。

「イルーシャ様、天火から取り出すのはわたしがやりますよ。万が

一、あなた様が火傷でもされたら大変ですから」

もうすでに随分と仲良くなった料理長が気を利かせて、わたしの代わりにオーブンからおいしそうに焼けたマドレーヌを取り出してくれた。

「ありがとうございます」

わたしがにつこりと料理長に笑いかけると、彼は照れたように笑った。

うーん、未だに彼の照れ屋は直らないようだ。

とりあえず、わたしはいくつかのオーブンにセットしてあったマドレーヌを型から取り出すと、冷めてから料理長や厨房の人達と味見をした。

自画自賛だけど、プレーンのもココア入りのものもなかなかうまく焼けていると思う。

料理長達も味に関しては太鼓判を押してくれた。

わたしは実用的な料理はそこそ出来るけど、お菓子類はほとんど作ったことないので、このことに関してはほとんど絶望的なよね。

あとは、クッキー、チーズケーキ、プリンくらいなら作れるけれど。

変わり種で言えば焼き団子だけど、ここにはもち米とかあまり入ってこないらしい。

それに、小豆であんこは作れそうだけど、わたしはみたらし団子の方が食べたい。

でもこの世界には醤油もみりんもないし、諦めるしかないわよね……。

ああ、今更ながらお菓子も面倒くさがらずにいろいろ作っておけばよかった。

今から言っても、後の祭りなんだけれど。

……けれど、この料理長はお菓子づくりに関してはさすがプロと言っべきか、かなりレベルが高い。

わたしは彼にお菓子作りを学びながら、わたしの料理の知識を彼に提供するという協力関係を作っていた。それに、調理場の人達とも仲は悪くない。

一国の王妃として、一介の料理人と場を同じくするだけではしたないと陰口を言う人達もいたけれど、わたしが「アークやガルディアの宮廷の方々に美味しい料理を提供したい」と言ってその人達に料理を振る舞ったら、それ以降文句を言ってくる人もいなくなった。……まあ、確かにわたしもその人達の言うように一国の王妃だから、程々にしておいた方がいいのかもしれないけれど、アークに美味しいものを食べてほしかったんだもの。

それで、わたしの王族専用の厨房通いは半ば恒例となった。

「イルーシャ様、とてもおいしいです。ココア味の焼き菓子なんて貴重なもの、初めて頂きました」

わたし付きの騎士の一人、ガルヴィンが感動したように言う。
る。

そこまで喜んでくれると、ちょっと気が引けるんだけど。

この時代、ガルディアではチョコレートやココアはかなり高価で、輸入元のザクトアリアから少量しか入ってこないらしくて、かなり珍重されている。

「少し置いた方が味が落ち着くから夕方にでも食べてね。あ、これジェラルドにも渡してほしいのだけど」

わたしは持ち帰り用に包装したマドレーヌをわたしの守護騎士の二人の為に用意した。

すると、真面目なガルヴィンはいたく感激したようだ。

「イルーシャ様が手ずからお作りになった菓子をわたし達にまでお渡しになれるとは……！」

……なんだか大袈裟ねえ。

これがジェラルドならスマートに「ご厚意ありがとうございます」とか言って受け取るんだけど。

まあ、これが二人の個性だと思って受け止めればいいかしらね。

とりあえず、わたしは焼いたマドレーヌがよい状態になるまで、厨房に置いてもらうこととした。

そして料理長はそれを快諾してくれたので、わたしはとても助かった。

わたしは昼食時にアークと一緒に食事をとれたので、その時に菓子を焼いたことをアークに話した。

「お茶の時間に一緒に食べてくれると嬉しいわ」

わたしがにこにこしながら言うと、アークが微笑んだ。

「もちろん、イルーシャが作ったものを食べないわけがないだろう。楽しみに待っている」

それでわたしは、料理長に今お菓子作りをいろいろ習っていると報告すると、アークは眉を上げた。

「それは……、料理長に少しばかり嫉妬するな」

「え、え……？」

歳の割に落ち着いているアークがまさかこんなことを言うと思わなかったので、わたしは驚いてしまった。

「料理長とは、いうなれば気の置けない歳の離れた友人というのが一番近いかしら。アークが嫉妬なんておかしいわ」

そう言いながら、わたしはおかしくなってしまうてくすくす笑う。しかし、かなり長い間料理長といるだろう。おまえが他の男というと思うだけで身を焦がすわたしの身にもなつてほしいぞ」

そのアークの言葉にわたしは少し赤くなりながら言った。

「わたしが厨房に入り浸るのはアークに美味しいものを食べてほしいからだもの。それを誤解されたら、わたし困るわ。それにジェラルド達や他の料理人達がいるのだから、アークが心配することなんてなにもないわ」

わたしはアークに疑われるようなことは一切していないし、する気もない。

「……ああ、そうだったな。わたしは馬鹿なことを言った」

自嘲するように笑ったアークにわたしは首を振った。

アークはわたしのことを心配して言うてくれているのだし、こうして嫉妬してくれるのはなんだか心地いいと思うのは酷いかしら？

でも、それだけアークに愛されてる気がしてわたしはこんな時すごく幸せになる。

「愛してるわ、アーク」

そうわたしが言うと、アークがとても優しく笑った。……それはわたしが一番大好きな笑顔だった。

「わたしも愛している」

そこでアークがわたしにキスしてきて、わたし達は昼食もそこそこに二人の世界を作った。

そしてそれは、宰相補佐のローラントが呼びにくるまで続けた。

そしてお茶の時間が近くなると、わたしはエレーンと一緒にマドレーヌを厨房から引き取ってきて、彼女にお茶の準備をしてもらった。

うん、焼き加減はうまくいったし、味見でもちゃんと美味しかった。

でも、アークの味覚に合うか分からないので内心ドキドキしている。

やがて、アークが共同の間にやってきて、彼を待っていたわたしを抱き寄せた。

それで早速、わたしとアークは応接セットに座って、エレーンにマドレーヌとお茶を出してもらう。

「……おもしろい色合いだな」

ココア色をしたマドレーヌを手にしたアークが興味深そうに言う。

「ココアを使ったの。ここではあまり使わないって聞いたから」

「そうか。どれ」

アークはわたしの言葉に納得したように頷くと、ココアのマドレーヌをぱくりと食べた。すると瞳を見開いて一言。

「うまい」

——嬉しい！

彼のその言葉が聞きたくて作ったから、こんなに嬉しいことはない。

わたしもにこにこしながらプレーンなマドレーヌを口にする。

ああ、うまく作れたし、時間を置いたことでより美味しくなったみたい。よかった。

わたしはほっとしながら、紅茶を口にする。

「とりあえず、わたしこれからはもう少し王妃の勉強をする事にするわ。少しは王妃らしいこともしたいし、厨房に出入りする機会も少なくなると思っから」

そう言つと、アークが少し驚いたようにわたしを見つめた。

「それを言つなら、おまえはかなり王宮の料理に貢献したぞ」

うーん、でもそれは王妃の仕事とはかなりかけ離れていると思うのよね。

出来るなら、もっと違ったことでアークに貢献したい。

拙いけど、わたしの記憶にある知識が少しでもこの国の役にたつたら嬉しい。

でもその前に、どうしてもわたしが果たしたいことがある。

「……早く、子供が出来ればいいのに」

わたしは自分の下腹部を押さえて言う。

——妊娠の兆候はまだない。

「まだこれからだ、イルーシャ。そんなに焦らなくても、いずれ授かる」

アークは優しく笑つてわたしを抱き寄せてくれた。

でもわたしはアークとの子が欲しかった。

わたしは彼に身を任せ、瞳を閉じる。

——アーク愛してる。

だから、どんなことがあるうとも、わたしはあなたの子を成してみせる。

58 大国の影

アークと一緒にいる時間はとても甘くて、そして切ない。

彼は王だから、わたしにかかずってばかりはいられない。

それに、伝承の魔術師の存在も気にかかって、わたしは時々いてもたってもいられなくなる。

もし、あの話通りにわたしに懸想する魔術師が現れた場合はどうしたらいいのだろう。

アークは大きな魔力を察知すればすぐに分かるとは言っていたけれど、彼がどんなに優れた魔術師でも魔法の詠唱をする手間を取られる分、アークが来る間までわたしは自分で時間をかせがなければならない。

そのためには、まずは魔法の習得だと思ふのよね。

「そういえば、わたしあなたに魔法を習いたいと思っていたの。アーク、時間のある時でいいから、是非お願いします」

わたしはアークに頭を下げながら言う。

「イルーシャ、わたしに頭など下げるな。そんなことをしなくとも教えるぞ」

アークが苦笑して言うてくるけれど、物事を教わるんだから一応のお願いはしないといけない。

本当は、キースに教わる約束をしていたのだけれど、それも果たせないまま過去に来てしまったし。

それでわたしは、アークに魔防壁と防御壁を教えてもらうことにした。

アークに教えてもらった魔防壁は薄い緑色で、防御壁は薄い灰色をした膜。

今までそれが透明なものだとばかり思っていたわたしは驚いてしまった。

「おまえの近くにいた魔術師は隠匿魔法を使っていたのだろう」

「隠匿魔法？」

初めて聞く単語だったので、わたしは首を傾げてしまった。

「ああ。対象物を消えたように見せかける魔法だ。魔法だけではなくて人間にも使える」

短い詠唱の後で、アークの姿がその場から消えた。

「え、ア、アーク？」

いきなり彼の姿が見えなくなったことで、わたしはかなり心細くなってしまった。

するとまた彼の詠唱が聞こえた後、アークが現れた。

わたしはほっとして思わず彼にしがみついてしまったけれど、王妃としては、少しはしたなかったかしら？

けれど、アークは気にする様子もなく、愛しそうにわたしの髪を梳いてくれた。……嬉しい。

「咄嗟に張る分にはこれには必要ない。おまえには近衛の者も付いていることだしな。……イルーシャ、覚えたいか？」

確かにガルヴィンやジェラルドがいるから、確かに必要はないかもしれない。

でも、念には念を入れた方がいいと思うのよね。

特に魔術師相手に気は抜けないし、いつもアークが傍にいるわけではないのだから。

「ええ、覚えたいわ。でも今のわたしの魔力で大丈夫かしら？」

飛躍的にわたしの魔力が伸びたと言われたのは五百年先の未来。

けれど、この体は過去のものだから、精神的にはどうなのかわたしには分からない。

「ああ、それだけあれば充分だ」

わたしの不安にアークは笑って頷いてくれた。

それを聞いてわたしは一安心。

これで一時的にも件の魔術師を遠ざけられるかもしれない。

そして、わたしはアークに防御壁から魔法を教わることにした。

キースみたいな天才ならともかく、わたしには一度に魔法を覚え

るのは無謀だから、無理はしないことにした。

それに、アークも忙しい身だものね。

わたしがアークに防御壁の出し方と消し方を教わった後、彼は執務に入らなくてはいけなくなったので、代わりに王宮付きの魔術師に付いて見てもらった。

「初めてにしては筋がよろしいですよ、イルーシヤ様」

お世辞かも知れないけど、そう言ってもらえると嬉しい。

「ありがとう」

防御壁の魔法はほぼ完璧に使えるようになったし、この調子で魔防壁も頑張らないといけない。

これで、詠唱短縮が出来ればいいのだけど、そこまではどうだろう。今度アークに聞いてみないと。

でも、それは隠匿魔法まで覚えてしまってからでいいわよね。

隠匿魔法は自分の存在を見えなくすることも出来るので、かなり便利そう。

……でも、これでなにかいたずらしようなんて考えてないわよ？
あくまでも、自分の身を守るのが目的だもの。

ああ、そういえば、わたしを守る立場のジェラルド達はいきなりわたしが消えたりしたら焦るだろうから、そういう魔法を習得するつもりなことをあらかじめ話しておいた方がいいかもしれないわね。

魔法の訓練が終わって、わたしはエレーンにお茶を淹れてもらってほっと一息付く。

慣れないことを一から教えてもらうのはやはり緊張する。

でも、頑張っただえて、もしかして来るかもしれない時に備えないといけないしね。

そんなことを考えながら、お茶を味わう。

五百年後と同じく、この時代もガルディアの飲み物はミルクティーが主体。

でも、あの時代と比べたら、だいぶ味はあっさりしている。たぶ

ん、茶葉の種類が違うのだろう。

この時代から随分とお茶も品種改良されているのだと思う。

品種改良と言えば、庭園の花もそう。

ここの庭園も見事だけれど、あの時代にはない花もかなりある。他にもいろいろとわたしの知らないことがここからあの時代へと緩やかに変わっていくのだと思う。

これからわたしのやろうとしていることは、それに関わる歴史を大幅に改編してしまうことだろうけれど、もうわたしは心に決めてしまった。

——わたしは、アークリッドの世継ぎを産む。

あれほど世話になったカディスやキースの存在を消しても構わないと思うわたしはとんでもない悪女だと思う。

心苦しいけれど、わたしは彼らよりアークを選んだのだ。

だから、もう迷わない。

そして、アークと共に生きるために、わたしは自分で戦うことにした。

魔法の習得はその第一歩だった。

「イルーシャ様、グローグ伯爵からまた贈り物が届いておりますが」
わたしはきつと難しい顔でもしていたのだろう。エレーンが、遠慮するように言ってきた。

……ああ、彼女に気を遣わせてしまつて申し訳なかったわね。
それにしても――。

「またなの？ 少し頻度が高すぎではないかしら」

こう言つてはなんだけど、アークがただ一人の妃と公言しているわたしに取り入ろうという貴族は少くない。なので、貴族からの贈り物はかなり頻繁にあつた。

もちろん、中には本当に好意で贈つてくださる方もいるということとも承知している。

けれど、グローグ伯爵はなにか腹に一物ありそうで油断ならない。

今まで短いなりに転生を繰り返してきて、それなりに人の悪意や下心などを見抜けるようになってきたわたしには、どうしてもそう感じるようになってしまった。

でも贈られてきた物自体は悪くはないし、一度仕方なく伯爵に直接会った時に感じた品の悪さは感じない。もしかして、贈り物自体は彼とは違う人物が選んでいるのかもしれない。

今回の品は、金糸で繊細な刺繍の施してあるタペストリーだった。それを見て、わたしはハーメイを連想してしまってどきりとしてしまった。

そしてあの悪夢を思い出してしまって、思わず顔をしかめてしまった。

——いけない。あのことはもう忘れなきゃ。こんなことで動揺していたら、付いているエレーンにも心配をかけてしまう。

もうわたしはアークリッドの妻なのだから、もっと毅然としていないと。

……この贈り物はハーメイを連想させるけれど、この時代、あの国はまだない。

「……これはトウルティエールのもものかしら。見事な刺繍だけれど」

思い起こしてみれば、贈り物には金細工の物もかなりあったような気がする。

すると、エレーンは感心したように言ってきた。

「まあ、イルーシャ様のおっしゃる通り、確かにこれはトウルティエールのものですわね」

「伯爵はトウルティエールと縁の深い方なのかしら？ 贈り物もかの国の物が多いようだけれど」

探るようなわたしの口調に、エレーンは戸惑ったようだった。

「そうだったことは、わたくしは耳にしたことはございませんが……。イルーシャ様がお気になさるのであれば、メルアリータ様に確認して参りますが」

「ええ、お願い」

わたしが頷くと、エレーンはすぐさま侍女長であるメルアリータに問い合わせに行き、しばらくしてから彼女と一緒に戻ってきた。

「確かにグローグ伯爵からの贈り物はトウルティエールのもので多いようです。伯爵領はかの国とは離れていますので、贈り物が偏っていることは確かですね。……伯爵の周辺を少し調べてみますか？」

トウルティエールとは一応交流はあるとはいえ、今ガルディアはあの国とは国境沿いで睨みあっている状態だ。

もしかすると、珍しいものをとグローグ伯爵は思ったのかもしれないけれど、それにしても偏りすぎている。

それに、そんな経緯で入手困難な品をいくつも手に入れられる程、一伯爵がそんなに羽振りがいいものだろうか？

考え出すと疑惑は尽きない。

「そうしてもらえると助かるわ。あとアークにも報告をお願いね」
「かしこまりました」

メルアリータはわたしの言葉を受け、礼をして下がっていった。

……早速彼女はアークのところに報告に行くだろう。

もしかしたら、裏でトウルティエールが動いている可能性はある。それがわたし経由ということは気になったけれど、今は王であるアークに判断を委ねるしかないだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7097p/>

月読の塔の姫君

2011年12月10日09時48分発行